(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第82集
県立みやま養護学校建設に伴う埋蔵文化財調査報告書

大平台遺跡

1989

群馬県教育委員会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第82集
県立みやま養護学校建設に伴う埋蔵文化財調査報告書

大平台遺跡

1989

群馬県教育委員会
財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

群馬県は中央を利根川が流れ、大小の支流河川が合流して地形を形作っています。支流と支流の間には舌状にのびる台地が発達し、ところにより畠となり、山地となっています。県立みやま養護学校が建てられた大平台は南を鏑川、北を碓氷川にはさまれた観音山丘陵に連なる畠地帯で桑園、果樹園が見られます。赤城、榛名、妙義の上毛三山をはじめとする周辺の連山を一望の下に眺めることのできる景勝地です。

発掘調査は昭和48年に群馬県教育委員会により行われました。調査によりまして縄文時代中期を中心とする自然を利用した豊かな生活文化が営まれたことが判りました。付近には古墳群もありその後も生活が続けられていたものと思われます。

整理事業は本年度事業として群馬県埋蔵文化財調査事業団で行いました。事業の実施にあたりまして種々ご配慮、ご指導を頂きました群馬県教育委員会を初めとする関係者の皆様に感謝いたします。また、調査遂行にあたられた関係者の努力に敬意を表します。

終わりに本報告によりまして本県の歴史の解明が多少なりとも前進し、学術および学校・社会教育において生きた資料として活用されることを期待いたしまして序といたします。

平成元年１月25日

㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長　清　水　一　郎

例　言

1．本書は群馬県立みやま養護学校建設の事前調査として、昭和47年11月から昭和48年10月にかけて群馬県教育委員会文化財保護課が発掘調査を実施した、大平台遺跡の調査報告書である。

2．本遺跡の所在地は群馬県高崎市乗附町五ツ塚甲3,947～3,967と同町杉林3,329の1～3,946番地にわたるが、遺跡地周辺の乗附町大平による通称として「大平台遺跡」と命名した。

3．予備調査は昭和47年度に1次の調査を行ない、群馬県教育委員会文化財保護室が実施した。調査担当者は以下の通りである。

　調　査　員　森田秀策・神保侑史・平野進一

　調査補助員　佐藤耕志・神戸聖語・桑野　格・飯塚卓二・萩原初男

4．本調査は昭和48年度に3次の調査を行ない、群馬県教育委員会文化財保護課が実施した。調査担当者は以下の通りである。

　調　査　員　井上唯雄・横沢克明・横倉興一・清水一夫・前沢和之・下城　正

　調査補助員　神戸聖語・桑野　格

5．本遺跡の整理事業は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が群馬県教育委員会からの受託事業（事業名称　昭和63年度公共開発関連出土品等整理事業）として実施した。事業担当職員は以下の通りである。

　事務担当職員　白石保三郎・松本浩一・田口紀雄・上原啓己・住谷　進・巾　隆之・笠原秀樹・須田朋子・小林昌嗣・吉田有光・柳岡良宏

6．本書作成の担当職員は以下の通りである。

　編集および本文執筆　下城　正　　遺物観察　縄文時代早・前期　原　雅信　　中期前半　山口逸弘

　中期後半　桜岡正信　　後期　藤巻幸男　　土・石製品　女屋和志雄　　整理業務　佐藤美代子・金子恵子・富永セン・高橋裕美・小久保トシ子・本多琴恵・小林恵美子

7．大平台遺跡の出土遺物等の資料は群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

8．調査において、地元関係者ならびに発掘調査に従事していただいた大勢の方々に、記して感謝いたします。また、本書の作成にあたっても多くの方々に協力を願いました。あわせて感謝する次第であります。

凡　例

1．遺構図の縮少率は全体図を1/500（付図）、分布図を1/1000、住居・土坑図を1/60、方形周溝墓を1/200とし、各図にスケールを付した。

2．本遺跡からはコンテナパットに約300箱分の遺物が出土したが、石器類については整理の都合上、数量の集計のみに終わった。なお、土器類および一部の石製品については575点を図示した。

3．遺物図の縮少率は完形および復原実測可能な個体は¼・⅙を基本とし、破片の拓影については縄文時代早・前期は⅓、中・後期は⅓を基本とした。

4．縄文土器90点の遺物については、スリット式正射投影カメラによる写真実測を行なった。また、土器展開図（1点）は3スペース実測機を使用した。

5．遺構図中のトーンは焼土を表わす。

目　次

第1章　調査の経過と方法 …… 1

1　調査に至る経過 …… 1
2　調査の経過 …… 1
3　調査の方法 …… 3

第2章　遺跡の立地と周辺遺跡 …… 4

1　立　地 …… 4
2　周辺遺跡 …… 4

第3章　基本土層 …… 6

第4章　縄文時代の遺構と遺物 …… 7

1　概　要 …… 7
2　住居跡 …… 7
住居跡一覧表 …… 61
3　土　坑 …… 62
遺構出土遺物観察表 …… 73
4　グリット出土の土器 …… 91
グリット出土土器集計表 …… 117
5　石　器 …… 120
石器集計表 …… 121
6　土製品・石製品 …… 124
土製品観察表 …… 128
石製品観察表 …… 132

第5章　古墳時代の遺構と遺物 …… 134

第6章　まとめ …… 136

1　縄文時代中期前半～中葉の土器について …… 136
2　縄文時代中期後半の土器について …… 137
3　小　結 …… 139

図 版 目 次

図版１－１　遺跡遠景(遺跡は正面丘陵中央頂部にある。遺跡の北西４kmにある八幡若田遺跡より)
　　２　遺跡の西100mにある湧水地からの流れ（湧水地の北東50mより）
図版２－１　遺跡遠景（後方の山は赤城山、西より）
　　２　遺跡全景（南西より）
図版３－１　予備調査風景
　　２　本調査風景
図版４－１　現在の県立みやま養護学校（南西より）
　　２　A区南半全景（北より）
図版５－１　A区東半全景（北西より）
　　２　A区西半全景（北より）
図版６－１　A区１号住居跡（北より）
　　２　A区１号住居跡遺物出土状態（北西より）
図版７－１　A区２号住居跡（東より）
　　２　A区３・11号住居跡（南より）
　　３　A区３号住居跡の炉（南より）
図版８－１　A区４号住居跡（東より）
　　２　A区４号住居跡の炉（南より）
　　３　A区４号住居跡の炉体土器出土状態（東より）
　　４　A区４号住居跡遺物出土状態（南より）
　　５　A区４号住居跡遺物出土状態（西より）
図版９－１　A区５号住居跡（南より）
　　２　A区５号住居跡の炉と立石（北より）
　　３　A区５号住居跡炉上部の遺物出土状態
図版10－１　A区６・14・15・16号住居跡（北西より）
　　２　A区６号住居跡の炉（北より）
　　３　A区15号住居跡の炉（北西より）
　　４　A区14号住居跡の炉（東より）
　　５　A区14号住居跡の埋甕（西より）
図版11－１　A区７・９号住居跡（東より）
　　２　A区７・９号住居跡遺物出土状態（南東より）
　　３　A区７号住居跡須恵出土状態（東より）
　　４　A区７号住居跡の炉（南より）
　　５　A区９号住居跡の炉（東より）
図版12－１　A区８号住居跡（南より）
　　２　A区８号住居跡の炉検出状態（南より）
　　３　A区８号住居跡の炉（東より）
　　４　A区８号住居跡遺物出土状態（東より）
　　５　A区８号住居跡遺物出土状態（西より）
図版13－１　A区10号住居跡（南西より）
　　２　A区10号住居跡遺物出土状態（南西より）
図版14－１　A区10号住居跡炉周辺の遺物出土状態（南西より）
　　２　A区10号住居跡の炉（北より）
　　３　A区10号住居跡出土の釣手形土器（南より）
図版15－１　A区12号住居跡遺物出土状態（南より）
　　２　A区12号住居跡遺物出土状態（北西より）
　　３　A区12号住居跡の炉（南西より）
図版16－１　A区13・21・29号住居跡（北より）
　　２　A区21号住居跡の炉（西より）
　　３　A区29号住居跡遺物出土状態（西より）
図版17－１　A区17号住居跡（東より）
　　２　A区17号住居跡遺物出土状態（南東より）
　　３　A区17号住居跡床面遺物出土状態（南より）
　　４　A区17号住居跡床面遺物出土状態（西より）
　　５　A区17号住居跡の炉（南より）
図版18－１　A区18号住居跡の炉（北より）
　　２　A区19号住居跡の炉（南より）
　　３　A区20号住居跡遺物出土状態（北西より）
図版19－１　A区22・28・35号住居跡（北より）
　　２　A区28・35号住居跡遺物出土状態（西より）
　　３　A区28・35号住居跡遺物出土状態（南西より）
図版20－１　A区23号住居跡（東より）
　　２　A区24号住居跡（東より）
　　３　A区25号住居跡（南東より）
図版21－１　A区26号住居跡（南東より）
　　２　A区26号住居跡の炉（南西より）
　　３　A区26号住居跡（北西より）
図版22－１　A区27号住居跡（南より）
　　２　A区27号住居跡の炉（西より）
　　３　A区30号住居跡（東より）
図版23－１　A区31号住居跡（東より）
　　２　A区32号住居跡（西より）
　　３　A区32号住居跡の炉（東より）
図版24－１　B区１・２号住居跡（西より）
　　２　B区１号住居跡遺物出土状態（東より）
　　３　B区D－12グリット遺物出土状態（西より）
図版25－１　B区６号住居跡（東より）
　　２　B区６号住居跡の炉土層断面（東より）
　　３　B区７号住居跡（南より）
図版26－１　A区18号住居跡周辺の土坑群（南西より）
　　２　A区145号土坑大型深鉢出土状態（南より）
図版27－１　A区116号土坑の立石（西より）
　　２　A区143号土坑（南東より）
図版28－１　A区27号土坑（西より）
　　２　A区21号土坑（南より）
　　３　A区16・17・18号土坑（南東より）
図版29－１　A区28号土坑（南より）
　　２　A区68号土坑（南東より）
　　３　A区44号土坑（西より）
図版30－１　B区１号土坑（北より）
　　２　B区４号土坑（東より）
　　３　B区69号土坑（東より）
図版31－１　１（左）・２（右）号方形周溝墓（東より）
　　２　１号周溝墓（南東より）
　　３　方形周溝墓出土遺物(1)
　　４　方形周溝墓出土遺物(2)
　　５　B区出土の剥形帝石製模造品
図版32　A区１号住居跡出土遺物
図版33　A区２号住居跡出土遺物
図版34－１　A区３号住居跡出土遺物
　　２　A区４号住居跡出土遺物
図版35　A区５号住居跡出土遺物
図版36－１　A区６号住居跡出土遺物
　　２　A区７号住居跡出土遺物
図版37－１　A区８号住居跡出土遺物
　　２　A区９号住居跡出土遺物
図版38　A区10号住居跡出土遺物(1)
図版39　A区10号住居跡出土遺物(2)
図版40　A区10号住居跡出土遺物(3)
図版41－１　A区11号住居跡出土遺物
　　２　A区12号住居跡出土遺物(1)
図版42－１　A区12号住居跡出土遺物(2)
　　２　A区13号住居跡出土遺物
図版43－１　A区14号住居跡出土遺物
　　２　A区15号住居跡出土遺物
　　３　A区16号住居跡出土遺物
図版44　A区17号住居跡出土遺物(1)

図版45　A区17号住居跡出土遺物(2)
図版46－1　A区18号住居跡出土遺物
2　A区19号住居跡出土遺物
図版47－1　A区20号住居跡出土遺物
2　A区21号住居跡出土遺物
図版48－1　A区22号住居跡出土遺物
2　A区23号住居跡出土遺物
図版49－1　A区24号住居跡出土遺物
2　A区25号住居跡出土遺物
図版50－1　A区26号住居跡出土遺物
2　A区27号住居跡出土遺物
図版51　A区28・35号住居跡出土遺物(1)
図版52　A区28・35号住居跡出土遺物(2)
図版53－1　A区29号住居跡出土遺物
2　A区30号住居跡出土遺物
図版54－1　A区31号住居跡出土遺物
2　A区32号住居跡出土遺物
3　A区33号住居跡出土遺物
4　A区34号住居跡出土遺物
図版55－1　B区1号住居跡出土遺物
2　B区2号住居跡出土遺物
3　B区3号住居跡出土遺物
図版56－1　B区6号住居跡出土遺物
2　B区7号住居跡出土遺物
図版57－1　A区145号土坑出土大型深鉢（正面）
2　A区145号土坑出土大型深鉢（裏面）
3　A区145号土坑出土大型深鉢（側面）
4　A区143号土坑出土遺物
図版58－1　A区16号土坑出土遺物
2　A区14号土坑出土遺物
3　A区15号土坑出土遺物(1)
4　A区27号土坑出土遺物
図版59－1　A区21号土坑出土遺物
2　A区28号土坑出土遺物(1)
3　A区36号土坑出土遺物
4　A区59号土坑出土遺物(1)
5　A区68号土坑出土遺物
図版60－1　A区96号土坑出土遺物
2　A区100号土坑出土遺物
3　B区1号土坑出土遺物(1)
4　B区4号土坑出土遺物
5　B区7号土坑出土遺物
図版61－1　A区13号土坑出土遺物
2　A区15号土坑出土遺物(2)
3　A区28号土坑出土遺物(2)
4　A区44号土坑出土遺物
5　A区59号土坑出土遺物(2)
図版62－1　A区45・97・113号土坑出土遺物
2　B区1号土坑出土遺物(2)
3　B区5号土坑出土遺物
4　B区8号土坑出土遺物
5　B区4・56・66号土坑出土遺物
6　B区67号土坑出土遺物
7　B区68号土坑出土遺物
図版63－1　グリット出土遺物(1)・(2)
2　グリット出土遺物(3)
3　グリット出土遺物(4)
4　グリット出土遺物(5)
図版64－1　グリット出土遺物(6)
2　グリット出土遺物(7)
3　グリット出土遺物(8)
4　グリット出土遺物(9)
図版65　グリット出土遺物(9)
図版66　グリット出土遺物00（32は前期）
図版67　グリット出土遺物00
図版68－1　グリット出土遺物01
2　グリット出土遺物03
3　グリット出土遺物03
4　グリット出土遺物04
図版69　グリット出土遺物03
図版70　グリット出土遺物03・06
図版71　グリット出土遺物04
図版72　グリット出土遺物04
図版73　土製品
1　土偶
2　土製品
3　耳栓
4　土製円盤
図版74　グリット出土遺物07
1　打製石斧(1)
2　打製石斧(2)
3　打製石斧(3)
図版75　グリット出土遺物08
1　磨製石斧
2　剥片石器(1)
3　剥片石器(2)
図版76　グリット出土遺物09
1　石鎚
2　石匙
3　石錐・ドリル
図版77　グリット出土遺物20
1　石鏃
2　敲石
3　石棒
図版78　グリット出土遺物21
1　磨石
2　凹石
3　石皿
図版79　グリット出土遺物23
1　多孔石
2　砥石
3　石製品

挿　図　目　次

第 1 図　遺跡位置図 …… 2
第 2 図　グリット設定図 …… 2~3
第 3 図　周辺遺跡分布図 …… 5
第 4 図　住居分布図 …… 8
第 5 図　A区 1 号住居跡 …… 9
第 6 図　A区 1 号住居跡出土遺物 …… 10
第 7 図　A区 2 号住居跡 …… 11
第 8 図　A区 2 号住居跡出土遺物 …… 12
第 9 図　A区 3・11号住居跡 …… 13
第10図　A区 3 号住居跡出土遺物 …… 13
第11図　A区11号住居跡出土遺物 …… 13
第12図　A区 4 号住居跡 …… 14
第13図　A区 4 号住居跡出土遺物 …… 15
第14図　A区 5 号住居跡 …… 16
第15図　A区 5 号住居跡出土遺物 …… 17
第16図　A区 6・14・15・16号住居跡 …… 19
第17図　A区 6 号住居跡出土遺物 …… 20
第18図　A区14号住居跡出土遺物 …… 20
第19図　A区15号住居跡出土遺物 …… 20
第20図　A区16号住居跡出土遺物 …… 20
第21図　A区 7・9 号住居跡 …… 21
第22図　A区 7 号住居跡出土遺物 …… 22
第23図　A区 9 号住居跡出土遺物 …… 22
第24図　A区 8 号住居跡 …… 23
第25図　A区 8 号住居跡出土遺物 …… 23
第26図　A区10号住居跡 …… 25
第27図　A区10号住居跡出土遺物(1) …… 26
第28図　A区10号住居跡出土遺物(2) …… 27
第29図　A区12号住居跡 …… 28
第30図　A区12号住居跡出土遺物(1) …… 29
第31図　A区12号住居跡出土遺物(2) …… 30
第32図　A区13号住居跡 …… 31
第33図　A区13号住居跡出土遺物 …… 31
第34図　A区17号住居跡 …… 33
第35図　A区17号住居跡出土遺物 …… 34
第36図　A区18号住居跡 …… 35
第37図　A区18号住居跡出土遺物 …… 35
第38図　A区19・33号住居跡 …… 36
第39図　A区19号住居跡出土遺物 …… 36
第40図　A区33号住居跡出土遺物 …… 36
第41図　A区20号住居跡 …… 37
第42図　A区20号住居跡出土遺物 …… 37
第43図　A区21・29号住居跡 …… 39
第44図　A区21号住居跡出土遺物 …… 40
第45図　A区29号住居跡出土遺物 …… 40
第46図　A区22・28・35号住居跡 …… 42
第47図　A区22号住居跡出土遺物 …… 43
第48図　A区28・35号住居跡出土遺物 …… 44
第49図　A区23・25号住居跡 …… 45
第50図　A区23号住居跡出土遺物 …… 46
第51図　A区25号住居跡出土遺物 …… 46
第52図　A区24・31号住居跡 …… 47
第53図　A区24号住居跡出土遺物 …… 48
第54図　A区31号住居跡出土遺物 …… 48
第55図　A区26号住居跡 …… 50
第56図　A区26号住居跡出土遺物 …… 50
第57図　A区27号住居跡 …… 51
第58図　A区27号住居跡出土遺物 …… 51
第59図　A区30号住居跡 …… 52
第60図　A区30号住居跡出土遺物 …… 52
第61図　A区32号住居跡 …… 53
第62図　A区32号住居跡出土遺物 …… 53
第63図　A区34号住居跡 …… 54
第64図　A区34号住居跡出土遺物 …… 55
第65図　B区 1・2 号住居跡 …… 56
第66図　B区 1 号住居跡出土遺物 …… 56
第67図　B区 2 号住居跡出土遺物 …… 56
第68図　B区 3 号住居跡 …… 57
第69図　B区 6 号住居跡 …… 58
第70図　B区 6 号住居跡出土遺物 …… 58
第71図　B区 7 号住居跡 …… 59
第72図　B区 7 号住居跡出土遺物 …… 60
第73図　土坑分布図 …… 64
第74図　土坑図 …… 65
第75図　土坑出土遺物(1) …… 66
第76図　土坑出土遺物(2) …… 67
第77図　土坑出土遺物(3) …… 68
第78図　土坑出土遺物(4) …… 69
第79図　土坑出土遺物(5) …… 70
第80図　土坑出土遺物(6) …… 71
第81図　土坑出土遺物(7) …… 72
第82図　グリット出土遺物(1) …… 101
第83図　グリット出土遺物(2) …… 102
第84図　グリット出土遺物(3) …… 103
第85図　グリット出土遺物(4) …… 104
第86図　グリット出土遺物(5) …… 105
第87図　グリット出土遺物(6) …… 106
第88図　グリット出土遺物(7) …… 107
第89図　グリット出土遺物(8) …… 108
第90図　グリット出土遺物(9) …… 109
第91図　グリット出土遺物(10) …… 110
第92図　グリット出土遺物(11) …… 111
第93図　グリット出土遺物(12) …… 112
第94図　グリット出土遺物(13) …… 113
第95図　グリット出土遺物(14) …… 114
第96図　グリット出土遺物(15) …… 115
第97図　グリット出土遺物(16) …… 116
第98図　土製品・石製品出土位置図 …… 124
第99図　土製品(1) …… 125
第100図　土製品(2) …… 126
第101図　土製品(3) …… 127
第102図　石製品(1) …… 130
第103図　石製品(2) …… 131
第104図　古墳時代の遺構と遺物図 …… 135
第105図　加曽利E式段階模式図 …… 138
第106図　時期別住居分布(1) …… 143
第107図　時期別住居分布図(2) …… 144

付図　大平台遺跡全体図（1／500）

第１章　調査の経過と方法

１．調査に至る経過

群馬県教育委員会は特殊教育の振興のため精神薄弱児を対象に、寄宿舎併設の県立学校を設立するための用地として、上毛三山が眺望できる景勝の地である高崎市西部の岩野谷丘陵の高台を選定した。

この地からの眺望は、北方は烏川により削られた段丘崖左岸より榛名山南面が一望でき、北毛の山々、赤城西麓が続く。西、東、南とも丘陵の尾根が続き、西方は長野県境の山々へと続き、南方は眼下に国立コロニー、白衣観音をみて、甘楽の山々が望める。東方は丘陵の谷の開口方向となり、高崎市街地が望める。本遺跡の北方1.5kmを下ると少林山達磨寺があり、直下を碓氷川が流れ平行して国道18号線（旧中仙道）が東西に走っている。

遺跡周辺は戦後の開拓によって開かれた地区であり、かねてより、埋蔵文化財の包蔵地であることが知られていた。事業所管の県教委管理課より連絡を受けた文化財保護室ではさっそく現地踏査を実施し、遺跡の存在が確実視されるため、遺跡の性格・時期・範囲等を把握するため予備調査を行なった。この結果、縄文時代中期を主体とする遺跡地であることが判明、本調査を実施するに至った。

２．調査の経過

第１次調査（予備調査、昭和47年11月27日～12月16日）

調査対象地は面積28,759㎡あり、10m方眼のグリットを組み２ｍ×８ｍのトレンチを対象地の52ケ所に設定し遺構・遺物の確認を行なった。この結果、対象地の南西部高台(Ｂ区)とこの部分から急傾斜地を隔てて北方へ延びる尾根状の台地（Ａ区）部分の２ケ所に遺物が集中して確認され、住居跡９軒を検出した。対象地の東方と西方は埋没谷となり、遺構の存在は認められなかった。以上の結果を本調査の資料とした。

第２次調査　（昭和48年３月19日～３月31日）

第１次調査の結果、最も遺構が濃密に分布すると推定されたＡ区を中心に短期間の調査を実施した。調査は住居跡の確認されたトレンチを人力で拡張して実施した。本次調査では１～３号住居跡をほぼ完掘し、他の部分にもトレンチを設定し、遺構の広がりの確認も同時に行なった。調査面積は約340㎡である。

第３次調査　（昭和48年４月11日～６月26日）

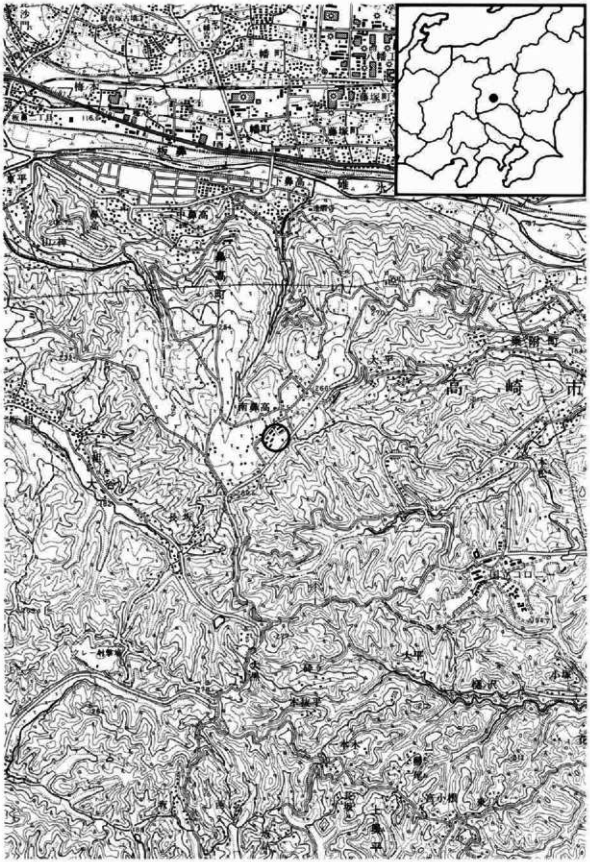
Ａ区を中心に調査を実施し同時にＢ区の調査も行なった。Ａ区の調査は人力を中心に一部、重機を導入して拡張を行なったが、対象地の北へ行くに従い包含層が厚くなり、遺構の重複率も高く調査は困難を極め、調査範囲に不充分さを残す結果となった。

Ｂ区では５軒の住居跡を確認したが、内、３軒が未完掘として残った。また、方形周溝墓状の屈曲した溝を確認したが部分調査となった。

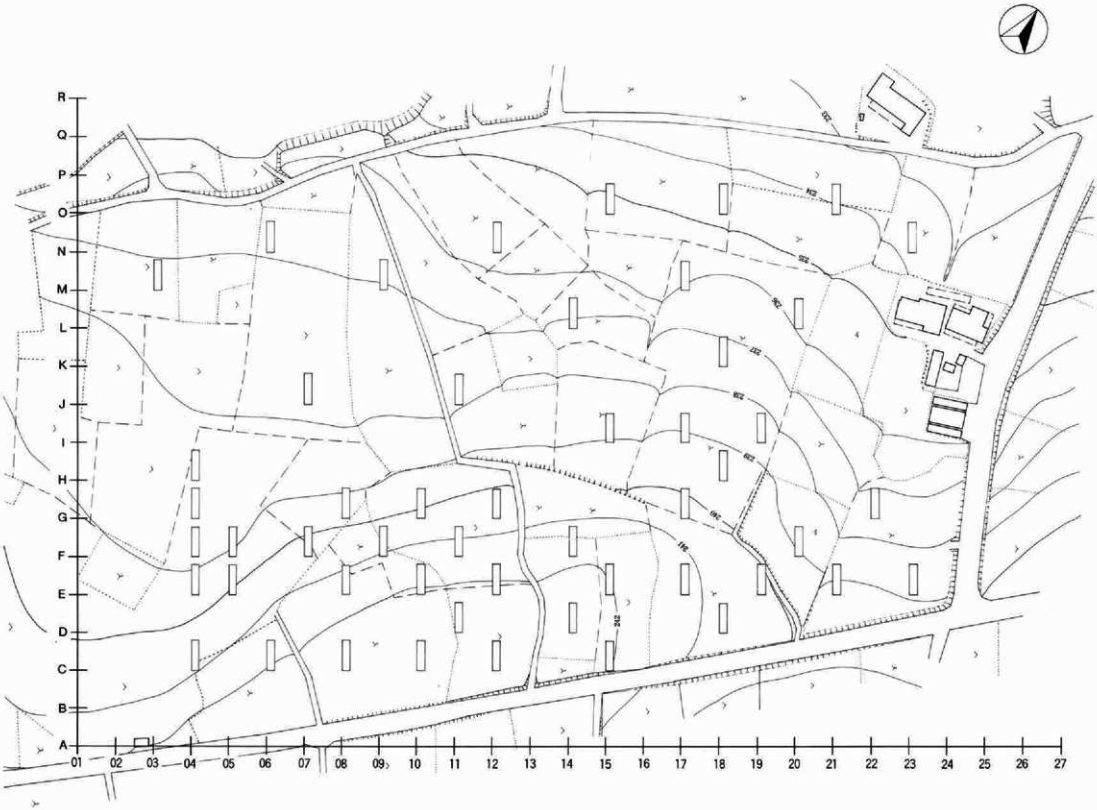
第４次調査　（昭和48年10月22日～10月31日）

養護学校建設に伴なう造成工事に際し、立ち合い調査を行ない、Ｂ区東半部で２軒の住居跡を確認し調査を実施した（本遺跡の調査概報の中でＣ区と称した部分である）。

以上の結果、縄文時代中期を中心とした住居跡42軒、土坑216基と古墳時代前期の方形周溝墓２基を確認し、２地点に分れた遺跡の状況が判明した。これにより遺構保存上、設計変更の必要性が生じ、工事着工前に寄宿舎棟の位置を修正した。学校は県立みやま養護学校と命名され、昭和49年４月に開校した。



第１図　遺跡位置図（国土地理院発行１／25,000　下室田・富岡使用）



第２図　グリッド設定図（含，試掘トレンチ設定状態）

0　50m

3．調査の方法

調査対象地は岩野谷丘陵北部の丘陵頂部にあり、南縁に沿って県道高崎―藤木線が東西に走り、東縁に沿って幅６ｍの市道が南北に走り、北縁に沿って幅２ｍの町道がやや屈曲して東西に走っている。

対象地は北へ緩やかに下る北面する台地にあり、対象地南西端が最も高く標高241.40ｍである。最も低い部分は対象地の北東端で標高は233.30ｍであり、対象地内での南北の比高差は8.10ｍである。この対象地を斜めに横断する状態で緩やかな尾根状の台地が走り、東西端は埋没谷へと傾斜している。本遺跡の調査方法は下記を基本とした。

① グリットの設定は調査対象地の区画に合わせ、対象地の南西隅を基点として10ｍ方眼を設定した。

② グリットの南北軸にアルファベット（Ａ～Ｑ）を用い、東西軸に算用数字（１～25）を用いて、グリットの南西隅を呼称の基点とした。

③ グリットの南北軸の方位はＮ－35°－Ｗである。

④ 遺構の実測は1/20作図を原則とし、平面図の作図には平板を用いた。また、炉については一部について1/10作図も行なった。

⑤ 遺構の写真撮影は35㎜版を用い、モノクロとスライドの撮影を行なった。

⑥ 遺構名称については遺跡の性格上、Ａ区・Ｂ区の２区にわけ、それぞれの区において遺構の種別ごとに通し番号を付した。なお、整理途上において調査時点での遺構名称を整理し、報告段階で改称した遺構もある。

第１次調査でのトレンチ調査

第２章　遺跡の立地と周辺遺跡

１．立　　地

大平台遺跡は群馬県西部の高崎市乗附町にあり、高崎市中心部の西方約５kmの丘陵上にある。また、上野三碑として著名な多胡碑・山ノ上碑・金井沢碑の所在地の北西約８kmにあり、県内最大の横穴式石室を有する八幡観音塚古墳の南西約2.5kmに位置している。遺跡地は以前より埋蔵文化財の散布地として知られており、付近の阿部吉春氏は多くの採集遺物を保有している。

遺跡は上毛三山のひとつである妙義山より東方へ連なる丘陵の東端近くにあり、南を鏑川、北を碓氷川、東を烏川によって囲まれた通称「岩野谷丘陵」に立地する。

岩野谷丘陵は上記河川の支流が樹枝状に入り込み、痩せ尾根と狭い谷が複雑に入り組んだ地形で、基層は第三紀層からなり礫岩や砂岩などの堆積岩で構成され、これに関東ローム層がのっている。遺跡はこの丘陵の碓氷川に面した北端にあり、碓氷川との比高差は約140mである。

遺跡周辺は岩野谷丘陵では稀な、丘陵頂部が馬背状をなす平坦な場所である。遺跡の南西約400mにある丘陵頂部より北西・北・北東の３方向へ平坦な頂部が各々、幅約400m、距離約1.5kmにわたって延びており、遺跡は北東へ延びる平坦な頂部から緩やかに北方へ下り込む台地状をなす面に立地している。

２．周辺遺跡

旧石器時代の遺跡は碓氷川対岸に古域遺跡があり、ナイフ型石器等が出土している。縄文時代の遺跡は岩野谷丘陵裾部に点在し、対岸の八幡丘陵上に多く分布している。八幡丘陵では昭和46・47年に商田遺跡が調査され、前期～後期にかけての27軒の住居跡や土坑群が確認されており、中期～後期にかけての同丘陵上の中核的集落と推定される。また、本遺跡周辺の丘陵平坦面には前期の遺跡が多く点在している。

弥生時代の遺跡は河川に沿った段丘崖縁辺に集中する傾向にあり、古墳時代の集落址は八幡丘陵に濃密な分布を見せ、古墳もいくつかの群に分かれ丘陵上に分布し、当地域での中核的古墳群を構成している。奈良・平安時代は岩野谷丘陵に古窯跡群（古く溯る可能性がある）が分布し、乗附廃寺等が確認されている。

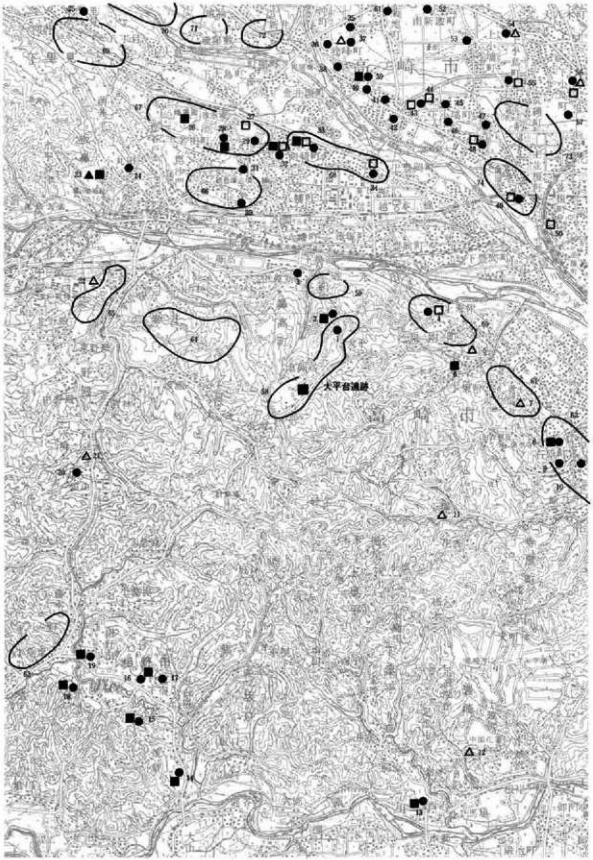
周辺遺跡一覧表

1．中原遺跡	16．仮称横野遺跡	31．八幡中原遺跡	46．前原遺跡	61．仮称諏国神社古墳群
2．板上遺跡	17．仮称小野平遺跡	32．谷津遺跡	47．北海道遺跡	62．仮称石原古墳群
3．拾弐遺跡	18．仮称大平遺跡	33．稲荷塚遺跡	48．上豊榎遺跡	63．仮称下高尾古墳群
4．御部入遺跡	19．仮称広畑遺跡	34．引間遺跡	49．上豊榎南遺跡	64．根岸古墳群
5．乗附廃寺	20．仮称山茶遺跡	35．上屋敷前遺跡	50．幅遺跡	65．岩井古墳群
6．諏訪平遺跡	21．桑原峠窯跡	36．零原遺跡	51．道下遺跡	66．仮称八幡観音塚古墳群
7．諏国神社遺跡	22．岩井遺跡	37．六反田遺跡	52．卯前遺跡	67．仮称八幡若田古墳群
8．清水下遺跡	23．古城遺跡	38．住吉遺跡	53．稲荷前遺跡	68．仮称八幡剣崎古墳群
9．毛無遺跡	24．仮称小丸田遺跡	39．屋敷前遺跡	54．二ノ宮遺跡	69．仮称下里見古墳群
10．岡ノ街道遺跡	25．仮称北村遺跡	40．諏訪前遺跡	55．森下遺跡	70．仮称本郷奥原古墳群
11．小屋窯跡	26．若田遺跡	41．新井遺跡	56．下小鳥遺跡	71．仮称本郷道場古墳群
12．岩崎窯跡	27．剣崎遺跡	42．永吞遺跡	57．石田境遺跡	72．仮称本郷新井古墳群
13．東吹上遺跡	28．大鳥原遺跡	43．貴遺跡	58．仮称乗附五ツ塚古墳群	73．仮称上豊榎古墳群
14．仮称後賀遺跡	29．大塚遺跡	44．八反田遺跡	59．小林山古墳群	74．仮称筑縄古墳群
15．仮称白岩遺跡	30．後原遺跡	45．天神谷遺跡	60．御部入古墳群	

注　遺跡の位置・名称については「群馬県遺跡地図　群馬県教育委員会　昭和48年」を基本とし、その他、報文等を参考にした。

周辺遺跡分布図のマーク仕様

▲ 旧石器時代　■ 縄文時代　□ 弥生時代　○ 古墳時代　△ 奈良・平安時代



第３図　周辺遺跡分布図（国土地理院発行１／50,000　榛名山・富岡使用）

第3章　基本土層

大平台遺跡の基本土層は下記の通りであるが、これはＡ区を中心とした部分である。調査対象地は南から北へ下り込む緩やかな傾斜面にあり、南のＢ区が高く北のＡ区へ台地状の緩やかな尾根筋が走り、東・西両端は埋没谷へ下り込んでいる。Ａ区とＢ区は約100ｍの距離をおいて比高差が約８ｍある。Ｂ区では第１層上面から第５層上面まで30～50cm程度で、間層も１層ほどである。Ａ区では第１層上面から第５層上面まで0.70～1.00ｍ程度で、０ライン以北では間層がさらに分層される。東・西両端部では第１層上面から第５層上面までの深さが1.50～2.20ｍと深くなり、間層がさらに分層される。

第１層　表　土　　褐色を呈する砂質土で浅間Ａ軽石を多量に含んでいる。

第２層　黒色土　　やや砂質の土層で上面に浅間Ｂ軽石の堆積が見られる部分がある。

第３層　明褐色土　　やや粘性の強い土層で縄文時代の遺物を多量に包含している。

第４層　黒褐色土　　粘性の強い土層で上面より縄文時代の遺物が多く出土する部分がある。

第５層　黄褐色ローム層　確認されない場所もあり、良好な部分で10～20cm程度の厚さである。

第６層　板鼻軽石層（As－YP）20～40cm程度の堆積が認められた。約12,000年前の降下とされる。

第７層　淡黄褐色ローム層　概報ではAs－BPを含むとしたが、As－SPの可能性もある軽石を含む。

Ａ区５号住居跡を横断する断層

Ａ区のＪ－17からＬ－21にかけてとＬ－15からＬ－17にかけて、そしてＫ－16において幅約２ｍの蛇行して東西に走向する断層が確認された。時期は縄文時代以降である。遺跡周辺は地滑り地帯であり、Ａ区とＢ区の中間にある地形的段差もその名残りと推定される。

第4章　縄文時代の遺構と遺物

1．概　　要（付図1）

大平台遺跡は縄文時代の遺構・遺物を主体とする遺跡である。遺構・遺物の分布は約50mの距離をおいて北のA区と南のB区の2地点に分かれる。両区は地形的にも段差を生じており、比高差は約8mである。

A区は幅約80m、距離約100mの北方へ緩やかに下る台地上にあり、A区北端の町道以北は約2mの段差があり地形的には隔絶している。調査では中期を中心とする竪穴住居跡35軒とこれらの住居跡に伴う土坑が147基確認された。

B区はA区より進なる台地の頂部にあたり、径約100mほどのやや楕円形をした平坦面に立地している。B区はこの頂部平坦面の南半部にあたる。B区の南約100mは東方へ流下する小河川の崖端となり、急角度で谷に落ち込んでいる。B区では前期初頭の竪穴住居跡1軒と中期の竪穴住居跡6軒が確認され、中期の土坑が69基確認された。

出土遺物としては早期の押型文系の土器片が出土し隔絶するが、早期後半条痕文系土器から後期加曽利B式まではほとんど断続なく出土している。また、県内では出土例の少ない釣手形土器やヒスイ製大珠も各々1点出土した。

遺跡のある碓氷川右岸の岩野谷丘陵は低丘陵ながら、地形的には狭峻で水利に乏しい地帯である。この地形的条件の中にあって、遺跡地は北面する台地ではあるが丘陵では稀な平坦な地形が広がる地帯であり、遺跡の北西約100mには北方へ流下する寺沢川の水源にあたる湧水がある。

大平台遺跡は岩野谷丘陵中の居住適地として、湧水の東縁部に営まれた縄文中期を主体とする丘陵中の中核的集落である。

2．住　居　跡

A区1号住居跡（第5、6図　図版6、32）

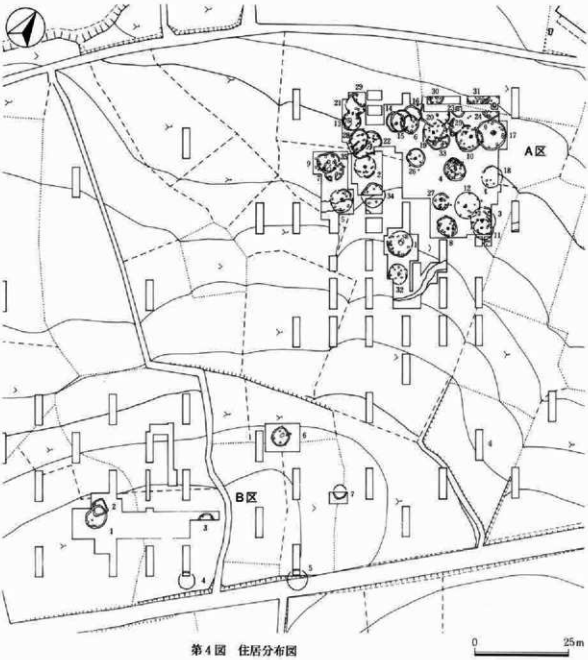
A区の南縁部のL－17に位置している。他の遺構とは重複せず、A区32号住居跡（以下、A区32住と略）の北2m、A区8住の西7mにある。

住居北半のプランは確認できなかったが、径約6.80m規模の円形をなすと推定される。出入口遺構と推定される位置や柱穴配置から主軸方位はN－45°－Eである。

周壁は残存状態の良好な部分で28cmを計り、やや斜めに立ち上っている。床面はローム層中に築かれ、やや凹凸があり炉周縁部がわずかに窪んでいる。柱穴より内部は固く締まっており、炉の南東床面が径約30cmにわたり焼けていた。周溝は北半部が不明であるが全周していたものと推定され、確認された周溝は幅16～37cm、最も深い部分で28cmを計り、断面形はU字状をなす。

主柱は6本と考えられ、1回の改築が行なわれている。主柱穴構成は Pit 1－3－5－7－9－11か12と Pit 1－2－4－6－8－10か11が考えられる。また、他に南東周溝寄りに3本の浅い柱穴状 Pit が確認された。

炉は中央部よりやや北東寄りに位置し、柱穴と同様に1回の改築を行なっている。北の良く焼けている炉の方が古く南が新しい。両者の平面形は不整楕円形をなし、ともに皿状の断面形で底面がやや凸凹している。規模は北が0.96×1.45m、深さ18cmで、南が1.07×1.15m、深さ38cmである。2基の炉とも縁石の抜き取り痕があり、炉体土器の抜き取り痕跡もある所から、2基とも炉体土器を持つ石囲い炉であったと推定される。



第４図　住居分布図

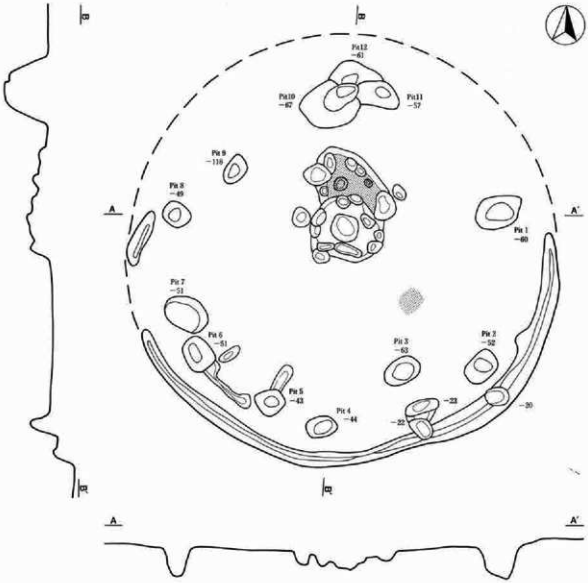
なお、Pit ５と６は小溝によって結ばれ、さらに両者の柱穴から住居内部へ小溝が40～50cm延びており、住居の出入口部に付属する遺構と考えられる。

住居の覆土は自然に堆積した様相を示し、遺物は覆土や床面上から少量出土した。また、第６図１の深鉢がPit ７の脇の床面から横位で出土し、ヒスイ製大珠（第102図１）１点が覆土中より出土した。本住居跡の時期は出土遺物から加曽利E３式第Ⅰ段階と考えられる。

A区２号住居跡（第７、８図　図版７－１、33）

A区西縁部のK－17に位置する。A区34住の北２ｍにあり、A区35住に切られている。土坑との重複はないが、炉の東床面が1.20×2.0ｍの範囲で攪乱を受けている。

ローム層の上面に築かれていたと推定され、プランは南東部の立ち上りと北半の一部で周溝を確認しただ



第5図　A区1号住居跡

0　2m

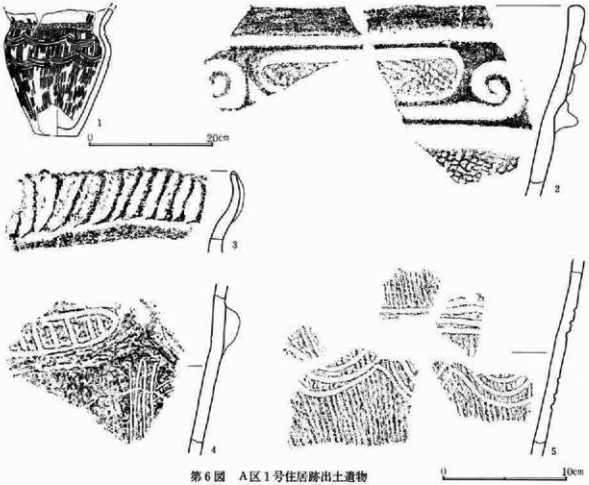
けでほとんど検出できなかった。一部確認されたプランや遺物の出土範囲から、規模が径約6ｍほどで円形をなしたものと推定される。炉の方向性や柱穴配置から主軸方位はN－22°－Wと推定される。

周壁は良好な部分で8cm程度が確認されただけで、一部残存した周溝は幅が35cm、深さ5cmほどである。床面も面として明確には確認できなかった。

また、数多くの柱穴状Pitが確認されたが、プランも不鮮明であまり深くはなかった。これらの柱穴状Pitの中で位置的にはPit 1～4が主柱穴配置に合致しており、2本の柱穴を欠くが6本柱の主柱配置であったと推定される。

炉はほぼ中央に位置したものと推定され、規模が61×70cmの方形の石囲い炉である。炉は長楕円形の礫4石で四辺を囲み、コーナー部に小礫を詰めている。炉床はあまり焼けていなかったが、炉の縁石は火を受けた痕跡があり、1石は熱によるヒビ割れを起こしていた。

覆土は自然に埋没したものと推定され、覆土中よりやや多くの土器片や石器片が出土した。第8図1は住



第６図　Ａ区１号住居跡出土遺物

居北側の周溝に近接して正位で出土し、床面に接していたと推定される。２は南壁寄りの部分から横位で出土し、これも床面に接していたと推定される。図示した他の土器は覆土中より破片で出土した。本住居跡は出土遺物から加曽利Ｅ３式第Ⅰ段階と考えられる。

Ａ区３号住居跡（第９、10図　図版７－２・３、34－１）

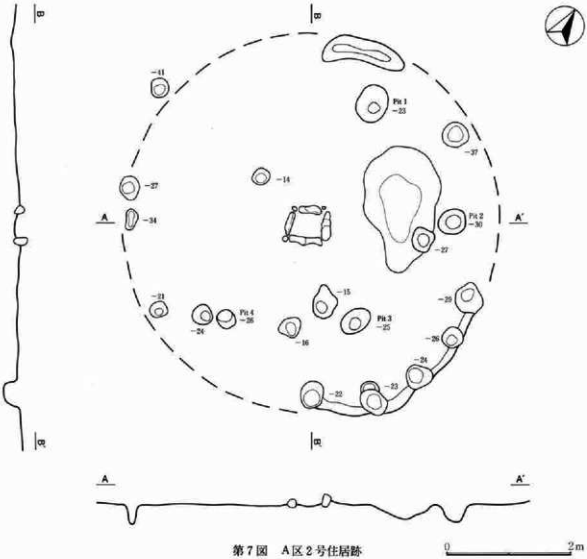
Ａ区東縁部のＬ－20に位置し、東半部は未調査である。Ａ区８住の東４ｍにあり、Ａ区11・12住を切っていると考えられ、本住居跡の炉の南東２ｍにＡ区11住の炉がある。

ローム層上面に築かれていたと推定され、プランは周溝の一部を検出しただけでほとんど確認できなかったが、推定される規模は径約7.40ｍ程度でプランはやや楕円形をなしていたと考えられる。炉の長軸方向から主軸方位はＮ－94°－Ｅと推定される。

床面も面として確認することができなかった。また、一部確認された周溝はやや屈曲して周り、幅12～33㎝、深さは平均13㎝で断面形はＵ字状をなしていた。

数多くの柱穴状 Pit が確認されたが、主柱穴構成は不明である。炉は住居のほぼ中央に位置したと推定され、規模75×80㎝の炉体土器を持つ方形の石囲い炉である。炉体土器は小型の深鉢土器の胴部が用いられており、炉の北側縁石に近接して正位で据えられていた。また、炉の縁石は南北辺に１石、東西辺に２石ずつの礫を据えており、検出時において一部の縁石がずれ込んでいた。

覆土は自然に埋没した様相を示し、覆土中より少量の土器片や石器片が出土した。本住居跡の時期は炉体土器により、加曽利Ｅ２式に併行する時期と考えられる。



第7図　A区2号住居跡

A区4号住居跡（第12、13図　図版8、34－2）

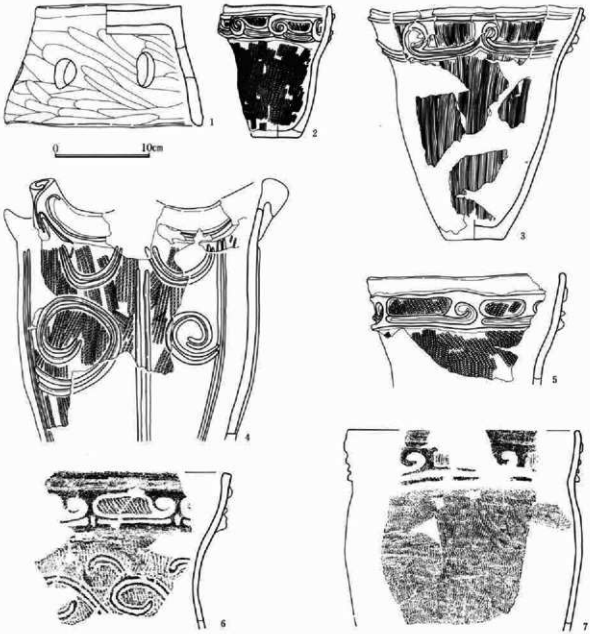
A区中央部のM－19に位置している。A区10住の南3mでA区27住の北5mにあり、A区35・66～64号土坑と重複している。

プランは不整円形をなし、規模は5.45×6.10mである。出入口部と炉の位置や主柱穴配置から、主軸方位はN－11°－Eである。(Pit 3・4・9には周溝が延びておりこの部分が出入口部と考えられる。)

周壁は高さ10－50cmが確認され、ほぼ直に掘り込まれていた。床面はローム層からAs－YP層中に築かれ、炉に向かってわずかに窪んでおりやや凸凹している。主柱穴内部は固く締まっていた。周溝は東西壁には巡らず、南北壁のみ周っていた。確認された周溝は幅15～34cm、深さ5－18cmで断面形はU字状をなしていた。

主柱は6本柱で1回改築を行なっている。主柱穴構成はPit 1－2－3－4－5－6とPit 7－8－9－10－11－12が考えられる。なお、住居内には補助柱穴と考えられるPitがやや数多く確認された。また、周溝の回らない東西壁に沿って、壁柱穴と推定される径5－12cm、深さ10cm前後の小Pitが多数確認された。

炉も1回改築を行なっており、中央部よりやや南に寄った規模1.30×1.76m、深さ28cmの不整形をなす規模の大きい方が古く、ほぼ中央に位置し規模約1m四方で深さ21cmの同じく不整形をなす小規模な方が新しい。古い方の1基は縁石等の抜き取り痕が不明で規模も炉としては大きいが、周壁が一部焼けており焼土の



第８図　Ａ区２号住居跡出土遺物

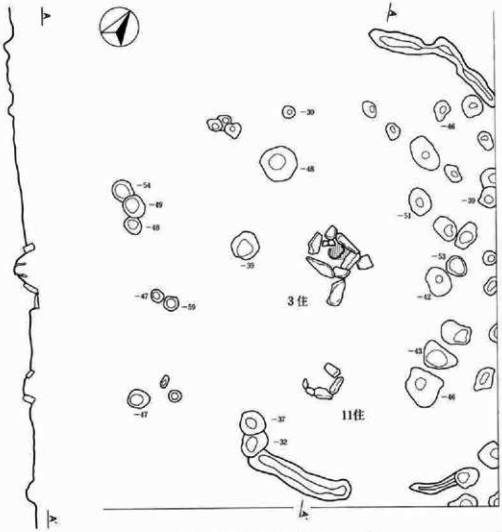
堆積も認められ、改築時に破壊された炉と考えられる。また、第13図３が北壁に接して横位で潰れた状態で出土した。炉の形状は不明である。新しい方の１基は縁石の抜き取り痕が残存し、第13図１が横位で潰れた状態で出土した。この炉は炉体土器を持つ方形の石囲い炉であったと推定される。

覆土は自然に埋没した様相を示し、覆土中より多量の土器片や石器片が出土した。第13図２・４は覆土中の出土である。本住居跡の時期は炉体土器により加曽利Ｅ３式第Ⅰ段階と考えられる。

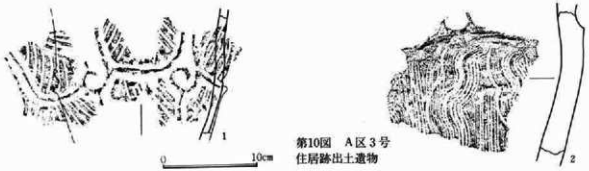
Ａ区５号住居跡（第14、15図　図版９、35）

Ａ区西縁部のレ－16に位置する。他の住居・土坑と重複せず、Ａ区34住の西３ｍ、Ａ区７住の南４ｍにある。住居の南半部に断層が貫入しており床面に段差を生じている。

プランには北壁の立ち上がりの一部が確認されただけである。平面形は円形をなすと考えられ、規模は径

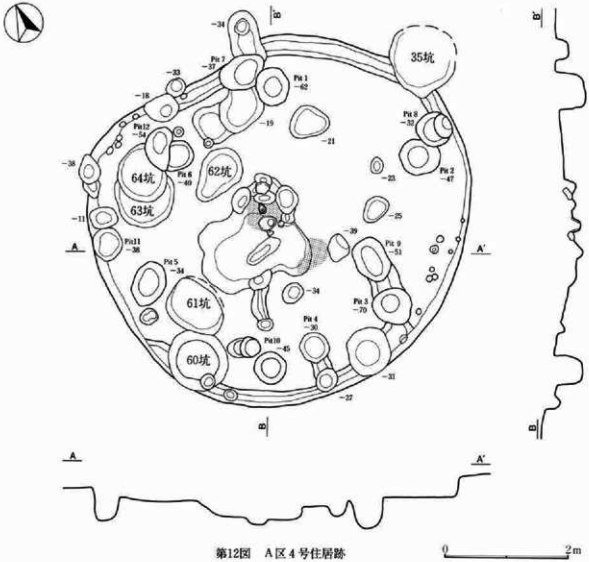


第9図　A区3・11号住居跡



第10図　A区3号
住居跡出土遺物

第11図　A区11号住居跡出土遺物



第12図　Ａ区４号住居跡

約6.5mほどと推定される。主軸方は主柱穴配置からＮ－61°－Ｗと考えられる。

周壁は良好な部分で高さ15cmを計る。床面はローム層中に築かれ、凹凸が著しく良好な面としては確認できなかった。周溝は確認されなかった。主柱はPit １～７の７本柱と考えられる。

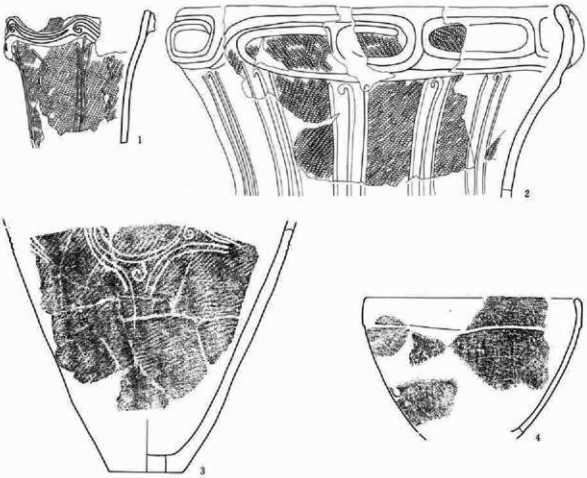
炉はほぼ中央に位置し、規模44×48cm、深さ15cmの不整楕円形をなす掘り方が確認された。周壁に沿って縁石の抜き取り痕が部分的に確認され、第15図１の底部を打ち欠いた浅鉢が北壁寄りに正位で据えられていた。また、炉床は非常に良く焼けていた。以上の状態から炉は炉体土器を持つ長方形の石囲い炉であったと考えられる。また、炉の東縁に高さ40cmで25cm四方の石柱が立っていた。

覆土はやや乱れていたが自然に埋没した様相を示し、覆土中より多量の土器片や石器片が出土した。第15図４は炉上面に横位で押し潰れた状態で出土した。２・３、５～９は覆土中より出土した。本住居跡の時期は炉体土器や出土遺物から加曽利Ｅ３式第Ⅰ段階と考えられる。

Ａ区６号住居跡（第16、17図　図版10、36－１）

Ａ区北縁部のＮ－18に位置している。Ａ区19住の西２ｍ、Ａ区26住の北４ｍにあり、Ａ区14～16住を切っている。土坑との重複はない。

プランは不整円形をなし、出入口部と考えられる南東壁がわずかに突出している。規模は4.65×5.10ｍで、



第13図　A区4号住居跡出土遺物

炉の長軸方向や出入口部の位置から考えられる主軸方向はN－48°－Wである。

周壁は良好な部分で高さ40cmを計り、ほぼ直に立ち上っている。床面 As－YP 層中に築かれており、平坦であるが軟弱であった。周溝は全周し、幅14～45cm、深さ5～14cmで断面形はU字状をなしていた。主柱穴配置は明確ではないが Pit 1－2・4－6が考えられ、6本か7本主柱と推定される。

炉は中央部より北西壁に寄った位置にあり、長方形の石囲い炉で規模は51×84cm、深さ16cmである。炉の南東辺の縁石には長さ47cmの緑泥片岩製の砥石が1石据えられており、他の部分にも磨石2石が用いられていた。炉床の焼けは弱いが、縁石は火を強く受けた痕跡を留めていた。

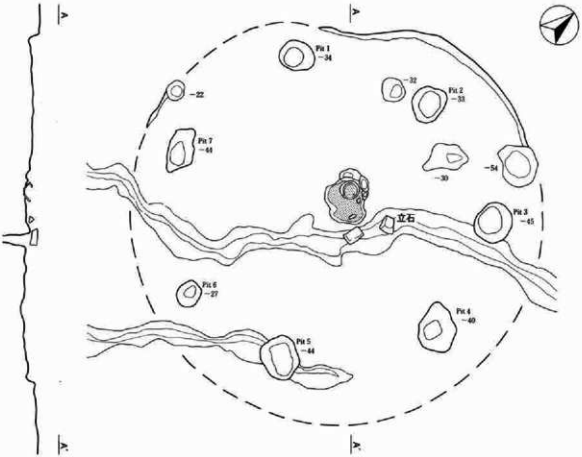
また、南東壁が周溝とともに長さ75cmにわたり、43cmほど住居外へ突出していた。この突出部分の基部には径約60cm、深さ50cmの Pit が掘られていた。この Pit の性格は不明であるが、この突出部が住居の出入口部と考えられる。

覆土は自然に埋没した様相を示し、覆土中や床面上より土器片や石器片が少量出土した。本住居跡の時期は確定的ではないが加曽利E3式第Ⅲ段階と推定される。

A区7号住居跡（第21、22図　図版36－2）

A区西縁部のM－16に位置している。A区2住の西3m、A区5住の北5mにあり、A区9住を切っている。土坑との重複はない。

北半部のプランは確認できなかったが他の部分では立ち上がりを確認しており、プランは不整楕円形をな



第14図　Ａ区５号住居跡　　0　2m

している。規模は5.15×約5.70ｍで、出入口部の位置等から主軸方位はＮ－30°－Ｗである。

周壁は良好な部分で高さ14㎝を計り、ほぼ直に立ち上っている。床面はローム層中に築かれていたが、凹凸が著しく軟弱であった。周溝は北壁部分は不明であるが出入口部を除き全周したものと考えられる。幅14～45㎝、深さ７～28㎝で断面形はＵ字状をなすが底面が凹凸していた。

主柱穴はPit １～６（Pit ５は数本の柱穴が重複しているものと考えられる）の６本主柱と考えられ、他に数本の補助柱穴が確認された。

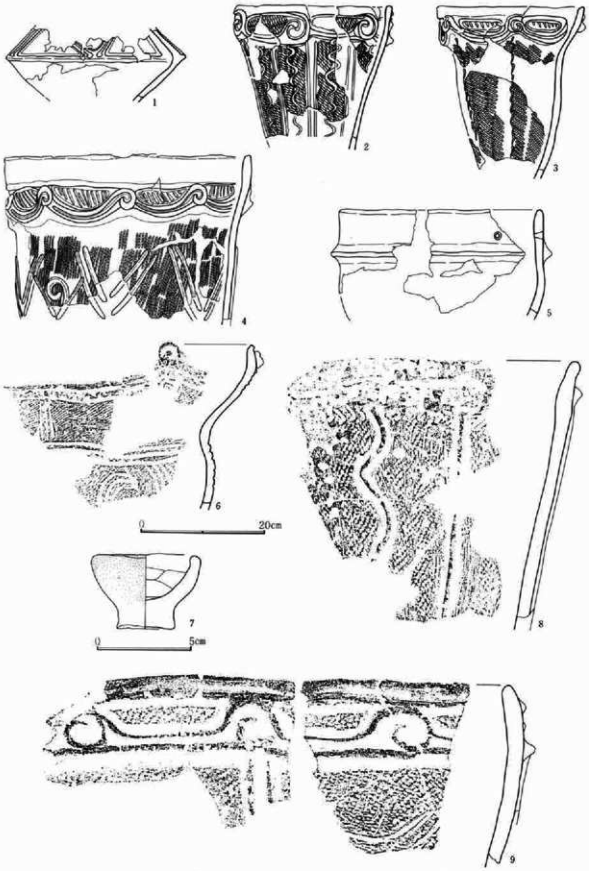
炉は中央部よりやや北寄りに位置している。形状は炉体土器を持つ方形の石囲い炉で、規模は56×64㎝、深さ25㎝である。炉体土器（第22図３）は胴部上半を欠いた深鉢を正位でほぼ中央に据えていた。また、南辺縁石は抜かれており残存した縁石もややずれ込んで検出された。炉はあまり焼けていなかった。

なお、住居の長軸方向にあたる南西壁は周溝が途切れ、深さ40㎝ほどの小溝が住居内に１ｍほど「ハ」の字状に入り込んでおり、この部分が住居の出入口部と考えられ、小溝は出入口部に付属する遺構と考えられる。

覆土は自然埋没の様相を示し、覆土中より多量の土器片や石器片が出土した。第22図１は北西周溝上面より横位で出土した。本住居跡の時期は出土遺物により加曽利Ｅ３式第Ⅰ段階と考えられる。

Ａ区８号住居跡（第24、25図　図版37－１）

Ａ区南縁部のＬ－19に位置している。Ａ区３・11住の西５ｍ、Ａ区27住の南２ｍにあり、他の住居や土坑と重複していない。



第15図　A区5号住居跡出土遺物

プランは不整楕円形をなし、規模は5.30×5.50mで、出入口部の位置や主柱穴配置から主軸方位はN－20°－Wと考えられる。

周壁は良好な部分で高さ26cmを計り、やや斜めに立ち上っている。床面はローム層中に築かれ、やや凹凸があるがほぼ水平で、固く締まっていた。周溝は屈曲を持ち出入口部を除き全周する。幅23～45cm、深さ8～25cmで断面形はU字状をなすが、底面は凹凸があり一定しない。

主柱穴はPit 1－2－4－5－7－8の6本主柱と考えられ、Pit 2と6は補助柱穴と考えられる。床面上には他に7本の柱穴状Pitが確認された。また、周溝内には深さ33～51cmの大小の柱穴状Pitが不定間隔で確認されたが、壁柱穴の可能性もある。

炉は中央部よりやや南に位置し、ほぼ円形を呈する石囲い炉で規模は52×55cm、深さ18cmである。炉の縁石には石皿が1石用いられていた。炉は焼けが弱く、焼土が少量堆積していた。

また、主軸線上の東壁は周溝が約50cm途切れ、この部分の床面は住居外から内部へ緩やかな傾斜を持ち、住居中央部の床面より固く締まっていた。住居プランや主柱穴配置からも、この部分が住居の出入口部と考えられる。

覆土は自然に埋没した様相を示す。遺物は住居南半部に集中する傾向にあり、覆土下部や床面上から少量出土した。第25図に図示した土器も南半部より出土した。本住居跡の時期は出土遺物により加曽利E1式期と考えられる。

A区9号住居跡（第21、23図　図版11、37－2）

A区西縁部のM－15に位置する。A区2住の西4m、A区5住の北5mにあり、A区7住によって切られている。土坑との重複はない。

東壁の一部が確認されなかったが、プランは歪みを持つ不整楕円形を呈している。規模は5.17×6.20mで、住居の長軸方向や主柱穴配置から主軸方位はN－22°－Eと考えられる。

周壁は高さ4～10cm程度が確認されただけである。床面はローム層中に築かれ、凹凸が著しく軟弱であった。周溝はA区7住との重複部分は不明となるが、全周していたものと推定される。幅17～35cm、深さ5～12cmで断面形はU字状をなしている。

主柱穴は1回改築を行なっており、Pit 5－7－8－9－10－11と5－12－13－14－15－16（Pit 5はA区7住の柱穴共通するもので、数本の柱穴が重複している）の構成が考えられる。

炉はほぼ中央に位置し、西辺の縁石4石が残存するだけで他の縁石は抜かれている。掘り方は不整形をなし、規模は0.96×1.05m、深さ20cmである。縁石の抜き取り痕から推定される炉の形状は方形の石囲い炉と考えられる。

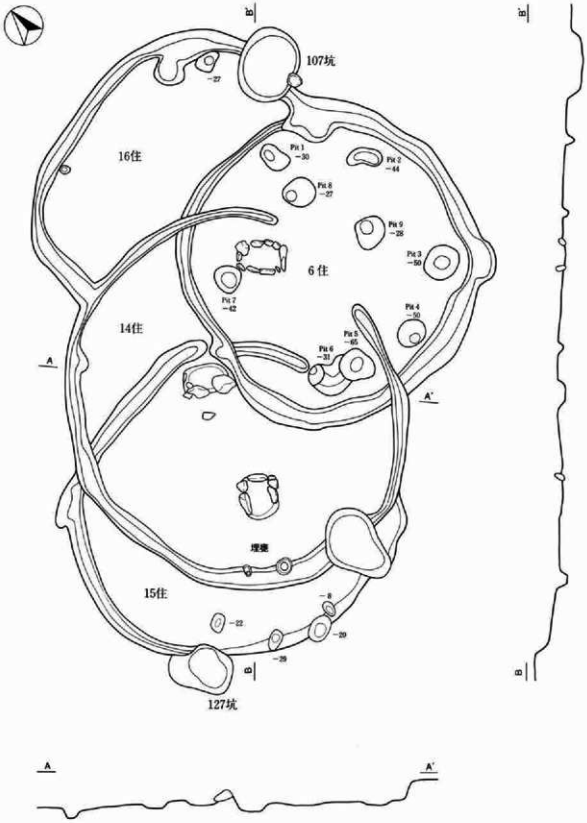
覆土は自然に埋没した様相を示し、覆土中より多量の土器片や石器片が出土した。本住居跡の時期は出土遺物により加曽利E2式段階と考えられる。

A区10号住居跡（第26～28図　図版13、14、38～40）

A区北縁部のN－19に位置している。A区4住の北3mにあり、A区17・25住に切られている。また、A区32・84号土坑と重複している。

プランは北東部がやや張り出す卵形状の楕円形をなしている。規模は6.92×7.70mで、主軸方位はN－138°－Wと考えられる。

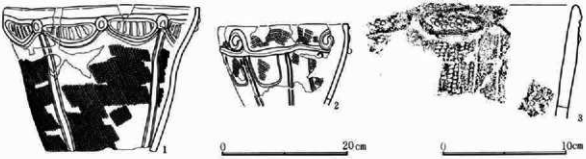
周壁は良好な部分で高さ52cmを計り、ほぼ直に立ち上っている。床面はAs－YP層下のローム層まで掘り下げ、住居北半部はロームと黒褐色土の混入土を客土して床面を水平に構築している（同様の手法はA区1住



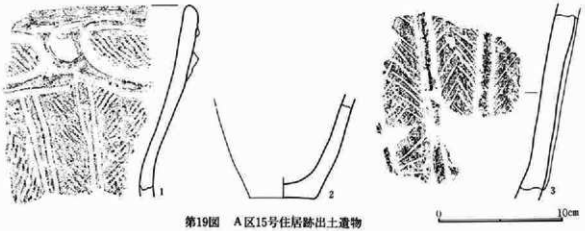
第16図　A区6・14・15・16号住居跡

0　2m

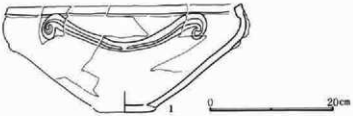
第17図　Ａ区６号住居跡出土遺物



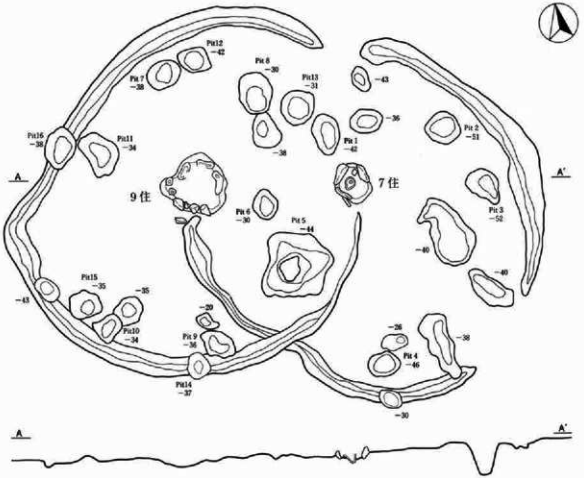
第18図　Ａ区14号住居跡出土遺物



第19図　Ａ区15号住居跡出土遺物



第20図　Ａ区16号住居跡出土遺物



第21図　A区7・9号住居跡　　0　2m

にも見られた)。床面は貼り床されており、2面の貼り床が認められた。床面は覆土が剥がれるように検出され、非常に固く締まっていた。周溝は一部途切れる部分があるがほぼ全周し、幅17～40cm、深さ11～15cmで、断面形はU字状をなしていた。

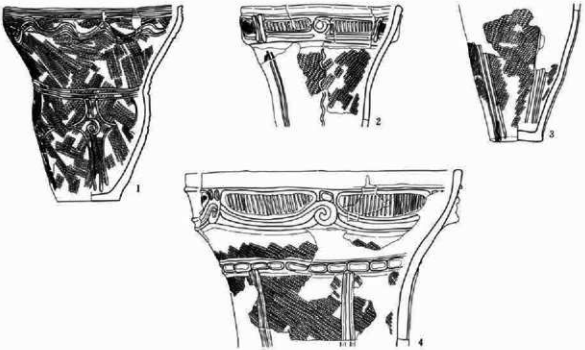
主柱は5本柱で1回改築しており、Pit 1～5とPit 6～10の構成が考えられる。また、床面上に他に9本の柱穴状Pitが周壁に沿って確認された。

炉は中央部よりやや北東に寄った位置にあり改築されていた。残存した炉は方形の石囲い炉で、規模は87×90cm、深さ25cmである。炉の縁石はややずれ込んだ状態で検出され、石皿2石が用いられていた。炉の焼けは弱い。また、炉の南の床面が3ケ所焼けていた。

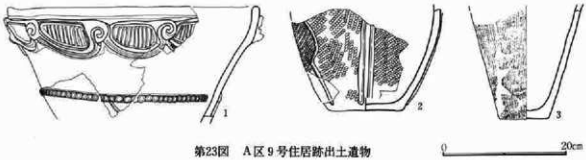
覆土は自然に埋没した様相を示す。覆土中には多量の土器片や石器片が廃棄され、レンズ状に堆積していた。第27・28図の6～8・10は炉周辺の床面から潰れた状態で出土し、1の釣手形土器は炉の西2mの床面上に横位で完形で出土した。他の図示した土器は覆土中より出土した。本住居跡の時期は出土遺物により加曽利E2式と考えられる。

A区11号住居跡（第9、11図　図版7－2、41－1）

A区東縁部のL－20に位置し、未完掘である。A区8住の東5mにあり、A区3住によって切られている。炉だけが確認され、他の構造物は確認できなかった。炉は西縁部の石が抜かれているが、方形の石囲い炉と



第22図　Ａ区７号住居跡出土遺物



第23図　Ａ区９号住居跡出土遺物

考えられ、60cm四方規模と推定される。炉の焼けは弱い。遺物は第11図に図示した土器片の他少量が炉周辺より出土した。本住居跡の時期は出土遺物により加曽利Ｅ式出現期と考えられる。

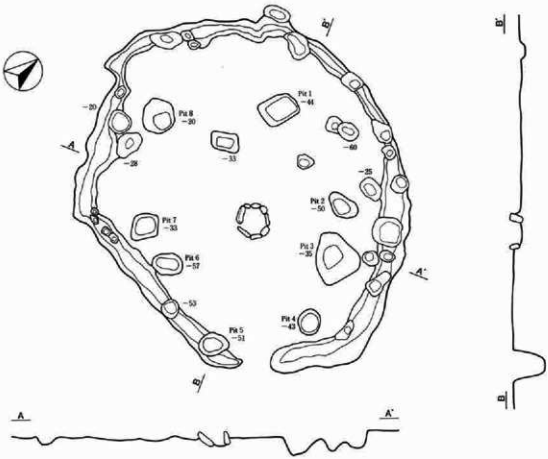
Ａ区12号住居跡（第29～30図　図版15、41－２、42－１）

Ａ区東縁部のＬ－19に位置している。Ａ区４住の東２ｍ、Ａ区８住の北３ｍにありＡ区３住に一部切られていると推定される。また、Ａ区13号土坑と重複している。

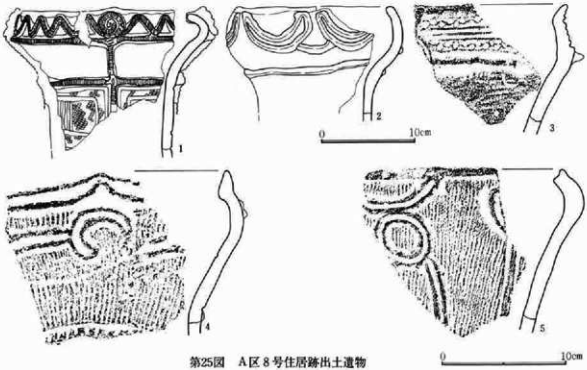
プランの確認はできなかったが、遺物の出土範囲から規模約7.70ｍほどの円形の住居跡と推定される。住居の主軸方位は炉の方向性からＮ－24°－Ｅと推定される。

ローム層上面に構築されていたと考えられ立ち上がりは確認できなかったが、炉周辺は約２ｍの範囲までは床面が確認された。周溝の存在は不明である。推定プラン内には８本の柱穴状小 Pit が確認されたが、主柱穴配置は不明である。

住居内における炉の位置は不明であるが、確認された炉は炉体土器を持つ長方形の石囲い炉である。南北短辺には長楕円形の礫を１石ずつ用い、長辺には礫を複数用いている。西辺の縁石は一部抜かれていた。炉の北東隅に口縁部を欠いた小型の深鉢（第30図１）が炉体土器として正位で据えられていた。炉床の焼けは



第24図　A区8号住居跡



第25図　A区8号住居跡出土遺物

弱いが縁石は熱によるヒビ割れを起こしていた。

覆土は自然に埋没した様相を示し、覆土中より多くの土器片や石器片が出土した。第30・31図に図示した土器片も覆土中からの出土である。また、石鏃２点が出土した。本住居跡の時期は加曽利Ｅ式出現期と考えられる。

第13号住居跡（第32、33図　図版16－１、42－２）

Ａ区北西隅のＮ－16に位置する。Ａ区28住と接し、Ａ区15住の西７ｍにあり、Ａ区21住に切られる。また、Ａ区140号土坑と重複する。

Ａ区21住との重複部分が不明となるが、プランは不整円形を呈する。規模は5.15×5.20ｍで、炉の位置や主柱穴配置から推定される主軸方位はＮ－12°－Ｗである。

周壁は良好な部分で高さ26㎝を計り、やや斜めに立ち上っていた。床面はローム層中に築かれ、床面全体が西壁寄りにある炉に向かって緩やかな傾斜を持っていた。床面はあまり固く締まっていなかった。周溝はない。

床面上には多数の柱穴状 Pit が確認されたが、木の根状の Pit もあり不確実なものもある。推定される主柱穴は改築を１回行なっている可能性があり、Pit １～５の５本主柱の構成と Pit ６～９の８本主柱と推定される構成の時期が考えられる。

炉は中央部より西壁に寄っており、形状は不明であるが縁石が１石確認され、径約55㎝の範囲が焼けていた。炉周辺は皿状に窪んでいた。

覆土は自然に埋没した様相を示し、覆土中より多くの土器片や石器片が出土した。第33図１は北壁寄りの覆土下部より出土した。本住居跡の時期は出土遺物により加曽利Ｅ３式第Ⅲ段階と考えられる。

第14号住居跡（第16、18図　図版10－１・４・５、43－１）

Ａ区北縁部のＯ－18に位置している。Ａ区26住の北６ｍにあり、Ａ区15・16住を切りＡ区６住に切られる。また、Ａ区126号土坑と重複している。

プランはＡ区６住との重複部分で一部不明な部分があるが楕円形を呈し、規模は5.44×6.05ｍである。主軸方位は炉と埋甕の位置関係からＮ－26°－Ｅと考えられる。

周溝は良好な部分で高さ34㎝を計り、ほぼ直に立ち上がる。床面はローム層中に築かれ、平坦であるがあまり固く締まっていなかった。周溝は全周していたものと推定され、幅15～40㎝、深さ平均10㎝程度で断面形はＵ字状をなしていた。柱穴は Pit ６・７が本住居に帰属すると考えられるが、他の柱穴は確認されず主柱穴配置は不明である。

炉は中央部よりやや北寄りに位置しＡ区６住によって一部壊されているが、形状は長方形の石囲い炉と考えられ、規模は37×50㎝、深さ12㎝である。炉床や縁石の焼けは弱い。

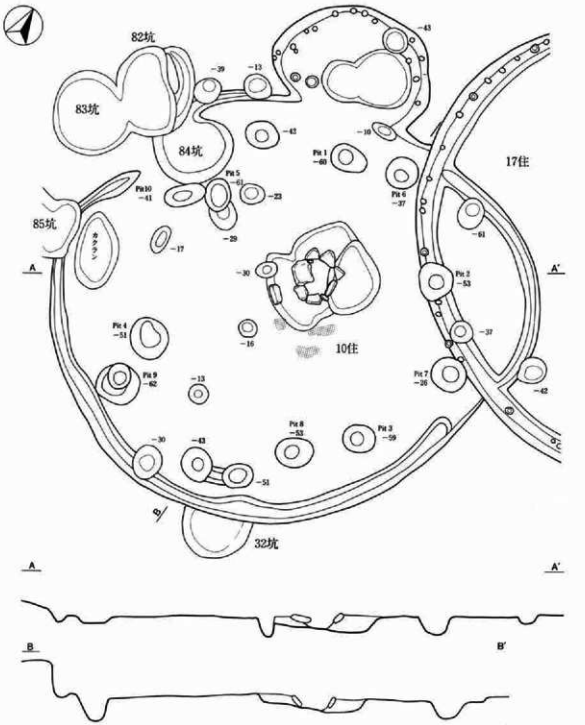
なお、南壁部の周溝内側法面に60㎝の間隔をおいて２基の埋甕が設置されていた。埋甕（第14図１・２）は両者とも胴部下半を欠いた深鉢を用い、正位で据えられていた。

覆土は自然に埋没した様相を示し、覆土や床面上より少量の土器片や石器片が出土した。本住居跡の時期は埋甕や出土遺物により加曽利Ｅ３式第Ⅱ段階と考えられる。

Ａ区15号住居跡（第16、19図　図版10－１・３、43－２）

Ａ区北縁部のＮ－17に位置している。Ａ区24住の東３ｍにあり、Ａ区６・14住に切られ、Ａ区16住を切っていると考えられる。また、Ａ区126・127号土坑と重複している。

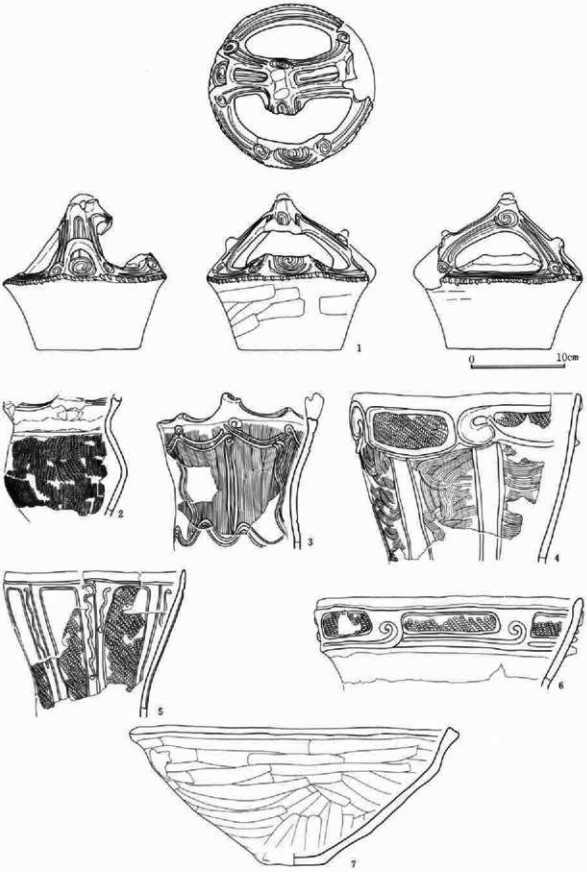
プランはＡ区６・14住との重複部分で一部不明な部分があるが不整円形を呈し、規模は5.00×5.20ｍである。炉の長軸方向から推定される主軸方位はＮ－30°－Ｅである。



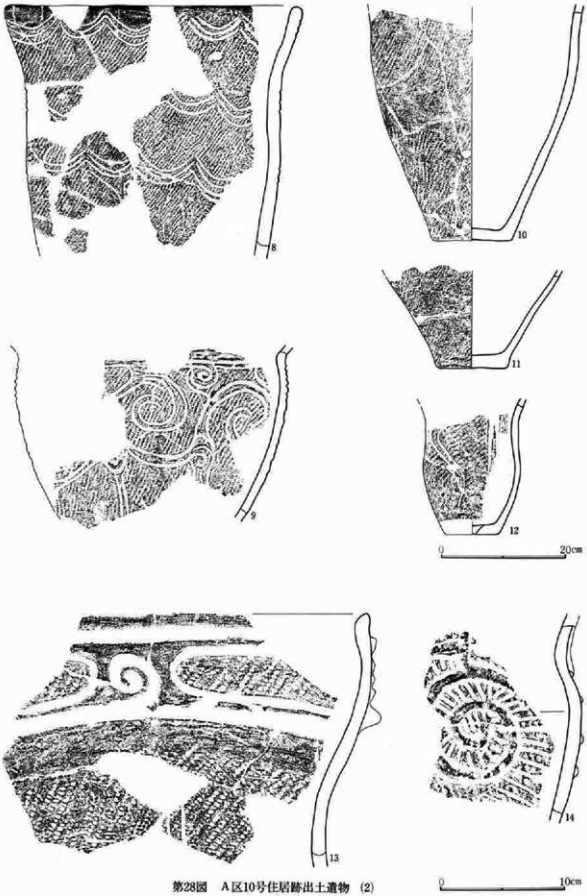
第26図　A区10号住居跡

周壁は良好な部分で高さ34cmを計り、ほぼ直に立ち上っていた。床面はA区14住に大半が切られ不明な部分が多いが、残存した部分ではローム層中に築かれ、平坦で軟弱であった。周溝は住居の北半部のみ巡り、幅18～33cm、深さ平均12cmで断面形はU字状をなしていた。柱穴は南壁部で4本のPitを検出したが、主柱穴配置は不明である。

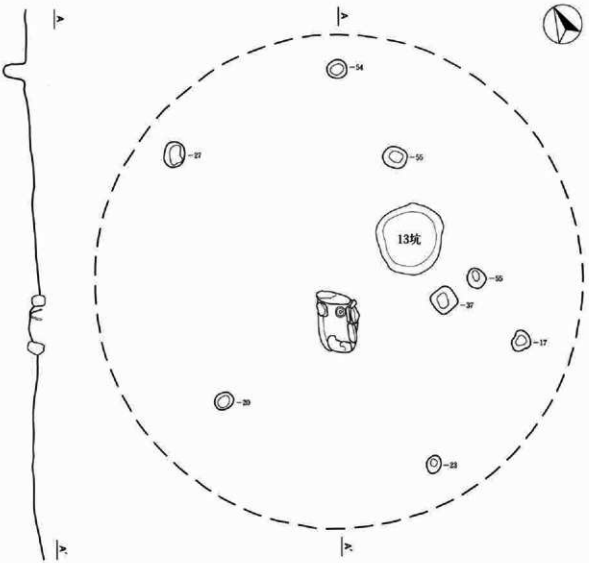
炉はほぼ中央に位置し南辺縁石は抜かれているが、形状は方形の石囲い炉で規模は60×65cm、深さ14cmである。炉の焼けは弱い。



第27図　Ａ区10号住居跡出土遺物　(1)



第28図　A区10号住居跡出土遺物（2）



第29図　Ａ区12号住居跡　　0　2m

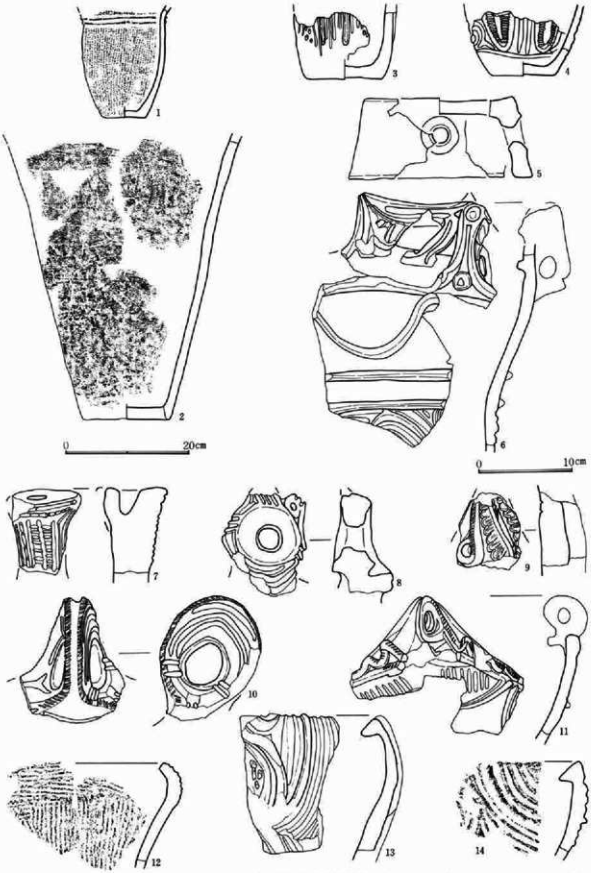
覆土は自然に埋没した様相を示し、覆土中や床面上より石器片や土器片が少量出土した。第19図に図示した土器片は覆土下部より出土したものである。本住居跡の時期は出土遺物により加曽利Ｅ３式第Ⅱ段階と考えられる。

第16号住居跡（第16、20図　図版10－１、43－３）

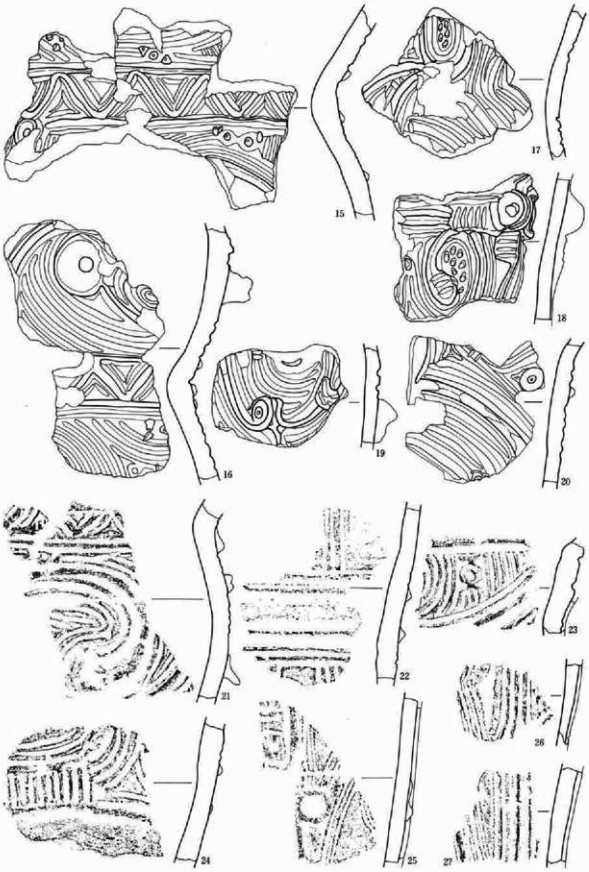
Ａ区北縁部のＯ－18に位置している。Ａ区６・14・22住に切って切られ、Ａ区107号土坑と重複している。住居の北半部だけが確認された。全体形状は不明であるが残存した形状からは隅丸方形をなす可能性もある。規模は4.90ｍ四方前後と推定される。

周壁の立ち上がりは不明で、残存した床面はローム層中に築かれ、平坦であったがやや軟弱である。周溝は残存した部分では全周していた。幅15～32㎝、深さ平均12㎝で断面はＵ字状をなしていた。柱穴は３本の小Pitが周溝に沿って確認されたが、主柱穴は不明である。また、炉も確認されなかった。

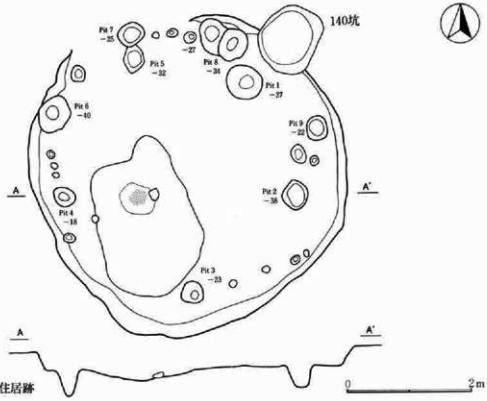
覆土は自然に埋没した様相を示し、覆土中より少量の土器片や石器片が出土した。第20図１の浅鉢は床面近くより出土したものである。本住居跡の時期は加曽利Ｅ１式と考えられる。



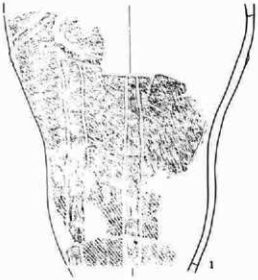
第30図　A区12号住居跡出土遺物（1）



第31図　A区12号住居跡出土遺物　(2)



第32図　A区13号住居跡



第33図　A区13号住居跡出土遺物　0　20cm

A区17号住居跡（第34、35図　図版17、44、45）

A区東縁部のN－20に位置している。A区18住の北5m、A区24住の南1mにあり、A区10住を切っている。また、A区68・69号土坑を切り、A区67・72号土坑に切られる。

プランはほぼ円形をなし、北壁部がやや張り出す。規模は7.95×8.12mで、主柱穴配置等から考えられる主軸方位はN－168°－Wである。

周壁は良好な部分で高さ48mを計り、ほぼ直に立ち上っている。床面はAs－YP層下のローム層に築かれ、平坦でわずかに北方へ傾いている。炉周辺の中央部は床面が特に固く、覆土が剥がれるように検出された。

周溝は全周し、幅20～37cm、深さ平均８cmで断面形はU字状をなしていた。

主柱は Pit １～８の８本柱と考えられ、他に４本の補助柱穴が床面上に確認された。また、周溝内には径５～15cm、深さ８～15cmの小 Pit が不定間隔で多数検出された。これらの小 Pit は壁柱穴の可能性がある。

炉は中央部やや北寄りに位置する。検出時において縁石が一部抜かれ倒れ込んでいたが、炉体土器を持つ長方形の石囲い炉で、規模は0.97×1.25ｍ、深さ30cmである。炉体土器（第35図１）は深鉢の胴部下半を欠いたものをほぼ中央に正位で据えていた。また、縁石には石皿が１石用いられていた。炉の焼けは弱い。

覆土は自然に埋没した様相を示し、覆土中には多量の土器片や石器片が廃棄されていた。第35図の２・８・10は床面から出土し、他は覆土中から出土した。本住居跡の時期は炉体土器や出土遺物により加曽利Ｅ３式第Ⅰ段階と考えられる。

Ａ区18号住居跡（第36、37図　図版18－１、46－１）

Ａ区東縁部のＭ－20に位置し、東半部は未完掘である。Ａ区３住の北６ｍ、Ａ区17住の南４ｍにあり、Ａ区16～18・22～24号土坑を切っている。

プランは北西部分においてわずかに周溝を確認しただけで全体形状は不明であるが、径約5.80ｍ規模の円形をなすと推定される。

住居はローム層上面に築かれていたと考えられ立ち上がりは全く確認されず、床面の検出もできなかった。一部確認された周溝は幅25cm、深さ13cmで断面形はＵ字状をなしていた。プラン内において柱穴状の Pit を13本確認したが、主柱穴配置は不明である。

炉はＡ区22号土坑を切り、ほぼ中央に位置していたと推定される。炉は炉体土器を持つ円形の石囲い炉で、規模は55×60cm、深さ25cmである。炉体土器（第26図１）は両耳壺の胴部下半を撥り切り正位で据え、縁石は炉体土器を巻くように囲んでいた。また、北辺の縁石が一部抜かれていた。炉の焼けは弱く、炉体土器内に少量の焼土が堆積していた。

覆土は自然に埋没した様相を示し、覆土中より少量の土器片や石器片が出土した。本住居跡は炉体土器や出土遺物により加曽利Ｅ３式第Ⅳ段階と考えられる。

Ａ区19号住居跡（第38、39図　図版18－２、46－２）

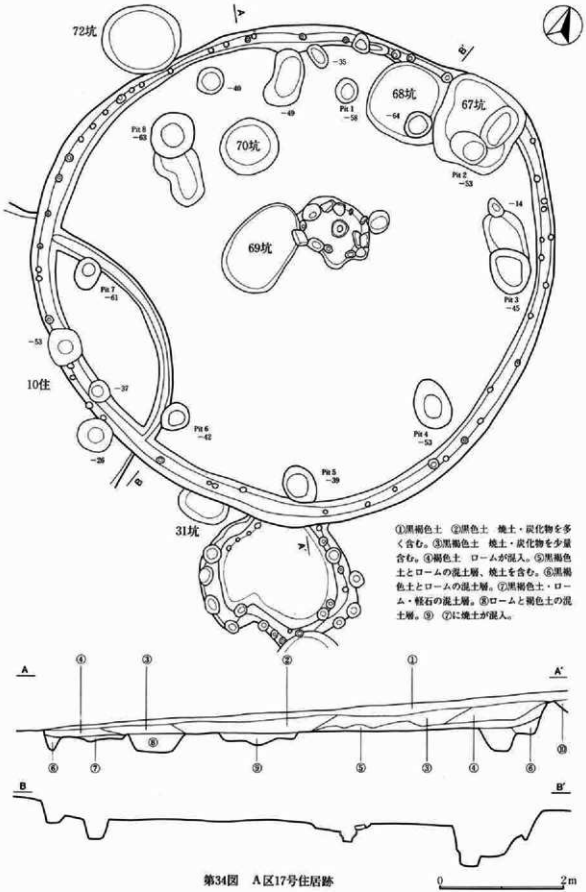
Ａ区北縁部のＮ－18に位置する。Ａ区６住の東２ｍ、Ａ区10住の西３ｍにあり、Ａ区33住を切りＡ区20住に切られる。また、Ａ区90・92～96・100・101号と重複している。

西半部のプランは確認できなかったが不整楕円形をなすと考えられ、規模は5.95×約6.80ｍである。炉の長軸方向や主柱穴配置から推定される主軸方位はＮ－34°－Ｗである。

プランは周溝のみの確認であり、立ち上がりは確認できなかった。床面はローム層上面に築かれていたと考えられ、やや凹凸があり軟弱であった。周溝は全周したものと推定される。確認された周溝は幅平均20cm、深さ５－12cmで断面形はU字状をなしていた。

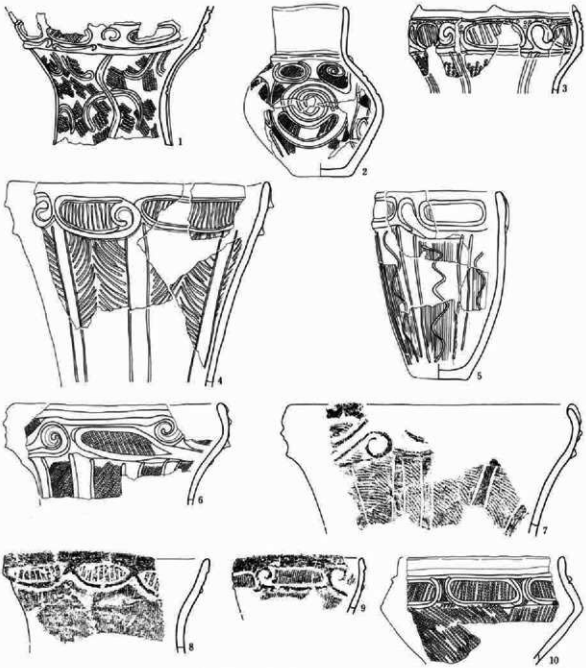
主柱穴配置は Pit １～６の６本主柱、あるいは Pit １－２－４－５の４本主柱が考えられる。なお、床面上に他には数本の柱穴状Pitが確認された。また、周溝内にも深さ８～25cmの大小の Pit が不規則に確認されたが、壁柱穴の可能性もある。

炉はほぼ中央部に位置し、Ａ区95号土坑を切って構築されている。炉は炉体土器を持つ方形の石囲い炉で、規模は0.75×1.00ｍ、深さ24cmである。炉体土器（第39図１）は胴部下半を撥り切った深鉢を用い、正位でほぼ中央に据えられていた。なお、炉体土器の上面には偏平な円礫が蓋石状に置かれていた。また、縁石は一部が抜かれていた。炉の焼けは弱く焼土が少量堆積していた。



①黒褐色土　②黒色土　焼土・炭化物を多く含む。③黒褐色土　焼土・炭化物を少量含む。④褐色土　ロームが混入。⑤黒褐色土とロームの混土層、焼土を含む。⑥黒褐色土とロームの混土層。⑦黒褐色土・ローム・軽石の混土層。⑧ロームと褐色土の混土層。⑨　⑦に焼土が混入。

第34図　A区17号住居跡



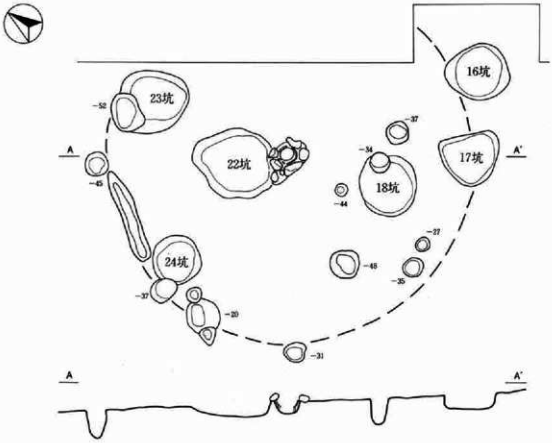
第35図　A区17号住居跡出土遺物

覆土は自然に埋没した様相を示し、覆土中よりやや多く土器片や石器片が出土した。本住居跡の時期は炉体土器により加曽利E３式第Ⅲ段階と考えられる。

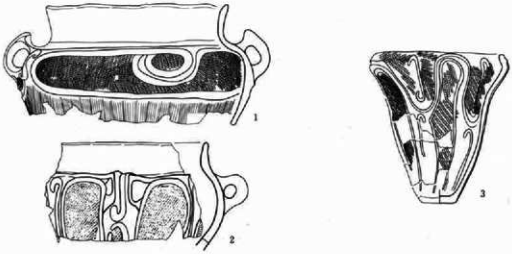
A区20号住居跡（第41、42図　図版18－３、47－１）

A区北縁部のO－18に位置し、北半部は未完掘である。A区23住の西に接し、A区16・19住を切り、A区30住に切られる。また、A区97－106号土坑と重複する。

黒褐色土中に構築され、楕円形を呈すると考えられる。規模は約7.30×7.75mと推定される。主軸方位は炉や住居の長軸方向からN－80°－Wと考えられる。



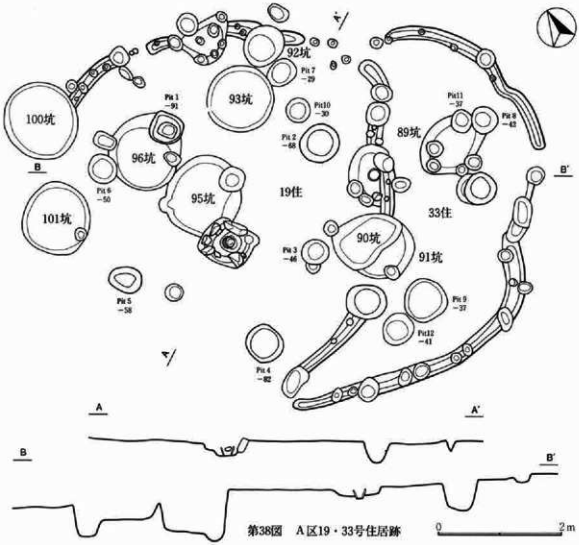
第36図　A区18号住居跡　0　2m



第37図　A区18号住居跡出土遺物　0　20cm

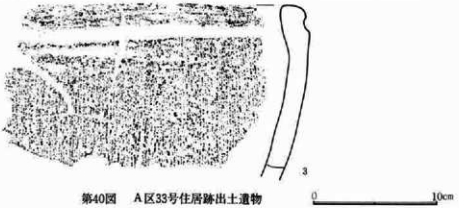
周溝のみの確認であり立ち上がりは不明である。床面は平坦で炉周辺がやや固く締まっていたが、他の部分は軟弱であった。周溝は全周したものと推定される。規模は幅平均18cm、深さ平均8cmで断面形はU字状をなしていた。柱穴は床面上や周溝中に8本が確認されたが、主柱穴配置の確認まではいたらなかった。

炉は中央部よりやや東寄りに位置している。炉は炉体土器を持つ長方形の石囲い炉で、規模は63×87cm、深さ28cmである。炉体土器（第42図1）は胴部下半を擦り切った深鉢を逆位で東辺寄りに据えていた。また、

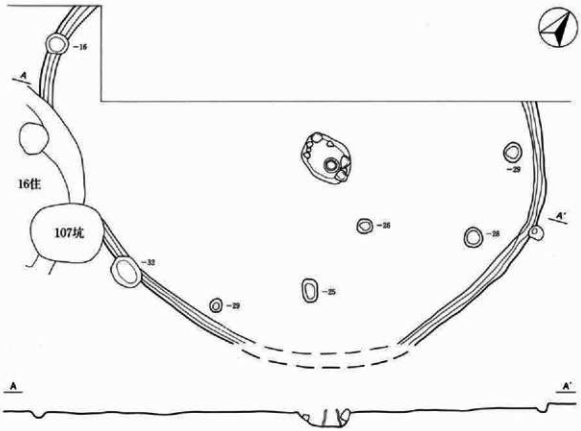


第38図　A区19・33号住居跡

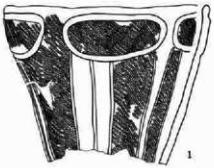
第39図　A区19号住居跡出土遺物



第40図　A区33号住居跡出土遺物



第41図　A区20号住居跡



第42図　A区20号住居跡出土遺物

縁石は抜かれていた部分が多いが、一部に石皿を用い比較的小ぶりの礫を用いていた。炉の焼けは弱く、焼土の堆積もほとんど見られなかった。

覆土は自然に埋没した様相を示す。遺物は住居東半部の覆土や床面にやや集中する傾向が認められた。本住居跡の時期は炉体土器により加曽利Ｅ３式第Ⅳ段階と考えられる。

A区21号住居跡（第43、44図　図版16－１・２、47－２）

A区北西隅のＯ－16に位置している。A区22・28・35住の北４ｍにあり、A区13・29住を切っている。また、A区141・143号土坑を切っている。

東壁の一部が未完掘であり、南北壁の一部も確認できなかったが、プランは不整円形をなすと考えられる。規模は径約5.80ｍ程度と推定される。また、主軸方位は炉の方向性によりＮ－18°－Ｗと推定される。

周壁は良好な部分で高さ22cmを計り、やや斜めに立ち上っていた。床面はローム層中に築かれており、炉

に向かってわずかに傾斜を持ち、やや凸凹している。また、あまり固く締まっていなかった。周溝は西半部のみ確認され、幅24～35cm、深さ平均12cmで断面形はＵ字状をなしていた。９本の柱穴状 Pit が確認されたが、Pit ３以外はいずれも浅く、主柱穴配置は不明である。

炉は中央部よりやや南に位置しＡ区141号土坑を切っている。形状は炉体土器を持つ方形の石囲い炉で、規模47×57cm、深さ18cmである。炉体土器（第44図１）は深鉢の口縁部と胴部下半を欠いた頸部～胴部上半を用い、炉のほぼ中央に正位で据えていた。なお、炉体土器の上面には長楕円形の礫が蓋石状に水平に置かれていた。また、縁石は南辺と東辺に１石ずつ確認され、他の辺は石が抜かれていた。炉床の焼けは弱いが、縁石は熱を受けヒビ割れを起こしていた。

覆土は自然に埋没した様相を示し、覆土中よりやや多くの遺物が出土した。本住居跡の時期は炉体土器や出土遺物により加曽利Ｅ３式第Ⅳ段階と考えられる。

Ａ区22号住居跡（第46、47図　図版19－１、48－１）

Ａ区西縁部のＮ－17に位置する。Ａ区15住の南３ｍにあり、Ａ区35住を切りＡ区28住に切られていると考えられるが、遺物が混入した部分もありプランも不明瞭であり、不確定の要素がある。また、Ａ区133～135・138号土坑と重複している。

プランは一部未完掘で、Ａ区28・35住との重複部分は部分的な確認に留まるが、北半部は周溝を伴い明確に確認できた。プランは不整円形をなすと考えられ、規模は約5.86×6.30ｍである。主軸方位は住居の長軸方向によりＮ－118°－Ｗと推定される。

周壁は良好な部分で高さ８cmを計る程度である。床面はローム層中に築かれ、北半部は固く締まった面が確認できたが、南半部は凹凸が著しく面としては確認できなかった。

周溝は北半部のみ確認され、幅20～28cm、深さ平均13cmで断面形はＵ字状をなしていた。また、住居内には多数の柱穴状 Pit が確認されたが、プランも不明瞭で深さも一定でなく主柱穴配置は不明である。また、炉は確認できなかった。

覆土は自然に埋没した様相を示し、覆土中よりやや多くの土器片や石器片が出土した。本住居跡の時期は出土遺物により加曽利Ｅ３式第Ⅲ段階と考えられる。

Ａ区23号住居跡（第49、50図　図版20－１、48－２）

Ａ区北縁部のＯ－19に位置し、住居の北半部は未完掘である。Ａ区10住の北３ｍにありＡ区25住に接する。また、Ａ区87号土坑と重複する。

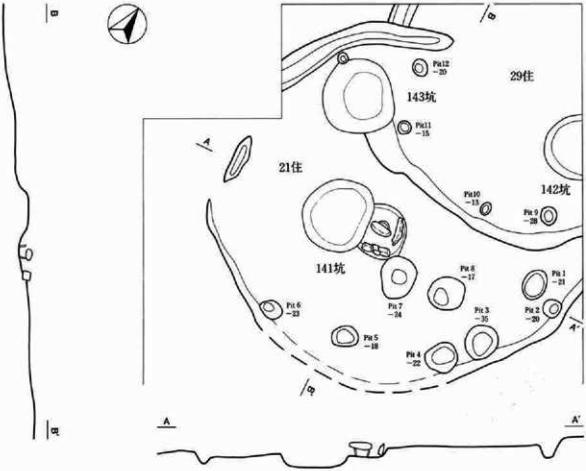
プランは炉周辺と南半部を確認しただけであるがやや楕円形を呈すると推定され、規模は4.00×4.50ｍ程度と推定される。主軸方位は住居の長軸方向からＮ－91°－Ｗと推定される。

周壁は良好な部分で高さ30cmを計り、ほぼ直に立ち上っていた。床面はローム層中に築かれ、平坦でやや固く締まっていた。特に炉周辺は固く締まっていた。

周溝は南半部では全周していた。幅平均25cm、深さ５cmで断面形はＵ字状を呈していた。柱穴は住居内において１本も確認されなかった。

炉は埋甕炉で第50図１の大型の深鉢の胴部下半を打ち欠いた胴部中位だけが検出時には正位で埋設されていた。口縁部は南半部床面上に内面を床面接する状態で弧状をなして出土した。これは住居廃棄時に炉体土器の口縁部を打ち欠いた結果と考えられる。炉内には焼土が少量堆積していた。

覆土は自然に埋没した様相を示し、炉体土器の他は覆土中より極少量の遺物が出土しただけである。本住居跡の時期は炉体土器により加曽利Ｅ３式第Ⅲ段階と考えられる。



第43図　A区21・29号住居跡　0　2m

A区24号住居跡（第52、53図　図版20－2、49－1）

A区北東隅のO－20に位置し、住居の中央部と東縁部が未完掘である。また、北壁部の一部が攪乱を受けている。A区10住の北1mにあり、A区31住に切られている。また、A区74・108号土坑と重複している。

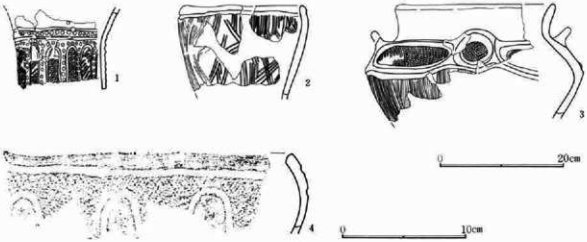
プランは住居南半部と北壁の一部が確認され、形状は円形をなすと考えられ、規模は径約6.25mである。炉の長軸方向から推定される主軸方位はN－29°－Wである。

周壁は良好な部分で高さ32cmを計り、ほぼ直に立ち上っていた。床面はローム層中に築かれ、平坦であるが北方へやや傾斜を持っている。炉周辺は固く締まっていた。

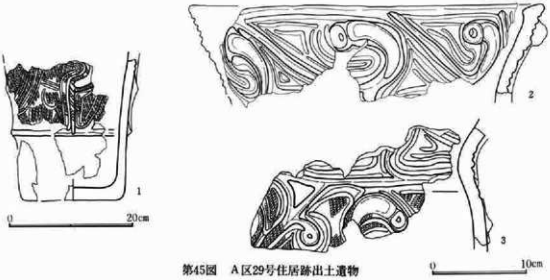
周溝はA区31住に切られた部分等が不明であるが全周していたと推定される。確認された部分では幅16～35cm、深さ平均12cmで断面形はU字状をなしていた。主柱穴はPit 1－4－6－8が考えられるが構成は不明である。なお、周溝内に径5～35cm、深さ10～36cmの大小のPitが不規則に確認されたが、壁柱穴の可能性もある。

炉はほぼ中央に位置していると考えられる。形状は長方形の石囲い炉で、規模は0.94×1.18m、深さ14cmである。縁石は比較的小ぶりな礫を用いて壁に立て並べている。なお、南辺の縁石2石が抜かれていた。炉床や縁石の焼けは弱い。

覆土はやや乱れていたが自然に埋没した様相を示す。遺物は覆土中や床面上より少量出土しただけである。本住居跡の時期は出土遺物により加曽利E2式段階と考えられる。



第44図　Ａ区21号住居跡出土遺物



第45図　Ａ区29号住居跡出土遺物

Ａ区25号住居跡（第49、51図　図版20－３、49－２）

Ａ区の北縁部のＮ－19に位置する。Ａ区19住の東１ｍにあり、Ａ区10住を切りＡ区23住に切られる。また、Ａ区78～85・87・88号土坑と重複している。

プランは住居の南半部～西半部を確認しただけで、北半部～東半部は土坑との重複が激しく確認できなかった。残存した部分から推定される形状はやや楕円形を呈すると考えられ、規模は径5.5ｍ程度と推定される。また、南半部のプランは屈曲してやや張り出し、周溝が２重に巡る所から改築あるいは重複していると考えられる。住居の主軸方位は埋甕の位置等からＮ－47°－Ｅと推定される。

周溝は西壁部の良好な部分で高さ20㎝を計り、ほぼ直に立ち上っていた。床面はローム層中に築かれ、北半部は確認できなかったが、南半部は平坦でやや固く締まっていた。

周溝は南半部のみ確認され屈曲して２重に巡っていた。幅の平均は25㎝、深さ平均13㎝で底面が凸凹していた。柱穴状の Pit が西半部にやや集中して確認されたが、主柱穴の配置は確認できなかった。また、炉も土坑によって切られたと考えられ確認できなかった。

住居の南壁部において周溝内に約1.8ｍの間隔を２基の埋甕（第51図１・２）が確認された。埋甕１は胴部

下半を打ち欠いた深鉢で周溝の外側法面に正位で据えられていた。埋甕２は胴部上半を打ち欠いた深鉢で西壁寄りの周溝が途切れる部分に正位で据えられていた。

覆土はやや乱れていたが自然に埋没した様相を示し、覆土中より少量の土器片や石器片が出土した。本住居跡の時期は加曽利Ｅ３式第Ⅰ段階～第Ⅱ段階と考えられる。

Ａ区26号住居跡（第55、56図　図版21、50－１）

Ａ区の中央やや北寄りのＭ－18に位置する。Ａ区４住の西６ｍ、Ａ区６住の南４ｍにあり、住居との重複はないが、Ａ区58号土坑を切りＡ区57号土坑に切られている。

プランは西壁部が出入口部状に屈曲した不整円形を呈し、規模は4.72×4.96ｍである。主軸方位は炉の長軸方向や出入口部と考えられる位置からＮ－45°－Ｅと考えられる。

周壁は良好な部分で高さ12cmを計り、ほぼ直に立ち上っていた。床面はローム層中に築かれ、緩やかな凹凸はあるが比較的平坦で固く締まっていた。

周溝は全周し、幅20～45cm、深さ５～15cmで断面形はＵ字状をなす。床面上からは７本の柱穴状 Pit が確認されたがいずれも浅く、主柱穴の配置は確認できなかった。

炉はほぼ中央に位置し、形状は炉体土器を持つ方形の石囲い炉で、規模は57×67cm、深さ14cmである。炉体土器（第56図１）は口縁部を打ち欠いた深鉢で東辺の縁石に倒れかかる状態で検出された。縁石は南辺と東辺が残存し、大小の礫を組み合わせていた。また、北辺と西辺（１石だけ残存）は縁石が抜かれていた。炉の焼けはあまり強くなかった。

覆土は自然に埋没した様相を示し、覆土や床面上より少量の遺物が出土した。第56図２の深鉢は炉の東床面より横位で潰れた状態で出土し、３は炉の南床面より破片で出土した。４は覆土からの出土である。本住居跡の時期は炉体土器や出土遺物により加曽利Ｅ３式第Ⅰ段階と考えられる。

Ａ区27号住居跡（第57、58図　図版22－１・２、50－２）

Ａ区の中央やや東寄りのＬ－19に位置している。Ａ区８住北２ｍにあり、住居との重複はないがＡ区44・45・147号土坑と重複する。

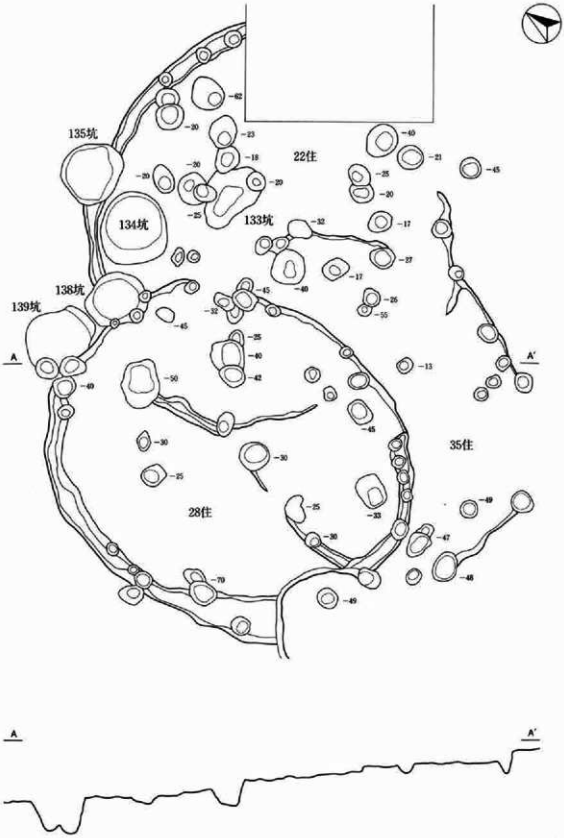
プランは出入口部と考えられる東壁部では立ち上がりは確認できなかったが、ほぼ円形を呈し、規模は4.33×4.47ｍである。炉の長軸方向や出入口部と考えられる位置等から考えられる主軸方位はＮ－100°－Ｗである。

周壁は良好な部分で高さ22cmを計り、ほぼ直に立ち上っていた。床面はローム層中に築かれ、炉に向かってわずかに傾斜を持ち、炉周辺が固く締まっていた。

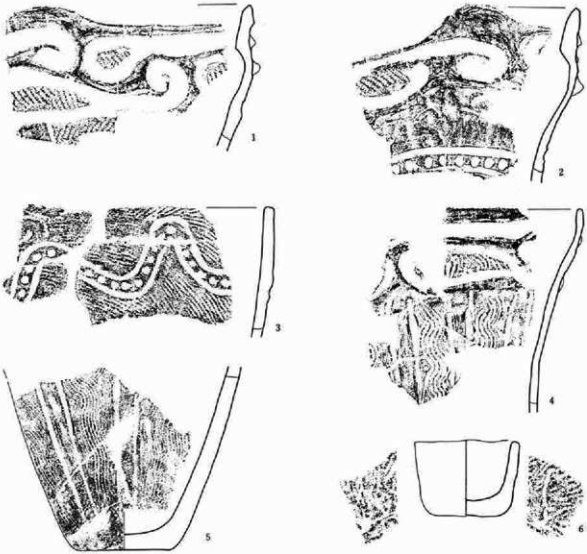
周溝は北壁部で一部確認されただけで他の部分には周っていなかった。確認された周溝は幅32～43cm、深さ平均10cmで断面形は床面がやや平坦なＵ字状をなしていた。主柱穴は Pit １～５の５本柱と考えられ、他に数本の柱穴状小 Pit が確認された。

炉は中央部よりやや北寄りに位置し、検出時において床面より約30cmＡ区147号土坑の中へ落ち込んでいたが、これは土圧により土坑内へ沈み込んだ結果と考えられる。炉は長方形の石囲い炉で、規模は48×約60cmである。縁石は南辺と西辺では大型の礫を用い、北辺では比較的小ぶりな礫を用いている。東辺は縁石が抜かれている。炉床や縁石はあまり強く焼けていなかった。また、炉の東方１ｍの床面が径約70cmの範囲で焼けていた。

覆土は自然に埋没した様相を示し、覆土中や床面より少量の遺物が出土した。本住居跡の時期は出土遺物により加曽利Ｅ３式第Ⅱ段階と考えられる。



第46図　A区22・28・35号住居跡



第47図　A区22号住居跡出土遺物

A区28号住居跡（第46、48図　図版19、51、52）

A区西縁部のN－16に位置し、南壁の一部が攪乱されている。A区2住の北2mにあり、A区22・35住と重複しているが、A区35住とは遺物が混じり合ってしまった部分があり不確定な要素を含むが、本住居はA区22・35住を切っていると考えられる。また、A区138・139号土坑と重複している。

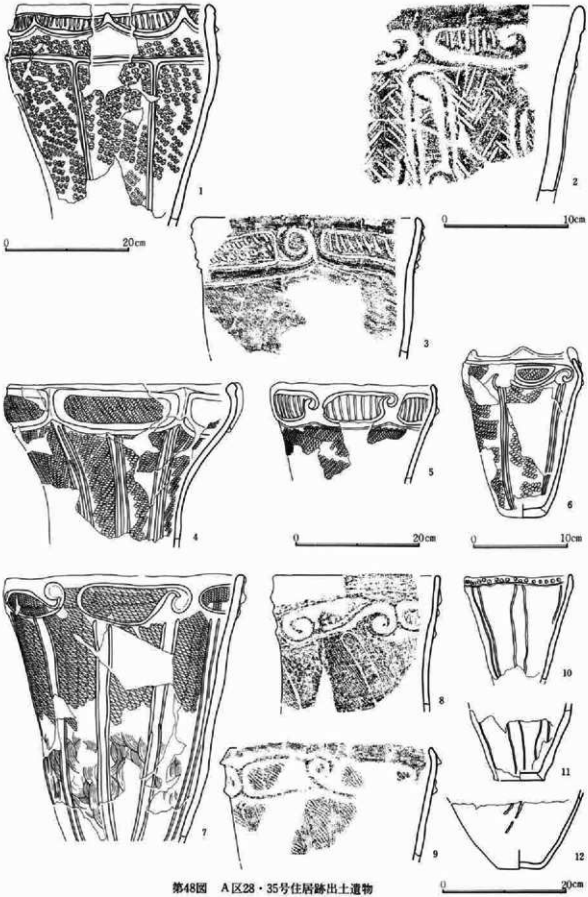
一部不明瞭な部分があるが形状は楕円形をなし、規模は5.12×5.53mである。主軸方位は住居の長軸方向からN－6°－Eと推定される。

周壁は良好な部分で高さ8cm程度であり、確認されたのはわずかである。床面はローム層中に築かれていたが、凹凸が著しく面として明瞭に確認できなかった。

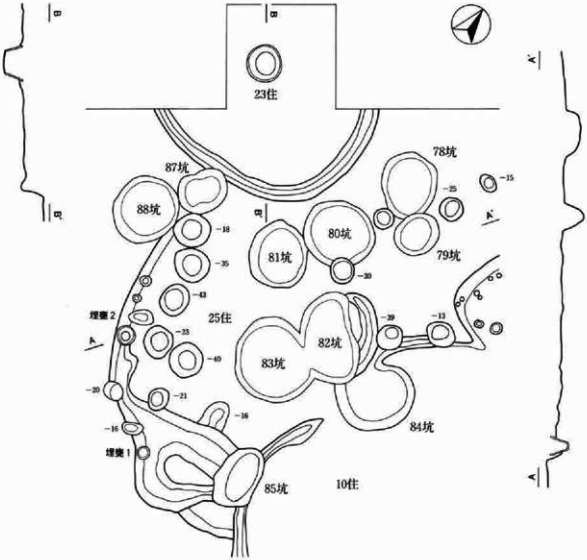
周溝は東壁部を除く他の部分では全周し掘りすぎた部分もあるが、幅平均20cm、深さ6～18cmで底面がやや凹凸のあるU字状をなしていた。

柱穴状Pitが床面上や周溝内から多数確認されたが、木の根痕状のものもあり主柱穴配置は確認できなかった。また、炉も確認されなかった。

覆土はやや乱れていたが自然埋没の様相を示し、覆土中より多くの土器片や石器片が出土した。本住居跡



第48図　A区28・35号住居跡出土遺物



第49図　A区23・25号住居跡　0　2m

の時期は加曽利E３式第Ⅲ段階と考えられる。

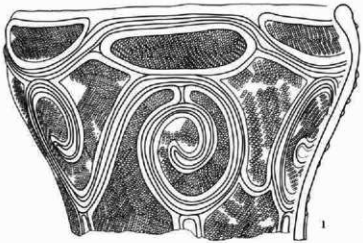
A区29号住居跡（第43、45図　図版16－１・３、53－１）

A区北西隅のO－16に位置し未完掘である。A区22・28・35住の北６ｍにあり、A区21住・A区142・143号土坑に切られる。

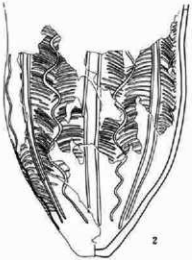
住居の南半部のみの確認であり、径約６ｍの円形をなすと推定される。周壁は良好な部分で高さ15cmを計り、やや斜めに立ち上っている。床面は平坦であるがやや北方に傾斜し軟弱である。

周溝は西壁でわずかに確認され、幅33cm、深さ10cmで断面形はU字状をなしていた。周壁に沿って４本の小規模な柱穴状 Pit が確認されたが、主柱穴とは考えられず配置は不明である。また、炉も確認されなかった。

覆土は自然に埋没した様相を示し、覆土や床面上より少量の遺物が出土した。本住居跡は出土遺物により加曽利E式出現期と考えられる。



第50図　Ａ区23号住居跡出土遺物



第51図　Ａ区25号住居跡出土遺物

Ａ区30号住居跡（第59、60図　図版22－３、53－２）

Ａ区北縁部のＯ－18に位置し、トレンチ内だけの確認であり未完掘である。Ａ区16住の北４ｍ、Ａ区31住の西６ｍにあり、Ａ区20住を切っている。

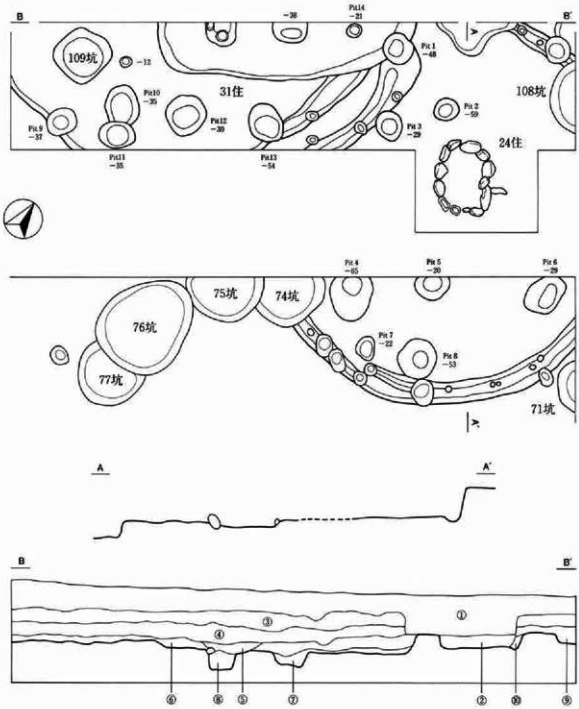
住居の南半部を確認したが、短軸3.6ｍ規模の楕円形を呈すると推定される。周壁は良好な部分で高さ26cmを計り、やや斜めに立ち上っていた。床面はローム層に築かれ、平坦で軟弱であった。

周溝は確認されず、主柱穴はPit ２－４－７が考えられるが配置は不明である。また、炉は南半部では確認されず、北半部に位置する可能性がある。

覆土は自然に埋没した様相を示し、遺物は覆土中や床面上より少量が出土した。第60図３は南壁寄りの床面上より横位で出土し、他の土器は覆土中から出土した。本住居跡の時期は出土遺物により加曽利Ｅ３式第Ⅳ段階と考えられる。

Ａ区31号住居跡（第52、54図　図版23－１、54－１）

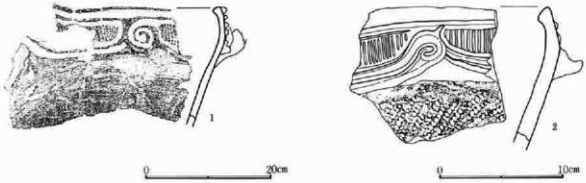
Ａ区北東隅のＯ－20に位置し、トレンチ内だけの確認であり未完掘である。Ａ区17住の北４ｍにあり、Ａ区24住を切り、Ａ区109号土坑と重複している。



①第1層　②浅間A軽石を多量に含む褐色土。③第2層　④第3層　⑤黒褐色土　ロームブロックをやや多く含む。　⑥黒褐色土　ロームブロックと軽石を少量含む。⑦黒褐色土　ロームブロックを多く含む。　⑧黒褐色土　ロームブロックと焼土をやや多く含む。　⑨黒褐色土とロームの混土層。⑩黒褐色土とローム・軽石の混土層

第52図　A区24・31号住居跡

0　2m



第53図　A区24号住居跡出土遺物

第54図　A区31号住居跡出土遺物

住居の南半部を確認しただけであるが、径約7mほどのやや楕円形を呈すると推定される。また、東壁部において周溝が2重に巡っていたが、土層断面上は重複とは考えられず拡張している可能性がある。

周壁は良好な部分で高さ30cmを計り、やや斜めに立ち上っていた。床面はローム層中に築かれ、わずかに凹凸があり炉周辺が1段低く下っていた。床面はあまり固く締まっていなかった。

周溝は南壁だけで確認され、内側の周溝が幅平均30cm、深さ6cm、外側の周溝が幅平均28cm、深さ16cmでともに断面形はU字状をなしていた。柱穴はPit 1～6が主柱穴の可能性があり、配置は不明であるが改築している可能性がある。

炉の位置は明確でないが、炉体土器を持つ長方形と推定される石囲い炉である。規模は短軸45cm、深さ27cmである。炉体土器（第54図1）は胴部下半を擦り切った深鉢で、南壁に接して正位で据えられていた。縁石は西辺で1石だけが残存していただけで、他の部分は抜かれていた。炉床や縁石の焼けは弱く、焼土がやや多く堆積していた。

覆土は自然に埋没した様相を示し、覆土中より少量の遺物が出土した。本住居跡の時期は炉体土器や出土遺物により加曽利E3式第Ⅱ段階と考えられる。

A区32号住居跡（第61、62図　図版23－2・3、54－2）

A区南縁部のJ－17に位置している。A区1住の南2mにあり、他の住居・土坑と重複していない。西壁部において径約50cmの集石状の礫群を確認したが本住居跡より新しいものである。

プランは南北壁において周溝の一部を確認し、他の部分では周溝の残痕である小Pitが確認されただけである。規模約5.20mほどの円形を呈していたと推定される。また、主柱穴配置等から推定される主軸方位はN－53°－Eである。

周壁は確認されず、床面はローム層上面に築かれていたと考えられ、炉周辺ではやや固く締まった面が確認されたが周壁部では確認されなかった。

周溝は全周していた可能性があり、確認された部分では幅平均23cm、深さ平均10cmで断面形はU字状を呈していた。主柱穴はPit 1～4の4本柱で、他に2本の柱穴状Pitが確認された。

炉はほぼ中央部に位置し、方形の石囲い炉で規模は93×96cm、深さ13cmである。検出時において東辺の縁石が抜かれ、他辺の縁石は斜めに倒れ込んでいた。炉床や縁石の焼けは弱い。

覆土は薄く、住居内からは極少量の遺物が出土しただけである。本住居跡の時期は出土遺物により加曽利E3式第Ⅱ段階と考えられる。

A区33号住居跡（第38、40図　図版54－3）

A区北縁部のN－18に位置している。A区4住の北4m、A区10住の西2mにあり、A区19住に切られている。また、A区89～91号土坑と重複している。

北半部のプランはA区19住によって切られているが、規模約5.70mほどの楕円形を呈すると推定される。炉の方向性から推定される主軸方位はN－37°－Eである。

ローム層上面に築かれていたと考えられ、周壁の立ち上がりは確認できなかった。また、床面もほぼ平坦であるが軟弱であった。周溝は部分的に途切れていたが全周していたと推定される。幅平均22cm、深さ平均10cmで断面形はU字状をなしていた。

床面上からは多くの柱穴が確認された。主柱穴はプラン確定ではあるがPit 7～9とPit 10～12を各々用いた4本柱と推定され、改築している可能性がある。

炉はA区19号住の周溝によって東壁を切られており、中央部よりやや北に寄って位置していると考えられる。炉体土器を持つ長方形の石囲い炉で、規模は約72×94cm、深さ22cmである。炉体土器（第40図1）は胴部下半を欠いた深鉢を正位でほぼ中央に据えていた。縁石は1石のみ残存するだけで他は抜かれていた。炉の焼けは弱く、炉体土器内に焼土が少量堆積していた。

覆土は自然に埋没した様相を示し、覆土中より少量の遺物が出土した。本住居跡の時期は炉体土器や出土遺物により加曽利E3式第Ⅱ段階と考えられる。

A区34号住居跡（第63、64図　図版54－4）

A区西縁部のL－17に位置し未完掘である。A区2住の南2m、A区5住の東3mにあり、住居との重複はないがA区146号土坑と重複している。

プランは北半部の立ち上がりを確認しただけであり、屈曲した形状から隅丸方形を呈していたと推定される。また、規模は遺物の散布範囲から径約6mほどと推定される。

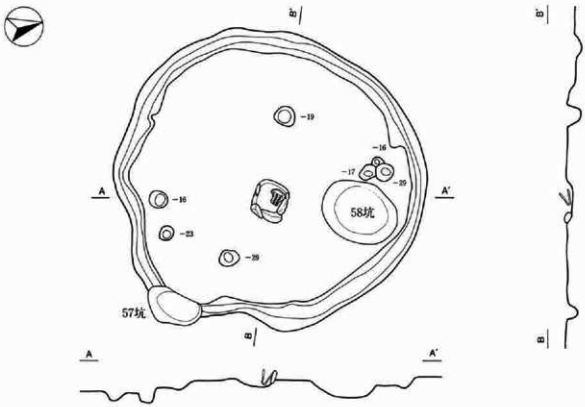
わずかに検出された周壁は良好な部分で高さ10cmほどである。床面はローム層上面に築かれていたと考えられ、北半部は軟弱ながら面として検出することができたが、南半部は北半部に比べ遺物の散布もやや少なく、床面の確認にはいたらなかった。

周溝は北壁部のみ確認され、幅20～48cm、深さ平均10cmで断面形はU字状をなしていた。床面上からは5本の柱穴状Pitが確認されたが主柱穴位置は不明である。また、炉も確認されなかった。

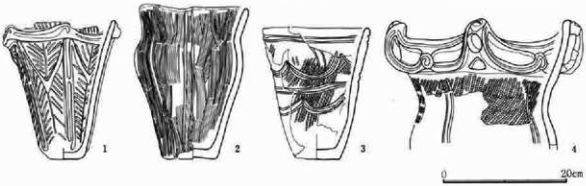
覆土は自然に埋没した様相を示す。プランは不明確であったが遺物は覆土中より多量に出土し、北半部に集中する傾向が認められた。遺物は土器を中心に破片が廃棄された状態であった。本住居跡の時期は出土遺物により加曽利E3式第Ⅱ段階と考えられる。

A区35号住居跡（第46、48図　図版19、51）

A区西縁部のN－16に位置し、A区7・9住の東4mにある。A区28号住とは遺物が混入してしまい不確定な要素を含むが、A区2住を切り、A区22・28住に切られていると考えられる。



第55図　Ａ区26号住居跡



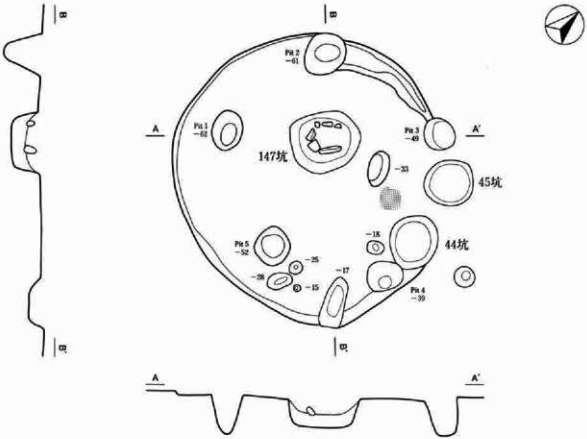
第56図　Ａ区26号住居跡出土遺物

プランは明確ではないが部分的に浅い立ち上がりが確認された。形状は楕円形を呈すると考えられ、規模は約4.60×5.70ｍである。住居の長軸方向から推定される主軸方位はＮ－20°－Ｅである。

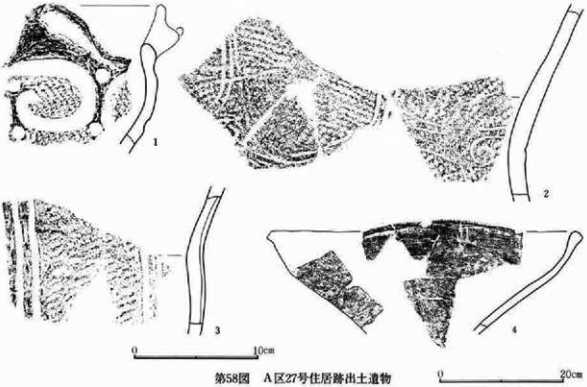
周壁は良好な部分で高さ12cmを計る。床面はローム層中に築かれ、凹凸が著しく明瞭な面としては確認できなかった。

周溝は西壁の一部で確認され、幅15cm、深さ10cmで断面形はU字状をなしていた。プラン内には多くの柱穴状 Pit が確認されたが木の模様状のものもあり、主柱穴配置は確認できなかった。また、炉もＡ区28住に切られたと考えられ検出されなかった。

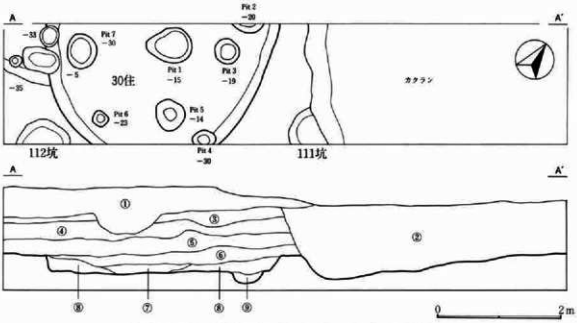
覆土はやや乱れていたが、自然に埋没した様相を示し、Ａ区28住とともに覆土中より多量の土器片や石器片が廃棄された状態で出土した。本住居跡の時期は出土遺物により加曽利Ｅ３式第Ⅰ段階と推定される。



第57図　A区27号住居跡

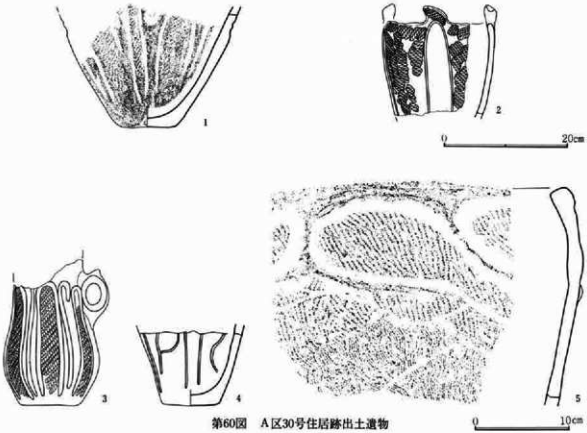


第58図　A区27号住居跡出土遺物

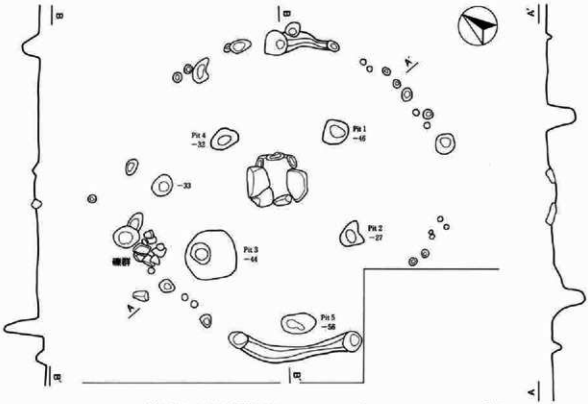


①第1層　②第1層〜第6層が混じり合った土層。　③浅間B軽石を多量に含む砂質土。　④第2層　⑤第3層　⑥黒褐色土　ロームブロックと焼土・炭化物を少量含む。　⑦黒褐色土　焼土・炭化物を多量に含む。　⑧黒褐色土　ロームと軽石を多量に含む。　⑨暗黄褐色土　ロームブロックを多く含む。

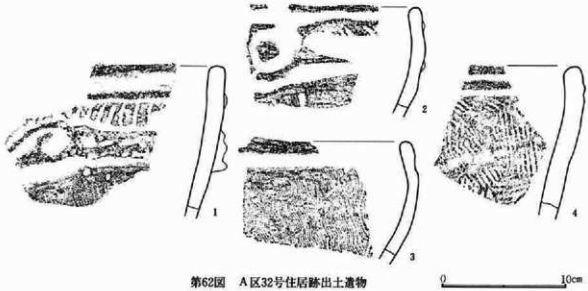
第59図　A区30号住居跡



第60図　A区30号住居跡出土遺物



第61図　A区32号住居跡



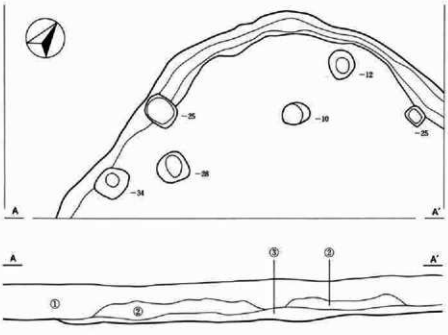
第62図　A区32号住居跡出土遺物

B区1号住居跡（第65、66図　図版24－1・2、55－1）

B区西縁部のD－09に位置している。B区3住の西25mにあり、B区2号住居を切っている。また、B区1～3・5～8号土坑と重複している。

形状は不整楕円形を呈し、規模は5.52×6.26mである。住居の長軸方向から推定される主軸方位はN－25°－Wである。

周壁はわずかに確認され良好な部分で高さ7cmを計る程度である。床面はローム層中に築かれ、北西方向



①表　土　浅間Ａ軽石を含む。　②浅間Ａ軽石層　③黒褐色土　ロームブロックと焼土・炭化物を少量含む。

第63図　Ａ区34号住居跡　0　2m

へわずかに傾斜している。緩やかな凹凸があるがやや固く締まっていた。

周溝は南壁部で一部不明確となるが他は全周し、幅17～43cm、深さ８～20cmで断面形はＵ字状を呈していた。また、３本の柱穴状 Pit が東壁寄りで確認されたが、主柱穴配置は確認できなかった。また、炉もＢ区２号土坑に切られたと考えられ確認できなかった。

覆土は薄く確認されたが自然に埋没した様相を示していた。遺物は第65図１の口縁部片が北壁寄りの床面上より２片に破れた状態で出土した。他は少量の土器片や石器片が覆土中より出土しただけである。本住居跡の時期は出土遺物により加曽利Ｅ式出現期と考えられる。

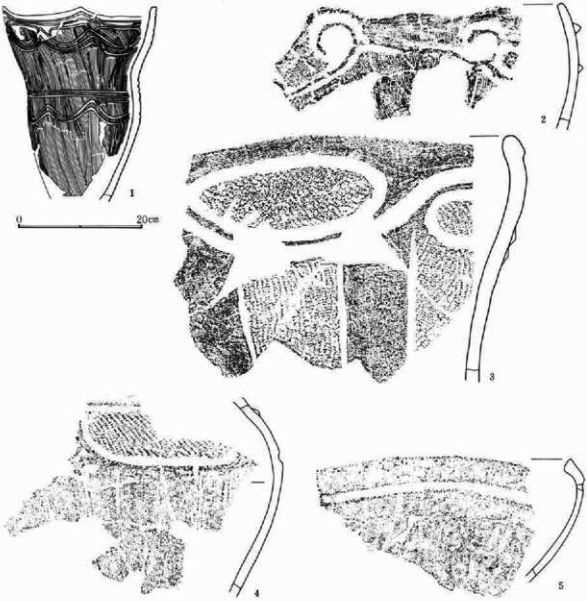
Ｂ区２号住居跡（第65、67図　図版24－１、55－２）

Ｂ区西縁部のＤ－09に位置し、図１住とＢ区１・１号土坑に切られる。形状は隅丸の不整台形を呈し、東壁北半部がやや北方へ張り出している。規模は3.61×4.08mで、住居の長軸方向から考えられる主軸方向はＮ－121°－Ｅである。

周壁の立ち上がりはほとんど確認されなかった。床面はローム層中に築かれており、ほぼ水平でわずかに凹凸がある。面はやや固く締まっていた。

周溝はほぼ全周し、幅19～40cm、深さ６～14cmで底面はわずかに凹凸があるが断面形はＵ字状をなしていた。また、床面上からは４本の浅い柱穴状 Pit が確認されたが、Pit ３・４は位置がずれ込むが、Pit １・２は位置的には主柱穴配置に合致しており、４本主柱の可能性がある。また、東壁部の周溝には柱穴状小 Pit が４本あり、壁柱穴の可能性がある。

覆土は薄く確認されただけであるが、自然に埋没した様相を示していた。土器は第67図に示した４点の土器片が覆土下部より出土しただけで他にはない。また、石器は剥片石器や石皿片がわずかに出土しただけである。本住居跡の時期は出土遺物により前期初頭の花積下層式と考えられる。



第64図　A区34号住居跡出土遺物

B区3号住居跡（第68図）

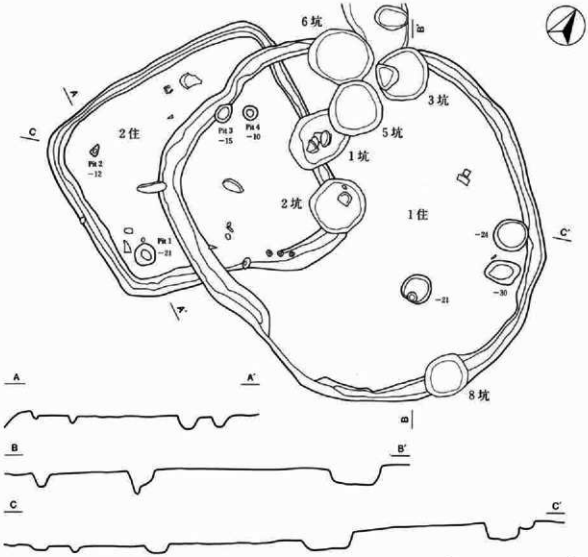
B区中央部のD－12に位置し未完掘である。B区4住の北14m、B区6住の南25mにあり、調査範囲では他の住居・土坑と重複していない。

住居の北半部1/3ほどを確認、北壁の一部が攪乱を受けている。全体形状は未確認であり、径約4.0mほどの円形を呈すると推定される。

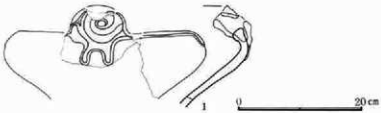
周壁は良好な部分で高さ46cmを計り、やや斜めに立ち上っている。床面はローム層中に築かれ、断面形状は皿状をなし、中央部がやや固く締まっており周壁部は軟弱である。

調査範囲では周溝は確認されなかった。また、床面上からは3本の柱穴状Pitが確認されたが主柱穴の可能性がある。また、明確な炉は確認されなかったが、中央部床が径約40cmほど焼けていた。

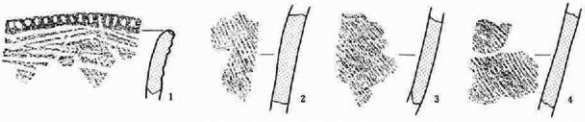
覆土は自然に埋没した様相を示し、覆土下部より数点の土器小破片が出土した。本住居跡の時期は出土遺



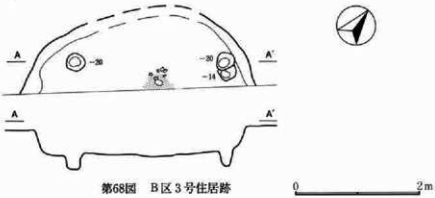
第65図　B区1・2号住居跡



第66図　B区1号住居跡出土遺物



第67図　B区2号住居跡出土遺物



第68図　B区3号住居跡

物やB区の遺構傾向により中期中葉末段階と推定される。

B区4号住居跡

B区南縁部のC－12に位置し未完掘である。B区3住の南13m、B区5住の西25mにあり、B区68号土坑と重複している。

トレンチ内において住居北半部の一部を確認しただけであり、全体形状や規模は不明である。北壁は高さ40cmを計り、ほぼ直に立ち上っていた。一部確認された床面はローム層中に築かれ、平坦でやや固く締まっていた。調査範囲では周溝は確認されず、柱穴や炉も不明である。

覆土は自然に埋没した様相を示し、覆土中より極少量の土器小破片が出土した。本住居の時期は出土遺物やB区の遺構傾向により中期中葉末段階と推定される。

B区5号住居跡

B区南縁部のC－15に位置し未完掘である。B区4住の東25m、B区6住の南33mにあり、調査範囲では他の住居・土坑との重複はない。

トレンチ内において住居北半部の一部を確認しただけであり、全体形状や規模は不明である。北壁は高さ約30cmを計り、ほぼ直に立ち上っていた。一部確認された床面はローム層中に築かれ、平坦であるが軟弱であった。調査範囲では周溝は確認されず、柱穴や炉も不明である。

覆土は自然に埋没した様相を示し、覆土中より極少量の土器小破片が出土した。本住居跡の時期は出土遺物やB区の遺構傾向により中期中葉末段階に併行すると推定される。

B区6号住居跡（第69、70図　図版25－1・2、56－1）

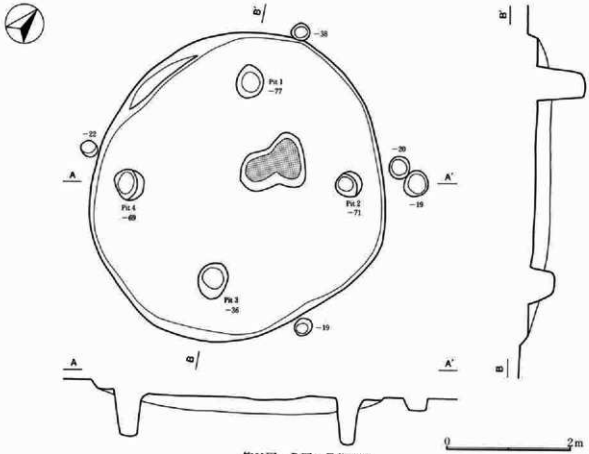
B区北縁部のF－14に位置している。B区3住の北25m、B区7住の西13mにあり、他の住居・土坑と重複していない。

プランは不整円形を呈し、規模は4.65×4.76mである。主柱穴配置や炉の位置から考えられる主軸方位はN－7°－Eである。

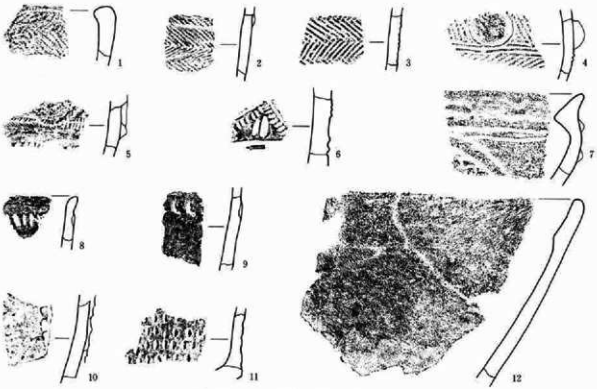
周壁は西壁部で2段に立ち上がる部分があるが良好な部分で高さ19cmを計り、斜めに立ち上っている。床面は貼り床され、深さ25cmの皿状の断面をなす掘り方を有している。掘り方の埋土には黒褐色土とローム・As－YPのブロックの混土を用いていた。これは床面を軟弱なAs－YP層中に築くことを避けた方法と考えられる。また、貼り床は水平に築かれ固く締まっており、良好な面を構成していた。

周溝はなく、主柱穴はPit 1～4の4本主柱と考えられる。また、壁外に5本の柱穴状Pitを検出したが、性格は不明である。

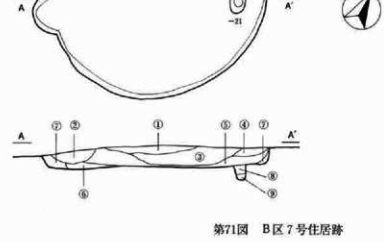
炉は中央部よりやや北寄りに位置している。形状は楕円形を呈する地床炉で1度改築を行なっている。東



第69図　Ｂ区６号住居跡



第70図　Ｂ区６号住居跡出土遺物



①黒色土　軽石を少量含み、遺物を多く包含している。
②黒褐色土　軽石を少量含む。
③黒褐色土　軽石を多く含み、炭化物を少量含む。
④黒褐色土　軽石を少量含む。
⑤黒褐色土　軽石を多く含み、ロームブロックを少量含む。
⑥暗黄褐色土　ロームを多量に含む。
⑦黒褐色土とロームの混土層。
⑧褐色土　軽石を多く含む。
⑨ロームと軽石の混土層。

第71図　B区7号住居跡

0　2m

西に長軸を持つ北半部が古く、規模は55×88cm、深さ17cmである。南北に長軸を持つ南半部は新しく、規模は58×64cm、深さ23cmである。新旧の炉はともに炉床や周壁の焼けは弱いが固く締まっていた。また、2基とも覆土中に多量の焼土が堆積していた。

覆土は自然に埋没した様相を示し、覆土中より少量の土器片や石器片が出土した。なお、覆土中より滑石製錘垂具1点（第102図2）が出土した。本住居跡の時期は出土遺物に時期差があるが、中期初頭段階と考えられる。

B区7号住居跡（第71、72図　図版25－3、56－2）

B区東縁部のE－16に位置している。B区5住の北27m、B区6住の東13mにあり、調査範囲内では他の住居・土坑との重複はない。

プランは南半部のみを確認した。また、西壁の一部が攪乱されていた。径約3.60mほどの規模で円形を呈すると推定される。

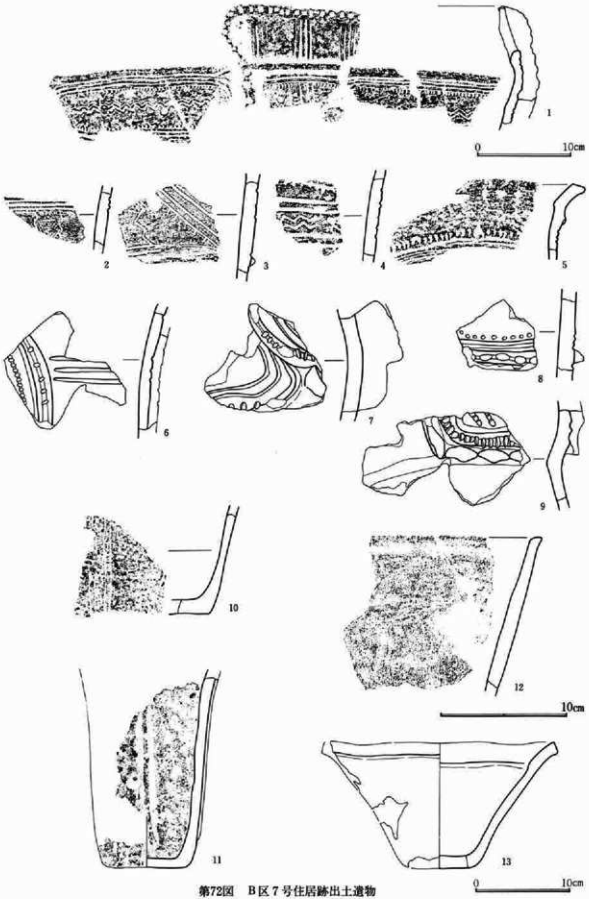
南半部の周壁は良好な部分で高さ45cmを計り、ほぼ直に立ち上っていた。床面はローム層中に築かれ、平坦で中央部は非常に固く良く踏み締められていた。周壁部はやや軟弱であった。

調査範囲内では周溝は確認されず、柱穴も東壁部において1本を確認しただけである。また、炉も確認されず北半部に位置したと推定される。

覆土は自然に埋没した様相を示し、覆土中よりやや多くの土器片や石器片が出土した。本住居跡の時期は出土遺物により阿玉台2式の段階と考えられる。

なお、A区において2基の性格不明の落ち込みを確認した。1基はA区10住の北壁を切る状態で確認され、もう1基はA区17住の南壁を切る状態で確認された。2基の落ち込みは径約3.6m、深さ20～35cmの不整楕円形を呈し、断面形状は2段に落ち込む皿状をなしていた。また、周壁部に柱穴状小Pitが不規則に確認された。覆土は自然に埋没した様相を示し、風倒木痕に見られる土層の逆転現象は認められなかった。出土遺物は加曽利E3式の土器片が少量出土した。

また、グリット出土遺物として第91図167－173はD－12に位置する風倒木痕からの一括遺物であり、加曽利E4式段階の住居跡が存在した可能性が高い。



第72図　Ｂ区７号住居跡出土遺物

住居跡一覧表

番号	位置	平面形	規模（m）	方　位	周　溝	柱　穴	炉	改　修	重　複	時　期	備　考
A区1住	南緑L17	円形？	径約6.80	N－45°－E	全周？	6本→6本	長方形石囲い炉・炉体土器？	柱穴・炉1回	無	加曽利E３式1段階	大珠１点
A区2住	西緑K17	円形？	径約6.00	N－22°－E？	一部	6本？	方形石囲い炉	無	2住→35住	加曽利E３式1段階	器台１個体
A区3住	東緑L20	楕円形？	径約7.40？	N－94°－E？	一部	不明	方形石囲い炉・炉体土器	無	11・12住→3住	加曽利E２式	未完掘
A区4住	中央M19	不整円形	5.45×6.10	N－11°－E	部分	6本→6本	方形石囲い炉？・炉体土器	柱穴・炉1回	無	加曽利E３式1段階	出入口部
A区5住	西緑L16	円形？	径約6.50	N－61°－W	無	7本	長方形石囲い炉・炉体土器	無	無	加曽利E３式1段階	炉縁に立石
A区6住	北緑N18	不整円形	4.65×5.10	N－48°－W	全周	6本？	長方形石囲い炉	無	14－16住→6住	加曽利E３式1段階	出入口部
A区7住	西緑M16	不整楕円形	5.15×約5.70	N－30°－W	全周？	6本	方形石囲い炉・炉体土器	無	9住→7住	加曽利E３式1段階	出入口部
A区8住	南緑L19	不整楕円形	5.30×5.50	N－20°－W	全周	6本	円形石囲い炉	無	無	加曽利E１式	出入口部土製品
A区9住	西緑M15	不整楕円形	5.17×6.20	N－22°－E	全周？	6本→6本	方形石囲い炉	柱穴1回	9住→7住	加曽利E２式	
A区10住	北緑N19	楕円形	6.92×7.70	N－138°－W	全周	5本→5本	方形石囲い炉	柱穴・炉1回	10→17・25住	加曽利E２式	釣手形土器１個体
A区11住	東緑L20	——	——	——	——	——	方形石囲い炉	——	20住→3住	加曽利E式出現期	未完掘
A区12住	東緑L19	円形？	径約7.70	N－24°－E？	——	——	長方形石囲い炉・炉体土器	無	12住→3住	加曽利E式出現期	石鏃２点
A区13住	北西N16	不整円形	5.15×5.20	N－12°－W	——	5本→8本	焼土	柱穴1回？	13住→21住	加曽利E３式1段階	
A区14住	北緑O18	楕円形	5.44×6.05	N－26°－E	全周	——	長方形石囲い炉	無	15・16住→14住→6住	加曽利E３式1段階	埋甕２基
A区15住	北緑N17	不整円形	5.00×5.20	N－30°－E	部分	——	方形石囲い炉	無	16住→15住→6・14住	加曽利E３式1段階	
A区16住	北緑O18	隅丸方形？	径約4.90	——	全周？	——	——	——	16住→6・14・22住	加曽利E１式	土偶１点
A区17住	東緑N20	円形	7.95×8.12	N－168°－W	全周	8本	長方形石囲い炉・炉体土器	無	10住→17住	加曽利E３式1段階	土偶・耳栓各１点
A区18住	東緑M20	円形？	径約5.80	——	一部	——	円形石囲い炉・炉体土器	無	無	加曽利E３式IV段階	未完掘
A区19住	北緑N18	不整楕円形	5.95×約6.80	N－34°－W？	全周？	6本か4本	方形石囲い炉・炉体土器	無	33住→19住→20住	加曽利E３式III段階	炉体土器に蓋石
A区20住	北緑O18	楕円形	約7.30×7.75	N－80°－W	全周？	——	長方形石囲い炉・炉体土器	無	16・19住→20住→30住	加曽利E３式IV段階	未完掘石鏃６点
A区21住	北西O16	不整円形	径約5.80	N－18°－W？	部分	——	方形石囲い炉・炉体土器	無	13・29住→21住	加曽利E３式IV段階	未完掘土製円盤
A区22住	西緑N17	不整円形	約5.86×6.30	N－118°－W	部分	——	——	——	35住→22住→28住？	加曽利E３式III段階	未完掘
A区23住	北緑O19	楕円形？	4.00×4.50？	N－91°－W？	全周？	——	埋甕炉	無	無	加曽利E３式III段階	未完掘
A区24住	北東O20	円形？	径約6.25	N－29°－W？	全周？	——	長方形石囲い炉	無	24住→31住	加曽利E２式	未完掘
A区25住	北緑N19	楕円形？	径約5.50？	N－47°－E？	部分	——	——	1回？	10住→25住→23住	加曽利E３式I・II段階	埋甕２基
A区26住	中央M18	不整円形	4.72×4.96	N－45°－E	全周	——	方形石囲い炉・炉体土器	無	無	加曽利E３式1段階	出入口部
A区27住	中央L19	円形	4.33×4.47	N－100°－W	一部	5本	長方形石囲い炉	無	無	加曽利E３式III段階	出入口部耳栓１点
A区28住	西緑N16	楕円形	5.12×5.53	N－6°－E？	部分	——	——	——	22・35住→28住？	加曽利E３式III段階	土製円盤１点
A区29住	北西O16	円形？	径約6.00	——	一部	——	——	——	29住→21住	加曽利E式出現期	未完掘

番号	位置	平面形	規模（m）	方　位	周溝	柱穴	炉	改築	重複	時期	備考
A区30住	北縁O18	楕円形？	径約3.60？	――	無	――	――	無	20住→30住	加曽利E３式Ⅳ段階	未完掘
A区31住	北東O20	楕円形？	径約7.00？	――	部分	――	長方形石囲い炉・炉体土器？	プラン１回？	24住→31住	加曽利E３式Ⅱ段階	未完掘
A区32住	南縁J17	円形？	径約5.20	N－53°－E？	全周	4本	方形石囲い炉	無	無	加曽利E３式Ⅲ段階	
A区33住	北縁N18	楕円形？	径約5.70？	N－37°－E？	全周？	4本→4本？	長方形石囲い炉・炉体土器	柱穴１回？	19住→33住	加曽利E３式Ⅱ段階	
A区34住	西縁L17	隅丸方形？	径約6.00？	――	一部	――	――	――	――	加曽利E３式Ⅲ段階	
A区35住	西縁N16	楕円形	約4.60×5.70	N－20°－E？	一部	――	――	――	35住→22・28住	加曽利E３式Ⅰ段階	石錘２点
B区1住	西縁D09	不整楕円形	5.52×6.26	N－25°－W	全周	――	――	無	２住→１住	加曽利E式出現期	
B区2住	西縁D09	隅丸台形	3.61×4.08	N－121°－E	全周	4本？	――	無	２住→１住	花積下層式	
B区3住	中央D12	円形？	径約4.00？	――	無？	――	――	――	無	中期中葉末	未完掘
B区4住	南縁C12	――	――	――	――	――	――	――	――	中期中葉末	未完掘
B区5住	南縁C15	――	――	――	――	――	――	――	――	中期中葉末	未完掘
B区6住	北縁F14	不整円形	4.65×4.76	N－7°－E	無	4本	地床炉	炉改築１回	無	五領ケ台式？	錘垂具１点
B区7住	東縁E16	円形？	径約3.60？	――	無？	――	――	――	無	阿玉台２式	未完掘

３．土　　坑

土坑はＡ区で147基、Ｂ区で69基が確認されたが、整理段階において遺構図や遺物の照合が多くの土坑で困難となり、掲載した遺構図や遺物図に偏向が生じている。土坑についてはその概要を記することとする。

分布傾向

Ａ区においては北東部に濃密な分布傾向を示し、住居との重複も激しく土坑同志の切り合いも多く見られる。これに対し、南西部は散在的な分布傾向にある。土坑の濃密な分布ラインはＯ－16からＫ－20にかけて弧状をなしており、集落内において住居群の拡がりより内部に分布していた可能性が考えられる。

Ｂ区は調査範囲が狭く明確ではないが、中央部から西半部にかけて密集傾向にあり、東半部は散在的な分布傾向を示している。

形態的特徴

平面形はほとんどが円形を呈する。断面形は底面が平坦な面をなすものがほとんどであり、極端な袋状を呈するものはなく周壁はやや斜めかほぼ直に立ち上がるもの、下半部がわずかに袋状をなし上半部がやや開くものがほとんどである。規模は確認できるローム層上面からの数値では、径が0.80～1.40ｍ、深さが40～70cmのものが圧倒的である。

覆土は自然に埋没した様相を示す方が多いが、各層のブロックが混じり合い一挙に埋没した様相を示す例もかなり見られた。また、遺物の出土状態としては完形に近い土器が土坑内から出土する例は中期前葉～中葉の土坑に見られ、中期後半段階の土器は破片として混入している傾向にある。

また、特異な例として土坑内に Pit を有する例や石柱を有する例、焼土・炭化物が土坑内に充満している例等がある。

時 期

時期を明確に押さえられる土坑は数が少ないが、住居の確認状況と同様に中期のほぼ全般にわたるものと考えられ、中期後半に属する土坑が多いと考えられる。

A区21号土坑（第74図 図版28－2）

A区東縁部のM－20に位置している。平面形は不整円形を呈し、規模は1.24×1.26m、深さ32cmである。断面形は底面が平坦で東壁が斜めに立ち上がり、西壁がほぼ直に立ち上っている。覆土は一挙に埋没した様相を示し、上面から深鉢（第77図）が横位で下部より小型の深鉢形土器（第77図）が出土した。時期は勝坂2式に併行する段階と考えられる。

A区27号土坑（第74図 図版28－1）

A区東縁部のM－20に位置している。平面形は不整円形を呈し、規模は1.14×1.20m、深さ56cmである。断面形は東壁が大きくオーバーハングしており底面も一段下がっている。他の部分は斜めに立ち上っている。覆土は一挙に埋没した様相を示し、覆土中位に深鉢（第77図）が横位で出土し、他に土器や石器の小破片が少量出土した。時期は勝坂3式と考えられる。

A区28号土坑（第74図 図版29－1）

A区東縁部のM－20に位置し、A区29号土坑を切っている。平面形は不整円形を呈し、規模は1.05×1.31m、深さ60cmである。断面形は底面が平坦で周壁は下端部が一部オーバーハングする部分があり、中位は内湾ぎみとなり、上端は外方に開いている。覆土は一挙に埋没した様相を示し、土器片（第75図）や礫が西半部の覆土上位から集中して出土した。時期は勝坂3式に併行する段階と考えられる。

A区29号土坑（第74図）

A区東縁部のM－20に位置し、A区28号土坑と柱穴に切られている。平面形はやや楕円形を呈し、規模は約0.70×0.95m、深さ20cmである。断面形は底面が平坦で周壁は斜めに立ち上っている。覆土は自然に埋没した様相を示し、北壁寄り覆土中位より打製石斧が1点出土した。時期は明確でないが中期中葉段階と推定される。

A区68号土坑（第74図 図版29－2）

A区東縁部のN－20に位置し、A区17住・A区67号土坑に切られている。平面形はほぼ円形を呈し、規模は1.11×1.12m、深さ71cmである。断面形は底面が平坦で、周壁は中位で内湾ぎみに膨らみを持ちながらやや斜めに立ち上っている。覆土は一挙に埋没した様相を示し、口縁部を欠いた深鉢（第77図）が北壁に倒れかかるように正位で出土した。時期は勝坂式後半段階と考えられる。

A区80・81号土坑（第74図）

A区北縁部のN－19に位置し、A区25住と重複し80号が81号を切っている。平面形はともに円形を呈し、規模は80号が1.00×1.14m、深さ34cmで、81号が0.93×1.06m、深さ40cmである。断面形はともに底面が平坦で周壁はやや斜めに立ち上っている。覆土もともに自然に埋没した様相を示し、遺物は出土しなかった。時期は明確でない。

A区116号土坑（第74図）

A区北縁部のN－18に位置する立石を持つ土坑である。平面形は円形を呈し立石部が張り出している。規模は径95cmで立石部が約45cm張り出している。深さは50cmである。断面形は底面に凹凸があり、周壁はほぼ直に立ち上っている。立石は径18cm、長さ65cmで土坑側へやや傾いた状態で検出された。覆土は一挙に埋没

第73図　土坑分布図

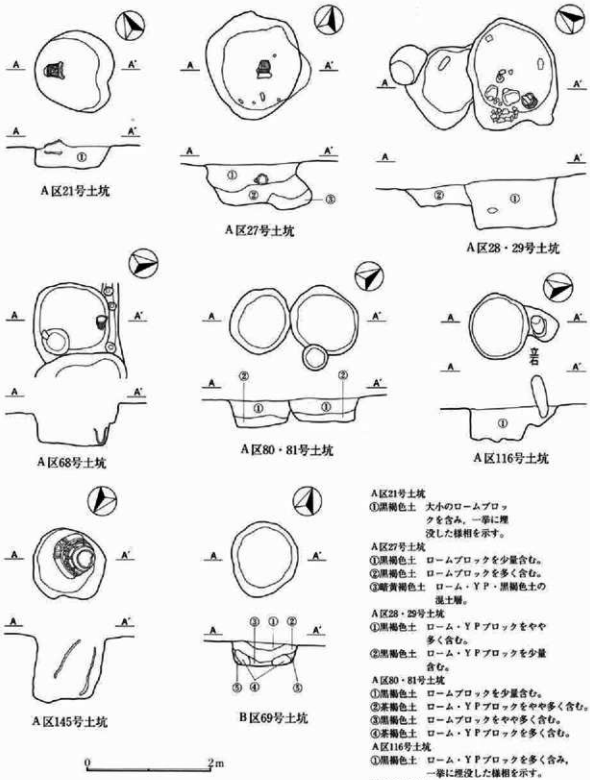
した様相を示し、遺物は出土しなかった。時期は明確でない。

A区145号土坑

A区西縁部のM－16に位置している。平面形は不整円形を呈し、規模は径85cm、深さ80cmである。断面形は底面にやや傾斜を持ち、周壁はほぼ直に立ち上っている。覆土は一挙に埋没した様相を示し、大型の深鉢（第78・79図）が逆位でやや斜めに坑内に納められていた。時期は勝坂３式と考えられる。

B区69号土坑（第74図　図版30－３）

B区北縁部のF－15に位置している。平面形はやや楕円形を呈し、規模1.07×1.25m、深さ40cmである。断面形は底面が平坦で、周壁はやや斜めに立ち上っていた。周壁には炭化物が貼り付き、覆土中に多量の焼土と炭化物が混入していた。時期は極少量出土した土器片から中期中葉段階と考えられる。



A区21号土坑
①黒褐色土　大小のロームブロックを含み、一挙に埋没した様相を示す。

A区27号土坑
①黒褐色土　ロームブロックを少量含む。
②黒褐色土　ロームブロックを多く含む。
③暗黄褐色土　ローム・ＹＰ・黒褐色土の混土層。

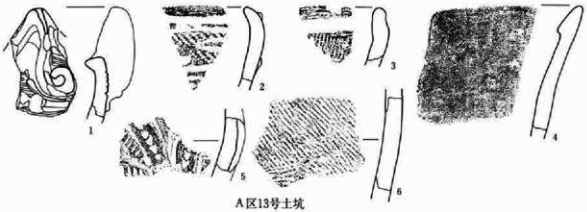
A区28・29号土坑
①黒褐色土　ローム・ＹＰブロックをやや多く含む。
②黒褐色土　ローム・ＹＰブロックを少量含む。

A区80・81号土坑
①黒褐色土　ロームブロックを少量含む。
②茶褐色土　ローム・ＹＰブロックをやや多く含む。
③黒褐色土　ロームブロックをやや多く含む。
④茶褐色土　ローム・ＹＰブロックを多く含む。

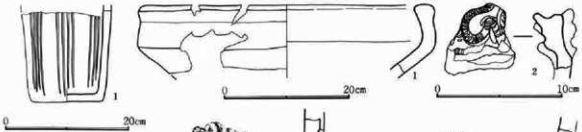
A区116号土坑
①黒褐色土　ローム・ＹＰブロックを多く含み、一挙に埋没した様相を示す。

B区69号土坑
①褐色土　焼土ブロックを少量含む。
②黒色土　粘性強く、焼土を少量含む。
③暗褐色土　焼土・炭化物を多量に含む。
④焼土ブロック
⑤炭化物　周壁に貼り付いた状態で堆積。

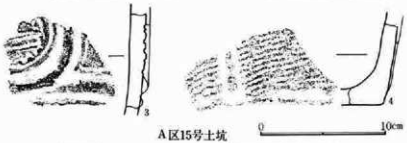
第74図　土坑図



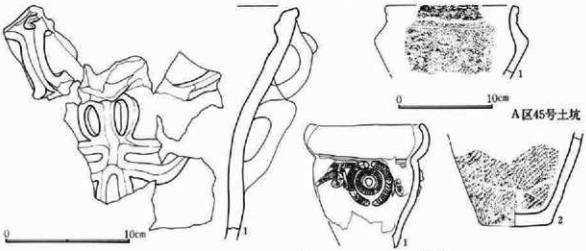
A区13号土坑



A区14号土坑

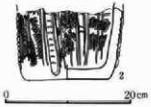


A区15号土坑



A区45号土坑

A区59号土坑

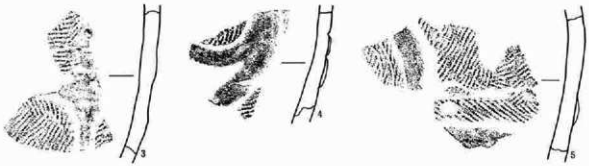


A区28号土坑

A区97号土坑

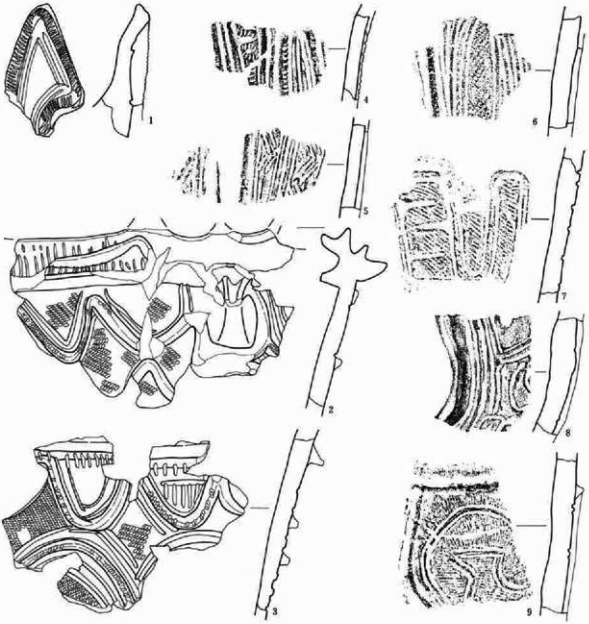
A区113号土坑

第75図　土坑出土遺物　(1)



A区59号土坑

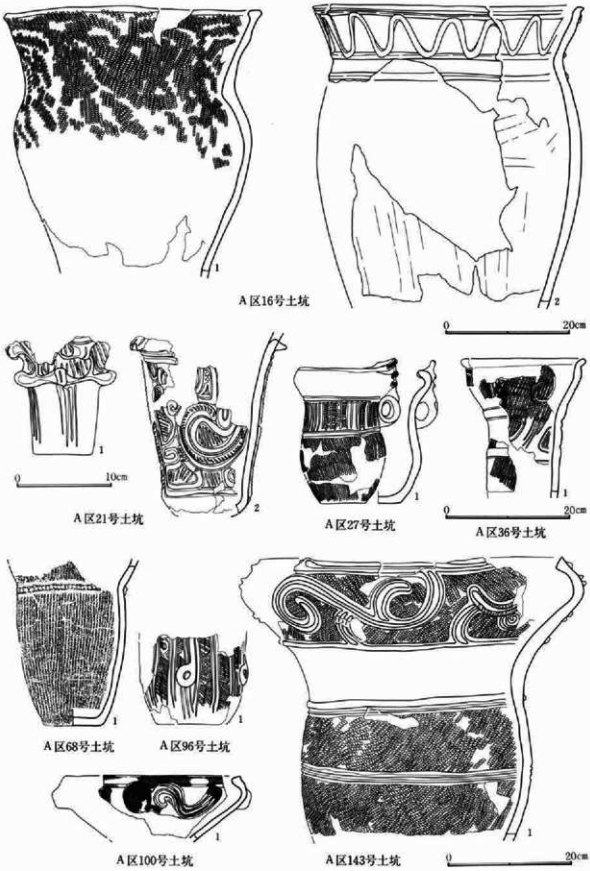
0 10cm



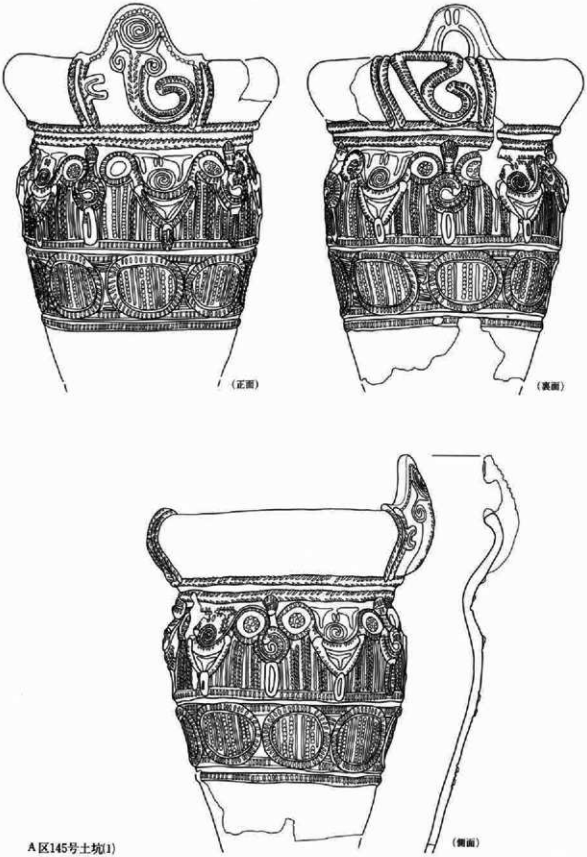
A区44号土坑

0 10cm

第76図 土坑出土遺物 (2)



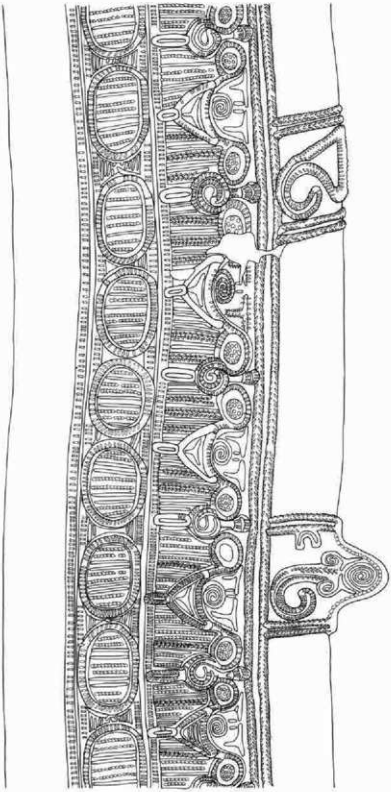
第77図　土坑出土遺物 (3)



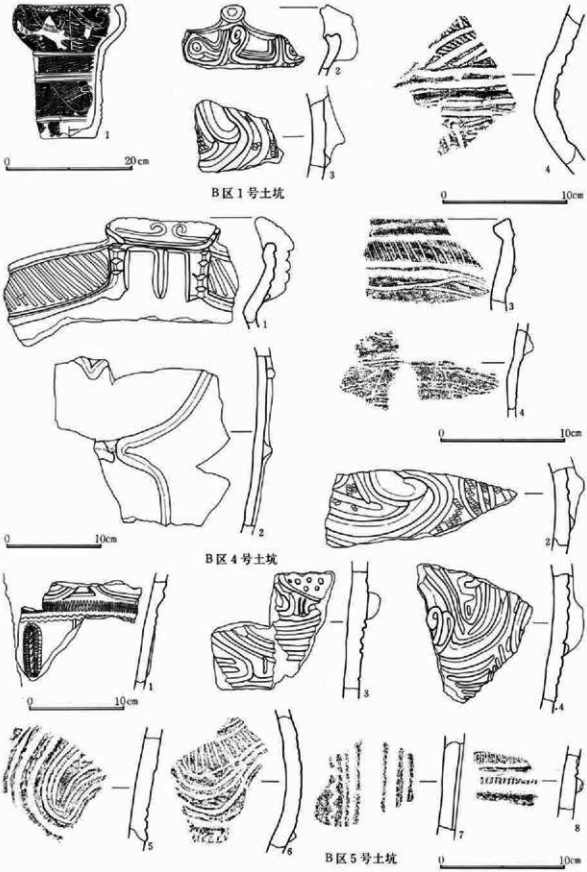
A区145号土坑(1)

第78図 土坑出土遺物 (4)

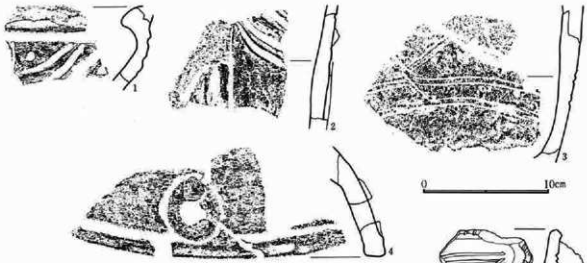
0 20cm



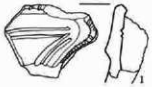
第79図　土坑出土遺物（5）A区145号土坑出土土製耳飾図



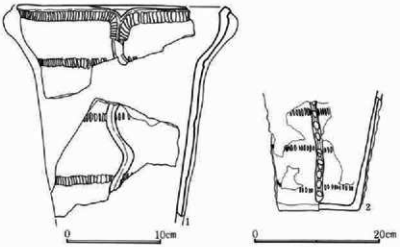
第80図 土坑出土遺物 (6)



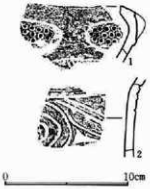
B区8号土坑



B区56号土坑



B区7号土坑



B区66号土坑

B区67号土坑

B区68号土坑

第81図　土坑出土遺物　(7)

遺構出土遺物観察表

遺構名称 遺物番号	器種 出土位置	残存状態 器高×口径×底径	器形・文様の特徴	分類	色調 備考
A区1住 №1	深鉢 床面	口縁部欠損 20.6×――×6.7	胴部中位に強いくびれを有する。地文は撚糸（L）の縦位施文でくびれ部に平行沈線を廻らし、間に交互刺突を施す。胴部下半は3本単位の沈線で連続を2段施文し、そこから下端の連結した3本沈線と波状沈線を交互に垂下している。	連弧文系	橙色
A区1住 №2	深鉢 床面	口縁部片 13.5×――×――	胴部のくびれの強い器形で、口縁部文様帯は、下端を中広の隆帯で区画し、楕円区画文と小渦巻文で構成される。楕円区画内はRL横位施文後、隆帯に沿って沈線施文。胴部はRL縦位。	加曽利E 3－Ⅰ	にぶい黄橙色
A区1住 №3	深鉢 覆土	口縁部片 5.3×――×――	口縁部が内湾する形態で、口縁部文様はRL横位施文後、口唇部に1本、そこから斜位に粘土紐を貼付し、下端に撫で を施す。	曽利系	橙色
A区1住 №4	深鉢 覆土	胴部上位破片 11.0×――×――	口縁部文様帯は、小渦巻文を1本隆帯で弧状に連結し、そこに沈線で楕円区画文を構成する。区画内は縦位の平行沈線。胴部は、口縁部小渦巻下に4本単位の平行沈線を垂下し縦位区画後区画内に被状の波線施文。	加曽利E 3－Ⅰ	橙色
A区1住 №5	深鉢 床面	胴部片 7.9×――×――	器面に撚糸（L）を縦位施文後、胴部中位に3本の平行沈線を廻らし、下位に3本単位の沈線で連弧文を施す。	連弧文系	明褐色
A区2住 №1	器台 床面	完形 12.9×20.8×15.5	上面がわずかに窪んだ台形状で、側面に6個の円孔がある。器内外面は指先の撫で を施す。上面は磨滅しわずかに光沢がある。		灰黄色
A区2住 №2	深鉢 床面	完形　底部破損 20.8×16.0×――	胴部中位にわずかにくびれを有する。胴部にRL縦位施文後口縁部文様帯区画。文様帯内は小渦巻と連結した楕円区画文で6単位構成。区画内は斜位平行沈線施文後隆帯に沿って沈線施文。	加曽利E 3－Ⅰ	橙色
A区2住 №3	深鉢 覆土	口縁～胴部 35.7×34.2×9.6	胴部上半に張りくびれを有する。口縁部文様帯は小渦巻間を2本隆帯で弧状に連結して構成。区画内及び胴部の縦位条線は口縁部区画後に施文。	*	灰褐色
A区2住 №4	深鉢 覆土	口縁部～胴部 39.9×39.4×――	胴部下半にわずかに張りを有する器形で、口縁部は上端に小渦巻文を施した4単位の突起と、舌状の突起で構成される。口縁部文様帯は突起部を隆帯で連結し構成。胴部は撚糸（R）縦位施文後、2本単位の隆帯を垂下して縦位区画し、区画内は2本隆帯で上部に弧、舌部に渦巻文を施す。	曽利系	にぶい赤褐色
A区2住 №5	深鉢 覆土	口縁部～胴部 15.2×39.8×――	口縁部文様帯は、胴部にRL横位施文後隆帯で区画し、小渦巻文と楕円区画文で構成。区画内はRL光沢施文。胴部撫で無し。	加曽利E 3－Ⅰ	褐色
A区2住 №6	深鉢 覆土	口縁部～胴部 20.8×――×――	胴部上半に強いくびれを有する。口縁部文様帯は隆帯区画で、小渦巻文と連結した楕円区画文で構成される。区画内は斜位平行沈線光沢隆帯、隆帯に沿って沈線を廻らす。胴部はRL横位施文後、両側に粗い撫 を施した2本隆帯で唐草状文様施文。	*	橙色
A区2住 №7	深鉢 覆土	口縁部～胴部 29.8×36.7×――	口縁部下に弱いくびれを有し、胴部に張りがある器形。口縁部文様帯は、胴部RL横位施文後の隆帯区画で、小渦巻文と連結した楕円区画文で構成。区画内は深い縦位の平行沈線を光沢隆帯に沿って沈線を廻らす。	*	にぶい橙色
A区3住 №1	深鉢 炉体土器	胴部片 12.0×――×――	胴部文様は、中位に小渦巻文を有する2本隆帯を垂下し、さらに小渦巻文部から横位に連結して方形区画する。区画内は縦状の沈線施文。	曽利系	にぶい橙色
A区3住 №2	深鉢 覆土	口縁部付近 10.6×――×――	口縁部文様帯は隆帯区画で、区画内にRL?光沢後隆帯に沿って中広の撫で を施す。胴部は縦位の波状条線施文。	加曽利E 3	黄灰色
A区4住 №1	深鉢 炉体土器	口縁付近～胴部 20.5×29.0×――	胴部下半にわずかにくびれを有する。口縁部は、胴部にRL縦位施文後、小渦巻文を2本単位の隆帯で弧状に連結して構成。胴部は3本単位の平行沈線と1本単位の波状沈線を交互に垂下。	加曽利E 3－Ⅰ	橙色
A区4住 №2	深鉢 覆土	口縁部～胴部 30.0×60.0×――	口縁部は内湾し、胴部中位にくびれを有する。口縁部文様帯は隆帯と中広沈線の楕円区画文で構成され、区画内はRL光沢。胴部は文様剥付後RLを光沢し、中央上端が疎手状となる3本単位の沈線を垂下する。	加曽利E 3－Ⅱ?	明黄褐色
A区4住 №3	深鉢 覆土	胴部～底部 38.6×46.4×12.0	RL楕文後、4本単位の沈線で渦巻状文様施文。文様連結部に小渦巻文を施す。	大木系?	明赤褐色
A区4住 №4	浅鉢 覆土	口縁～胴部 21.3×――×――	口縁部がわずかに内湾する鉢形で、器内外面は丁寧に磨かれている。口縁部は中広に肥厚し、胴部との境に段を有する。		にぶい橙色
A区5住 №1	浅鉢 炉体土器	胴部片 11.0×――×――	算盤玉状の器形で口縁部は直立するのもと考えられる。肩部の文様帯は2本単位の隆帯で三角形状に区画し、連結部に沈線で小渦巻文を施す。		橙色 内外面の磨れが激しい。
A区5住 №2	深鉢 覆土	口縁部～胴部 29.7×24.3×――	くびれのほとんどみられない鉢形。口縁部文様帯は平面的な隆帯区画で、小渦巻文と連結する楕円区画文で構成されている。区画内はL縦位光沢。胴部はL縦位施文後中の狭い平行沈線と波状沈線を垂下し、沈線間を磨消す。	加曽利E 3－Ⅱ	にぶい橙色

遺構名称 遺物番号	器　種 出土位置	残存状態 器高×口径×底径	器形・文様の特徴	分　類	色　調 備　考
A区5住 №3	深　鉢 覆　土	口縁部～胴部 26.0×22.5×——	口縁部文様帯は、小渦巻文を２本隆帯で弧状に連結し、楕円区画文を構成。区画内は斜位平行沈線を充填し、隆帯に沿って沈線を廻らす。胴部は結節したLを縦位施文している。	加曽利Ｅ３－Ⅰ	にぶい橙色
A区5住 №4	深　鉢 炉　上　面	口縁部～胴部 25.2×38.0×——	口縁部に市弧の無文帯を有し、口縁部文様帯は小渦巻文を隆帯で弧状に連結し、区画内に斜位平行沈線充填後隆帯に沿って沈線を廻らす。胴部は燃糸（L）縦位施文後２本単位の隆帯を「V」状に貼付する。隆帯両側の撫では明瞭でなくほとんどみられない。	＊	明赤褐色
A区5住 №5	鉢付土器 覆　土	口縁部～胴部 16.0×32.5×——	口縁部は直立し、胴部の張りも弱い器形で、口縁部下に断面三角形の鍔を丁寧に貼付している。器面は丁寧な磨きを施している。口縁部に１カ所焼成後の補修孔と思われる穿孔あり。		にぶい橙色
A区5住 №6	深　鉢 覆　土	口縁部～胴部 20.8×41.5×——	口縁部はわずかに内消し、強いくびれを有する器形。口縁部は４単位の突起を有する波状口縁で、文様は器面全面に RL 縦位施文後、口縁部に沿って交互刺突を間に有する平行沈線を、くびれ部に３本単位の平行沈線をそれぞれ廻らす。くびれ部上半は口縁部波底部で３本単位の沈線で上下に連結し、胴部は３本単位の沈線で渦巻文を施す。	大木系？	にぶい赤褐色
A区5住 №7	ミニチュア 土　器 覆　土	ほぼ完形 3.9×5.8×3.0	粘土紐積によって成形し、底部は擬高台状に突出する。文様は全くみられない。		橙色。外面高熱により発泡。
A区5住 №8	深　鉢 覆　土	口縁部～胴部 20.2×——×——	くびれのない鉢形。口縁部文様帯は剥落し不明。胴部は RL 縦位施文後、波状及び直線的な１本隆帯を交互に貼付。隆帯間には粗い条線を施す。	加曽利Ｅ３－Ⅰ	明赤褐色 口縁部外面の痕れが散しい。
A区5住 №9	深　鉢 覆　土	口縁部片 ——×——×——	器面全面に RL 縦位施文後、口縁部は隆帯で小渦巻文と楕円区画文を組み合わせて構成。楕円区画内は隆帯に沿って市広の撫でを施す。胴部は口縁部小渦巻文部から２本単位の撫での縦帯な隆帯を垂下し、間に２本単位の沈線を連続条に施文する。	＊	にぶい橙色 口縁部内面の痕れが散しい。
A区6住 №1	深　鉢 床　面	口縁部片	口縁部内面が三角形状に突出する。口縁部文様帯は燃糸（L）を横位施文後、断面カマボコ状の隆帯で小渦巻文及び楕円区画文を構成する。楕円区画内の撫ではあまり明瞭でない。	加曽利Ｅ３	にぶい赤褐色
A区6住 №2	深　鉢 覆　土	口縁部片	口縁部文様帯は楕円区画文と小渦巻文とで構成されるものと考えられ、楕円区画内は斜位平行沈線充填後沈線で楕円区画を描出している。	＊	にぶい橙色
A区6住 №3	深　鉢 床　面	口縁部片	口縁部に沿って市広の隆帯を廻らし、上面に指先による刺突を施す。胴部は平行沈線を垂下し無文帯を区画し、間にLを縦位充填施文する。	加曽利Ｅ３－Ⅲ？	にぶい橙色
A区7住 №1	深　鉢 覆　土	完形 30.4×29.7×9.8	口縁部は内消し、胴部中位に強いくびれを有する。口縁部付近は横位、胴部は斜位に燃糸（L）施文後、口縁部及びくびれ部に３本単位の沈線を廻らす。上半に３本単位の連弧文を施し、下半は、中間に小渦巻文を有する懸垂沈線を６単位垂下し、両側の沈線を左右に連結させ星形の文様を描出している。	連弧文系	にぶい橙色
A区7住 №2	深　鉢 覆　土	口縁部～胴部 17.5×25.6×——	口縁部文様帯は隆帯区画で、胴部文様帯との間に段を有している。文様帯内は４単位の小渦巻文と横長の楕円区画文で構成され、楕円区画文は中央に粘土紐を２本縦位に貼付することによって２分割されている。区画内は縦位平行沈線充填施文後、隆帯に沿って沈線施文。胴部は RL 縦位施文後、平行沈線を４単位垂下し、間に１本単位の波状沈線を垂下している。	加曽利Ｅ３－Ⅰ	褐色 沈線間の磨消しは無し。
A区7住 №3	深　鉢 炉　体　土　器	胴部～底部 21.3×——×8.0	器面に細の粗い RL 縦位施文後、３本単位の平行沈線を５単位垂下している。この内２カ所は、１本単位の波状沈線垂下後に３本単位の平行沈線を引き直している。	＊	橙色。底部はやや深み、周辺が磨滅。
A区7住 №4	深　鉢 覆　土	口縁部～胴部 26.5×42.8×——	胴部上位に弱いくびれを有し、口縁部は直立する。文様帯は３帯構成をとる。口縁部文様帯は、上部に１本の隆帯を廻らし、そこから２～３本の隆帯で連結した小渦巻文を、２本単位の隆帯で弧状に連結している。区画内は縦位平行沈線を充填施文後隆帯に沿って楕円形に沈線を施す。頸部から胴部は、LRL 縦位施文後、塊に鎖状浮線文状の隆帯を廻らし、頸部素文帯を区画する。胴部文様帯は２本単位の隆帯を垂下する。	加曽利Ｅ２	にぶい橙色
A区8住 №1	深　鉢 床　面	口縁部～胴部 15.1×20.2×——	口縁部から頸部にかけて「く」字状に屈曲し、口縁部内面に突帯を廻らしたようになる。口縁部文様帯は、４単位の隆帯小渦巻文を貼付し、渦巻間に波状の隆帯を施す。隆帯上には刻みを施し小渦巻文上はわずかに突起を有する。頸部は無文帯であるが、小渦巻文下から刻みを有する隆帯を垂下する。胴部は隆帯で方形区画し、区画内は RL 縦位施文後沈線で方形の文様施文。	加曽利Ｅ１？	橙色

遺構名称 遺物番号	器種 出土位置	残存状態 器高×口径×底径	器形・文様の特徴	分類	色調 備考
A区８住 No２	深鉢 覆土	口縁部～胴部 11.2×16.6×――	口縁部は内湾し、頸部にくびれを有する。文様帯は口縁部のみで、２本単位の隆帯で弧状に連結する。頸部には１本の隆帯を巡らし、胴部と区画する。胴部は縦位の研磨。	加曽利Ｅ１？	橙色
A区８住 No３	深鉢 覆土	口縁部片	口縁部から頸部にかけて「く」字状に屈曲し、屈曲部に隆帯を１本廻らして、口縁部文様帯を区画する。区画内には４本単位の小渦巻を貼付し、間に平行沈線と交互刺突を施す。	〃	にぶい赤褐色
A区８住 No４	深鉢 覆土	口縁部片	口縁部は内湾し、４単位の山形小突起が付くと考えられる。器面全面に撚糸（Ｌ）を縦位施文後、口縁部に沿って２本単位の隆帯を廻らし、小突起部で連結する。また、小突起下に巾広の隆帯を「Ｃ」字状に貼付し、左右に同隆帯で連結する。隆帯上には強い沈線を施し、２本単位のような表現をとる。胴くびれ部には刻みを有する太い隆帯を１本廻らし、両側に沈線を施す。	〃	橙色
A区８住 No５	深鉢 覆土	口縁部片	口縁部は強く内湾し、口縁部内側が「く」字状に窪む。器面には撚糸（Ｌ）を縦位施文し、巾広の隆帯及び平行沈線で文様施文し、隆帯上には沈線を施す。	〃	にぶい赤褐色
A区９住 No１	深鉢 覆土	口縁部～胴部 17.0×38.0×――	胴部上位に弱いくびれを有し、口縁部は直立する。文様帯は３帯構成で、口縁部文様帯は、上端に隆帯を１本廻らし、突出する小渦巻文を２本隆帯で弧状に連結し構成している。区画内は縦位平行沈線充填後隆帯に沿って沈線を廻らす。頸部無文帯と胴部文様帯の区画は、上端に指先の押圧を施した太い隆帯で、胴部文様帯は RL？縦位施文後、隆帯を波状に垂下する。	加曽利Ｅ２	にぶい黄褐色
A区９住 No２	深鉢 覆土	胴部～底部	器面に RL を縦位～斜位施文後、２本単位の隆帯を１本単位の波状隆帯を交互に垂下する。隆帯両側の撫では粗く、剥落した部分もある。	〃	明赤褐色
A区９住 No３	深鉢 覆土	胴部～底部	全面縦位条痕施文後粗く撫でを施す。	〃	にぶい赤褐色 底部はやや歪み。 周辺磨滅。
A区10住 No１	釣手形土器 床面	完形 15.6×17.0×10.8	逆台形状の体部で口縁部は「く」状に内傾し、三叉の釣手部が付く。口縁部文様は３本単位の平行沈線で、屈曲部外面には斜位の押圧を施す。釣手部は両側面に口縁部から連続する３本単位の平行沈線が廻り、上端及び基部に小渦巻文を施す。また、釣手基部にはやや大柄な渦巻文が施され、その上部に粘土紐を横状に貼付する。上端は縦の円磨状を呈すると考えられる。	加曽利Ｅ２？	明赤褐色 内面に炭化物付着。
A区10住 No２	深鉢 床面	口縁部～胴部 19.1×17.8×――	口縁部下に強いくびれを有し、胴部中位に張り を有する。口縁部はやや外反し、上端がわずかに内傾する。口唇部には１本の沈線が施され、４単位の突起及び横状の取手があったものと考えられる。胴部は RL 横位施文後、口縁部文様帯を区画する隆帯下端を粗く撫でている。	曽利系	明赤褐色
A区10住 No３	深鉢 覆土	口縁部～胴部 23.2×25.7×――	胴中位に弱いくびれを有する。口縁部は上端に渦巻文を施した４単位の突起と、間の山形の小突起で構成され、口唇部には１本の沈線が施される。胴部は縦位条痕施文後、口縁部下に一端に小渦巻文を有する２本単位の沈線を連弧状に施し、弧部から２本単位の平行沈線及び波状沈線を交互に４単位づつ垂下。	〃	にぶい褐色
A区10住 No４	深鉢 覆土	口縁部～胴部 26.4×36.0×――	口縁部文様帯は１本隆帯で渦巻文を弧状に連結して区画。区画内は RL 横位充填施文後、隆帯に沿って粗い撫でを施す。口縁部文様は５単位構成。胴部は器面割付後条痕を青海波状に施し、無文帯との境に巾広の平行沈線を引き直している。	加曽利Ｅ３－Ⅱ	にぶい褐色
A区10住 No５	深鉢 覆土	口縁部～胴部 22.8×28.7×――	口縁部に沿って沈線を１本廻らし、口縁部無文帯を区画する。胴部文様は、１本単位の沈線を８本垂下し器面を縦位に８分割する。各区画内には上端鋸手状の波状沈線と「Ω」状の区画文が施され、区画内に RL 縦位充填施文し、沈線を引き直す。	〃	にぶい橙色
A区10住 No６	深鉢 床面	口縁部～胴部上位 13.4×42.0×――	３帯構成をとるもので、口縁部文様帯は隆帯の楕円区画文と小渦巻文で構成される。区画内は RL 横位充填施文と思われ、隆帯に沿って沈線を廻らしている。頸部は無文帯である。	加曽利Ｅ２	橙色
A区10住 No７	浅鉢 床面	ほぼ完形 21.1×50.0×9.0	口縁部下に屈曲を有し、口縁部は外面肥厚する。内外面共に全面粗い磨きを施す。		橙色
A区10住 No８	深鉢 床面	口縁部～胴部 37.9×48.0×――	胴部上半に弱いくびれを有し、口縁部に沿って４cm程度帯状に残し、その下全面に RL 縦位施文する。文様は３本単位の連弧文で、残存部で３段観察された。	連弧文系	にぶい橙色

遺構名称 遺物番号	器種 出土位置	残存状態 器高×口径×底径	器形・文様の特徴	分類	色調 備考
A区10住 №9	深鉢 覆土	頸部～胴部 26.0×――×――	胴中位に強いくびれを有し、下半が若干張る器形で、RL縦位施文後、くびれ部に巾広で強い沈線を数本施し、無文を施すことによって隆帯状の表現をしている。下半は2本単位の沈線で横S字文と2－3本単位の懸垂文を描出し、連結部に小渦巻文を施している。	大木系	にぶい橙色
A区10住 №10	深鉢 床面	胴部～底部 36.7×――×12.5	器面全面RL縦位施文。	加曽利E2	橙色。内面は粗れ、底部に炭化物付着。
A区10住 №11	深鉢 床面	胴部～底部 14.4×――×11.5	器面全面RL縦位に間隔をあけて施文。横部はやや歪み原体の圧痕がみられ、周囲はリング状に磨滅している。	＊	明赤褐色。内面は粗れ、底部に炭化物付着。
A区10住 №12	深鉢 覆土	胴部～底部 20.6×――×8.6	胴中位にくびれを有し、下半にわずかに張りをもつ。器面全面に施の大きなRL縦位施文後、間隔の狭い平行沈線及び2本単位の波状沈線を交互に垂下する。	＊	橙色
A区10住 №13	深鉢 覆土	口縁部～胴部片	口縁部文様帯は隆帯区画で、小渦巻文と楕円区画文で構成される。口縁部の文様帯区画は、器面にRL縦位施文後と考えられ、楕円区画内は隆帯に沿って沈線が廻っている。胴部は間隔の狭い平行沈線を垂下する。	加曽利E3－1	明赤褐色
A区10住 №14	深鉢 床面	胴部片	胴部に1本隆帯で渦巻文を施文し、間に沈線を充填施文する。	曽利系	橙色
A区11住 №1	深鉢 床面	口縁部～胴部 6.3×――×――	平縁。口唇部は内折し、口縁部は内湾する。口縁部文様帯は横位隆帯で画されるが、明瞭な分割線ではない。横位隆線より垂下隆線が派生し胴部を分割するのであろう。口縁部文様帯内は交互沈線により蛇行文が描かれる。口唇部、隆線には刻みが施される。	加曽利E出現期	にぶい橙色
A区11住 №2	深鉢 覆土	胴部片 5.3×――×――	頸部破片。刻みを施す横位隆帯が付せられ、上位は無文、下位は撚糸文が施される。やゝ厚手。	＊	にぶい赤褐色
A区11住 №3	深鉢 覆土	胴部片 5.0×――×――	半截竹管による刻みを施した隆帯が垂下し、無文部と沈線による施文部を分割する。沈線はやゝ太めで隆線に沿い、また弧状に描かれる。	＊	にぶい赤褐色
A区12住 №1	深鉢 炉体土器	口縁部欠損 16.9×――×6.6	胴部中位に穏やかな膨らみを持たせる小型の深鉢。頸部に2条の隆線を横位に付し、頸部上位は開き気味である。胴部は撚糸Lを密に施す。	＊	明赤褐色
A区12住 №2	深鉢 覆土	胴部 43.5×――×7.0	厚手で大型の深鉢。胴部上半で大きく開く器形を呈す。無文で縦位、斜位の研磨が施される。	＊	赤褐色
A区12住 №3	深鉢 床面	胴部～底部 6.9×――×8.0	腰部に強かな丸みを持たせ、直立気味に立ち上がる。垂下隆線が数条付され、沈線が2条沿う。隆線によって分割された空白部には刺突文が充填される。	＊	明赤褐色
A区12住 №4	深鉢 覆土	胴部～底部 6.8×――×6.6	腰部は著しく丸みを帯びる。太めの沈線による文様描出を主とし、二重円文や縦位楕円文が描き出される。楕円文は短沈線が充填された後、沈線が縦位に施される。文様帯下端は横位沈線で画される。全体に丁寧な施文である。	勝坂3	にぶい赤褐色
A区12住 №5	器台 覆土	口縁部～底部 8.4×19.5×15.9	大型の器台である。脚部中位に孔が穿たれる。残存部では1ケのみである。孔を中心とした外面は丁寧な撫でが施されるが白部上面の磨痕などは看取されない。	＊	赤褐色
A区12住 №6	深鉢 覆土	口縁部～胴部片	大型の深鉢。口縁部に中空状の突起が付され、口縁部は僅かに内湾する。把手は隆帯を繋ぎ、環状突起を両側に配した加飾性に富むものである。口縁部文様帯は横位隆線によって頸部と画され、頸部文様帯は隆帯による波状文が付されるのみである。頸部文様帯の下位には2条の横位隆線で胴部と画し、胴部文様帯は弧状の隆帯とそれに沿う太めの沈線が主な文様であろう。	加曽利E出現期	にぶい赤褐色
A区12住 №7	把手付土器 覆土	把手片	柱状の突起。おそらく口縁部などに付され、垂下隆帯などと連関するものであろう。上面に孔が穿けられるが中空にはなっていない。上端には横位沈線とペン先状刺突文が施され、以下は縦位の沈線と結節沈線が施される。また、沈線に挟まれた空白部には刻みが連続する。	＊	明赤褐色
A区12住 №8	把手付土器 覆土	把手片	円環状の突起。粘土盤を2枚合せ、縁辺を短沈線などで飾る。また、小型の円環状突起も斜位に付され、全体の対象性を崩す。短沈線は2本縁は2本1組で、三方に刻まれ、内面にまで及ぶ。突起下端には上面三角形の小突起が突出する。	＊	にぶい赤褐色

遺構名称 遺物番号	器　種 出土位置	残存状態 器高×口径×底径	器形・文様の特徴	分　類	色　調 備　考
A区12住 No 9	把手付土器 覆　土	把手片	口唇部上に付される波状突起。波頂部より弧状垂下する隆帯や隆線による逆６字状のモチーフが特徴的である。突起、隆帯縁辺には半裁竹管による刺突文が施され、逆６字状のモチーフには施文のLR縄文が残る。内面にも刺突文や沈線が施文される。	加曽利E 出現期	明赤褐色
A区12住 No10	把手付土器 覆　土	把手片	口唇部上に付される大型の把手。把手縁辺を刻みで飾り両側を沈線が充填される。２本１組の短沈線も把手基部に施される。図示し得なかった反対面には沈線による小渦巻文が描かれ基部には三叉文が沈刻される。	＊	にぶい赤褐色
A区12住 No11	深　鉢 覆　土	口縁部片	著しく開く口縁部。内面の後は突出する。口唇部上に環状の突起を付し、突起より派生した細隆線が口縁部の屈曲部で蛇行文となる。屈曲部は横位隆線によって画され、狭い文様帯を形成する。以下の胴部の文様帯は細隆線で半円状に区画がされ、区画内は縦位沈線が充填される。	＊	暗赤褐色
A区12住 No12	深　鉢 覆　土	口縁部片	口縁部は穏やかに内湾する。口縁部の屈曲部上位は撚糸Rの横位、斜位施文。下位は縦位施文である。	＊	にぶい赤褐色
A区12住 No13	深　鉢 覆　土	口縁部片	口縁部は内折し口縁部は穏やかに内湾する。隆線を基本とし、半裁竹管による沈線が縦く隆線に沿う。隆帯は口縁部や双環状突起を中核として弧状に派生し円形の区画などをなす。区画内は刺突文が施される。	＊	にぶい赤褐色
A区12住 No14	深　鉢 覆　土	口縁部片	口縁部は鋭く内折し口縁部は尖り気味である。13と同様に細隆線が口唇部より弧状に延び沈線が沿う。	＊	暗赤褐色
A区12住 No15	深　鉢 覆　土	胴部片	大型の深鉢無部。屈曲部を挟んで２条の横位隆線で画される。上位と下位の文様帯は隆線に沿って太めの沈線が施され、半内浮彫的な文様を主とする。中位の文様帯は隆線による交互の三角区画の連続で、区画内は沈線が丁寧に沿う。	＊	明赤褐色
A区12住 No16	深　鉢 覆　土	胴部片	15と同一個体であろう。大型の環状突起が付され、隆線が派生し、巴状のモチーフを描く。	＊	明赤褐色
A区12住 No17	深　鉢 覆　土	胴部片	刺部しているが突起が付されるのであろう。突起を中核として隆線が派生し沈線が沿う。隆線は縦位楕円状の区画を設け、区画内は刺突文が施される。	＊	明赤褐色
A区12住 No18	深　鉢 覆　土	胴部片	胴部上位の破片。横位隆線で分割され小形の双環状突起や短沈線を施した小突起が付される。突起を中心として隆線が弧状に派生する。一端を結束せずに渦巻状のモチーフを描くものもある。渦巻の内部は刺突文が施される。	＊	赤褐色
A区12住 No19	深　鉢 覆　土	胴部片	懸垂状に垂下する細隆線に小型の双環状突起と短沈線を施した小突起が付される。隆線には太めの沈線が沿い２本１組の短沈線がアクセントとして刻まれる。	＊	赤褐色
A区12住 No20	深　鉢 覆　土	胴部片	細隆線とそれに沿う太めの沈線。沈線は撚糸も施され、隆線によって囲まれた中位には円形のモチーフと三叉文として処理される。	＊	赤褐色
A区12住 No21	深　鉢 覆　土	胴部片	胴部上位の大形破片。15.16と同様に連続する三角区画文が狭い文様帯として配される。下位の胴部文様帯には細隆線より発達した凹面を持つ弧状突起が巴状に設けられ、太めの沈線が空白部を充填する。	＊	明赤褐色
A区12住 No22	深　鉢 覆　土	胴部片	平行する２条の横位隆線によって画される胴部文様帯。隆線間は無文。上位、下位の文様帯とも沈線による方形区画文が配される。方形区画内は無文のようである。	＊	にぶい赤褐色
A区12住 No23	深　鉢 覆　土	胴部片	おそらく口縁部文様帯。横位隆線と蛇行隆線で画される区画文であろう。区画内は縦位沈線群が充填され、中位には円形のモチーフが彫り込まれる。	＊	にぶい赤褐色
A区12住 No24	深　鉢 覆　土	胴部片	胴部下半の破片か。大形の深鉢である。横位隆線と弧状の隆線が付され、空白部を太めの沈線が充填される。横位隆線以下は無文。	＊	にぶい赤褐色
A区12住 No25	深　鉢 覆　土	胴部片	や・薄手の器厚。垂下隆線と円形のモチーフが付せられる。円形のモチーフからは斜位の隆線が派生し、半裁竹管による細沈線が隆線に沿う。垂下隆線の左側には太めの沈線で円形の文様が描かれる。	＊	にぶい赤褐色
A区12住 No26	深　鉢 覆　土	胴部片	半裁竹管による沈線が丁寧に区画文を構成する。区画中位には三叉文が沈刻される。	＊	赤褐色
A区12住 No27	深　鉢 覆　土	胴部片	隆線が垂下し、半裁竹管による沈線が沿う。	＊	赤褐色

遺構名称 遺物番号	器　種 出土位置	残存状態 器高×口径×底径	器形・文様の特徴	分　類	色　調 備　考
A区13住 №1	深　鉢 覆　土	胴部 41.0×――×――	胴中位にゆるいくびれを有する。口縁部文様帯は両側に施文を施した平面的な隆帯で楕円区画している。区画内は L 光軸施文、胴部は器面剥付後、上半は L 縦位、下半 LR 縦位光軸施文後、無文部に縦位の撫でを施し、両側に沈線を引き直す。	加曽利E 3－Ⅲ	明赤褐色
A区14住 №1	深　鉢 覆　土	口縁部～胴部 22.5×29.5×――	胴部上半に弱いくびれを有する器形で、小突起文様帯は1本隆帯を連弧状に施し楕円区画文を構成する。連弧の底頂部には円形の刺突を施す。区画内は細い斜位平行沈線光軸後隆帯に沿って沈線を廻らす。胴部は RL 横位施文後5単位平行沈線を垂下し、沈線間を磨消している。	加曽利E 3－Ⅱ	にぶい褐色
A区14住 №2	深　鉢 炉体土器	口縁部～胴部 12.3×20.8×――	口縁部文様帯は、1本の隆帯で横位に区画し、この隆帯に連結して上向に隆帯で小渦巻文を6単位施文し、渦巻間は LR 光軸施文する。胴部は「U」状及び3本単位の平行沈線を交互に垂下し「U」状区画内に LR を光軸施文する。	＊	明赤褐色
A区14住 №3	深　鉢 覆　土	口縁部片	口縁部文様帯は、口縁部肥厚部に弧状に隆帯を貼付して楕円区画文を構成し、区画内に円形刺突をランダムに施す。胴部は平行沈線を垂下し無文部を区画し、間に RL を斜位光軸施文する。	加曽利E 3－Ⅲ？	にぶい黄橙色
A区15住 №1	深　鉢 覆　土	口縁部～胴部片	胴部中位にわずかにくびれを有する器形で、口縁部文様帯は、平面的な隆帯の小渦巻文と楕円区画文で構成され、楕円区画内は RL 横位光軸施文後隆帯に沿って撫でを施す。胴部は RL を粗く縦位施文後、間隙のごく狭い平行沈線を垂下し、波後に口縁部文様帯を区画する横位隆帯下端に撫でを施している。	加曽利E 3－Ⅱ？	褐色 沈線間磨消しは無し。
A区15住 №2	深　鉢 覆　土	胴部～底部 7.4×――×5.3	器面に LRL を粗く縦位施文後、比較的巾広の平行沈線を4単位垂下している。沈線間は磨消さない。	？	赤褐色
A区15住 №3	深　鉢 覆　土	胴部片	1本単位の隆帯を垂下し縦位区画し、区画内に被杉状沈線を充軸施文。	曽利系	赤褐色
A区16住 №1	浅　鉢 覆　土	口縁部～胴部 16.0×38.0×――	口唇部は平坦で内傾し、口縁部断面は方形状を呈する。口縁部は強く内湾する鉢形。文様は両端に小渦巻文を有する隆帯を弧状に貼付する。	加曽利E 1？	赤褐色 上半赤彩の痕跡あり。
A区17住 №1	深　鉢 炉体土器	口縁部～胴部 20.7×――×――	胴中位に比較的強いくびれを有する。口縁部文様帯は隆帯区画で、小渦巻文と楕円区画文で構成され、下端を区画する隆帯には先端に小渦巻文を付す深い沈線を廻らす。胴部は L 縦位施文後口縁部文様帯区画の横位隆帯上から、波状の1本単位の隆帯を垂下し、器面を4単位に縦区画する。区画内は上下に「し」状の2本単位沈線を施文し、1カ所だけ隆帯と両側沈線で同文様を施している。口縁部外面及び内面は熱による刺部が激しい。	加曽利E 3－Ⅰ	橙色
A区17住 №2	壺形土器 床　面	ほぼ完形 27.0×11.0×8.0	口縁部は長く直立し、胴部中位が強く張る器形。口縁部は無文で胴部との境に1本の太い隆帯を廻らしている。胴部は巾広の沈線で文様描出しており、上下の文様が入り組んでいる。上文様は楕円区画文と渦巻文5単位で構成され、下文様は大柄な渦巻文と「U」状の区画文で構成され、区画内は RL の光軸施文である。	大木9？	橙色
A区17住 №3	深　鉢 床　面	口縁部～胴部 13.0×27.0×――	口縁部はやや内湾し、胴上半にくびれを有する。口縁部には4単位と思われる山形の小突起がみられる。口縁部文様帯は撫でを施した隆帯で下端区画及び小渦巻文を施し、小渦巻間に斜位平行沈線施文後、沈線で楕円区画する。さらに口縁部文様帯上縁に沿って円形刺突を廻らす。胴部は RLR 縦位施文後2本単位の平行沈線を垂下する。	加曽利E 3－Ⅰ	にぶい褐色
A区17住 №4	深　鉢 覆　土	口縁部～胴部 30.7×41.4×――	口縁部文様帯は隆帯区画で、小渦巻文を弧状に連結し楕円区画文を構成している。区画内は縦位平行沈線光軸施文後、隆帯に沿って沈線を廻らせる。胴部は比較的巾広の平行沈線を9単位垂下し器面を縦区画し、区画内に被杉状沈線を充填する。	曽利系	灰褐色
A区17住 №5	深　鉢 覆　土	口縁部～底部 30.0×20.0×8.0	円筒状の器形で、口縁部文様帯は隆帯の楕円区画で構成される。区画内は条線を斜位光軸施文し、隆帯に沿って撫でを施す。胴部は平行沈線を垂下し、区画内に縦位条線光軸施文後、1本単位の波状沈線を垂下する。	加曽利E 3－Ⅲ	橙色
A区17住 №6	深　鉢 覆　土	口縁部片～胴部 15.0×32.0×――	口縁部は内湾し、胴上位にくびれを有する。口縁部文様は両側に撫でを施した隆帯で、小渦巻文と楕円区画文を組み合わせている。区画内は RL 横位光軸施文後、隆帯に沿って撫でを施す。胴部は器面剥付後区画内に RL を光軸施文し、無文帯両側に沈線を引き直している。	＊	橙色

遺構名称 遺物番号	器種 出土位置	残存状態 器高×口径×底径	器形・文様の特徴	分類	色調 備考
A区17住 No 7	深鉢 覆土	口縁部～胴部 37.2×46.0×——	口縁部文様帯は両側に撫でを施す隆帯で、小渦巻文と楕円及び三角形区画文を構成し、区画内に RL 光堝施文後隆帯に沿って撫でを廻らす。胴部は器面剥付後区画内に RL 光堝施文し、無文帯両側に沈線を引き直している。	加曽利E 3－Ⅲ	明赤褐色
A区17住 No 8	深鉢 床面	口縁部～胴部 13.7×32.6×——	口縁部文様帯は隆帯を連弧状に貼付し、楕円区画文を構成する。区画内は斜位平行沈線光堝後、隆帯に沿って沈線を廻らせる。胴部は縦位条縄施文。	加曽利E 3－Ⅰ？	橙色
A区17住 No 9	深鉢 床面	口縁部～胴部 7.2×20.0×——	口縁部文様帯は、小渦巻文と連結した弧状隆帯で楕円区画し、区画内は無糸（L）光堝施文後、隆帯に沿って撫でを廻らす。胴部は無糸（L）縦位施文。	＋	にぶい赤褐色
A区17住 No10	浅鉢 床面	口縁部～胴部 16.3×6.6×——	口縁部は短く直立し、胴部は「く」状に屈曲する。肩部の文様帯は無糸（L）縦位施文後、頂部に1本隆帯を廻らし、この隆帯と胴部屈曲部との間に粘土紐を「＊」状に貼付し楕円区画する。区画内は隆帯に沿って沈線を廻らせる。胴部下半は無糸（L）を斜位に数段施す。	＋	にぶい赤褐色
A区18住 No 1	両耳壺 炉体土器	口縁部～胴部 18.3×29.0×——	口縁部は無文で直立し、胴部上半に強い張りを有する。胴部上半には隆帯と撫でによる楕円区画文が施され、区画内は RL 光堝施文後撫でが施される。また、中広の撫でで5字文を施した1対の橋状把手が貼付されている。胴部下半は縦位条縄施文。	加曽利E 3－Ⅳ	橙色
A区18住 No 2	両耳壺 覆土	口縁部～胴部 15.7×27.7×——	口縁部は無文で直立し、胴部上半に比較的強い張りを有する。口縁部と胴部の境は撫でを施した隆帯で区画し、連結して1対の橋状の把手が貼付されたものと考えられる。胴部は「∩」状の区画文と蕨手文を中広の沈線で交互に施し、区画内は RL 光堝施文する。	＋	にぶい橙色
A区18住 No 3	深鉢 覆土	口縁部～底部 29.8×22.0×10.5	口縁部は強く内湾し、胴部上半にくびれを有する。器面は上半に1本単位の中広の沈線を波状に廻らし、波頂部に入り組むように「∩」状の区画文を沈線で施す。さらに区画内は LR 光堝施文し、上位縄文部及び下位無文部に蕨手文を施す。胴部内面下半に炭化物付着。	＋ -	にぶい褐色
A区19住 No 1	深鉢 炉体土器	口縁部～胴部 13.0×20.0×——	口縁部文様帯は隆帯区画で、小渦巻文と楕円区画文で構成される。区画内に縄文が施文されたかどうかは器面の損耗が激しく不明。また、口縁部文様帯区画隆帯上には円形刺突がみられる。胴部は「∩」状の沈線を8単位垂下し、器面を縦位区画し、沈線間は LR を光堝施文したと考えられる。	加曽利E 3－Ⅲ？	黄橙色
A区20住 No 1	深鉢 炉体土器	口縁部～胴部 27.1×30.5×——	胴部にくびれを全く有さない鉢形である。口縁部文様帯は中広の沈線で6単位の楕円区画文を施し、区画内に LR 縦位光堝施文する。胴部は2～3本単位の平行沈線で縦位光堝施文する。内面中位に炭化物わずかに付着。	加曽利E 3－Ⅳ？	にぶい橙色
A区21住 No 1	深鉢 炉体土器	頸部～胴部 12.0×——×——	胴部くびれ部に2本単位の平行沈線を廻らし、沈線間及び下位に円形刺突を施す。下半の文様は「∩」状の沈線を13単位垂下し無文部と区画する。区画内は RL 光堝施文後沈線の引き直しをし、無文部には縦位に円形刺突を施す。	加曽利E 3－Ⅳ	橙色
A区21住 No 2	深鉢 覆土	口縁部～胴部 14.5×19.0×——	口縁部がわずかに内湾する鉢形で、全面斜位条縄施文後口縁部に沿って中広の沈線を1本廻らせる。	＋	にぶい褐色
A区21住 No 3	両耳壺 覆土	口縁部～胴部 18.5×26.6×——	口縁部はやや外反ぎみに立ち上がり、胴部上半に強い張りを有する。口縁部は無文で、肩部文様帯は撫でを施した隆帯で楕円及び円形区画文を施している。円形区画文上端は杏状に突出し楕円区画文の他端に1対の橋状の把手が付されるものと考えられる。区画内は RL 光堝施文。胴部下半は縦位条縄施文。	＋	にぶい赤褐色
A区21住 No 4	深鉢 覆土	口縁部片	口縁部は強く内湾する器形で、口縁部に沈線を1本廻らし、下位に1本単位の波状沈線を廻らし、無文部と縄文部を区画する。区画内は RL 光堝施文する。	＋	にぶい赤褐色
A区22住 No 1	深鉢 覆土	口縁部片	口縁部は4単位の波状口縁と考えられ、口縁部文様帯は両側に撫でを有する隆帯で、小渦巻文と連結した楕円区画文を構成する。区画内は RL 光堝施文後撫でを施す。胴部は平行沈線を垂下し、RL 光堝施文。	加曽利E 3－Ⅲ	にぶい橙色
A区22住 No 2	深鉢 床面	口縁部片	4単位の杏状の突起が付くものと考えられ、突起下に隆帯と中広の撫でで小渦巻文を施し、渦巻頭を隆帯で弧状に連結し楕円区画文を構成する。区画は RL 横位光堝施文する。胴くびれ部に間に円形刺突を有する中広の平行沈線を廻らせ、口縁部文様帯との間に無文帯を形成する。口縁部内面肥厚し、明瞭な段を有する。	加曽利E 3－Ⅲ	灰褐色

遺構名称 遺物番号	器種 出土位置	残存状態 器高×口径×底径	器形・文様の特徴	分類	色調 備考
A区22住 No 3	深鉢 覆土	口縁部片	口縁部には4単位の山形小突起が付されるものと考えられる。文様は間に円形刺突を有する平行沈線を、口縁部下に波状に廻らし、残りの部分に RL を光明施文する。	?	にぶい赤褐色
A区22住 No 4	深鉢 覆土	口縁部～胴部片	口縁部は波状口縁になるものと思われるが残存せず不明。口縁部文様帯は無文を施した隆帯で小渦巻文と楕円区画文を構成すると思われ、区画内に波状条線を光明施文後隆帯に沿って無文を廻らす。胴部は器面附付後波状条線を縦位光明施文し、沈線を引き直し無文部を区画する。口縁部下内面が「く」状に屈曲。	加曽利E 3－Ⅲ	褐色
A区22住 No 5	深鉢 床面	胴部～底部 13.5×――×7.8	やや中広の平行沈線を垂下し器面を縦位区画後、区画内に波状条線を縦位光明施文する。沈線の引き直しなし。	*	橙色
A区22住 No 6	深鉢 覆土	胴部～底部 5.9×――×5.2	器面に RL 施文後半截竹管状工具で沈線を垂下する。底部外縁部の磨滅が激しい。	*	にぶい赤褐色
A区23住 No 1	深鉢 炉体土器	口縁部～胴部 58.0×56.0×――	いわゆる「胴部隆帯文土器」と呼称されるもので、口縁部文様帯と胴部文様帯の2帯構成をとる。口縁部文様部は、無文を施した太い隆帯で楕円区画文と半月形区画文を交互に6単位施し区画内は RL 横位光明施文後、隆帯に沿って無文を廻らしている。胴部は文様帯は、無文を施した2本単位の隆帯で、横S字文を3単位施し、渦巻部から同じ2本単位の隆帯を垂下する。さらに、隆帯によって区画された部分には RL を光明施文し、隆帯に沿って無文を施している。内面わずかに横れがみられる。	加曽利E 3－Ⅲ?	褐色
A区24住 No 1	深鉢 覆土	口縁部片	3帯構成をとるもので、口縁部に4突起を有するものと考えられる。口縁部文様帯は隆帯の小渦巻文と楕円区画文で構成され区画内は縦位平行沈線光明後、隆帯に沿って浅い沈線を廻らす。胴部は無文帯で、口縁部文様帯中の隆帯協付は雑。	加曽利E 2	にぶい橙色
A区24住 No 2	深鉢 覆土	口縁部片	3帯構成と考えられ、口縁部文様帯は斜上方向に突出する小渦巻文と連結した弧状隆帯で区画された楕円区画文で構成される。区画内は縦位平行沈線光明後隆帯に沿って沈線施文。胴部は、RL 縦位施文した素文帯である。口縁部にわずかに炭化物付着	*	にぶい橙色
A区25住 No 1	深鉢 埋甕	口縁部～胴部 19.7×26.5×――	口縁部文様帯は隆帯区画で、小渦巻文を連結する楕円区画文で構成され、区画内はランダムな刺突後隆帯に沿って沈線を廻らす。胴部は全面に RL 縦位施文後平行沈線を4単位垂下し縦区画する。区画内には2本単位の沈線で「L」状の支様を懸垂沈線に連結し左右に施す。	加曽利E 3－1	にぶい赤褐色
A区25住 No 2	深鉢 埋甕	胴部～底部 51.0×――×7.4	2本単位の平行沈線を8単位垂下し、器面を縦位区画する。区画内は綾杉状沈線を光明施文、1本単位の中広の波状沈線を垂下している。	曽利系	褐色
A区26住 No 1	深鉢 炉体土器	口縁部欠損 22.5×――×6.0	口縁部文様帯は、一端に小渦巻文を有する隆帯を弧状に連結し楕円区画文を構成する。区画内は斜位平行沈線光明施文後、隆帯に沿って沈線を廻らす。胴部は2本単位の隆帯中位を左右に連結し「H」状とした隆帯を5単位垂下し縦区画後、上半に「V」状に隆帯を貼付し、区画内中央に懸垂沈線を伴う綾杉状沈線を光明施文する。底部の磨滅が激しい。	*	にぶい橙色
A区26住 No 2	深鉢 床面	胴部 20.7×16.5×6.5	ほぼ完形 口縁部下にくびれを有し、胴部上位に張りを有する。文様は全面に縦位条線施文後、上端が「コ」状になる平行沈線を8単位垂下する。外面の一部剥の粗れが激しい。	?	にぶい褐色
A区26住 No 3	深鉢 床面	口縁部～底部 20.7×16.5×6.5	くびれを有さない鉢形で、器面に熱糸（L）施文後、口縁部及び胴部中位に2本単位の沈線を廻らし横位区画する。区画内には2本単位沈線の連弧文をそれぞれ一帯廻らす。	連弧文系	にぶい赤褐色
A区26住 No 4	深鉢 覆土	口縁部～胴部 21.0×25.5×――	口縁部は上端に小渦巻文を付した4単位の突起が施され、突起間を隆帯でレリーフ状に連結し、突起部は鶴状となる。突起前面及び下方には円孔がみられる。突起を連結する隆帯は中間で上端と連結し小渦巻文が付される。胴部は RL 縦位施文後2本単位の平行沈線を5単位垂下する。	曽利系	にぶい黄橙色
A区27住 No 1	深鉢 覆土	口縁部片	4単位の舌状突起を有すると思われる。口縁部文様帯は隆帯と中広の無で楕円状区画文を施し、区画内は RL 光明施文後再度無文を施す。また、隆帯上に円形刺突がみられる。	加曽利E 3－Ⅲ?	にぶい橙色
A区27住 No 2	深鉢 覆土	胴部片	LRL 施文後2本単位の平行沈線で文様描出する。	大木系?	橙色
A区27住 No 3	深鉢 覆土	胴部片	器面剥付後 RL 縦位光明施文し、無文部に3本単位の中広沈線を垂下する。	加曽利E 3－Ⅲ?	にぶい橙色

遺構名称 遺物番号	器種 出土位置	残存状態 器高×口径×底径	器形・文様の特徴	分類	色調 備考
A区27住 №4	浅鉢 覆土	口縁部～胴部 14.7×50.6×——	4単位の波状口縁と考えられ、口縁部下に屈曲がみられる。器面は内外面研磨され、内面は黒色にいぶしがされている。口縁部は外面肥厚する。	加曽利E 3－Ⅲ？	にぶい褐色
A区28・ 35住 №1	深鉢 床面	口縁部～胴部 33.8×34.0×——	胴部上位に張り を有し、口縁部がわずかに内傾する。口縁部文様帯は隆帯区画で、胴部に LRL 縦位施文後連続状に隆帯を廻らせ半円形の区画上端及び隆帯に沿って沈線を廻らせる。胴部は、胴部最大径部直上に隆帯を1帯廻らせ、連結して1本単位の隆帯を垂下する。隆帯両側の撫では粗く、地文の上にかかっていることが観察できる。単位は不明。	加曽利E 3－Ⅰ	にぶい褐色
A区28・ 35住 №2	深鉢 床面	口縁部～胴部片	口縁部文様帯は中広の沈線で楕円区画文と連結する。小渦巻文で構成される。特に小渦巻文は沈線を深く抉ることにより、隆帯表現としている。区画内は縦位平行沈線充填後、楕円状に沈線を引き直す。胴部は隆帯で上端及び中位に小渦巻文を有する縦長の区画文を施し、区画文間には1本単位の隆帯を垂下後、側に綾杉状沈線を充填する。	曽利系	褐色
A区28・ 35住 №3	深鉢 床面	口縁部～胴部 21.0×36.6×——	口縁部文様帯は撫で を施した中広の隆帯区画で、小渦巻文と連結した楕円区画文で構成され、区画内は2段の列点と斜位平行沈線を交互に充填したものと考えられ、隆帯に沿って粗い沈線を廻らせる。胴部は全面しを施文し、口縁部文様帯を区画する隆帯下端に1本の沈線を施す。	加曽利E 3－Ⅰ	灰褐色
A区28・ 35住 №4	深鉢 覆土	口縁部～胴部 24.5×36.0×——	口縁部は内湾し、胴部中位に強いくびれを有する。口縁部文様帯は撫で を施した隆帯区画で楕円区画文と連結する。この楕円区画文連結部は突出し突起状を呈する。区画内は RL 縦位充填施文後隆帯に沿って中広の撫で を施す。胴部は3本単位の平行沈線を口縁部楕円区画文連結部及び孔中央から垂下し、器面を縦区画する。区画内は RL 縦位充填施文し、沈線の引き直しをしない。内面下半がやや粗れている。	加曽利E 3－Ⅱ？	にぶい橙色
A区28・ 35住 №5	深鉢 胴部片	口縁部～胴部片	口縁部文様帯は粗い撫で を施した隆帯区画で、小渦巻文と連結した楕円区画文を構成する。区画内は縦位平行沈線充填施文後隆帯に沿って撫で を廻らせる。胴部は上端に1段 L を横位施文し、下半は RL を縦位施文する。	加曽利E 3－Ⅰ	灰褐色
A区28・ 35住 №6	深鉢 床面	底部欠損 17.4×11.0×——	口縁部は強く内湾し、山形の小突起を4単位施す。口縁部文様帯は隆帯で、楕円区画文と連結した小渦巻を施し、区画内に、LR 充填後隆帯側面に沈線を施す。胴部は間隔の狭い2本単位の平行沈線を6単位垂下し、区画内上半に LR を方向を変え羽状を意識したかのように充填施文している。	加曽利E 3－Ⅱ？	明赤褐色
A区28・ 35住 №7	深鉢 覆土	口縁部～胴部 41.7×38.6×——	胴部下半にわずかにくびれを有する。口縁部文様帯は楕円区画文と連結する小渦巻文6単位で構成されているが、隆帯で表現されているのは小渦巻文と楕円区画文上端だけで、下半は沈線である。区画内は LR を充填施文し、沈線を廻らす。胴部は平行沈線を10単位垂下し、区画内上半に LR 縦位。下半に条線をコンパス文状に充填施文し、沈線を引き直す。	加曽利E 3－Ⅲ？	にぶい橙色
A区28・ 35住 №8	深鉢 床面	口縁部～胴部 21.0×36.6×——	口縁部下に中広の隆帯を廻らし、下位に1本単位隆帯で小渦巻文と楕円形区画文を施し、口縁部文様帯を構成する。区画内は綾位の綾杉状沈線を充填し、隆帯に沿って鋭な撫で を施す。胴部は上半が弧状に連結した平行沈線を斜位に施し、LR を縦位充填施文する。	＊	にぶい赤褐色
A区28・ 35住 №9	深鉢 覆土	口縁部～胴部 17.1×32.8×——	口縁部文様帯は鋭な隆帯で、小渦巻文と連結した楕円区画文を施し、区画内に RL 横位充填施文後、隆帯に沿って粗い撫で を廻らす。胴部は上端の連結した平行沈線で器面縦区画後、区画内に RL を横位充填施文する。沈線の引き直しはなし。	＊	にぶい橙色
A区28・ 35住 №10	深鉢 覆土	口縁部～胴部 16.3×17.0×——	器面内外面を縦位研磨後、鋭な2本単位の平行沈線を5単位垂下し、器面を縦区画する。次に口縁部に沿ってやや中広の沈線を1本廻らし、口縁部との間に円形刺突を1帯施す。器面のハゼが激しい。	＊	明黄褐色
A区28・ 35住 №11	深鉢 覆土	胴部片 11.0×——×——	器面の粗れが激しく、懸垂する2本単位の平行沈線が数単位観察できただけで、地文は不明である。	＊	橙色
A区28・ 35住 №12	深鉢 覆土	胴部～底部 14.4×——×7.0	器厚がやや薄めで外面は丁寧に縦位に研磨されている。底部にも若干の光沢があり、周辺のみ磨滅している。内面及び外面の一部に炭化物が付着している。	＊	橙色

遺構名称 遺物番号	器種 出土位置	残存状態 器高×口径×底径	器形・文様の特徴	分類 備考	色調 備考
A区29住 No 1	深鉢 覆土	胴部～底部 21.8×22.0×14.0	大形の深鉢。楕円隆線で無文の胴部下半と画される。胴部文様帯は隆線が弧状、縦位、斜位に付され平行する沈線は半截竹管による細沈線である。明瞭な区画文を設けず、隆線間に挟まれた空白部には沈線文が描かれる。縦位隆線上位に接する弧状突起は平行する沈線の動きから縦位に絞行する兆しを見せる。また、地文の縄文は隆帯上にまで施され、隆帯貼付後の施文を物語る。	加曽利E 出現期	橙色
A区29住 No 2	深鉢 覆土	口縁部片 9.28×31.4×——	開き気味の口縁部形態。口唇部は内折する。環状突起と弧状突起の組み合わせの巴状モチーフを1単位とし、これが6～8単位配される口縁部文様帯があろう。突起、隆線には太めの沈線が沿い、中位の空白部は沈線による三角文と三叉文で処理される。	*	にぶい赤褐色
A区29住 No 3	深鉢 覆土	頸部片	大型の深鉢頸部。頸部隆線によって、口縁部文様帯と胴部文様帯を画する。両文様帯とも頸部隆線より細隆線が派生し太めの沈線が沿う。口縁部文様帯内の区画中位は波線で4字状に別まれる。胴部文様帯には2と同様に環状突起と弧状突起が配される。地文の縄文LRは弧状突起の一端にまで及ぶ。	*	にぶい赤褐色
A区30住 No 1	深鉢 覆土	胴部～底部 18.0×——×8.8	中位に小鳥巻文を付した平面的な中位の隆帯で器面を縦区画し、区画内は中位の沈線を「∩」状に施し、内部にRL縦位光軸施文する。底部は突出し光沢があるが別部品は磨滅する。	加曽利E 3	明赤褐色
A区30住 No 2	深鉢 覆土	口縁部～胴部 17.0×18.0×——	口縁部には上端が窪む耳状の突起が4単位付されるものと考えられ、胴部は突起下に「∩」状に沈線を垂下し、器面を縦位に4単位区画する。区画内は、1～4は口縁部に沿って1帯横位に、下部は縦位光軸施文する。地文施文は突起外面におよんでいる。	加曽利E 4？	にぶい黄橙色
A区30住 No 3	把手付深鉢 覆土	口縁部欠損 15.0×——×6.0	胴部下半に張りを有し、口縁部は内傾ぎみに立ち上がるものと思われ、1カ所に鳥状の取手が付されている。口縁部は無文と考えられる。「∩」状の沈線及び上端乗手状懸垂文を7単位施し、区画内にRL縦位光軸施文する。	加曽利E 3－Ⅳ	黄橙色
A区30住 No 4	深鉢 炉体土器	胴部～底部 7.6×——×6.2	器面を粗く縦位磨擦後、2本単位の平行沈線及び1本単位の波状沈線を5単位交互に垂下する。内面は黒色にいぶされたような状態を呈する。	？	明赤褐色
A区30住 No 5	深鉢 覆土	口縁部～胴部片	口縁部文様帯は撫でを施した中広の隆帯及び中広の撫でで、楕円区画文を施す。区画内にRLを横位光軸施文し、隆帯に沿って横い中広の撫でを施す。胴部は、下位に波状条線を垂下後、口縁部文様帯下にRLを横位施文する。	加曽利E 3	明赤褐色
A区31住 No 1	深鉢 炉体土器	口縁部～胴部 16.4×18.5×——	口縁部はやや内湾し、胴部上位にわずかにくびれを有する。口縁部文様帯は、胴部にRL施文後に高さのある隆帯を連弧状に張らし、半円形の区画文を構成し、区画内に縦位平行沈線を光軸施文する。胴部は口縁部文様帯の弧状隆帯連結部から、巾の狭い2本単位の平行沈線を垂下し、器面を縦区画し、区画内に1本単位の波状沈線を垂下している。	加曽利E 3－Ⅱ？	橙色
A区31住 No 2	深鉢 覆土	胴部～底部 12.5×——×9.0	熟糸（L）を縦位施文後、2本単位の平行沈線を6単位？垂下している。底部は中央がわずかに深み、周辺がやや磨滅する。	*	赤褐色
A区32住 No 1	深鉢 覆土	口縁部片	口縁部文様帯はやや突出する小鳥巻き、楕円区画文で構成され、区画内に縦位平行沈線を光軸施文する。胴部は縦位条線。	*	赤褐色
A区32住 No 2	深鉢 覆土	口縁部片	口縁部文様帯は平面的な隆帯で、小鳥巻文と楕円区画文を施し区画内はRLを横位光軸施文する。区画内に沈線は廻らない。胴部は平行沈線で縦区画後、区画内にRL光軸。	*	灰褐色
A区32住 No 3	深鉢 覆土	口縁部片	口縁部が強く内湾する。口縁部に沿って1本の中広の沈線を廻らし、胴部に波状条線を縦位施文する。	加曽利E 3－Ⅲ	にぶい橙色
A区32住 No 4	深鉢 覆土	口縁部片	胴部にRL施文後口縁部に沿って2本の沈線を廻らせる。	*	にぶい赤褐色
A区33住 No 1	深鉢 炉体土器	口縁部～胴部 17.0×17.0×——	くびれを有さない鉢形で、口縁部は隆帯化し無文帯となる。口縁部文様帯は隆帯を連弧状に貼付し、楕円区画文を構成する。区画内は縦位平行沈線光軸後接市に沿って沈線を廻らせる。胴部は器面側付後1縦位光軸施文し、無文部両側に巾の狭い2本単位の平行沈線を引き直している。	加曽利E 3－Ⅱ？	明赤褐色

遺構名称 遺物番号	器種 出土位置	残存状態 器高×口径×底径	器形・文様の特徴	分類	色調 備考
A区33住 No 2	深鉢 覆土	口縁部～胴部 12.6×34.8×——	口縁部はやや外面肥厚し、口縁部文様帯したにわずかにくびれを有する。口縁部文様帯は撫でを施した巾広の隆帯で、小渦巻文と連結した楕円区画文を備城する。区画内は RL を充填施文し隆帯に沿って撫でを施す。胴部は縦区画後 RL を縦位充填施文する。口縁部を区画する隆帯はこの始文の上に一部かかる。	加曽利E 3－Ⅲ	にぶい橙色
A区33住 No 3	深鉢 覆土	口縁部片	口縁部がやや内湾する器形で大型である。胴部は縦位条縄施文後口縁部に沿って巾広の沈線を1本巡らせる。	＊	橙色
A区34住 No 1	深鉢 床面	底部欠損 29.5×24.0×——	口縁部は4単位の波状口縁で、胴中位に比較的強いくびれを有する。器面全面に縦位条縄施文後、口縁部及び胴くびれ部に2本単位の平行沈線を巡らせ、上下に横区画する。さらに上下に2本単位の連弧文を施し、それぞれ横位平行沈線とで形づくる区画内に、半月形に沈線を施す。また、上位連弧文から2本単位の懸垂沈線を6単位重下し、下位連弧文から12本単位平行沈線及び1本単位の波状沈線を交互に垂下する。	連弧文系	にぶい赤褐色
A区34住 No 2	深鉢 覆土	口縁部片	口縁部には4単位の山形小突起を付す。口縁部文様帯は1本単位の隆帯で小渦巻文を左右に連結し、区画している。区画内及び胴部は条縄施文。	加曽利E 3－Ⅲ？	灰褐色
A区34住 No 3	深鉢 覆土	口縁部～胴部片	口縁部文様帯は撫でを施した隆帯で楕円区画文を施し、区画内 RL 横位充填施文後巾広の撫でを巡らす。胴部は器面剥付後区画内に RL を充填施文し、無文部周囲の沈線を引き直す。	＊	にぶい赤褐色
A区34住 No 4	壺 覆土	胴部片	口縁部は無文で外反ざみに立ち上がるものと考えられ、胴部上半に強い張りを有する。肩部文様帯は平面的隆帯による楕円区画文で、区画内に RL 横位充填施文後、隆帯に沿って雑な沈線を巡らせる。胴部下半は縦位条縄施文。	＊	にぶい赤褐色
A区29住 No 5	浅鉢 床面	口縁部～胴部片	口縁部は強く内湾し、内面に三角形条に突出する。口縁部外面に巾広の撫でを強く巡らせ段をつけ、撫で内に1ヵ所焼成前の穿孔がある。内外面研磨を施すが内面は特に顕著である。	＊	橙色 補修孔あり。
B区1住 No 1	浅鉢 床面	口縁部～胴部 13.3×29.0×——	中空突起を付す浅鉢口縁部。突起外面中央に孔が穿たれ、隆帯で渦巻文が付され、片側には三叉文が沈刻される。突起下端より隆帯が短く2本垂れ下がる。内面には隙跡状の環状突起が設けられる。突起及び口唇部は赤色塗彩が残る。	加曽利E 出現期	橙色
B区2住 No 1	深鉢 床面	口縁部片	ゆるやかな波状口縁の深鉢。口唇部は棒状施文具による刻目が加えられる。口縁部にはやはり棒状施文具を用いた直線的な文様が構成される。縄文は細く、密接しており一見撚糸文状であるが、条およびそれの走向を観察すると直前段反撚り RR 横位とみられる。胎土に少量繊維を含む。	花積下層式	褐灰色
B区2住 No 2	深鉢 床面	胴部片	繊維土器の胴部片。縄文のみみられる。縄文は、条が細く、密集する特徴のなもので、RR 横位である。胎土・縄文からみておそらく1と同一個体であろう。	花積下層式	褐灰色
B区2住 No 3	深鉢 床面	胴部片	繊維土器の胴部片。図上部に1と共通する沈線が認められる。縄文も RR 横位であり、1・2と同一個体であろう。	花積下層式	褐灰色
B区2住 No 4	深鉢 覆土	胴部片	繊維土器の胴部片。縄文は RR 横位とみられるが、1などに比べると条がやや太い。1～3とは別個体であろう。	花積下層式	にぶい橙色
B区6住 No 1	深鉢 覆土	口縁部片	口唇部は平坦面を焼き中・内傾気味。口唇部下に薄い隆帯が横位に貼り付けられ、横位・縦位 LR 縄文を施す。	五領ヶ台	にぶい褐色
B区6住 No 2	深鉢 覆土	胴部片	横位隆帯が付せられ、結束第1種の RL・LR 縄文を隆帯上にまで施す。	＊	にぶい褐色
B区6住 No 3	深鉢 覆土	胴部片	半截竹管による集合沈線が矢羽状に多段施文される。	＊	褐色
B区6住 No 4	深鉢 覆土	胴部片	おそらく胴部上位の破片。半截竹管による3条の横位沈線で分帯され、上位は円形突起を中心に格子目条の集合沈線が施文され、下位は LR 縄文が施される。突起縁辺には沈線が沿う。	＊	褐色
B区6住 No 5	深鉢 覆土	胴部片	横位隆線で画され、上位は U 字状に垂下する隆線が接する。隆線には ペン先状刺突文とキャタピラ文が沿う。	勝坂式	にぶい橙色
B区6住 No 6	深鉢 覆土	胴部片	沈線が山形状に施文され区画をなすのであろう。沈線には小型半截竹管文が沿い、区画内は2ケ1組の短沈線や横位沈線が施される。	＊	暗褐色

遺構名称 遺物番号	器種 出土位置	残存状態 器高×口径×底径	器形・文様の特徴	分類	色調 備考
B区6住 No7	深鉢 覆土	口縁部片	口唇部は内傾し、口縁部は穏やかに内湾する。平縁を呈し、横位隆線が口唇下を間隔を持たせて平行する。横位隆線下は口縁部文様帯と思われるが、波状隆線が垂下する。薄い沈線が沿う。波状隆線下位には波状沈線文が描かれる。	勝坂式	にぶい褐色
B区6住 No8	深鉢 覆土	口縁部片	やゝ薄手の器厚を呈し、口唇部は僅かに外傾する。口唇下は横位短刻目列が施される。	阿玉台式	灰褐色
B区6住 No9	深鉢 覆土	胴部片	薄手の器厚を呈す。横位のヒダ状圧痕が施され、内面には炭化物が付着する。	＊	にぶい橙色
B区6住 No10	深鉢 覆土	胴部片	押圧状の刻みを施す隆線が垂下する。隆線は下端において斜位に垂下する兆しを見せる。	＊	褐色
B区6住 No11	深鉢 覆土	胴部下半片	小型の深鉢膨部破片。小型の爪形状横位刻み目列が比較的密に施される。	諸磯c式	にぶい橙色
B区6住 No12	浅鉢 覆土	口縁部～胴部片	大型の浅鉢破片。穏やかな波状口縁を呈し、内面は丁寧に研磨される。外面の器壁は荒れている。	阿玉台式	明赤褐色
B区7住 No1	深鉢 覆土	口縁部片	大型の深鉢である。やゝ薄手の扇状把手を設ける。把手縁辺には刻みを施し、把手より垂下する2本の隆線にも深い大型の刻みを施す。把手内は3条1組の半截竹管による沈線が3箇所で垂下する。口縁部文様帯は把手直下の区画とその他の区画に分けられ、直下の区画には円形刺突文を中心に付した小型の方形区画文を沈線で2区画し、区画内線を小型半截竹管による刺板列が沿う。その他の区画も同様に刺痕列が沈線に沿うが、中位には波状沈線文が横位施文される。	＊	にぶい赤褐色
B区7住 No2	深鉢 覆土	胴部片	横位沈線下位に縦位回転による結束縄文が施される。	勝坂式	にぶい赤褐色
B区7住 No3	深鉢 覆土	胴部片	横位隆線によって画された胴部文様帯。上位は比較的鋭い平行沈線が羽状、横位に描かれ、三角区画をなすのであろう。区画中位には1条の波状沈線文が蛇位に施される。また斜位の平行沈線にはまばらな截痕列が施される。下位の文様帯は判然としないが横位隆線より弧状の隆線が垂下し、隆線には沈線が沿う。	＊	明赤褐色
B区7住 No4	深鉢 覆土	胴部片	横帯文区画構成をとる。上位から、小型半截竹管文・平行沈線文・同沈線による波状文・平行沈線文が施される。	＊	にぶい赤褐色
B区7住 No5	深鉢 覆土	口縁部片	平縁、口縁部は外反し、口唇部端部は鋭い。口縁部に無文部を設け、横位隆線で画する。隆線には刻みが施され、下位には平行沈線が沿う。内面は丁寧に研磨され内稜を持つ。	＊	にぶい赤褐色
B区7住 No6	深鉢 覆土	胴部片	絞行垂下する隆線には刻みが付され、沈線と雑なペン先状刺突文が沿う。また横位の平行沈線も3条施される。	＊	明赤褐色
B区7住 No7	深鉢 覆土	胴部片	口縁部に付きれる大形の突起。形状は判然としないが円形か。頸部隆線と接し、平行沈線が沿う。	＊	橙色
B区7住 No8	深鉢 覆土	胴部片	押圧を施す横位隆線に平行沈線と連続刺突文が沿う。	＊	橙色
B区7住 No9	深鉢 覆土	胴部片	口縁部下位～頸部破片。頸部は無文帯であろう。口縁部には押圧を施して跳状の効果を持つ隆線が区画をなし、区画内を小型半截竹管文と太めの沈線が沿い、中位を斜位の結節沈線が充填される。頸部の無文帯と口縁部の無文部は繋り、おそらく把手がこの直上に付せられるのであろう。	阿玉台式	にぶい褐色
B区7住 No10	深鉢 覆土	胴部～底部片	開き気味に立ち上がる。胴部より垂下した半截竹管による平行沈線が底部端部にまで及ぶ。破片端部には斜位の沈線が看取される。凝位波状文の下端であろうか。	勝坂式	橙色
B区7住 No11	深鉢 覆土	胴部～底部片 19.0×――×9.0	比較的小形の胴径を呈す。僅かな膨らみを持たせながら胴部上半に延び、上半において外反する兆しを見せた。上半より垂下した隆線は器面を4分割すると思われる。他は無文である。	＊	明赤褐色
B区7住 No12	浅鉢 覆土	口縁部～胴部片	平縁、口唇部は鋭く、口縁部は僅かに外傾する。無文で、内外面は凸凹があり、雑な撫でを施す。	――	橙色
B区7住 No13	浅鉢 覆土	口縁部～底部 13.2×24.5×7.6	平縁。内傾する口縁部形態を呈す。外面は凹凸がある分内面とともに丁寧な研磨を施す。内面には薄い内稜を設ける。	――	明赤褐色
A区13号 土坑 No1	深鉢	口縁部片	口縁部に付せられる波状突起。波頂部より垂下した隆帯が過巻状突起に派生する。突起両脇には半截竹管撫面使用の平行沈線が横位に施される。突出した内稜を持つ。	加曽利E 出現期	明赤褐色

遺構名称 遺物番号	器種 出土位置	残存状態 器高×口径×底径	器形・文様の特徴	分期	色調 備考
A区13号 土坑 №2	深鉢	口縁部片	平縁を呈し口縁部は内湾する。口唇部に平行して隆線が付せられ、頸部隆線とともに幅狭の口縁部文様帯を画す。口縁部文様帯内は地文に横位RLを施し、隆線によるモチーフを陪行する。内面の研磨は丁寧である。	加曽利E出現期	明褐色
A区13号 土坑 №3	深鉢	口縁部片	平縁。口唇下に強い横撫でによる幅広の凹線を横位に持たせ、下位は縦位RLを施す。地文の縄文にも撫では及ぶ。内面は丁寧な横研磨。	＋	明褐色
A区13号 土坑 №4	深鉢	口縁部片	大型の深鉢口縁部。大きく開き、頸部で屈曲するのであろう。口縁部の無文帯である。口唇部端部は丸みを帯び、内折し稜を持つ。内面の撫では丁寧。	＋	橙色
A区13号 土坑 №5	深鉢	胴部片	太い隆帯が胴位に付せられ、隆帯上を大き目のペン先状刷突文が刷む。隆帯の脇には幅広の爪形状刷み目列が沿う。隆帯による区画は三角形状であろう。区画中位には三叉文状の空白が看取される。	＋	暗赤褐色
A区13号 土坑№6	深鉢	胴部片	横位LR縄文が密に施文される。内面には横撫でが施されるが、剥落は著しい。	＋	赤褐色
A区14号 №1	深鉢	胴下半～底部 14.0×14.0×11.5	半截竹管腹面使用の3条の垂下沈線が胴部下半を8分割する。沈線に挟まれた空白部は無文で丁寧な撫でを施す。また、図反対面は幅狭の単位となり垂下沈線も5条と2条施される箇所がある。	＋	橙色
A区15号 土坑 №1	浅鉢	口縁部～胴部 7.2×30.8×――	口唇部は肥厚し平坦面を築く。内端気味に直立する口縁部形態を呈す。頸部で丸みを帯びて屈曲する。無文で内外面とも丁寧な撫でを施す。	＋	橙色
A区15号 土坑№2	深鉢	口縁部片	口縁部に付せられる立体的な突起。欠損部が多く全体観は判然としないが刷みを連続する隆線で飾られる。	＋	にぶい赤褐色
A区15号 土坑 №3	深鉢	胴部片	横位隆線と弧を描く隆線が接し小区画文を画する。隆線には半截竹管腹面使用の沈線が沿い、区画内は無文のものと、半截竹管による刺突文、横位沈線が施されるものがある。	＋	橙色
A区15号 土坑№4	深鉢	底部片	隆線が底部直上まで垂下し、胴部を等分割するのであろう。地文の縄文は縦位LRである。やゝ軟質な土器である。	＋	明赤褐色
A区16号 土坑 №1	深鉢	口縁～胴下半部 40.8×19.0×――	2とともに合せ口状に出土した。口縁部は大きく開き頸部の屈曲も強い。屈曲部下の胴部に膨らみを持たせ底部にいたる変形の深鉢である。口唇部は内外に若干突出し、端部は平坦面を築き浅い凹線が施される。口縁部から胴部上半にかけて縦位RLが施される。下半は比較的丁寧に撫でられる。	＋	明赤褐色
A区16号 土坑 №2	深鉢	口縁～胴下半部 47.0×42.0×5.0	1と同様な変形の器形が頸部に強い屈曲を設ける。頸部に2条の横位隆線が付せられ口縁部文様帯を画す。口唇部にも1条の隆線が走る。口縁部文様帯内の分割線は設けられず、隆線による波状文が横位に施される。胴部は無文だが上半は横位、下半は縦位の撫でを主とした成整形痕が看取される。	＋	明赤褐色
A区21号 土坑 №1	深鉢	胴部～底部 12.5×――×6.2	小形である。胴部は直立し、上半より頸部にかけて外反する。瘤状の小突起を横位隆線に付し、横位隆線によって2文様帯に画する。上位の文様帯はやはり瘤状の突起が付され、突起を中核として隆線を弧状に結付ける。隆線には半截竹管腹面使用の平行沈線が沿う。瘤状突起には縦位の細沈線が1条施される。下位は装飾的な上位文様帯と対象的に2・3条の垂下沈線が施され、胴部を5分割する。	勝坂式	赤褐色
A区21号 土坑 №2	深鉢	胴部 27.0×――×――	頸部以下の残存。直線的な胴部形態だが腰部は屈曲し、屈折底様になる。頸部隆線は突出し交互刺突を施す。胴部は1文様帯で垂下隆線と腰部の屈曲によって大形の区画文を配し2単位構成を取る。区画内は刷みを付す隆線による渦巻状のモチーフを配し、空白部は半截竹管腹面使用の平行沈線による小区画文や小渦巻文が埋められる。小区画内は斜位の沈線が充填されたり、三叉文が比刺される。また平行沈線の1部には交互刺突が刷まれる。基本的には2単位構成を取るが明反対面の区画上位には楕円区画文が配され、対称性を崩している。	＋	にぶい赤褐色
A区27号 土坑 №1	深鉢	完形 23.0×17.0×7.0	横状把手を持つ小形の深鉢。横状把手は頸部～胴部上半の括れ部に付され、正面図は鍵状である。口縁部は内湾し、頸部から胴部上半にかけて穏やかに括れ、下半は球形状を呈する特徴的な器形を呈す。把手直上の口縁部は小波状突起となり、刷みを施す波頂部より隆線は把手に繋り短い隆線が2条横断する。	勝坂式末葉	にぶい赤褐色

遺構名称 遺物番号	器種 出土位置	残存状態 器高×口径×底径	器形・文様の特徴	分類	色調 備考
			口縁部文様帯は無文で丁寧な横方向の研磨を施す。頸部～胴部は平行沈線によって２文様帯に分帯される。上位の文様帯は縦位沈線が充填され、沈線間を交互刺突文、小形の胴みを密接に施文する。下位は、RL縄文を横位、斜位、縦位に密に施す。		
A区28号 土坑 No１	深鉢	口縁部片	波状縁を呈し橋状把手を付す。横位隆線で口縁部文様帯、頸部、胴部文様帯を画し、頸部の眼鏡状の横状把手を中心に口縁部文様帯には２対の横状把手が付されるのであろう。１対は欠損している。頸部の把手より隆線が胴部に流生する。内面は丁寧に研磨するがやや・軟質な器である。	加曽利E出現期	黄褐色
A区28号 土坑 No２	深鉢	胴下半部～底部 11.0×――×13.5	２条１組の胴みを施す垂下隆線が胴部下半を４分割する。区画は８ケを数え、幅広のものと幅狭のものとで１単位と考えられよう。隆線には平行沈線が沿い、幅狭の区画には半截竹管による刺突文が縦位に施される。幅広の区画内の刺突文は横位に刷まれ、横位沈線も施される。	＊	明褐色
A区36号 土坑 No１	深鉢	口縁部～胴部 21.0×19.0×――	口唇部は肥厚し突出するように外傾する。口縁部は内湾し胴部は垂直に落ちる。頸部に幅広の横位隆帯を設け口縁部文様帯と胴部文様帯を分ける。口唇下に交互刺突文を横位に施し、他の口縁部文様は平行沈線による渦巻文や直線的な文様が施される。胴部文様帯は横位隆帯より派生したや、幅狭の隆帯が三角区画や円弧を描き平行沈線が隆帯に沿う。隆帯貼付後縦位RL縄文を施す。	＊	にぶい赤褐色
A区44号 土坑 No１	深鉢	口縁部片	突起。一応三角形の波状突起としたが、横位に付せられる反三角形状を呈す可能性もある。縁辺を刷みが連続し、内側には平行沈線が沿う。	＊	明赤褐色
A区44号 土坑 No２・３	深鉢	口縁部～胴部片	同一個体破片。口唇部上と胴部上端に欠損しているが把手を付す。口縁部に隆線を横位に貼り付け突出させる。突出隆線と口唇部の間は狭い文様帯となり、縦位沈線を充填せず、隆線を弧状に貼付する。突出隆線下は胴部文様帯となり、橋状把手が付される。把手を中核として、細隆線による波状文が横位に施され、平行沈線が隆線に沿う。胴部下半も横位隆線で画される。隆線下には縦位沈線が施され、細隆線による U 字状モチーフが連続する。U字状モチーフ下は大型の逆U字状モチーフが配される。U字状モチーフ内は平行沈線が沿うものや縦位沈線が充填されるものがある。全体的に立体感ある土器である。	＊	暗赤褐色
A区44号 土坑No４	深鉢	胴部片	分岐垂下する刷みを付す隆線とそれに沿う平行沈線。空白部には連続三叉文と刺突文が施される。	＊	橙色
A区44号 土坑 No５	深鉢	胴部片	平行垂下する２条の隆線間は狭く丁寧に撫でられ無文である。隆線の外側は縦位平行沈線が側隔を持って施され、沈線間には山形状の縦位波状沈線文が埋められる。内面には炭化物が付着する。	＊	赤褐色
A区44号 土坑 No６	深鉢	胴部片	垂下隆線に沿う平行沈線。空白部には逆U字状のモチーフを沈線で描く。地文は横位LR。	＊	赤褐色
A区44号 土坑No７	深鉢	胴部片	無節縄文ｒを地文とし、平行沈線で縦長の波状文を描く。空白部には連続三叉文が交互に沈刻される。	＊	暗褐色
A区44号 土坑 No８	深鉢	胴部片	厚手の器厚を呈す。弧条の隆帯が付せられ、半截竹管面使用の平行沈線が沿う。上位は縦位の沈線が施され小区画を なす。区画内は細沈線が弧を描く。	＊	暗褐色
A区44号 土坑 No９	深鉢	胴部片	横位隆線より派生垂下する隆線が分岐し、区画がなされる。区画内は平行沈線による円形のモチーフが描かれ、円の内部には平行沈線による意匠文が描かれる。条線状の細沈線が地文として充填されるのが平行沈線施文後である。	＊	暗褐色
A区45号 土坑 No１	深鉢	口縁部～胴部 7.5×14.0×――	平縁を呈す。口縁部は外反し胴部上位でく字状に屈曲し、算盤玉条の胴部形態を呈す。口唇下には２条の横位沈線が平行する。縄文は横位LRを基本とし下半では縦位に施文する。	＊	にぶい赤褐色
A区59号 土坑 No１	深鉢	口縁部～胴部 18.3×18.0×――	平縁を呈し、口縁部は強く内湾し頸部で括れ、胴部に膨らみを持たせる器形。口縁部は無文で、胴部に主文様を配す。隆線による円形のモチーフに繋る。２単位と考えられるが明瞭な分割線は設けられない。隆線には矢羽状の刷みが密接に施される。器厚は比較的薄い。	＊	にぶい赤褐色

遺構名称 遺物番号	器種 出土位置	残存状態 器高×口径×底径	器形・文様の特徴	分期	色調 備考
A区58号 土坑No 2	深鉢	胴部～底部 9.2×――×7.5	開き気味に立ち上がる。縄文は縦位RLを密に施す。縄文施文後丁寧な撫でを底部直上に施す。	加曽利E 出現期	橙色
A区59号 土坑 No 3～5	深鉢	胴部片	同一個体破片。横位隆帯や円弧を描く隆帯が付せられ、円弧を描く隆帯はそのまま円形の区画を画するのであろう。縄位・縦位RL縄文を施文と、横位隆帯には横位RL縄文を丁寧に施文する。弧を描く隆帯には縄文は施されず、丁寧な研磨を施す。円弧内は細沈線が1～3条沿う。また大型の三叉状の空白部も文様として取り入れ内部を丁寧に磨く。	〃	にぶい赤褐色 外面赤塗彩
A区68号 土坑 No 1	深鉢	胴部～底部 25.5×――×8.6	胴部に緩やかな膨らみを持たせ頸部以上は開く。頸部に横位隆帯を付し、小型の半截竹管による連続刺突文を施す。頸部、胴部とも熟練（L）を施す。	加曽利E 1？	明赤褐色
A区96号 土坑 No 1	深鉢	胴部～底部 14.0×――×11.0	垂下隆線が胴部下半まで伸び、下端に円環状突起が付きれる。垂下隆線は4条付き、器面を4分割する。隆線間は半截竹管腹面使用の平行沈線が2条1組で縦位に施され沈線間は連続三叉文や円形文などが沈刻され、半肉浮彫的な文様が充填される。縦位RL縄文を施文とする。	加曽利E 出現期	明赤褐色
A区97号 土坑 No 1	深鉢	口縁部片	口唇部は僅かに外傾し突出し、口縁部は内湾する。口唇下には半截竹管による平行沈線が沿い、縦位の平行沈線が充填され口縁部文様帯とするのであろう。	〃	にぶい赤褐色
A区100 号土坑 No 1	浅鉢	口縁部片	口唇部は強く内湾し、口唇部は内面に若干突出する。隆帯による円形文と横位S字状モチーフが連接して1単位のモチーフとして付される。連接部とS字状モチーフ端部は盛り上がり突起状となる。内面は丁寧な横研磨を施す。	加曽利E 1？	明褐色 外面赤色塗彩
A区113 号土坑 No 1	深鉢	胴部片	円弧を描く隆帯上に左の沈線が懸かれ、隆帯の両脇にも沈線が沿う。		明赤褐色
A区143 号土坑 No 1	深鉢	口縁部～胴下部	口縁部は強く内湾し、山形の小突起を有する。胴くびれ部上下にカマボコ状の隆帯を廻らし、頸部に無文帯を区画する。口縁部文様帯は、RL施文後2本単位の隆帯を横位S字状に貼付する文様と、刺みを有する隆帯文様と小渦巻文とで構成される文様を交互に配すると考えられる。胴部はRL施文後中位に3本単位の平行沈線を横位施文する。	加曽利E 1？	橙色
A区145 号土坑 No 1	深鉢	口縁部～胴下部 61.5×45.0×――	優品である。逆位で出土した。突起を2対配し、口縁部は強く内湾する。撫頸で括れ、胴部に膨らみを持たせた変形に近い器形を呈する。器形の変換点に、刺みを付す2条の隆帯を横位に貼付し4帯に分帯する。口縁部文様帯、胴部上位、下位の文様帯と下端の無文帯である。口縁部文様帯は突起と連接した2条1組の垂下隆帯で画された2区画文である。正面の突起は半円状で外面には渦巻文が沈線で描かれる。渦巻文を頭部として隆帯が瓢手状に垂下し、隆帯には矢羽状の刺みと沈線が施される。隆帯の両脇には沈線による渦巻文が対称的に接する。渦巻文と垂手状隆帯で1モチーフとし、正面観の強調と捉えられよう。人体状の抽象文であるがあたかも山椒魚文の正面像を想起させる。胴部文様帯に配される人体状モチーフとは違う細付きである。また区画隆帯の1方には指状のモチーフが貼付される。印象的な区画文である。突起内面は2本1組の縦沈線と三叉文で囲まれた半中空状の円孔が設けられる。対極する裏面の突起は横位の隆帯を貼付した低い突起である。両端より派生した隆帯が接近し正面のモチーフと同様に瓢手状の端部処理をする。胴部文様帯は2帯に分けられる。上位の文様帯は渦巻文を施した円形の小突起を中位に挟んと隆帯ではほぼ等間隔に5区画される。区画内は歪曲した人体状のモチーフが配される。モチーフは渦巻文を頭部とし、隆帯による逆三角区画を胴部とする。三角の両端より隆帯が上方に伸び円形区画文に連接する。三角の下端からは中位に沈線を施した隆帯が1条垂下する。三角の区画内は三叉文が沈刻されるが1区画のみ弧条の沈線を充填する。円形区画内も刺突列点文が主だが無文のものが正面の区画に設けられる。モチーフ以外の空白部には縦位に矢羽状の連続刺みII列、先端の丸い連続刺突文、太めの沈線が充填される。下位の文様帯は指円区画文が配列される。8単位を数える。区画内は上位の文様帯と同様に縦位の沈線文や刺突文が充填される。	勝坂3式	にぶい橙色

遺構名称 遺物番号	器種 出土位置	残存状態 器高×口径×底径	器形・文様の特徴	分類	色調 備考
A区145 号土坑 No 1			また楕円区画が接することによって生じる隙間には横位沈線文が施される。 口縁部文様帯が2単位、胴部が5単位と8単位を数え、対称性を著しく崩した構造であるが、正面観の強調と等間隔の支脚割付けがなされるため全体的に整った印象を得る。		
B区1号 土坑 No 1	深鉢	ほぼ完形 21.5×16.7×8.2	口縁部は強く内湾し胴部は直線的に落ちる。頸部、胴部中位、下端の横位平行沈線で3段の文様帯に分帯する。上位は口縁部文様帯で、1・2条の垂下沈線で5区画を構成する。1区画は大形の区画で他の4区画は小形である。区画内の文様は沈線による調巻文を主体とし、欠損部が多いため判然としないが大形の区画内は2対配される大きさである。単位構成は大形の区画をAとすると、A＋B（a＋b）＋C（a＋b）が考えられるが不明点が多い。口唇部下には寸載竹管による刺突文が連続する。胴部文様帯は2分帯されるが分割線の横位沈線は他の沈線とは相違し2条1組である。強い分割意識か。上位は素文帯で、縄文施文のみである。下位は口縁部文様帯のような沈線による区画線は設けられず、平行沈線による渦巻文もU字状モチーフなど分配される。モチーフの数は計5ケだが、おそらく口縁部文様帯と同様な単位構成が想起できる。地文の縄文は横位LRである。	加曽利E1？	赤褐色
B区1号 土坑 No 2	深鉢	口縁部片	小形の桂状突起を付す。口縁部文様帯内は瘤状の小突起が付きれる。突起には円形陥付文、短沈線などが施され立体的な装飾を加味する。	加曽利E出現期	明赤褐色
B区1号 土坑 No 3・4	深鉢	胴部片	同一個体破片。3は胴部、4は頸部であろう。3は弧状突起と隆線が接し巴状などのモチーフを描くのであろう。4は頸部縄で分帯され扎めの沈線が描かれる。短沈線も施される。	＃	橙色
B区4号 土坑 No 1	深鉢	口縁部片	扇状把手を付す大形の深鉢。把手縁片には刻み が付きれ、両端より垂下する隆線には粘土帯による貼り付けがされ大形で深い刻みを付す。把手内には沈線による小渦巻文が横位に2対配され、下端には横位沈線も施される。把手直下も沈線による方形文が2対配されるが下端は区画されず凸状となり頸部無文帯と繋る。おそらく把手によって口縁部文様帯を4分割するのであろう。口縁部文様帯は沈線によって縁どられ、斜位の沈線が充填される。	阿玉台式	橙色
B区4号 土坑 No 2	深鉢	胴部片	大形の胴部上位の破片。1と一個体の可能性がある。上端にV字状の貼付がされる。隆線による懸垂状モチーフが垂下し、波頂部が隣合うモチーフと接する。	＃	橙色
B区4号 土坑 No 3	深鉢	口縁部片	口唇部下に狭い無文部を設け、口縁部文様帯は頸部隆線で画される。文様帯内は浅い沈線で線取られ、1と同様に斜位の沈線が充填される。頸部隆線以下も浅い沈線が確に施される。	＃	褐色
B区4号 土坑No 4	深鉢	胴部片	横位隆線上位は弧状の隆線が付きれる。以下は平行沈線が沿い、手載竹管による交互回転の小波状文が横位施文される。	＃	褐色
B区5号 土坑 No 1	深鉢	胴部片	横位隆線上位は口縁部文様帯か。弧状隆線が相対するように、おそらくX字状に縁し区画文を配するのであろう。区画内は沈線が沿う。横位隆線以下はキャタピラ文が沿い、小波状沈線文が横位施文される。胴部文様帯のモチーフとしては、抽象文（いわゆる草鞋虫状文）が配される。	勝坂式	橙色
B区5号 土坑No 2	深鉢	胴部片	1坑3・4と同一個体の可能性は高い。弧状突起と隆線で巴状モチーフを描き、太めの沈線が沿う。地文の縄文は横位RL。	加曽利E出現期	橙色
B区5号 土坑 No 3・4	深鉢	胴部片	同一個体破片。瘤状の小突起を中心に離隆線が弧状の動きをする。隆線に沿って半載竹管腹面使用の平行沈線が施される。3の瘤状突起上方には円形などの小区画がなされるのであろうか刺突列点文が施される。破片下には三叉状の交互刺突文が比別きれ、蛇行文の効果を描出する。4、瘤状突起の側面には円形の陥付が付きされている。3と同様に交互刺突文が比別される。	＃	にぶい褐色
B区5号 土坑No 5	深鉢	胴部片	弧状隆線が付きれ、外側は半載竹管腹面使用の平行沈線が沿い、内側は1本工具による太めの沈線が沿う。	加曽利E出現期	暗褐色
B区5号 土坑 No 6	深鉢	胴部片	隆線が付きれる。平行する沈線の動きから おそらく弧状に付きれるのであろう。沈線によって囲まれた空白部には短沈線が充填される。隆線下端には刺突文が施されるが大形のものと小形のものを交互に連続する特徴的な施文である。	＃	橙色

遺構名称 遺物番号	器　種 出土位置	残存状態 器高×口径×底径	器形・文様の特徴	分　類	色　調 備　考
B区５号 土坑No７	深　鉢	胴部片	A区44坑５と同様な構成。平行する垂下隆線２条に太めの沈線が沿い、波状沈線文も平行する。	加曽利E 出現期	黄橙色
B区５号 土坑No８	深　鉢	胴部片	刻みを付す横位隆線上位に平行沈線が沿い、その上端を小形のキャタピラ文が施される。隆線下位は無文である。	＊	にぶい赤褐色
B区７号 土坑 No１	深　鉢	口縁部～胴部 22.5×22.7×――	口唇部は僅かに外傾し、口縁部は穏やかに内湾する。頸部で屈曲し胴部は直線的に落ちる。口唇部にＹ字状隆線を貼付し、胴部の縦行する垂下隆線に繋ぐのであろう。口唇部下、頸部の屈曲部、胴部に多段に横位刻み目列が施されるが口唇部と頸部のそれは密接な連続施文がされる。器厚は薄く内面は丁寧な研磨が施される。	阿玉台式	にぶい赤褐色
B区７号 土坑No２	深　鉢	胴下半部～底部 17.3×――×12.8	押圧を施した垂下隆線が４条付され、器面を等分割する。横位刻み目列が多段に施されるが輪積痕には沿っていない。	＊	にぶい黄橙色
B区８号 土坑 No１	深　鉢	口縁部片	口唇部外面は欠損するが、内外面で突出するのであろう。口唇部は強く内湾する。斜位の隆線が付せられ、口唇部の突出ともに三角～半楕円の区画をなすのであろう。区画内は太めの沈線が沿い、中位には円形の刺突文が施される。内外面とも研磨を施した丁寧な作りである。	加曽利E 出現期	橙色
B区８号 土坑 No２	深　鉢	胴部片	垂下隆線と蛇行隆線が付され、太めの沈線が１・２条沿う。弧状隆線上端は盛り上がり、何らかの突起などに発達するのであろうか。内面は丁寧な研磨を施す。	＊	明赤褐色
B区８号 土坑 No３	深　鉢	胴部下半片	横位平行沈線が２条施され、上位に平行沈線が相対称するように斜位に施される。山形状の波状文か。内面に少量の炭化物が付着。	＊	明赤褐色
B区８号 土坑No４	器　台	胴部下半片 8.0×――×――	脚端部は肥厚し平坦面を築く。穏やかに内湾する脚形態を呈し、隆帯で縁取られた孔を穿つ。	＊	明赤褐色
B区56号 土坑No１	深　鉢	口縁部片	小形の瘤状把手。縁辺に刻みが付き、把手内には平行沈線が横位、斜位に施される。	＊	明褐色
B区66号 土坑 No１	深　鉢	口縁部片	平縁を呈し、緩やかに内湾する口縁部。口唇部は尖り、器厚は著しく薄い。口縁部文様帯中位に突起を付し、丁寧に撫でを加え、楕円状の区画を構成する。区画内は円形刺突文が充填される。口縁部文様帯下には小形の刻み目列が横位に施される。	＊	赤褐色
B区66号 土坑 No２	深　鉢	胴部片	横位平行沈線下に斜位、円弧の沈線による モチーフ が展開される。斜位の沈線には連続三角文、円弧との隙間には三叉文が沈刻される。器厚は薄い。	＊	赤褐色
B区67号 土坑No１	深　鉢	胴部片	小形の縦位楕円区画文が配され、区画内には爪形状の刻みが施される。平行沈線が隆線に沿う。	＊	にぶい褐色
B区67号 土坑No２	深　鉢	口縁部片	波状突起。波頂部を欠損するが、細隆線を縁辺に沿わせ、円形の孔を穿つ立体観にあふれる突起である。	＊	明褐色
B区67号 土坑No３	深　鉢	口縁部片	大形の深鉢。平縁を呈し、口縁部に無文帯を持つ。中位に押圧による鎖状隆帯が横位に付される。	＊	暗赤褐色
B区68号 土坑 No１	深　鉢	口縁部片	直立する口縁部形態。口唇部は鋭く内折し、１条の横位沈線が施され内稜を持つ。口縁部は連続刻み目列を施し、横位隆線で幅狭の文様帯を画する。文様帯内は沈線が沿い、刺突列点文が充填される。	勝坂式	にぶい黄褐色
B区68号 土坑No２	深　鉢	胴部片	Ｖ字状に垂下する隆線の両脇を小形のキャタピラ文が沿う。またペン先状刺突文も斜位に施される。	＊	にぶい褐色
B区68号 土坑No３	深　鉢	胴部片	隆線による三角区画か。キャタピラ文が沿う。またペン先刺突文が沿う。	＊	にぶい赤褐色
B区68号 土坑 No４	深　鉢	胴部～底部 5.2×――×――	胴部下端の楕円区画文配列。上端には小形のキャタピラ文が沿い、区画中位にはペン先状刺突文による蕨面状波状文が横位に施される。内面に少量の炭化物が付着する。	＊	明褐色

4．グリット出土の土器

押型文土器（第82図１）

楕円押型文土器の胴部片である。内面は、よく調整され平滑になっている。楕円押型文はネガティブであり、押型文の長径は５ミリ程度である。原体の長さは、少なくとも2.5cm以上あるとみられるが、１周あたりの刻み目数は不明である。

条痕文土器（第82図２～７）

早期後半条痕文系土器を一括する。いずれも胎土に繊維を含み、内面に条痕をもつ。量的には少ないが子母口式土器、鵜ケ島台式土器などが含まれる。

ａ（２～４）　２・４は棒状工具による区画文内に、同種施文具の連続押引文が加えられる。２には、円形文も付される。３は細沈線により文様構成され、交点に円形文が付される。繊維含有量は少なく、焼成も良好である。内面の条痕は明瞭である。鵜ケ島台式土器に位置づけられる。

ｂ（５～６）　条痕－条痕土器の胴部片である。５の表面の条痕は明瞭であるが、６については細く不明瞭である。

ｃ（７）　絡条体圧痕文により文様が構成される。絡条体圧痕文は幅５ミリ程度で、深く明瞭である。絡条体はしがコイル状に密集して巻かれ、横位、縦位、斜位にやや接して加えられる。内面の条痕は細く、不明瞭であるが横位に施される。この条痕はｂの条痕に類似するようにみられる。子母口式土器に位置づけておく。

花積下層式土器（第82図８～10）

８は波状口縁の深鉢。口唇部はやや肉厚で、内側に面をもつ。口縁部は折り返し口縁状に肥厚し、波頂部はさらに隆起させる。文様は１段Ｌを２本１組とした撚糸圧痕文により構成される。圧痕文は深く明瞭で、口縁部は斜位に加え、矢羽根状の構成をとり、以下は横位に加えられる。また、波頂部には、円形刺突文が垂下する。器内外面とも整形は良好で、平滑となっている。９は胴部片で、Ｌ横位が施され、曲線文もしくは同心円文状の沈線文が一部認められる。いずれも、花積下層式土器に位置づけられよう。10はRL横位が施される胴下半部である。器形は丸底をなす深鉢型土器とみられ、花積下層式土器に相当しよう。

黒浜式土器（第82図11・13～18）

11は半截竹管による平行線文が重畳して加えられる。含まれる繊維の量は多く、器外に露出する。黒浜式土器に位置づけておきたい。13はＬ横位が施される胴部片である。器内面もよく整形され、繊維は器外へ露出しない。器面には、縄文施文に伴う粘土の盛り上りが残されており、この点からみて黒浜式土器に位置づけられるものといえる。14はＬ横位が加えられる。原体に用いる原料が粗いためか、条が明瞭に残る。15は口縁部がわずかに内湾する水平口縁の深鉢形土器である。整形は器内外面とも良好であり、縄文は$R\left|\frac{L}{L}\right.$横位が施される。口唇部は角頭型で、上端に面をもつ。16は頸部片で、わずかに括れる。縄文はやや不確実ながら$R\left|\frac{L}{L}\right.$縦位とみられる。器内面の整形は良好で、横位の調整痕が認められる。17は胴部片で$R\left|\frac{L^3}{L^3}\right.$、$L\left|\frac{R^3}{R^3}\right.$を各々横位施文し、羽状構成としている。縄文施文順序は$L\left|\frac{R^3}{R^3}\right.\rightarrow R\left|\frac{L^3}{L^3}\right.$となり、全体の構成として菱形状縄文を形成するとみられ、黒浜式土器に相当するものといえる。18は器台状の底部片である。底径が小さく、器壁も薄手であることから小型土器とみられる。縄文は$R\left|\frac{}{L}\right.$横位であるが、下端では縦位に近くなっている。

有尾系土器　（第82図12）

櫛歯状工具により、列点状刺突文が施される。文様からみて、三角形状もしくは菱形状構成をもつものと

みられる。含有される繊維の量は少ない。いわゆる有尾系土器に類似する資料である。

諸磯a式土器　（第83図19～22）

19、20、22は口縁部、21は頸部片である。19は半截竹管による横走線文、山形状文で文様帯を構成する。20は波状口縁をなし、口縁部はわずかに内湾する。半截竹管による弧状文を組み合せ、木葉文もしくは入組文を形成するものとみられる。21は肋骨文が施される。半截竹管を施文具とするが、縦位の平行線文と連続爪形文を加えた斜位の平行線文を組み合わせている。22は縄文片である。口縁に沿って結節回転が一条巡り、以下L｜$^{R}_{R}$横位が不明瞭ながら施される。

諸磯b式土器（第83図23～28）

23は外反ぎみに開く口縁部片であるが、波状口縁の可能性もある。文様は幅広の連続爪形文により構成される。施文はやや粗雑であるが、深く明瞭である。24は平行線による弧状文が加えられ、文様帯が構成される。25はR｜$^{L}_{L}$縦位を施した後に浮線文を貼付し、さらにその上に縄文を加えている。浮線文は太目でやや偏平である。26は水平口縁の深鉢形土器で、胴部から口縁部にかけ直線的に立ち上がる。器面には縄文のみ認められる。縄文はR｜$^{L}_{L}$・L｜$^{R}_{R}$を結束第1種とした羽状縄文で、縄文帯の幅は約3㎝程度である。胎土に砂粒が多く含まれることから節の形状などはやや不明瞭となっているが、結束部は明瞭に表出されている。27は口縁部片で、L横位を施した後、口唇下約2㎝に重畳した平行線文による幅狭の文様帯が形成される。平行線文の施文は深く、立体的な文様効果もみられる。28は結節浮線の加えられる胴部片である。縄文はR｜$^{L}_{L}$・L｜$^{R}_{R}$を結束第1種とした羽状縄文で、その上に太目の粘土紐を貼付し、半截竹管により粗雑な刻目を加える。この刻目は内側竹管によるが、施文は深く、粘土紐を切断し刺突が器面に達する部分も認められる。

諸磯c式土器（第83図30・31・35）

30は波状口縁で、波頂部に粘土粒を2個貼付する。縄文は極めて不規則で、Lが斜位に近く施され、条が横走している。31は端部が張り出しぎみの底部片で、R｜$^{L}_{L}$横位の縄文の上に、ボタン状貼付文を貼付する。35も底部であり、やはり端部が張り出す。半截竹管による幾何学文を施し、ボタン状貼付文を貼付する。

十三菩提式土器（第83図33・34・36～38）

33は内湾する口縁部片で、口唇部に棒状（竹管）工具による刻目が加えられるため、小さな波状をなしている。器面は、内側竹管による結節浮線文が平行して加えられ、立体的な文様効果をあげている。この文様により不明瞭となっているが、縄文が一部に認められる。R｜$^{L}_{L}$横位とみられる。34は口縁部付近で、結節浮線文などにより文様構成し、縄文はR｜$^{L}_{L}$横位が加えられる。35もR｜$^{L}_{L}$横位が施され、結節浮線文が加えられるが、半截竹管による結節は細くこまかい。37は平行線による集合条線が弧状に組み合わされ、その文様が部分的に削りとられ、沈刻文となっている。38は大きな波状をなす口縁部で、口唇部はくの字状に内傾する。器面は集合条線による同心円状、弧状などの文様に覆われ、これらの文様にかこまれた部分を削りとり、円形や三角形の沈刻文としている。また、口縁屈曲部外側には三角形状の貼付文が巡らされ、さらにこの部分から口唇部にかけ棒状の突起が加えられる。これら貼付文、突起面には半截竹管による刺突文（内側竹管）が連続して加えられる。

興津Ⅰ式土器（第83図29、第70図11）

外側竹管を斜めに刺突しながら、器面の粘土を盛り上げる手法をもつものである。

大木系土器（第83図32）

波状口縁をなす深鉢形土器の波頂部分で、頂部を欠損する。口縁には、半截竹管先端部を斜めに削った施文具による押圧文が加えられ、その下位に平行線文が2条巡る。頸部には口縁に加えた押圧文と同種施文具

による波状文が横走する。縄文はLR横位であるが、原体は太く、施文は粗い。

五領ケ台式土器（第84図39～48）

39は口唇部を欠損した口縁部破片。半截竹管腹面使用の平行沈線を横位に施し、幅狭の口縁部文様帯を画する。平行沈線には交互刺突文が施される。口縁部文様帯内は地文に縄文を施し連続三叉文を沈刻する。40～44、48は細沈線による格子目文が施され、半截竹管腹面使用の平行沈線によって小区画文が配される。三叉文や三角文も刻まれる。40、41口縁部破片で口唇部に小突起が付され、48には円形の突起が付く。45～47は結束縄文の縦位回転施文。

阿玉台式土器（第49～63）

49は内湾する口縁部を頸部の隆帯で画する。頸部隆帯は撫でによって幅を持たせ、つまみ状小突起を付す。口唇部に沿って波状沈線が描かれ、頸部隆帯に沿う単列の結節沈線と繋がり楕円状の区画を配するのであろう。頸部の小突起上にはU字状のモチーフが描かれる。50～52も口縁部に単列の結節沈線が施される。49は口縁部破片で口唇部上端にも結節沈線が施される。51は頸部の破片。波頂部より垂下した隆帯と頸部隆線が接する。52は口唇部に沿う結節沈線は単列だが、口縁部文様帯に施文される結節沈線は２本１組である。53は頸部破片。横位隆線に撫でによりX字状の隆帯を貼付し、下位を浅い沈線が沿う。54は横位平行沈線で画された幅狭の文様帯に弧状、斜位の平行沈線が描かれる。55は口縁部文様帯の構成は51に似ているが区画が確立し、内部を沿う結節沈線も２本１組である。56も２本１組の結節沈線が横位に施される。57は横位隆線が付され、押圧による爪形状刻み目列が横位に施文される。58は波状口縁部破片。波頂部には隆線によって円弧が描かれる。口縁部文様帯内は沈線によって横位矢羽状に沈線が充填される。59は指頭押圧を施した垂下隆線。60は尖鋭な波状口縁。波頂部より刻みを付す隆線が垂下し、口唇部、隆線に沿って小型半截竹管の連続押し引き文が沿う。61は横位隆線に弧状隆線が接し、弧の内部には浅い刻みと沈線が施される。62は隆線による楕円状区画。隆線には縄文が施され、区画内には平行沈線が沿う。63は大型の深鉢胴部上半の破片。円環状突起に平行する横位隆線が接し、隆線上側に小型の刻み目列が沿う。隆線には指頭押圧が施され、円環内部には沈線が施される。胴部下半にかけて、隆線による横位波状文が描かれる。隆線下位には平行沈線が沿う。

勝坂式系土器（第85・86図）

64～74はⅠ～Ⅱ式に併行する。第85・86図75～97は後半から終末段階の様相を呈す。

64、65はキャタピラ文、ペン先状刺突文で三角枠状文などを縁取り、区画中位には円形刺突、三叉文が沈刻される。66は密接な刻みを付す２条の横位隆線が平行し、上位を隆線による円弧が接す。下位は小型の半截竹管腹面使用の平行沈線が縦位に施される。67は波状突起。波頂部には刻みが２ケ付され、突起縁辺は隆帯によって縁取られる。内縁はS字状の隆線が垂下し、縁辺をペン先状刺突文が飾る。68は中空状の突起。外面中位より１、内面は２方向から円環状に孔が穿たれる。内面の正面観は眼鏡状の双環状突起であろう。外面は突出した波状突起となり刻みを付した隆線で飾る。69は内湾する口縁部破片。口唇下に上面が三角形状の突起が突出する。突起両脇に刻みを付した隆線が三角形状に縁取り、渦巻文が刻まれる。70は口縁部破片。口唇部は隆線により肥厚し、瘤状突起より隆線が垂下する。隆線に沿って爪形状のキャタピラ文が施され、その内縁を半截竹管の刺突が連続する。71は半截竹管腹面使用の平行沈線が充填される。72は特徴的な中空の柱状突起が付される。74は内湾する口縁部破片。口唇部は欠損する。隆線による三角形区画の交互配列に似た構造であろう。半截竹管腹面使用の平行沈線、爪形状の刻み目などが施される。

75は内湾する口縁部破片。口縁部文様帯は無文部を主とする。突起が付され、矢羽状の刻みを施す隆帯が

垂下する。内面に少量の炭化物が付着する。76、内湾する口縁～頸部。渦巻文を施した突起を付し、隆線が弧を描く。弧の内側にも渦巻文が描かれる。77も内湾する口縁部破片。渦巻文を施した突起が口唇部に付され、頸部隆線上の双環状突起に連接する。頸部隆線下は爪形状の刻み目列が看取される。78は大きく内湾する口縁部。嘴状の突起が付されるのであろう。口唇部、隆線には刻みが付され、区画内は沈線が充塡される。

79、80は口縁部下の平行沈線に刻み目状の交互刺突文を施す。79は波状口縁を呈し、胴部に LR 縄文を施す。80、幅狭の口縁部文様帯で頸部の隆線で画される。81は横位隆線下の平行沈線にまばらな刻み目を連続させる。沈線による渦巻文などが施される。82、83は口縁部に付される弧状の隆帯。82はやゝ長めの刻み目を施した後沈線を平行させる。83は沈線による渦巻文や先端の丸い刺突文が施される。84、85は口縁部文様帯に刻みを施す隆線が付され、太めの沈線（84）や半截竹管腹面使用の平行沈線（85）が沿う。83には渦巻文を施した小突起が付され、85には孔が穿たれる。86～90は大型の深鉢胴部破片で、沈線による渦巻文、隆帯には刻み目、空白部には太めの沈線を施す。91、やはり大型の深鉢口縁部破片で、口縁部の害文部に4条1組の沈線が縦位に施される。頸部に横位隆帯が付され、胴部文様帯は平行四辺形の区画が配されるのであろうか。区画内は三叉文が沈刻される。92は平行する隆線に矢羽状の刻み目が付され、隆線間には縦位の太めの沈線が充塡される。横位隆線下には同様の隆線が弧を描くが、空白部には横位の太めの沈線が施される。93は口縁部に付される板状の突起。上端の両脇には小渦巻文が付され、突起内は太めの沈線が施される。93は口縁部に付される板状の突起。上端の両脇には小渦巻文が付され、突起内は太めの沈線が縦位に充塡される。94～96は浅鉢口縁部破片である。内外面を丁寧に研磨する。94は波状突起を付し、内面には三叉文が沈刻される。95は沈線による楕円枠がロ縁部文様帯に配されるがやゝ雑な施文。96は渦巻文を中核として隆帯が繋ぎ、意匠的なモチーフを配するのであろう。97は小型の鉢形土器。有孔鍔付土器の器形に近似する。孔は付されずに橋状把手が頸部の屈曲部をまたぐ。あるいは両耳壺か。

加曾利E式出現期（いわゆる「焼町土器」系統と考えられる1群）（第87図98～117）

98～106は、双環状突起、環状突起を付す深鉢片。98には地文の縄文 LR が残る。隆線には太めの沈線が沿い、双環状突起上位の平行沈線には交互刺突文が付される。99は口縁部破片。突起より隆線が派生し、半截竹管腹面使用の平行沈線が沿う。100は螺線状の突起より隆線が巴状に派生し、太めの沈線が沿う。101は環状突起に太めの沈線が沿い、隆線によって三角形状の区画が画され、斜位の沈線が充塡される。101は渦巻状の小突起である。内面も同様な施文。103は、口唇部上に突出する円環状の突起。周辺を隆線や短沈線などによって飾り、中央に孔を穿つ。104も口唇部上の円環状突起。中央に孔が穿たれ、円環の4箇所に短沈線を施す。内稜は突出する。105は波状突起波頂部。小型の環状突起より隆線が派生し、太めの沈線が沿う。立体装飾的な文様である。内面は円環状のモチーフである。106は平縁を呈す。口唇部に幅広の瘤状突起を付し、縦位の沈線が施される。突起より隆線が垂下し、太めの沈線が沿う。内稜は突出する。107～109比較的平面的な文様。隆線による方形を基調とした区画が配されるのであろう。107は上位に三角枠の交互配列が施される。区画には太めの沈線が充塡される。108は横位隆帯上を太めの沈線がトレースする。隆帯下は楕円、方形の区画がなされるのであろう。区画内は斜位の沈線が施される。109は、隆線による方形区画。横位隆線下は無文である。区画内は太めの沈線が沿うが、円弧状のモチーフも描かれる。110は太い隆帯を撫でることによって作り出した弧状突起。通常は片方に環状突起が付される。横位隆線が派生し、突起には沈線が沿う。地文の縄文は横位 LR。111は隆線による円形区画。区画内は刺突文が施される。112は捩りを加えた突起より隆線が派生し、渦巻状のモチーフを描く。隆線には太めの沈線が沿う。やゝ薄手の器厚を呈す。113は浅鉢口縁部破片。無文だが、内外面に円盤を貼り付け、滑車状の突起とする。突起中位と下端には円形の孔と長楕円形の小孔が穿

たれる。内外面とも研磨する。114は口縁部に付される柱状突起。突起には横位沈線が加飾される。器面には半截竹管腹面使用の平行沈線が充塡され、立体的な効果を出す。115、口縁部に横位沈線と隆線を付し、以下胴部文様帯とする。横位隆線には三角形状の小突起が付される。突起より隆線が垂下し、胴部文様帯は方形区画される。区画内は半截竹管腹面使用の平行沈線が沿い、斜位の沈線が充塡される。口唇部に赤色塗彩。116は小型の環状突起を中核として隆線が派生する。不安定な区画がなされるであろう。区画内は斜位の沈線が充塡される。隆線には太めの沈線が沿う。117は弧を描く隆線と横位、縦位隆線で種々の区画が配されるであろう。横位隆線下は大型の方形区画と思われ、横位沈線、太めの沈線による三叉文などが描かれる。上位の弧を描く隆線と横位隆線の接点は三角の隙間が生じているがどのような意匠かは判然としない。隆線には太めの沈線が沿う。

加曽利E式出現期（第88図118～131）

在地系で中期中葉にいたる過程のものを一括した。隆帯の上に地文を施すものが多い。

118は曲隆線文を主体とし、隆線の上を沈線がトレースする。隆線に沿って太めの沈線が施される。119～121は隆帯による小区画文。地文に縄文や撚糸文を施す。119は三角形状の区画か。平行沈線が沿い、連続三角文が沈刻される。120は隆帯による方形区画を基調とし、太めの沈線が沿う。121は横位隆帯と弧を描く隆帯が接し、円弧状の区画が考えられる。太めの沈線が沿い、横位隆帯下には短沈線が縦位に施される。122～125は隆帯による渦巻文。122は隆帯内を沈線で渦巻文を描く。124は隆帯に沿って平行沈線が施され、連続三叉文や円形刺突文が沈刻される。126は垂下隆帯の下端が小型の渦巻状小突起となり、太めの沈線が沿う。上の地文は単節縄文だが下位は撚糸文である。127、128は胴部下半に無文帯を設ける。分帯線は隆線である。127は半截竹管腹面使用の平行沈線が沿う。128は方形区画でやや太めの沈線が区画内を沿う。中位には円形のモチーフが描かれる。129は垂下隆線が底部直上にまで及ぶ。幅狭と幅広の区画が配され、縦位平行沈線が隆線に沿う。胴径は小さい。130、128と同様に下半に無文帯を設ける。横位隆帯上には雑な施文の沈線がトレースされる。131は大型の深鉢である。口縁部は外傾し、頸部で僅かに括れ、胴部は穏やかに膨らむ。頸部の平行する2条の隆線で口縁部文様帯が画され、文様帯内は隆線による巴状モチーフが配される。隆線には太めの沈線が沿い、弧を描く隆線によって生じる空白部は主に三角形状である。大型の三角形状区画も配され、中位には縦位短沈線が1条施され、周縁を刻み目による刺疵列が囲む。胴部は横位隆線によって数段に分帯される。口縁部文様帯と同様に隆線で小型の巴状モチーフを描き、また、上位には及環状突起が付される。

加曽利E式出現期（第89図132～141）

口縁部に蛇行隆線や橋状把手が付される1群である。おそらく、中期中葉に平行すると思われる。

132は細身の橋状把手が付され、把手背後には円孔が穿たれる。突出した横位隆線によって幅狭の文様帯が設けられ、蛇行隆線が付される。横位隆線以下は半截竹管腹面使用の平行沈線や、円形刺突文、三叉文が沈刻される。133は蛇行隆線以下の胴部文様帯に環状突起が付され、三叉文などが沈刻される。134は橋状把手である。蛇行隆線は付されないが把手は4方向から孔が設けられ、中空状である。135、136は同一個体であろう。小型の橋状把手が蛇行隆線を施す狭い文様帯をまたぐ。この文様帯の上位、下位とも隆線を主体とした構成だが、区画構造などは判然としない。隆線には平行沈線が沿う。横位隆線は押圧による鎖状隆線である。137は眼鏡状の橋状把手。上端には円形の貼付文が付される。把手下位には横位隆線が接し、垂下隆線が派生する。132～137は前述の焼町土器、在地系の土器群と様相を同一し、系譜、関連など興味深い資料である。138～140は口縁部に蛇行隆線を設け、隆線には刻みを施す。138は頸部隆線より垂下隆線が派生し、半截竹管腹面使用の平行沈線が沿う。横位LR縄文が施される。139は及環状突起より刻みを付す隆線が垂下する。140

は内傾する口縁部に蛇行隆線が付され、屈曲下は横位平行沈線が施される。141は口唇下に蛇行隆線が付されるが、他は無文である。

加曽利Ｅ式出現期（第89図142～150）

加曽利Ｅ式初現期のものと併行する可能性の高い要素を持つ。

142は平縁を呈し、口唇下に沈線が平行する。内湾する口縁部には平行沈線による逆Ｕ字状のモチーフが描かれ、沈線には交互刺突される箇所もある。地文には撚糸が施される。143は著しく内傾する口縁部。口唇下には浅い凹線が施される。屈曲下には沈線による方形区画が配されると思われ、撚糸文が施される。144の頸部隆線は鎖状を呈し、小型の半截竹管による刻み目が連続する。頸部隆線下は撚糸文が施される。145、146は刻みを付す横位隆線。145は垂下隆線が接する。146は弧を描く隆線が接し、上位には区画が配される。区画内は横位と縦位沈線が充填される。147は隆線が円弧を描き、弧内をペン先状刺突による渦巻文が施される。148は三角形状の小突起を中心に垂下隆線と弧を描く隆帯が派生する。突起と隆帯には刻み目が付され、隆帯は円弧状の区画を構成するとおもわれる。区画内は太めの沈線が沿い、大型の刺突文が充填される。149は隆帯をＹ字状に貼付し、その上を沈線がトレースすることによって３条の隆線が描きだされる。分岐点には瘤状の小突起が貼付される。撚糸文Ｌを地文とする。150は撚糸Ｌを施し、横位波状沈線文が描かれる。

特殊な器形のもの（第90図151・152）

151は器台である。隆帯を貼付した孔が穿たれる。器面全体が荒れており、台部の磨滅痕などは判然としない。孔の単位は５単位か。152、鉢形土器。口唇部は僅かに外傾し、端部中位で屈曲する。器厚は薄く軽い。器面は荒れており、無文のため詳細は避けるが、別時期の可能性もある。

加曽利Ｅ式出現期（曽利式的な要素が加味される１群として捉えた。）（第90図153～158）

153は大型の深鉢口縁部破片。口縁部に無文部を持ち、横位隆線で画される。隆線には中空状の柱状突起が付され、刻みを付す細隆線が飾る。隆線以下は胴部文様帯となるが、縦位沈線、横位沈線が描かれる。154～156、158は153と同様に外反する口縁部に無文帯を設ける。154は隆帯の逆Ｕ字状のモチーフが付せられる。155は横位隆帯に交互刺突文が施される。156は３条の隆帯が垂下する兆しを見せる。中央の隆帯上には沈線が施される。158は先端の丸いペン先刺突文が横位に施され、胴部文様帯は沈線でＵ字状モチーフが連続する。157は隆帯によって曲線が描かれ、おそらく連続波状文が展開するのであろう。空白部にはＵ、逆Ｕ字状モチーフが対に設けられ、沈線や刺突文が沿う。

加曽利Ｅ１式？（第90図159～161）

159は胴くびれ部に１本の隆帯を廻らし、胴部下半に１本隆帯を４単位施して４単位区画後、器面にしを縦位施文する。さらに相対する区画内に１本の波状沈線を垂下する。160はめがね状の把手を１カ所有し、口縁部下に強いくびれをもつ器形で、器面にＲ縦位施文後胴部に半截竹管で渦巻文を施す。また、くびれ部には同施文具で５本の隆帯を表現し、間に２段の交互刺突を施す。161は胴部上半に張りを有し、口縁部が「く」状に屈曲する器形で、口縁部に１カ所「Ｃ」状の隆帯と横状把手を組み合わせて貼付し、肩部には隆帯で楕円区画文を施す。隆帯上を含む器面全面にRL縦位施文後、楕円区画内に先端蕨手状の鋸歯状沈線を施す。

加曽利Ｅ３式？（第91図162～166）

162は口縁部には４単位の突起を有し、胴部上半に緩いくびれがみられる。口縁部文様帯は隆帯を弧状に４単位貼付して半月状の区画をし、突起下連結部及び中間部に小渦巻文を施す。また、区画内は縦位平行沈線を充填する。胴部は、器面にRL斜位施文後くびれ部に２本単位の平行沈線を廻らし、下部に３本単位の沈線で連弧文を施し、さらに２本単位の平行沈線を垂下する。164は鉢型の器形で器面全面にRLを粗く縦位施文後、

2～3本単位の沈線で連弧文を3段施す。162・164はいわゆる連弧文系の土器である。163は胴部中位にゆるいくびれを有する器形で、2本単位の平行沈線を垂下し、RLを充塡施文する。165は1本単位の隆帯を5単位垂下して器面を縦位区画し、区画内に綾杉状沈線を充塡施文する。165はいわゆる曽利Ⅳ式系の土器である。166は器面に撚糸Lを縦位施文後、沈線で「V」状及び小渦巻文等の文様施文する。

加曽利E4式（第91図167～173）

167は口縁部に幅広の無文帯をもち、胴部との境に微隆帯を廻らす。胴部は全面にLRを縦位施文する。地文施文は微隆帯上にも及んでいる。168は両耳壺と通称されるもので、口縁部に幅広の無文帯をもち胴部上半に1対の横状取手を有する。この取手間には微隆帯で楕円区画文を施し、区画内はRL横位充塡施文後微隆帯両側に撫でを行う。169は口縁部が内湾し、胴部中位に強いくびれを有する器形で、口縁部に沿って沈線を1本廻らし、胴部に2本単位沈線で2段6単位の波状文を施し、RLを充塡施文後沈線を引き直している。170は4単位の波状口縁で胴部中位にくびれを有する。口縁部に沿って1本の微隆帯を廻らし、胴部に2段に楕円区画文（上位区画文は上端が完全に連結するものと、1本の微隆帯で連結する2種を交互に配する。）を施し、区画内にLを充塡施文する。171は口縁部が内傾する壺型で、口縁部は幅広の無文帯で胴部との境に1本の隆帯を廻らし、4単位の舌状の突起を施す。胴部は器面割付け後隆帯及び区画内にRLを充塡施文し、縦位平行沈線を引き直す。172は口縁部に沿って1本の微隆帯を廻らし口縁部無文帯区画後、胴部を微隆帯で縦位区画する。区画内は交互にLRを縦位充塡施文し、微隆帯両側に撫でを施す。173は口縁部が強く内湾する器形で、口縁部に沿って沈線を廻らし、胴部は沈線で「U」を連結し区画する。区画内はRL充塡施文後沈線を引き直す。

称名寺1式土器（第92図174・180～182）

帯縄文によるJ字文を中心とする文様で構成されるが、174・180では刻みを施した隆帯を垂下させて文様分割が行われており、文様はかなりみだれている。180は波状口縁のもので、筒状の把手上面には一対のC字文が施されている。沈線間を充塡する縄文はいずれもLRである。

称名寺2式土器（第92図175～179・183～186）

口縁は平縁と波状（176・177）のものとがあり、口唇部が内湾して外削ぎ状を呈するもの（175・176）とそうでないものとがある。文様はJ字文・X字文を組み合わせて構成されるものと思われ、沈線区画内を縄文で充塡するもの（176～179・183）、列点状刺突で充塡するもの（184・185）、沈線のみのもの（175・186）とがある。縄文はいずれもLRである。

堀之内1式土器（第92図187～第94図227、第96図298～第97図307）

187～190・193～199・203～227・298～306は、頸部がくびれ口縁部が開く深鉢で、本遺跡では堀之内1式土器の大半をこの器種が占めている。口縁は平縁と波状口縁とがあり、いずれも突起を伴うものが多い。突起には称名寺式のC字文から変化した弧状沈線や刺突文が付けられ、口唇部をめぐる沈線と組み合って文様帯を構成する。頸部には沈線をめぐらして文様帯を画し、口縁部は無文化される。187・209・210・298・299・301～303は古手のもので、いずれも口縁部の幅が狭く、胴部は球形状を呈す。文様は2本単位とする沈線で描かれるものが多い。187は上面に刺突を伴うC字状沈線を施した大型の把手が付くもので、頸部には8の字状の貼付文が施されている。把手上面の縄文はLRである。298・299は斜行沈線とJ字文を組み合わせた単位文様で胴部文様帯を構成し、胴部中位に2本沈線をめぐらして文様帯を画し、区画内に縄文LRを充塡している。299のJ字文下に付く懸垂沈線は、称名寺式の矢印文の名残りである。いずれも頸部沈線上には、文様単位を示す刺突を伴う円形貼付文が付けられている。209・210もこれらと同類の土器であろう。301・303は

やや小型の粗製的な土器で、口唇部は外削ぎ状を呈す。胴部全面に縄文 LR を施し、301では頸部をめぐる沈線から蛇行沈線を垂下させている。器面調整は他に較べて粗雑である。302は突起下頸部に刺突を付した円形貼付文を施し、それを基点に弧線文が施される。この弧線文は298・299のＪ字文の変化したものであろう。胴部を充塡する縄文は LR である。188～190・193・194・204～206・211～213・300は中段階のものであろう。胴部はやや長胴化し、口縁部の幅も広くなる。口唇部文様帯は粗大化し、突起下に刻みを施した隆帯を垂下させるものもある（190・193・194・360）。胴部文様は３本を単位とする沈線で、曲線的な弧線文を器面いっぱいに構成している。また、頸部の円形貼付文は８の字状の貼付文へと変化している（121・213）。胴部の空白部は縄文 LR で充塡されるが、204～206・300は縄文が施されない。なお、300の文様構成は３単位である。195～199・203・207・208・214～227・304～306は新しい段階のものである。口縁部の幅はさらに広くなり、頸部がくの字状に屈曲して口縁が大きく開くもの（197・198・224・304）や、頸部のくびれが弱いもの（199・207・208・214・305）もみられる。口唇部文様は衰退して刺突文が中心となり、突起下隆帯も細くなる。また、頸部沈線上の８の字状の貼付文が一般化する。胴部文様は３～４本を単位とする集合沈線で、より直線的に描かれるようになり、沈線のみのもの（203・207・208・227）、空白部に縄文を充塡するもの（214・217・218・222～225・304）、縄文を地文とするもの（215・216・305・306）とがある。縄文はいずれもLRである。なお、214・218・226・227は、胴部８の字状貼付文下に１～２本の沈線や刻みを施した隆帯を垂下させて、胴部文様を分割している。

200～202は、いわゆる朝顔形の深鉢である。いずれも口唇部に刺突や弧線を伴う沈線をめぐらし、201では刺突下に蛇行沈線を垂下させ、202では４本単位の集合沈線で弧状の文様を構成している。縄文はいずれも LR である。

307は球形状の胴部に小さく開いた口縁部が付く壺状の土器である。口縁波頂部に円孔を施し、頸部と胴部波頂下に沈線で縁取られた隆線を施し、その交点に刺突を付けている。内外面とも入念に研磨され、光沢をおびている。

191・192は浅鉢である。194は波状口縁のもので、幅広の口唇部に刻みを伴う２本の沈線をめぐらし、波頂部には隆線によるＳ字状の文様を施している。192は大型の突起をもつもので、くの字状に内折する幅広の口唇部に、191同様刻みを伴う２本の沈線をめぐらしている。

堀之内２式土器（第94図228～第95図276、第97図309～312・314）

311は頸部がくびれ口縁部が開く深鉢である。堀之内１式では主体を占める器種であるが、２式では比較的少ない。口縁部は大きく開き、内折する口唇部には沈線がめぐる。頸部には沈線にかわって刻みを付けた隆線が施され、口縁部隆線との接点には８の字状の貼付文が付けられる。胴部文様は集合沈線から帯縄文に変化しており、逆Ｕ字状の懸垂文で構成されている。縄文は LR で、無文部には研磨が施されている。

309・310は胴部下半に内折部をもち、上半がゆるく外反しながら開く鉢で、本型式に特徴的な器種である。口唇下に幅広く無文帯をおき、文様帯は上下の帯縄文で明確に画される。文様はいずれも帯縄文による三角形を組み合わせた、横位回転の一連の文様で構成される。309は垂線を基準とする一段構成、310は交互に組み合わせた２段構成である。312はやや器形が異なるが、文様構成は310と同じである。いずれも沈線間を充塡する縄文は LR で、無文部には研磨が施されている。

228～244・247～258・261～271・314は朝顔形の深鉢で、本型式の主体を占める。沈線区画内を充塡する縄文はいずれもLRである。228～235・263は古手の一群である。把手の付く波状口縁のものや突起の付くものが多い。把手・突起下には８の字状の貼付文が付けられ、口唇下に隆線や沈線をめぐらして口唇部文様帯を形

成するものもある。228～233・236・237は把手・突起下に隆線による懸垂文のみを施すもので、228・236のように対弧文状のものと、230・233のように垂下隆線と弧文を組み合わせたものとがある。なお、これらの隆線には刻みが施されない。234・235は隆線懸垂文と帯縄文によるX字文を組み合わせたもので、懸垂隆帯には刻みが施されているが、235はそれに刻みの施されない弧文が伴っている。この弧文は、堀之内1式の朝顔形深鉢にみられる、2～3本の沈線による弧文に系統をもつものであろう。263は234と同個体の可能性がある。以上の土器は、いずれも精緻な作りで無文部は入念に研磨されている。これら以外のものは沈線が主体で、文様は横位転回の一連の文様で構成され、文様帯の上下は帯縄文で画される。口縁部は無文帯とされるが、刻みを施した隆線をめぐらすのもあり、隆線上には8の字状貼付文が付けられる（255～258・264）。また、口唇内面に沈線をめぐらすのも特徴の一つである。文様構成はX字文あるいは菱形文を構成するもの（238・239・242・243・250～252・264～271・314）、X字文の中央に楕円文を組み合わせるもの（240・244・247～249）、垂線と斜行線を組み合わせたもの（262）、310と同様三角形を交互に組み合わせて2段構成をするもの（253）、J字文で構成するもの（256～258）、などのバラエティがみられる。J字文で構成するものはいずれも口縁部に隆線をめぐらしており、8の字状貼付文の下に弧状無文部を続けていることから、254・255も同類であろう。文様はいずれも帯縄文で構成されるが、空白部を集合沈線で充塡するものも多い（242～244・247～253・314）。また、集合沈線のみのものもある（240・241）。いずれも無文部はかるく研磨が施されている。

272～276は注口付土器である。272は集合沈線で文様を描くもので、注口部上位に大型の把手が付けられている。273～276は帯縄文で区画された中を集合沈線で充塡するもので、無文部は入念に研磨されている。

245・246・259・260は器形が判然としない。245は強く内傾するものと思われ、口縁部に渦巻文が施されている。246・259・260は刻みを施した隆線で文様を分割する、同形態の土器と思われる。

加曽利B1式土器（第95図277～281・284・285・291・294・295・297・第97図308）

277・281は波状口縁を呈する深鉢の口縁部で、波頂部にはいずれも大型の把手が付く。277は耳状の把手で、左右に2個1対の刺突を施して8の字文を表わしている。281は眼鏡状の把手で、上面に対弧文を施し、把手下に円孔を施している。文様は縄文LRで充塡された菱形文で構成され、把手下には渦巻文を伴う鎖状懸垂文が施されている。なお、口唇部には刻みが施されている。いずれも口縁部内面には2～3本の沈線をめぐらしており、内外面とも入念に研磨されている。

278は注口付土器と思われる。胴部上半に枠状の区画文を2段施し、区画外に縄文LRを充塡して、区画文間上下に刺突文を加えている。

279・280・308はゆるく内湾する鉢である。279・280は同個体で、口縁部に刻みを施した平行沈線を2条めぐらし、同下半にも沈線と刻みを施した平行沈線を施している。内外面とも入念に研磨され、光沢をおびる。308は口唇下に数条の沈線を施し、口唇部には刻みが付けられている。

384・385は口縁が強く内湾する鉢である。口縁部に細い帯縄文をめぐらし、胴部には枠状の区画文を施して区画外に縄文LRを充塡している。内面および無文部は入念に研磨され、光沢をおびる。なお、口縁の一部と断面に朱塗が認められる。

297は頸部がくの字状に内折する土器で、円孔が施された頸部隆帯下に、無節縄文Lで充塡された帯縄文を施している。なお、内外面には朱塗痕が認められる。

291・294・295はいわゆる粗製の深鉢で、いずれも口縁内面に1～2本の沈線がめぐる。291は口唇下に縦線文を施し、胴部には縄文RLを地文に数条の平行沈線が施されている。294・295は横位条線を地文に数条の

沈線を施したもので、294は口唇下１帯を無文帯とし、２帯目に波状沈線を加えている。

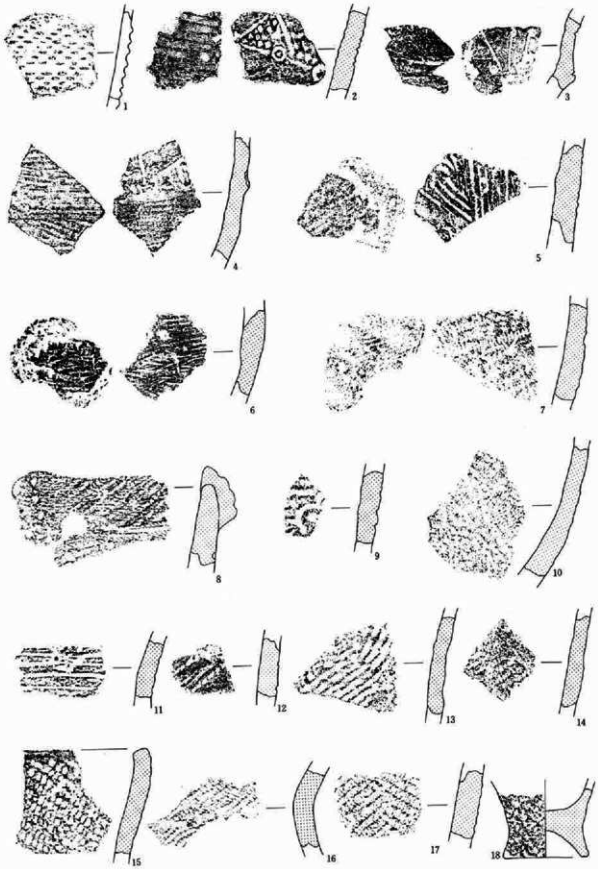
加曽利Ｂ２式土器（第95図283・284・286・287）

282・283は277・281の系統を引く深鉢である。282は把手を中心に大型の円形刺突が施されており、そのうち把手下の一つは円孔となっている。283は内折する口唇下に、縄文LRを充填した２本の帯縄文を施し、その間に対弧文を施している。いずれも無文部は入念に研磨している。

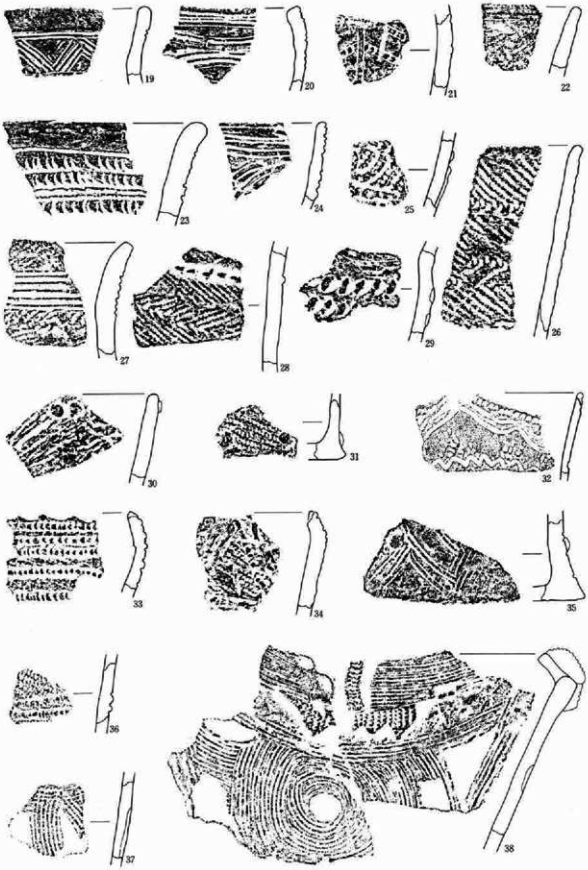
286・287は口縁部が内湾する鉢である。286は284・285の系統を引くもので、口唇直下に縄文 LR を充填した縄文帯をめぐらし、口縁を無文化して頸部に刺突を伴う平行沈線をめぐらし、以下を斜行沈線で充填している。287は口縁下に隆線をめぐらすもので、内外面とも入念に研磨されている。

加曽利Ｂ３式土器（第95図288～290・292・293・296、第97図313）

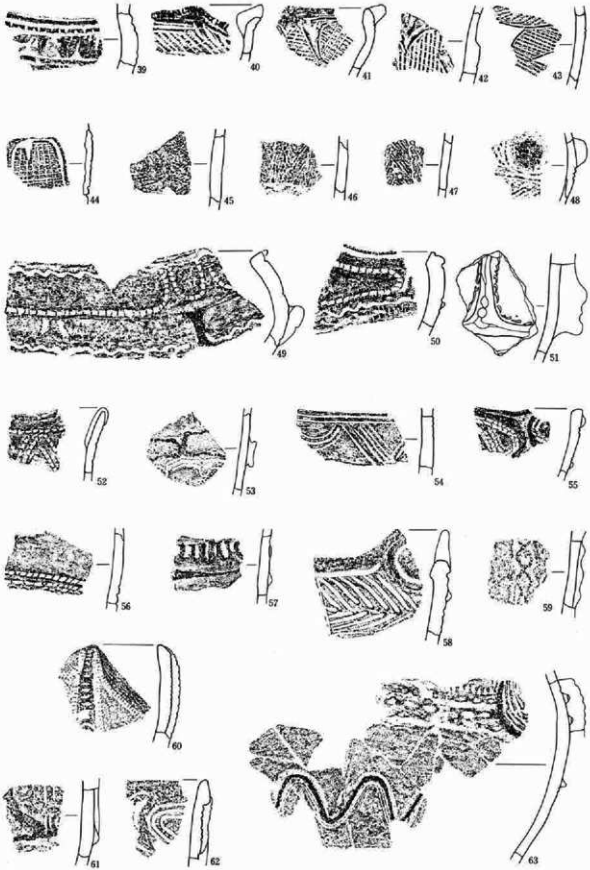
288・289・296は斜行沈線を施す深鉢である。289は胴屈曲部に沈線をめぐらして施文部を分割している。296は口径10cm程の小型土器で、口縁には小突起が付けられている。290は波頂部に把手が付く深鉢で、把手基部には２条の隆線をめぐらし、口唇下には刺突を伴う２本の太沈線と隆帯を施して文様帯を形成している。292は口縁部が内湾する鉢形の土器で、口縁下には２個の円孔を施した舌状突起が付く。293は条線の施された粗製の深鉢である。313は台付土器の台部で、裾部に綾杉状の文様が施されている。



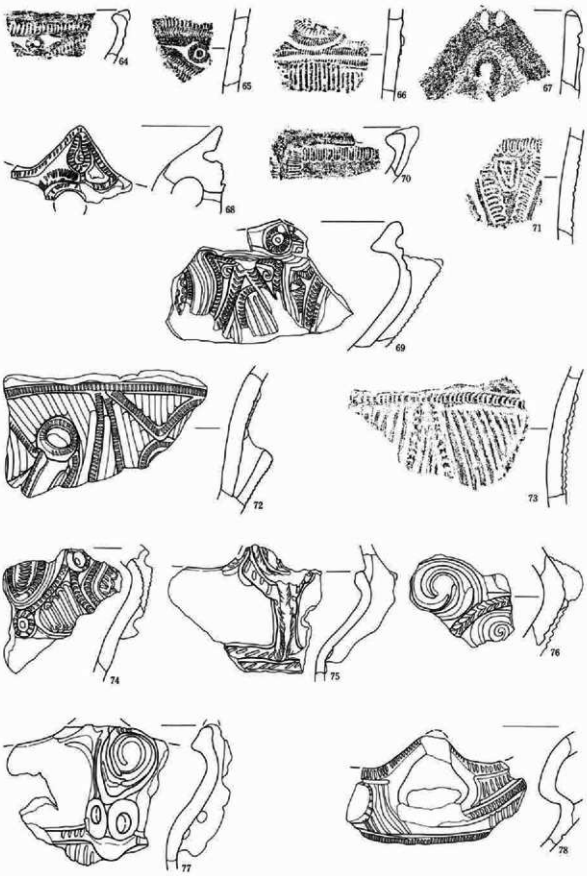
第82図　グリット出土遺物 (1)



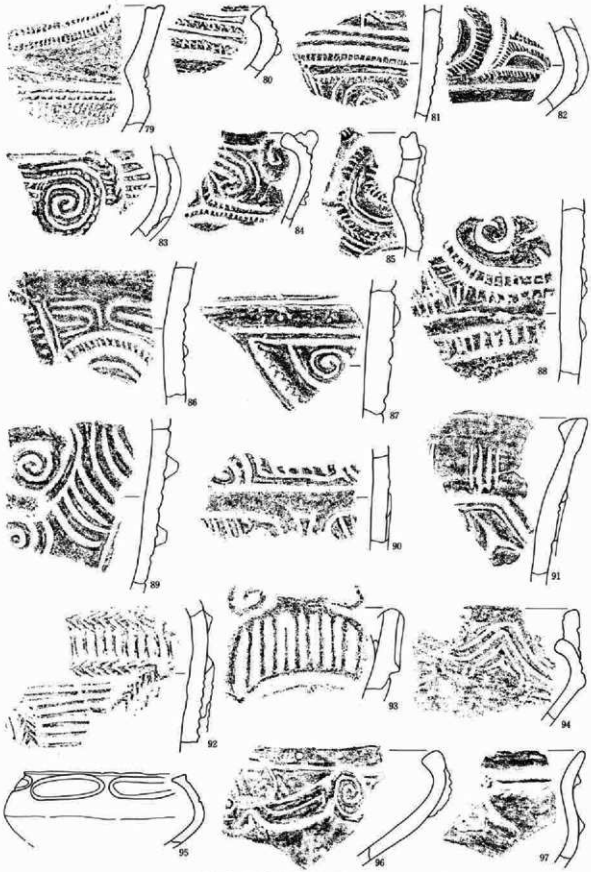
第83図　グリット出土遺物　(2)



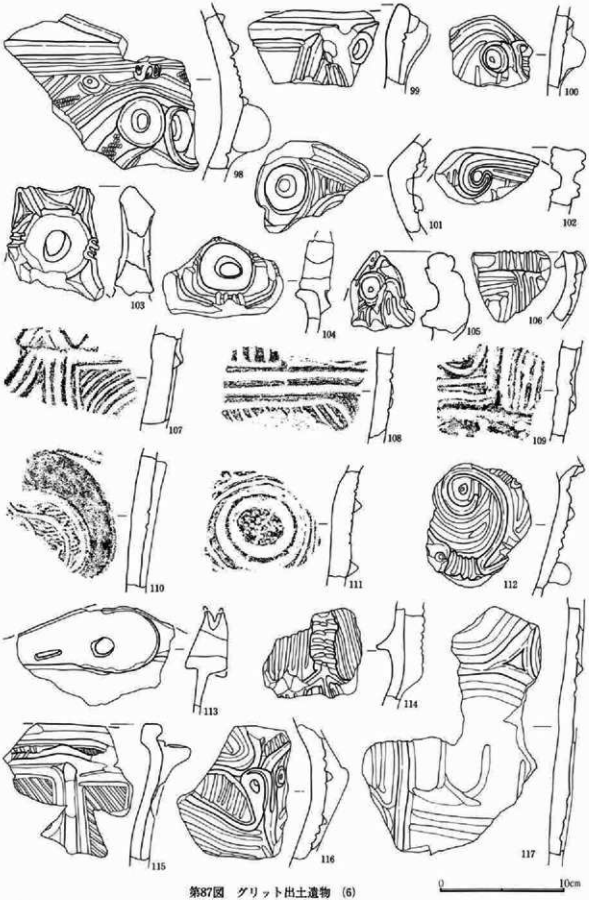
第84図　グリット出土遺物（3）



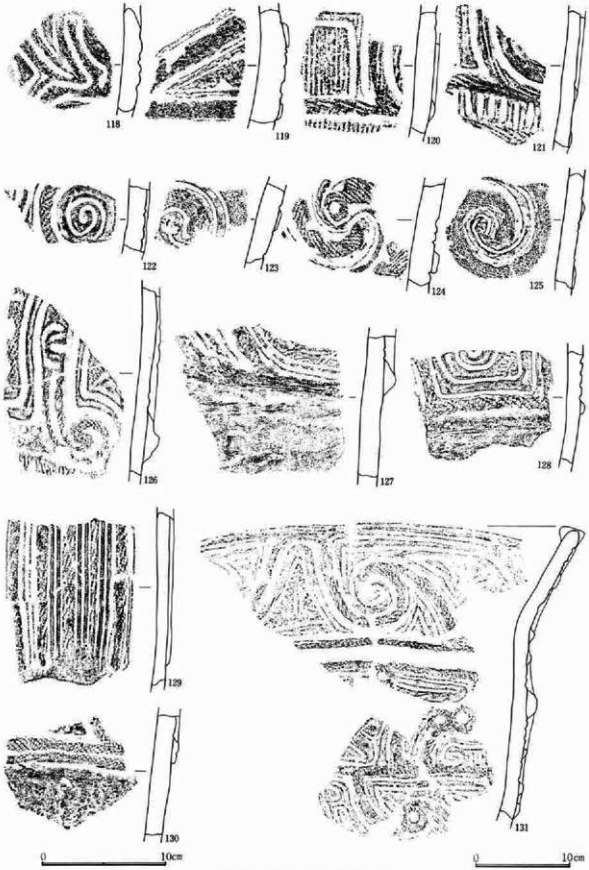
第85図　グリット出土遺物（4）



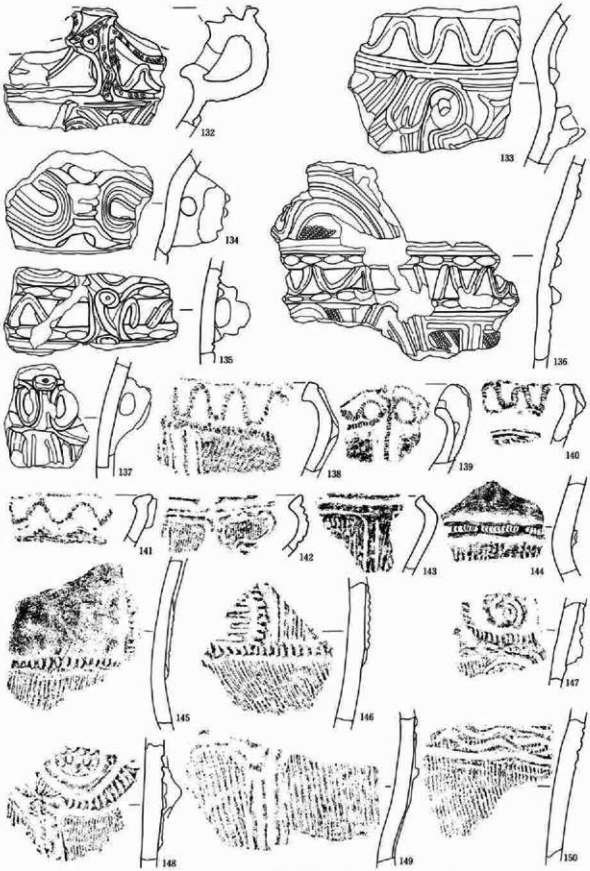
第86図　グリット出土遺物　(5)



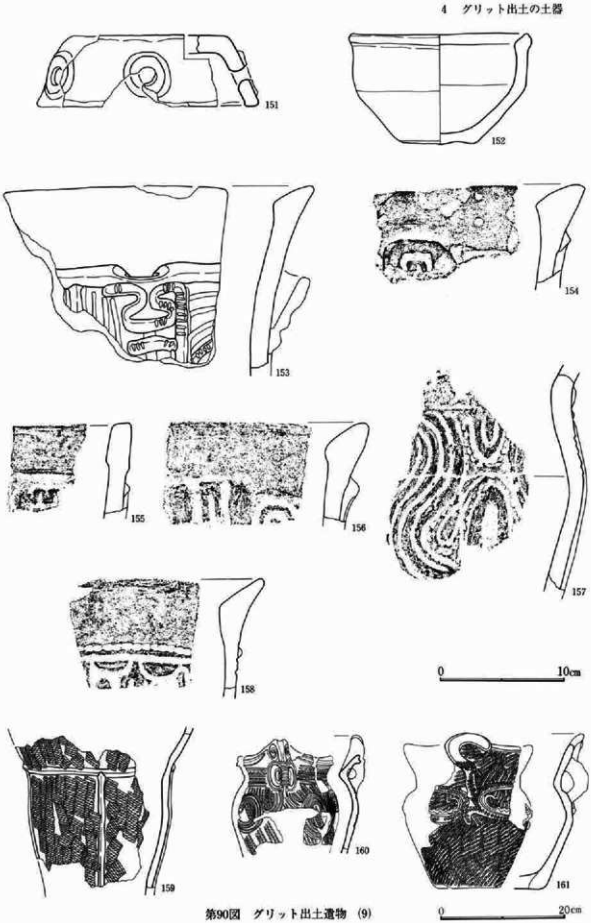
第87図　グリット出土遺物　(6)



第88図　グリット出土遺物（7）

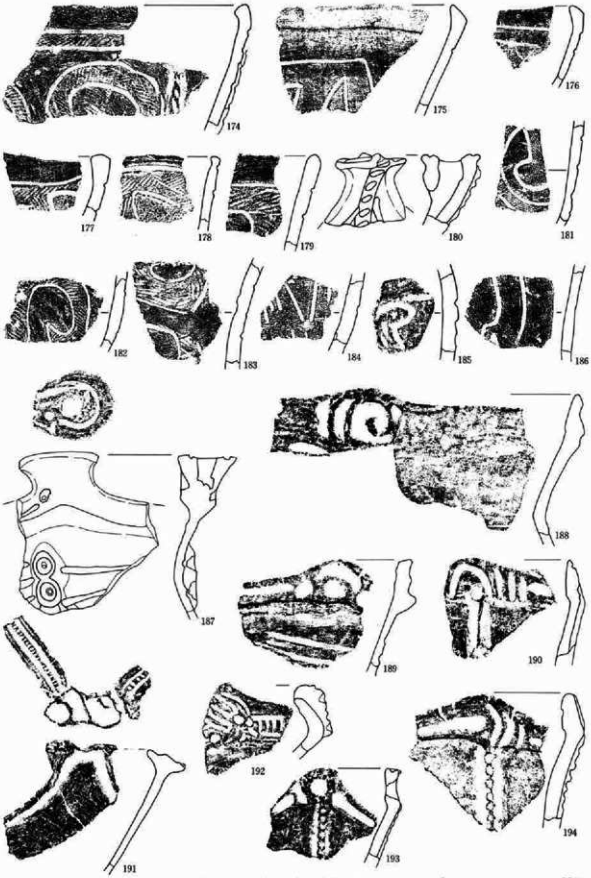


第89図　グリット出土遺物　(8)

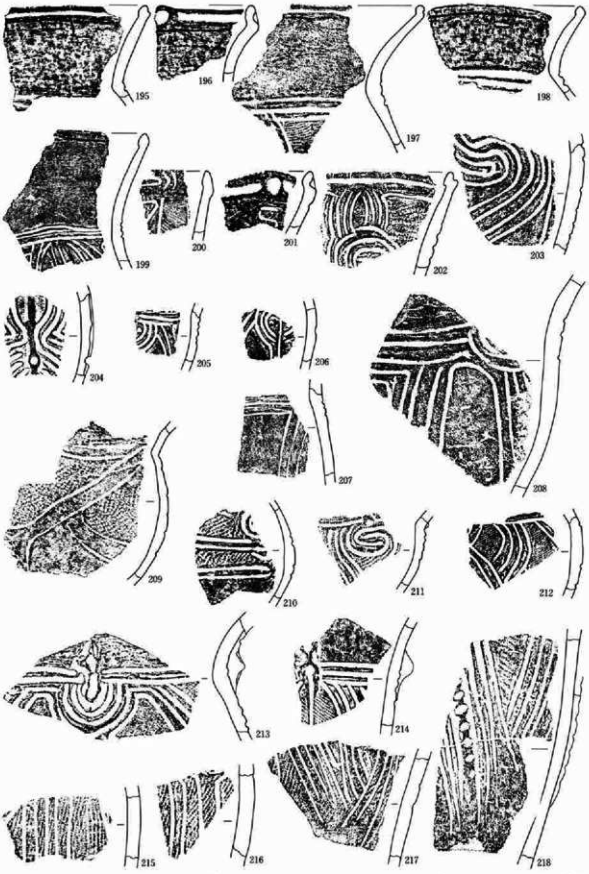


第90図　グリット出土遺物（9）

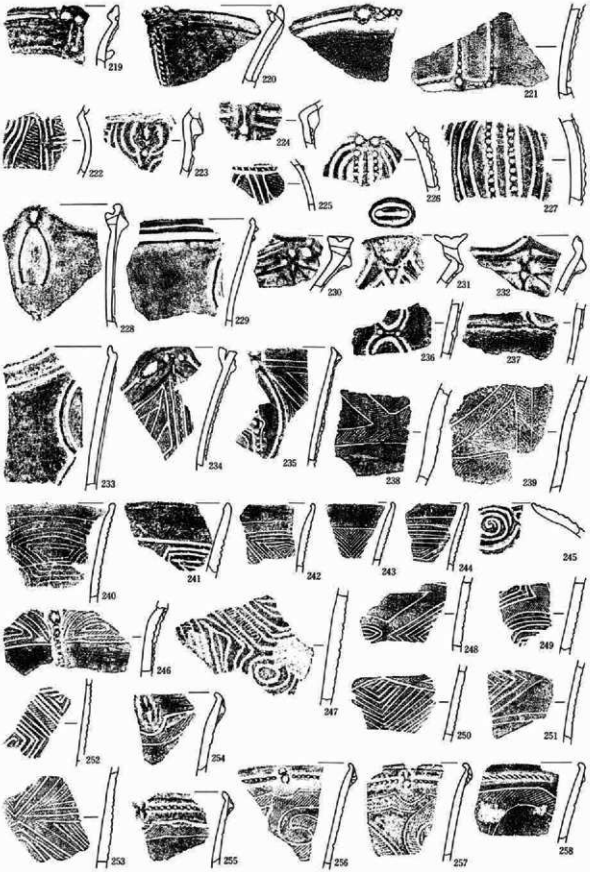
第91図 グリット出土遺物 (1)



第92図　グリット出土遺物 (11)

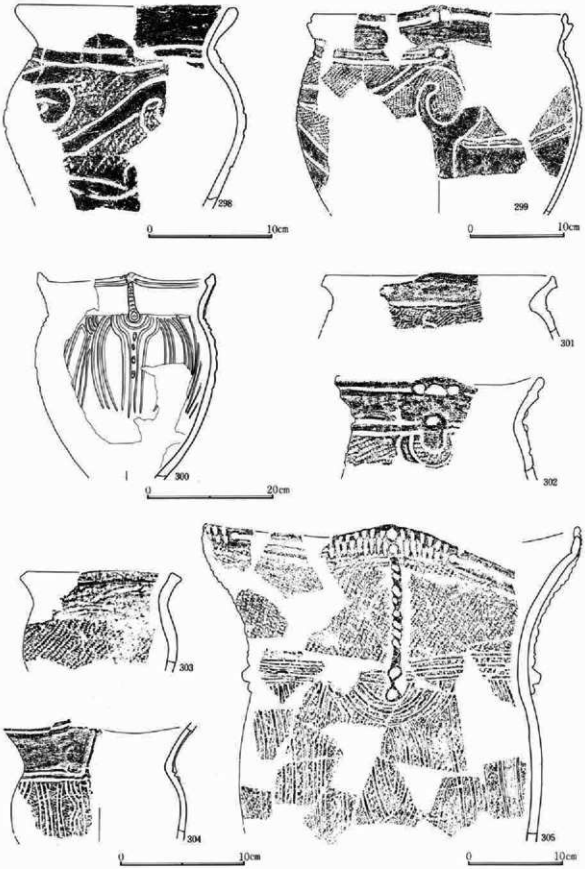


第93図　グリット出土遺物　(2)

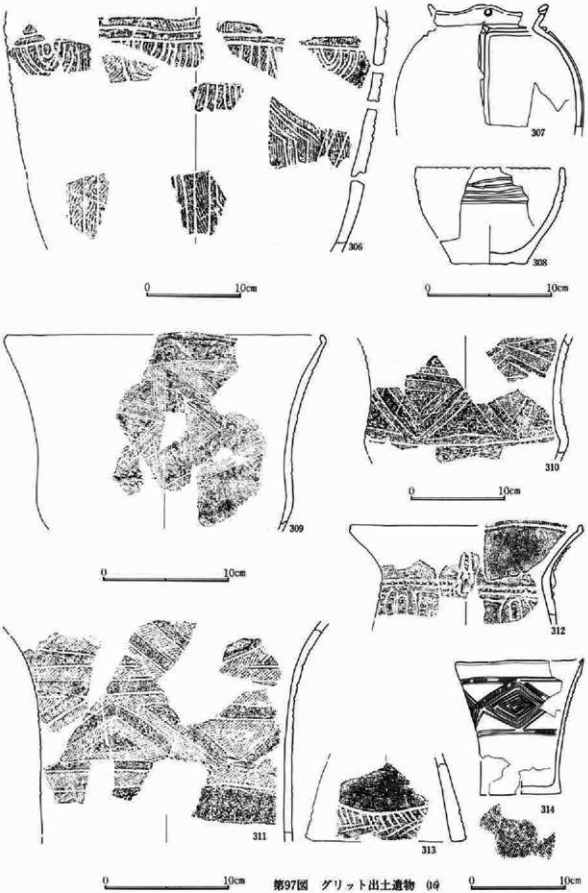


第94図　グリット出土遺物　03

第95図　グリット出土遺物　(4)



第96図　グリット出土遺物　09



第97図　グリット出土遺物 (6)

グリット出土土器集計表

番号	出土位置	器種・残存状態		色調
1	表土	深鉢	胴部片	明赤褐色
2	L−17	深鉢	胴部片	赤褐色
3	L−18−3	深鉢	胴部片	明赤褐色
4	N−16−3　3層	深鉢	胴部片	にぶい赤褐色
5	M−17	深鉢	胴部片	暗赤褐色
6	M−17	深鉢	胴部片	明赤褐色
7	M−20−1　3層	深鉢	胴部片	明褐色
8	E−12	深鉢	口縁部片	にぶい赤褐色
9	表土	深鉢	胴部片	にぶい褐色
10	L−22	深鉢	胴部片	にぶい橙色
11	B区	深鉢	胴部片	赤褐色
12	E−23	深鉢	胴部片	橙色
13	E−23	深鉢	胴部片	明褐色
14	D−11	深鉢	胴部片	赤褐色
15	表土	深鉢	口縁部片	褐色
16	E−23	深鉢	胴部片	明褐色
17	L−16−3　2層	深鉢	胴部片	褐色
18	L−19−3　2層	深鉢	底部片	明褐色
19	D−13	深鉢	口縁部片	にぶい橙色
20	E−12	深鉢	口縁部片	褐色
21	B−3	深鉢	胴部片	橙色
22	方形周溝墓	深鉢	口縁部片	赤褐色
23	M−19−4　4層	深鉢	口縁部片	黒褐色
24	方形周溝墓	深鉢	口縁部片	黒褐色
25	O−18	深鉢	胴部片	明赤褐色
26	D−14	深鉢	口縁部片	赤褐色
27	方形周溝墓	深鉢	口縁部片	暗褐色
28	M−16−2	深鉢	胴部片	赤褐色
29	K−17−2　3層	深鉢	胴部片	にぶい赤褐色
30	方形周溝墓	深鉢	口縁部片	赤褐色
31	L−19	深鉢	底部片	赤褐色
32	L−17	深鉢	底部片	褐色
33	B区	深鉢	口縁部片	赤褐色
34	B−7	深鉢	口縁部片	赤褐色
35	D−13	深鉢	胴部片	赤褐色
36	L−17	深鉢	胴部片	明赤褐色
37	M−16	深鉢	口縁部片	明赤褐色
38	M−20−1	深鉢	胴部片	にぶい赤褐色
39	D−13	深鉢	口縁部片	明褐色
40	D−11	深鉢	口縁部片	赤褐色
41	D−10	深鉢	胴部片	暗赤褐色
42	B区	深鉢	胴部片	暗赤褐色
43	表土	深鉢	胴部片	黒褐色
44	方形周溝墓	深鉢	胴部片	赤褐色
45	方形周溝墓	深鉢	胴部片	褐色
46	方形周溝墓	深鉢	胴部片	褐色
47	F−4	深鉢	胴部片	赤褐色
48	表土	深鉢	口縁部片	赤褐色
49	表土	深鉢	口縁部片	赤褐色
50	方形周溝墓	深鉢	胴部片	赤褐色
51	M−16	深鉢	口縁部片	褐色
52	方形周溝墓	深鉢	胴部片	明褐色
53	D−13	深鉢	胴部片	赤褐色
54	方形周溝墓	深鉢	口縁部片	褐色
55	方形周溝墓	深鉢	胴部片	赤褐色
56	表土	深鉢	胴部片	暗褐色
57	表土	深鉢	口縁部片	赤褐色
58	方形周溝墓	深鉢	胴部片	赤褐色
59	M−19　3層	深鉢	胴部片	赤褐色

番号	出土位置	器種・残存状態		色調
60	方形周溝墓	深鉢	胴部片	赤褐色
61	N−3	深鉢	口縁部片	赤褐色
62	D−11	深鉢	胴部片	明赤褐色
63	E−5	深鉢	口縁部片	にぶい赤褐色
64	C−6	深鉢	胴部片	褐色
65	M−18−2	深鉢	胴部片	にぶい赤褐色
66	L−19−4　3層	深鉢	口縁部片	灰褐色
67	表土	深鉢	口縁部把手片	にぶい赤褐色
68	M−18−3	深鉢	口縁部片	にぶい赤褐色
69	M−19−4　3層	深鉢	口縁部片	にぶい褐色
70	M−19−3	深鉢	胴部片	黒褐色
71	N−17−2	深鉢	胴部片	暗赤褐色
72	A区14住　覆土	深鉢	胴部片	暗褐色
73	M−19−3	深鉢	胴部上位片	暗赤褐色
74	M−18−3	深鉢	口縁部片	にぶい赤褐色
75	O−16−3	深鉢	口縁部片	にぶい赤褐色
76	O−19−1・2	深鉢	口縁部片	暗褐色
77	M−20−1	深鉢	口縁部片	にぶい赤褐色
78	表土	深鉢	口縁部片	暗褐色
79	M−18−2	深鉢	口縁部片	赤褐色
80	表土	深鉢	胴部片	にぶい赤褐色
81	L−14	深鉢	胴部片	橙色
82	K−19−1　4層	深鉢	胴部片	にぶい黄褐色
83	M−15−3	深鉢	口縁部片	にぶい赤褐色
84	M−20−1　3層	深鉢	口縁部片	灰褐色
85	O−19−2	深鉢	胴部片	にぶい褐色
86	表土	深鉢	胴部片	にぶい赤褐色
87	P−1　3層	深鉢	胴部片	にぶい橙色
88	M−19−3　4層	深鉢	胴部片	明赤褐色
89	M−19−2　3層	深鉢	胴部片	にぶい赤褐色
90	M−20−1　3層	深鉢	口縁部片	赤褐色
91	N−12	深鉢	胴部片	にぶい赤褐色
92	表土	深鉢	口縁部把手	橙色
93	表土	深鉢	口縁部片	橙色
94	表土	深鉢	口縁部片	赤褐色
95	O−16−3	深鉢	口縁部片	にぶい赤褐色
96	M−19−2　3層	深鉢	口縁部片	赤褐色
97	M−18−3	深鉢	胴部片	赤褐色
98	M−17	深鉢	口縁部片	明赤褐色
99	L−19　3層	深鉢	胴部片	暗赤灰色
100	L−19−3　2層	深鉢	胴部片	明赤褐色
101	表土	深鉢	口縁部片	灰褐色
102	表土	深鉢	口縁部把手	にぶい赤褐色
103	表土	深鉢	口縁部片	暗赤褐色
104	L−19−3	深鉢	口縁部片	暗赤褐色
105	L−19−2	深鉢	口縁部片	赤褐色
106	M−18−2	深鉢	胴部片	暗赤褐色
107	M−19−2　3層	深鉢	胴部片	明赤褐色
108	M−17	深鉢	胴部片	にぶい赤褐色
109	C−6	深鉢	胴部片	褐色
110	C−10	深鉢	胴部片	明褐色
111	N−18　3層	深鉢	胴部片	赤褐色
112	N−17−2	深鉢	口縁部片	にぶい赤褐色
113	M−16	深鉢	口縁部片	暗赤褐色
114	D−10・11	深鉢	口縁部片	明褐色
115	C−10	深鉢	胴部片	褐色
116	C−10	深鉢	胴部片	明褐色
117	N−19　3層	深鉢	胴部片	明褐色
118	L−17	深鉢	胴部片	明褐色

番号	出土位置	器種・残存状態	色調
119	A区14住　覆土	深鉢　胴部片	明褐色
120	A区4住　覆土	深鉢　胴部片	明褐色
121	N－17－2　1層	深鉢　胴部片	にぶい褐色
122	M－15－3　1層	深鉢　胴部片	赤褐色
123	N－17－2　1層	深鉢　胴部片	明赤褐色
124	M－15－3	深鉢　胴部片	明赤褐色
125	M－16	深鉢　胴部片	明赤褐色
126	L－19－4　2層	深鉢　胴部片	にぶい赤褐色
127	A区7住　覆土	深鉢　胴部片	赤褐色
128	A区4住　覆土	深鉢　胴部片	赤褐色
129	A区28住　覆土	深鉢　胴部片	赤褐色
130	O－21	深鉢　口縁部～胴部片	にぶい赤褐色
131	M－20－2	深鉢　口縁部片	暗赤褐色
132	M－18－3	深鉢　胴部片	暗赤褐色
133	A区18住　覆土	深鉢　胴部片	赤褐色
134	M－18－2　3層	深鉢　胴部片	赤褐色
135	M－18－2　3層	深鉢　胴部片	にぶい褐色
136	L－19－4　2層	深鉢　胴部片	黒褐色
137	M－18－2	深鉢　口縁部片	暗赤褐色
138	M－19－4　4層	深鉢　口縁部片	暗赤褐色
139	M－20－2	深鉢　口縁部片	にぶい橙色
140	表土	深鉢　口縁部片	暗褐色
141	O－19－2	深鉢　口縁部片	赤褐色
142	L－17　2層	深鉢　口縁部片	明赤褐色
143	M－18－2	深鉢　胴部片	にぶい赤褐色
144	L－22	深鉢　胴部片	にぶい赤褐色
145	O－19－1	深鉢　胴部片	にぶい赤褐色
146	N－19－4　4層	深鉢　胴部片	黒褐色
147	M－18－3	深鉢　胴部片	黒褐色
148	A区14住　覆土	深鉢　胴部片	にぶい赤褐色
149	N－17－1	深鉢　胴部片	にぶい赤褐色
150	D－11	器台　口縁部～台部ﾗﾝ	にぶい黄褐色
151	D－12	壺型土器　ほぼ完形	橙色
152	P－19－1	深鉢　口縁部片	にぶい黄橙色
153	M－19－2	深鉢　口縁部片	赤褐色
154	J－11	深鉢　口縁部片	暗赤褐色
155	A区4住　覆土	深鉢　口縁部片	赤褐色
156	N－19－4　4層	深鉢　胴部片	にぶい赤褐色
157	K－18	深鉢　口縁部片	灰褐色
158	N－19	深鉢　胴部ﾗ	にぶい赤褐色
159	O－19－2	深鉢　口縁部～胴部ﾗ	暗赤褐色
160	A区17住　覆土	深鉢　口縁部～底部ﾗ	明赤褐色
161	O－21	深鉢　ほぼ完形	赤褐色
162	C－10	深鉢　胴部～底部ﾗ	明褐色
163	O－21	深鉢　ほぼ完形	明褐色
164	O－21	深鉢　胴部下半	赤褐色
165	O－21	深鉢　胴部下半	赤褐色
166	表土	小型深鉢　ﾗ残存	褐色
167	表土	深鉢　口縁部～胴部ﾗ	褐色
168	D－12	深鉢　口縁部～胴部ﾗ	褐色
169	D－12	深鉢　口縁部～胴部ﾗ	橙色
170	D－12	深鉢　口縁部～底部ﾗ	明褐色
171	D－12	深鉢　口縁部～胴部ﾗ	赤褐色
172	D－12	深鉢　口縁部片	褐色
173	D－12	深鉢　口縁部片	褐色
174	L－19－4　2層	深鉢　口縁部片	褐色
175	J－11	深鉢　口縁部片	にぶい褐色
176	O－18－3　3層	深鉢　口縁部片	にぶい褐色
177	N－17－2	深鉢　口縁部片	赤褐色
178	L－16	深鉢　口縁部片	灰褐色
179	N－17－2　1層	深鉢　口縁部片	にぶい橙色
180	A区14住　覆土	深鉢　口縁部片	にぶい橙色
181	N－20－2　2層	深鉢　胴部片	にぶい橙色
182	L－19－3　3層	深鉢　口縁部片	にぶい褐色
183	P－19－2　3層	深鉢　胴部片	にぶい褐色
184	O－18－2	深鉢　胴部片	にぶい赤褐色
185	O－16－3　3層	深鉢　胴部片	にぶい橙色
186	J－11	深鉢　胴部片	にぶい橙色
187	P－19－1	深鉢　口縁部片	橙色
188	O－16－2　3層	深鉢　口縁部片	にぶい橙色
189	N－12	深鉢　口縁部片	にぶい橙色
190	O－17－1　3層	深鉢　口縁部片	暗赤褐色
191	A区28住　覆土	深鉢　口縁部片	にぶい赤褐色
192	O－16－2	深鉢　口縁部片	にぶい褐色
193	M－17	深鉢　口縁部片	にぶい橙色
194	O－16－3	深鉢　口縁部片	にぶい褐色
195	O－18	深鉢　口縁部片	明赤褐色
196	L－19－2	深鉢　口縁部片	褐灰色
197	D－3	深鉢　口縁部片	にぶい赤褐色
198	D－2	深鉢　口縁部片	黒褐色
199	O－17－1	深鉢　口縁部片	灰黄褐色
200	O－18－3	深鉢　口縁部片	灰黄褐色
201	O－19－1　3層	深鉢　口縁部片	暗褐色
202	N－18－3　2層	深鉢　口縁部片	褐色
203	N－17－3　3層	深鉢　胴部片	にぶい黄橙色
204	N－17－2　2層	深鉢　胴部片	黒褐色
205	L－19－2	深鉢　胴部片	にぶい橙色
206	M－17	深鉢　胴部片	灰黄褐色
207	A区14住　覆土	深鉢　胴部片	にぶい橙色
208	A区28住　覆土	深鉢　胴部片	にぶい褐色
209	O－16－3	深鉢　胴部片	黒褐色
210	O－16－3	深鉢　胴部片	にぶい褐色
211	L－19－3　2層	深鉢　胴部片	にぶい黄橙色
212	A区14住　覆土	深鉢　胴部片	にぶい黄橙色
213	L－20	深鉢　胴部片	にぶい黄橙色
214	A区1住　覆土	深鉢　胴部片	にぶい黄橙色
215	P－19－1　2層	深鉢　胴部片	にぶい褐色
216	表土	深鉢　胴部片	にぶい褐色
217	O－19－2　2層	深鉢　胴部片	にぶい褐色
218	N－17－1	深鉢　胴部片	にぶい黄橙色
219	N－17－1	深鉢　口縁部片	黒褐色
220	L－16－2	深鉢　口縁部片	にぶい褐色
221	表土	深鉢　胴部片	黒褐色
222	M－16－1	深鉢　胴部片	にぶい黄橙色
223	N－17－2　1層	深鉢　胴部片	にぶい黄橙色
224	M－16－3	深鉢　胴部片	にぶい赤褐色
225	O－18－3　3層	深鉢　胴部片	にぶい黄橙色
226	N－17－1　2層	深鉢　胴部片	暗褐色
227	B区	深鉢　胴部片	褐色
228	N－17－1	深鉢　口縁部片	灰褐色
229	N－16－3	深鉢　口縁部片	褐灰色
230	N－17－1	深鉢　口縁部片	暗褐色
231	N－16－3	深鉢　口縁部片	明黄褐色
232	N－19　3層	深鉢　口縁部片	灰褐色
233	N－17－3　3層	深鉢　口縁部片	にぶい黄褐色
234	N－17－1	深鉢　口縁部片	褐灰色
235	O－17－4	深鉢　口縁部片	黒褐色
236	N－16	深鉢　胴部片	にぶい黄褐色
237	C－3	深鉢　胴部片	にぶい褐色
238	O－17－1	深鉢　胴部片	にぶい褐色
239	N－12	深鉢　胴部片	黒褐色
240	O－17－1	深鉢　口縁部片	にぶい黄褐色

番号	出土位置	器種・残存状態		色調
241	O−18−1　3層	深鉢	口縁部片	にぶい橙色
242	N−18−2　3層	深鉢	口縁部片	灰褐色
243	O−18−1	深鉢	口縁部片	灰褐色
244	L−17	深鉢	口縁部片	にぶい黄褐色
245	O−16−3　2層	深鉢	口縁部片	にぶい黄橙色
246	K−18−1	深鉢	胴部片	灰黄褐色
247	N−18−1	深鉢	胴部片	にぶい黄褐色
248	N−18−1　3層	深鉢	胴部片	黒褐色
249	K−17−2	深鉢	胴部片	にぶい褐色
250	L−16	深鉢	胴部片	にぶい橙色
251	N−18−3　4層	深鉢	胴部片	灰褐色
252	O−19−1　3層	深鉢	胴部片	にぶい褐色
253	P−19−1　3層	深鉢	胴部片	にぶい褐色
254	N−12	深鉢	口縁部片	灰褐色
255	N−16−1	深鉢	口縁部片	にぶい褐色
256	O−16−2	深鉢	口縁部片	灰褐色
257	D−3	深鉢	口縁部片	灰褐色
258	L−16−3　2層	深鉢	口縁部片	にぶい黄橙色
259	表土	深鉢	胴部片	にぶい黄橙色
260	O−16−3　2層	深鉢	胴部片	にぶい黄褐色
261	K−17　3層	深鉢	胴部片	にぶい褐色
262	N−12	深鉢	胴部片	灰褐色
263	N−17−2　1層	深鉢	胴部片	褐灰色
264	L−17	深鉢	口縁部片	灰黄褐色
265	O−16−2	深鉢	口縁部片	にぶい黄橙色
266	N−19−2　4層	深鉢	口縁部片	にぶい赤褐色
267	L−19−1　3層	深鉢	胴部片	にぶい黄橙色
268	K−17　3層	深鉢	胴部片	にぶい褐色
269	N−19	深鉢	胴部片	黒褐色
270	D−3	深鉢	胴部片	にぶい黄褐色
271	O−16−2	深鉢	胴部片	暗褐色
272	A区23住　覆土	注口土器	注口部片	にぶい黄褐色
273	A区14住	注口土器	胴部片	褐灰色
274	N−18−3　3層	注口土器	胴部片	黒褐色
275	表土	注口土器	胴部片	黒褐色
276	P−19−1　3層	注口土器	胴部片	黒褐色
277	N−18−2　3層	深鉢	口縁部片	にぶい黄褐色
278	O−18−3　3層	深鉢	胴部片	にぶい黄橙色
279	O−16−2	深鉢	口縁部片	にぶい黄橙色
280	O−16−3	深鉢	口縁部片	にぶい黄橙色
281	M−17	深鉢	口縁部片	黒褐色
282	O−19−2　2層	深鉢	口縁部片	灰黄褐色
283	N−19−4　3層	深鉢	口縁部片	にぶい黄褐色
284	C−2	深鉢	口縁部片	暗褐色
285	A区17住　覆土	深鉢	口縁部片	にぶい褐色
286	N−19−3　4層	深鉢	口縁部片	赤褐色
287	P−19−2　3層	深鉢	口縁部片	にぶい褐色
288	J−18−2	深鉢	口縁部片	にぶい褐色
289	M−16	深鉢	胴部片	灰褐色
290	O−16−2	深鉢	口縁部片	にぶい赤褐色
291	O−18	深鉢	口縁部片	にぶい赤褐色
292	N−18−1	深鉢	口縁部片	にぶい褐色
293	D−10−3　2層	深鉢	口縁部片	にぶい黄褐色
294	N−19−2　4層	深鉢	口縁部片	にぶい橙色
295	A区20住	深鉢	口縁部片	にぶい褐色
296	表土	深鉢	口縁部片	褐灰色
297	N−20−1	深鉢	口縁部片	にぶい赤褐色
298	M−18−3	深鉢	口縁部～胴部片	にぶい黄褐色
299	L−19−2　3層	深鉢	口縁部～胴部片	にぶい褐色
300	N−12　3層	深鉢	口縁部～胴部片	赤褐色
301	M−18	深鉢	口縁部片	灰褐色

番号	出土位置	器種・残存状態		色調
302	A区14住　3層	深鉢	口縁部片	黒褐色
303	M−16	深鉢	口縁部片	にぶい橙色
304	D−2	深鉢	口縁部片	暗褐色
305	N−17−2　1層	深鉢	口縁部～胴部片	にぶい褐色
306	N−18　O−18	深鉢	胴部片	にぶい褐色
307	O−15	壺型	口縁部～胴部片	黒褐色
308	O−17−2	埴型	写残存	赤褐色
309	N−12	深鉢	口縁部片	褐色
310	N−18−1　3層	深鉢	胴部片	にぶい褐色
311	K−17−2　3層	深鉢	胴部片	にぶい褐色
312	L−17　N−18	深鉢	口縁部片	にぶい褐色
313	M−18−3	深鉢	口縁部片	にぶい赤褐色
314	O−17−1	深鉢	ほぼ完形	にぶい褐色

完形および復原個体の法量

番号	器高×口径×底径
150	8.0×−×−
151	8.5×14.0×5.8
158	24.5×−×−
159	19.0×20.0×−
160	24.8×22.0×10.0
161	22.4×19.0×−
162	17.9×−×9.0
163	18.0×14.0×7.5
164	23.0×21.0×−
165	24.0×−×−
166	18.5×11.8×4.8
167	14.3×27.4×−
168	27.0×36.6×−

番号	器高×口径×底径
169	24.9×39.2×−
170	29.0×31.0×8.0
171	22.3×43.6×−
306	32.8×33.6×−
307	32.4×26.5×−
308	20.7×27.0×−
309	14.8×17.8×−
310	7.0×16.7×−
311	4.3×18.1×−
312	14.0×13.0×8.5
313	7.5×11.8×5.9
314	9.6×9.6×−

５．石　　器

大平台遺跡からは9,338点の石器が出土したが、整理の都合上、特殊な石製品を除き図示することができなかった。また、一部の石器を除き石質の調査も行なえず、出土数量の提示と写真による代表的な石器の提示だけとなった。

本遺跡の石器は遺構の確認状況から中期に帰属するものが大半を占めると考えられるが、遺跡からは早期から後期にいたる土器が出土しており、各時期の石器も混入していると考えられ、石器整理の状況からも出土傾向等の概略的報告としたい。

石器の出土傾向として、表土が４％で、Ｂ区が７％Ａ区からは89％と大半を占めている。これは遺構の確認状況や土器出土量と合致している。

石器の検出状態としては遺構出土が38％でグリットおよび表土が62％と、多くが包含層からの出土である。遺構出土の石器のうち、Ａ区10住が19％、Ａ区17住が19％、Ａ区28住が18％でこの３軒で遺構出土石器量の56％を占めている。Ａ区で確認された住居跡のうち約1/2の住居跡が覆土中に多量の土器を包含しており、石器もこれらの土器とともに廃絶住居に廃棄されたものと考えられる。

出土した石器のうち、剥片や自然石が58％を占め、各種の石器製品が42％である。製品の中では打製石斧が41％、剥片石器が30％、磨石・凹石が23％でこれらの石器で製品の94％を占めている。これらのことは３種の石器の使用頻度や廃棄性を示していると考えられる。

出土した石器の特徴の概略は下記の通りである。

打製石斧は短冊形を呈するものが圧倒的に多く中期的様相を示している。また、短冊形の中には神流・鏑川水系の結晶片岩を用いた、無加工かあるいはわずかに柄装着部に加工を加えただけの棒状の石斧が約1/3を占めている。また、打製石斧約2/3が破損していた。磨製石斧は結晶片岩や搬入品である蛇紋岩が多用されていた。

石鏃は無茎が多く、黒曜石とチャートが多用されていた。剥片石器は刃部の辺数によって分類したが、剥離方向と刃部の付け方に一定の手法はほとんど認められなかった。

石匙は少量ながら小型の縦形、横形がほぼ同数出土し、大型異形のものが１点出土した。ドリルは抓みを作り出したものと棒状のもの、剥片を利用したものとがある。また、石槍の先端部１点が出土した。剥片石器・石匙・ドリル・石槍・礫器には安山岩や頁岩が多用されている。

石皿は破損したものがほとんどで、炉の縁石に用いられた例も多い。また、裏面が多孔石状を呈しているものがほとんどである。用材としては結晶片岩系の偏平な礫が目立つ。磨石・凹石は鳥・碓氷川系の円礫が多用されている。

多孔石は安山岩系の礫が用いられ、石棒は無加工の結晶片岩系の礫が用いられている。砥石は偏平な砂岩系の礫が用いられ、使用面は皿状に窪むか溝を有している。また、Ａ区16住の炉の縁石として用いられていた緑色片岩の大型の砥石は径14.5㎝、長さ40㎝で、使用面は内湾し２条の溝を有している。大型の砥石の存在は大珠の未成品の出土もあり、磨製製品の集落内での生産の一端を窺わせるものである。

敲石は棒状の安山岩や頁岩の硬質な礫が用いられており、一方あるいは両端部が破断している。石核は不定形で多方向からの剥離が加えられており、石鏃やドリル等の小型の石器の母岩と考えられる。

石錘（第102・103図）は数量はわずかであるが、本遺跡の眼下には碓氷川の東流しており、遺跡の生業の一端を示すものである。

石器集計表

種類＼位置		A区1住	A区2住	A区3住	A区4住	A区5住	A区6住	A区7住	A区8住	A区9住	A区10住	A区11住	A区12住	A区13住	A区14住	A区15住	A区16住	A区17住	A区18住
打製石斧	短冊形	1	5		12	8	7	20	1	4	114		28	3	9	1	4	90	11
	撥形										2			1				10	
	分銅形														1				
	不明																		
磨製石斧	乳棒状										2							1	
	定角式	1		1		3	1	2			3		1					1	
	小型																		
	不明																		
石鏃	三角				1						1							2	
	無茎		1					3										6	
	有茎																		
	不明																	1	
剥片石器	1刃	1	2		2	4	4	6	1	1	60	1	9	1	6	2	2	40	1
	2刃		1			1		2		2	45		7	1	2		2	13	
	3刃	1			2	2	1	3	1		37		1		2			4	1
	多角									1	6		1						
	その他				1						7							8	1
石匙	縦形																		
	横形				1						1						1		
ドリル																			
石核						1													
石皿		1	1		1	1	3	1	1	1	10				1		1	3	3
磨石	円形	1				1		1					1		1				2
	楕円形				5	7				1	6		3					3	1
	長楕円					1		1	1		7		3		2				1
	小型		5	2	2			4		2	10		2	1	2		2	14	
	不明				4		1	5	1	1	14		7	1	2			25	
凹石	円形				2							1	1		1				
	楕円形	1	1	1	4			3			5	1	3		2	1		16	2
	長楕円		1				2	1		2	2								
	小型										1								
	不明				1		2	1											
石錘																			
磨製石斧							1												1
多孔石		1			4	1					5	1		1				1	1
石棒																		1	
石錐											2								
砥石		1								6	4		1		1			8	
敲石具		1																	
石英質岩					1						1				1			2	
桂化木					1													2	
焼石								4											
剥片		4	2	4	30	21	14	50	2	7	345	4	60	23	40		6	404	29
その他			4											1				7	
計		14	23	8	74	50	36	107	8	28	690	8	128	33	73	4	18	662	54

石器集計表

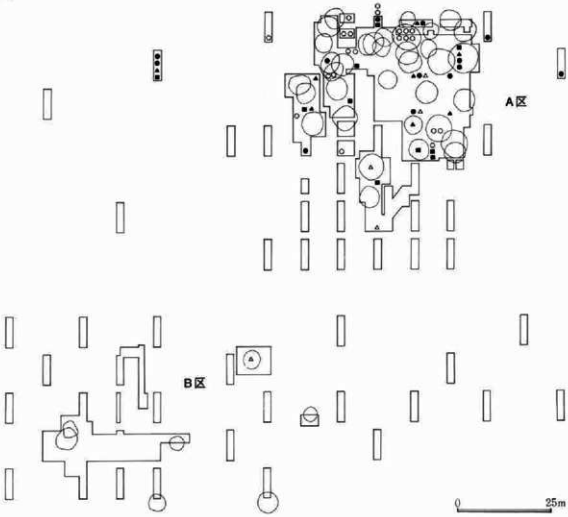
種類＼位置		A区19住	A区20住	A区21住	A区22住	A区23住	A区24住	A区25住	A区26住	A区27住	A区28住	A区29住	A区30住	A区31住	A区32住	A区34住	A区35住	B区1住	B区2住
打製石斧	短冠形	4	8	15	4	6			17	2	77	2	1	2	2	2	16	7	
	撥形	1	1	2							3							7	
	分銅形																		1
	不明																		
磨製石斧	乳棒状								1										
	定角式		2	1			1				1								
	小型										1								
	不明	1		1															
石鏃	三角																1		
	無茎										2								
	有茎																		
	不明																		
剥片石器	1刃		2	2	1		2		3	3	54	2	1			2	6	1	
	2刃	2			2		1	2	1		32		3	2	1		14		
	3刃			1		1			1		16						3		1
	多角		1				1												
	その他			1							8								
石匙	縦形																		
	横形																		
ドリル											2						1		
石錐	楕																		
	器										2								
石	皿	1	11	2			3		1		8		2				2	2	1
磨石	円形	2								1									
	楕円形		2	10	3	1	2				9						2		1
	長楕円	2	2								3			1					1
	小型			4	4		1				20	1	1				4	1	
	不明		6		3				3		38						9		
凹石	円形		2																
	楕円形		4	3		1	1		1		10		1	1			3	1	
	長楕円	2	4								6								
	小型																		
	不明		2										1						
石錘			6														1		
砥石															1				
多孔石	礼石										3								
敲石	棒石										1								
石	核										2								
剥	具										4								
石	材										1								
英	岩														1				
桂	化木			1													1		
焼	石										10								
剥	片	4	14	98	17	13	9	2	12	5	301	6	8	18	1	41	100	6	9
そ	の他			7	4		1				75						26		
計		19	67	148	38	22	22	4	40	11	689	11	18	24	6	45	189	19	14

石器集計表

種類	位置	B区3住	B区5住	B区6住	B区7住	A区住居出土合計	B区住居出土合計	A区土坑出土合計	B区土坑出土合計	A区グリット出土合計	B区グリット出土合計	表土	総計
打製石斧	短冊形	1	1	1	9	476	19	5	5	936	86	34	1,561
	撥形					20	1	1		14	1	1	38
	分銅形					1	1			1			3
	不明												
磨製石斧	乳棒状					4			1	4	1		10
	定角式					17				8			25
	小型					1				12			13
	不明					2				6		1	9
石鏃	三角					5				3	1	1	10
	無茎					12				14	1	4	30
	有茎									1			1
	不明					1				3			4
剥片石器	1刃	1		3	2	221	7	3	3	237	27	6	505
	2刃			1		136	1		2	126	20	2	287
	3刃	1				77	2			65	8	1	153
	多角					10				2			12
	その他				1	26	1		1	15	1		44
石匙	縦形									6		1	7
	横形				1	3	1			4			8
ドリル						3				4		3	10
石錐										1			1
石核						3							3
石皿		1				58	4	1	1	29	1	5	99
磨石	円形					10				6			16
	楕円形			1	1	55	3			71	2	2	133
	長楕円			3		24	4			35	2	6	71
	小型			1		81	2	1	4	60	4		152
	不明				2	120	2			173	6		301
凹石	円形					7	1			3			11
	楕円形					65	1			57	1	8	132
	長楕円			2		20	2	1	1	19	2	1	46
	小型					1							1
	不明			1	1	7	1	1		11			20
石錘						7				11			18
砥石						3				31	2	1	37
多孔石						18		1		8		1	28
石棒						2				1			3
敲石						4				2		1	7
石核						25				37		1	63
海棲具				1		2	1			2			5
石英質岩						6				1			7
柱状木化						5				4	1	1	11
焼石						14				12			26
剥片		12		24	29	1,694	80	1	16	2,726	264	298	5,079
その他					21	125	21			171	2	20	339
計		17	1	38	67	3,371	155	14	35	4,931	433	399	9,338

6．土製品・石製品

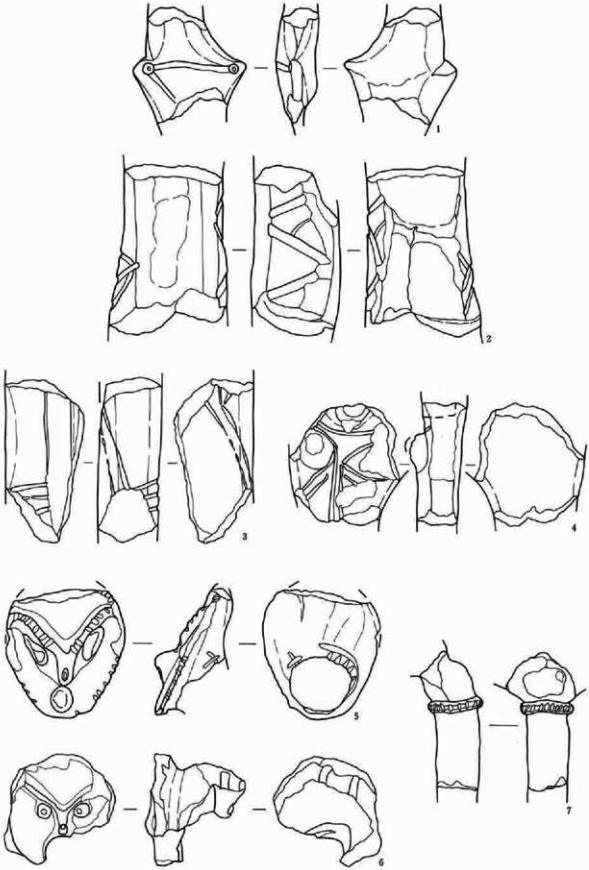
本遺跡から出土した特殊遺物として、土偶・耳栓・土製円盤等の土製品（第99～101図）や飾垂具等の石製品（第102・103図）がある。これらの遺物はB区1住の飾垂具1点を除き、他はすべてA区からの出土である。また、ほとんどが包含層からの出土であるが、A区6住からは石錘6点が出土しており特異な例である。



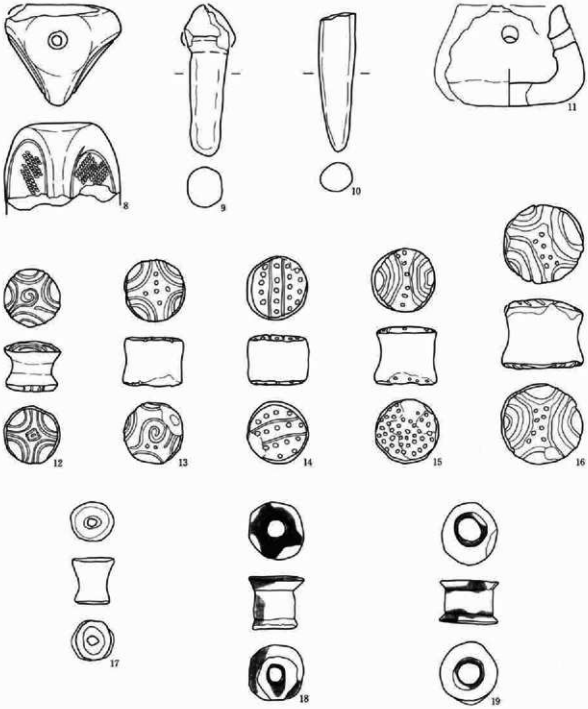
土製品
- ■ 土偶・土製品
- ▲ 耳栓
- ● 土製円盤

石製品
- △ 飾垂具・石製品
- ○ 石錘

第98図　土製品・石製品出土位置図



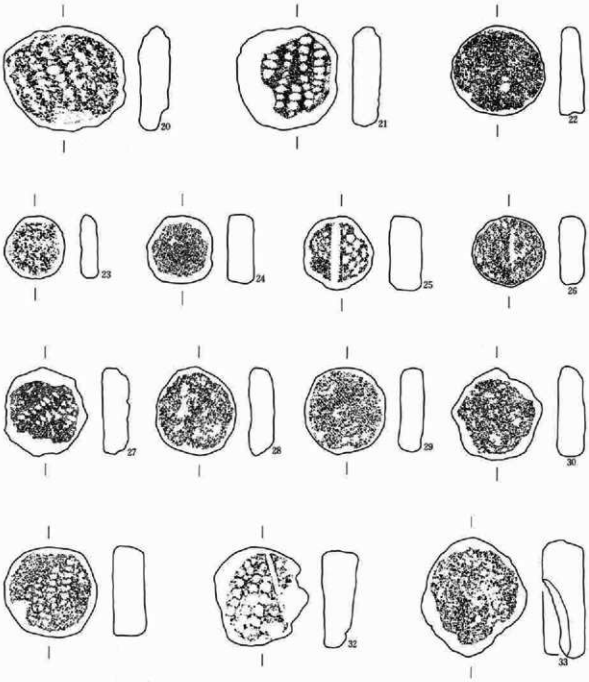
第99図　土製品　(1)（縮尺与）



第100図　土製品　(2)（縮尺⅓）

報告をした土製品は、土偶7点、三角柱形土製品1点、棒状土製品2点、手捏土器1点、耳栓8点、土製円盤14点の合計33点である。未報告分には、棒状土製品と有孔土製円盤の各1点がある。

33点のうち、遺構に帰属できるのは8点だけで、従って時期を特定でき、遺構との関連を明らかにできるものが石製品と同様に少ない。時期は、個別の特徴によると土製円盤が中期後半加曽利E式に限定できるほかは、凡そ中期後半から後期前半である。



第101図　土製品　(3)（縮尺⅔）

土偶は、1～4までが中期後半、5～7が後期前半である。中期の4点は、立像形が板状のもので2と3を好例とする粘土紐作りによる分割塊製作によっており、3は接合面から剥離し、面自身は丸みを持つ程で破損を意図する例ともいえる。文様では沈線が多用されている。後期の3点は、立像形、中空形があり、表現にリアルさが目立っている。土偶全体に見られる破損箇所は、中期と後期とが相補うかの様に胴部と頭部、腕が残存するが、先の接合面での剥離を除いて共通項や顕著な点はない。

三角柱形土製品は、県内2例目の報告[註]である。これにより県内全域での分布と中期中葉～後半にまで時間幅が広がり、今後の資料増加が待たれる東北、北陸地方との関連を知る特徴的な遺物である。

土製品観察表

単位はcm、g

番号	種　類	出土位置	長さ×幅×厚さ	重量	色　調	特　徴
1	土　偶	K−18−2	4.5×4.5×1.7	23.7	にぶい黄橙色	板状、首から胴部、全体は紐作りで肩と臀背面には粘土を貼付、両肩に円形刺突を施し、沈線で結ぶ。頭部と下肢は簡略表現か。
2	土　偶	A区17住　床面	6.6×4.3×3.6	96.8	にぶい黄橙色	胴部、全体は2本の紐を貼付、腹・背とも粗くなで整形、背面には一部、足へ続く隆起が見られる。脇腹には連続する「ハ」の字沈線を施文。
3	土　偶	L−19−3	6.4×3.2×2.7	50.1	明褐色	胴部の右半分、粘土紐の接合面で剥落、腹部は平坦で脇から背にかけて丸みを持つ。胸から脇腹に2条の沈線がめぐり、背は3条の沈線で囲を表現。
4	土　偶	M−17−2	4.8×4.4×2.1	34.2	明褐色	板状、胴部、胸部には乳房を表現する突起があり、上端には口と思われる凹痕がある。沈線が胸元から下胴部に施文されるが背は無文。
5	土　偶	表土	5.0×4.8×2.8	35.7	にぶい橙色	頭部、頂部を欠損、顔面は平板的できざみによる縁取りがあり、粘土紐を貼付した眉も同様で鼻は隆起する。目と口は刺突による凹痕で表現、首にもきざみを施した沈線がめぐる。
6	土　偶	N−12	4.3×4.4×4.0	31.8	黒褐色	中空土偶の頭部、顔面は板状で仮面を被った様に表現。眉から鼻は貼付隆帯で表現され、目と鼻孔は刺突凹痕、口は大きな円孔があく。頭頂部には2対以上の小孔があく。
7	土　偶	A区16住　覆土	5.4×1.7	22.8	にぶい黄褐色	右腕、肩との接合部で剥落、写実的な表現で全体が研磨されている。つけ根にはきざみを施した貼付隆帯が全周する。
8	三角柱形土製品	L−19−2　4層	3.4×4.6	51.0	にぶい黄橙色	各稜は丸みを持つ。三面とも沈線による楕円区画の中に縄文を施文する。長軸中央は径0.4cmの竹管を芯とした貫通孔があく。
9	棒状土製品	A区8住　覆土	5.9×1.8×1.4	15.3	にぶい橙色	男根状、先端はうちかきで欠損する。
10	棒状土製品	M−16−2	5.5×1.5	8.8	にぶい黄橙色	上端は折損、一部に帯状の赤彩が残る。
11	手捏土器	N−17	3.9×4.1×6.0	32.3	にぶい褐色	鉢、内面は指頭痕を残すが外面は平滑になで整形、口縁近くに斜め方向の円孔2つがあく。
12	耳　栓	A区17住　覆土	2.0×2.2×1.6	9.2	橙色	臼形、完存、内面は平坦、外面は凸面で内径より2mm大きい。内外面とも弧状沈線が施文される。
13	耳　栓	N−12	1.9×2.4×2.2	13.2	橙色	臼形、完存、内外面とも平坦で側面のくびれ少ない。内面は弧状と渦巻の沈線、外面は弧状沈線内を刺突する。
14	耳　栓	N−19	2.0×2.5×2.4	13.1	橙色	臼形、完存、内面は中央が少しくぼみ、外面は凸面となる。内外面とも4段の刺突文と2条の平行沈線が施文される。
15	耳　栓	M−20　3層	2.3×2.5×2.1	15.1	橙色	臼形、完存、内面は平坦で外面は凸面となる。側面のくびれは楕円形、内面全体に刺突文、外面は弧状沈線間に縦列の刺突が施文される。

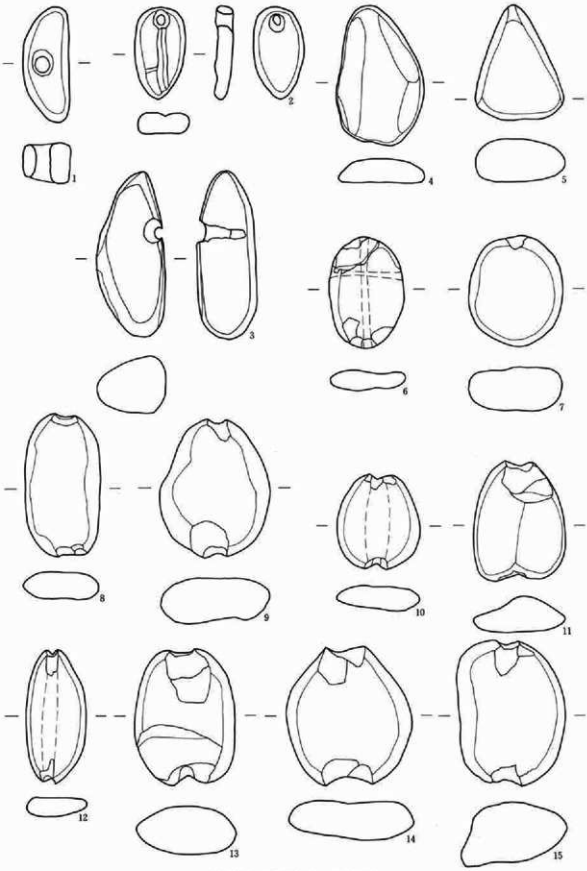
番号	種　類	出土位置	長さ×幅×厚さ　重量	色　調	特　徴
16	耳　栓	M−16　3層	2.8×3.2×2.7　28.3	橙色	臼形、完存。内面は平坦で外面が凸面となる。側面のくびれは楕円形、内外面とも弧状沈線と刺突文を施文する。
17	耳　栓	A区27住　覆土	1.8×1.7×1.1　3.1	橙色	環状臼形、完存、無文だが化粧土を薄く塗っている。環状内面は粗雑な調整痕を残す。
18	耳　栓	C−19−1	2.0×2.2×1.6　5.5	にぶい黄橙色	環状臼形、完存、内面端部は着装のため丸く削っている。無文、全面に赤彩。
19	耳　栓	N−16　4層	1.7×2.3×1.9　6.2	にぶい黄橙色	環状臼形、完存、無文、全面に赤彩。
20	土製円盤	A区28住　覆土	4.1×4.9×1.2　26.0	橙色	完存、側縁はうちかき整形、深鉢胴部。
21	土製円盤	A区21住　覆土	4.0×4.0×1.1　23.0	にぶい黄橙色	完存、側縁はうちかき後に磨き整形、深鉢胴部。
22	土製円盤	A区17住　覆土	3.5×3.7×1.1　15.1	明黄褐色	完存、側縁はうちかき後に磨き整形、深鉢胴部。
23	土製円盤	O−18　3層	2.5×2.4×0.7　5.3	明褐色	完存、全体が磨滅、深鉢胴部。
24	土製円盤	L−16−1	2.2×2.6×1.1　10.2	にぶい黄褐色	完存、側縁はうちかき後に磨き整形、深鉢胴部。
25	土製円盤	N−12	2.9×2.8×1.3　13.4	明褐色	完存、側縁は研磨、縫かけ様のきざみをわずかに持つ、深鉢胴部。
26	土製円盤	N−23	2.8×2.9×1.1　8.7	にぶい橙色	完存、側縁は研磨、表裏に縫かけ様の浅い溝がある、深鉢胴部。
27	土製円盤	O−19−2　2層	3.5×3.3×1.1　15.1	黒色	完存、側縁は7角形にうちかき後に一部研磨、深鉢胴部。
28	土製円盤	N−19−2　4層	3.5×3.2×1.1　12.0	明褐色	完存、側縁はうちかき後に磨き整形、深鉢胴部。
29	土製円盤	N−12	3.4×3.2×1.0　11.8	明赤褐色	完存、側縁はうちかき後に磨き整形、長軸上に縫かけ様のきざみを持つ、深鉢胴部。
30	土製円盤	N−20−2	3.6×3.6×1.1　13.2	明黄褐色	完存、側縁は5角形にうちかき後に粗く磨く、深鉢胴部。
31	土製円盤	M−19−4　4層	3.6×3.7×1.3　22.9	明赤褐色	完存、側縁は8角形に研磨整形、深鉢胴部。
32	土製円盤	O−21	3.9×3.8×1.5　21.6	明赤褐色	一部欠損、側縁はうちかき後に粗く磨く、短軸上に縫かけ様のきざみを持つ、深鉢胴部。
33	土製円盤	表土	4.6×4.2×1.1　26.5	にぶい橙色	裏面刺茎、側縁はうちかき後に粗く磨く、深鉢胴部。

棒状土製品は、9が加曽利Ｅ１式期のＡ区８住出土である。９は男根状で、先端が尖る10とは形状を異にすることは十分考えられ、胎土、成形の差にもあらわれている。

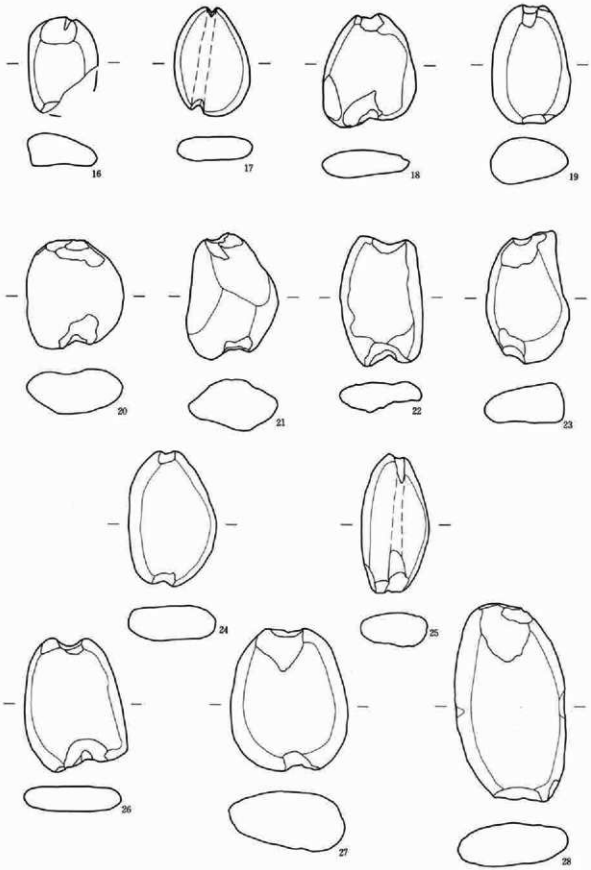
耳栓は、12と17が加曽利Ｅ３式期の竪穴住居跡から出土している。13～16は、形・共通する形状と文様の点で中期後半と考えられ、18と19の２点は精製された作りと赤彩などの点から後期前半とできる。

土製円盤は、側縁の特徴から次の３分類ができる。Ａ類　うちかいたもの、Ｂ類　一部を研磨したもの、Ｃ類　円形に研磨したもので、Ｃ類が多く、一部に縫かけ様のうちかきを持ったものがある。

註．沼田市寺入遺跡から中期のもの１点が出土している。底面を除く２面に角押文が施文されている。（群馬県史　資料編１，1988）



第102図　石製品 (1)（縮尺1/3）



第103図　石製品　(2)（縮尺1/3）

石製品観察表

単位　cm、g

番号	種　類	出土位置	長さ×幅×厚さ	重量	石　質	特　徴
1	硬玉製大珠	A区1住　覆土	4.5×1.9×1.6	22.3	翡翠（淡緑色の縞模様）	半月形、側面に稜を残す肉厚、側縁寄りに孔径6mmの孔が両面穿孔である。各面の研磨は一様に平滑だが両端部には擦痕と敲打痕を残す。
2	飾　糸　具	B区6住　覆土	3.6×2.0×0.9	10.3	滑石	全体に丸みをおびた楕形、上端に両面穿孔で径5mmの円孔があく。表面のみ円孔にかけて垂線が刻まれ、下端近くで十字をなす。
3	大　　珠	N−19	6.1×2.8×2.3	38.8		半月形、穿孔時の破損による未製品、穿孔の様子からすると整形型だったものを半月形としたか、成形は殆ど研磨で、穿孔は棒錐による片面
4	磨製石斧未成品	J−18　3層	5.5×3.6×0.9	30.3	蛇紋岩	定角式小型磨製石斧の未成品、表裏をほぼ平滑に研磨し、側縁の一部に研磨が入った段階
5	三角形石製品	M−19−2　3層	4.5×3.6×2.0	45.0		二等辺三角形、頂部に最大の厚さがある。各面とも平滑であるが少し凸面状態にある。
6	礫　石　錘	A区12住　覆土	4.4×3.0×0.7	14.1		楕円形、長軸の一端を粗くうち欠き、短軸上の側縁にはわずかにきずを持ち、横位の擦痕がある。
7	礫　石　錘	A区12住　覆土	4.4×3.8×1.7	36.4		ほぼ円形、紐かけは長軸上の両端にあるがわずかな痕跡程度である。
8	礫　石　錘	A区35住　覆土	5.6×3.1×1.2	35.5	緑色片岩	隅丸長方形、紐かけは長軸上の両端にありうち欠いている。
9	礫　石　錘	A区35住　覆土	5.5×4.4×2.0	53.8		不整楕円形、紐かけは簡単なうち欠きによる。全体はわずかに磨耗している。
10	有溝石錘	A区20住　覆土	3.8×3.3×1.0	17.8		卵形、紐かけはうち欠き後に溝状に磨く。その間は幅約7mmの凹線状の溝が上下にめぐる。
11	礫　石　錘	A区20住　覆土	4.7×3.7×1.4	27.2		不整楕円形、紐かけは簡単なうち欠きによる。その一部は溝状に磨耗している。
12	有溝石錘	A区20住　覆土	5.3×2.4×0.8	18.5	緑色片岩	長楕円形、紐かけはうち欠き後にU字状に磨く。その間は幅約5mmの凹線が上下にめぐる。
13	礫　石　錘	A区20住　覆土	5.3×4.0×1.9	51.8		楕円形、やや厚い、紐かけは粗くうち欠き、下端は深くV字状となる。
14	礫　石　錘	A区20住　覆土	5.5×5.2×1.6	58.4		卵形、紐かけは簡単にうち欠いた後に両方とも軽く敲打している。下端のうち欠きがやや大きく深い。
15	礫　石　錘	A区20住　覆土	5.8×4.4×2.6	91.2		不整楕円形、やや厚い、紐かけは敲打によるうち欠き程度でU字状、浅い。
16	礫　石　錘	O−18−2	3.8×2.8×1.4	20.8	緑色片岩	楕円形、下部節理面による欠損、紐かけはうち欠き後に細く溝状に磨く。
17	有溝石錘	N−17−3　3層	4.3×3.0×0.9	17.9		卵形、紐かけはV字状に磨きこむ。その間は幅約5mmでわずかに磨く。
18	礫　石　錘	O−15　3層	4.5×3.7×1.2	26.1	粘板岩	不整楕円形、紐かけは粗くうち欠く。上端は一部を溝状に磨き、下端は敲打調整している。

番号	種　類	出土位置	長さ×幅×厚さ　重量	石　質	特　徴
19	礫石錘	O−17−1	4.7×3.2×1.9　37.0		楕円形、やや厚い。紐かけは敲打によるうち欠き程度である。
20	礫石錘	O−17−1	4.3×3.9×1.8　42.8		不整楕円形、紐かけは粗いうち欠きによる。両方とも敲打調整され、下端は U字状をなす。
21	礫石錘	O−17−1　覆土	5.0×3.7×2.0　40.1		不整形、やや厚い、紐かけは粗いうち欠き後に敲打調整されている。
22	礫石錘	L−17−1　4層	5.2×3.4×1.2　26.7	結晶質片岩	楕円形、紐かけはうち欠き後に溝状に磨く。左側縁に打痕があり十字形に紐かけか。
23	礫石錘	O−17−1　覆土	5.3×3.4×1.7　35.3		不整形、やや厚い、紐かけはうち欠き後に敲打調整している。
24	礫石錘	M−15−3　2層	5.4×3.5×1.7　43.0		楕円形、紐かけは敲打調整後に粗く磨いて溝状としている。
25	有溝石錘	O−18−2　3層	5.5×2.7×1.4　33.4	緑色片岩	長楕円形、紐かけは簡単にうち欠いた後に溝状に磨く。その間は上下に浅い凹線で結ぶ。
26	礫石錘	M−17　1層	5.3×4.1×1.1　37.4		不整楕円形、偏平、紐かけは粗くうち欠いた後に一部を溝状に磨く。
27	礫石錘	N−17−4　3層	5.6×4.7×2.3　85.0		卵形、厚い、紐かけは粗くうち欠いた後に敲打調整している。敲打は側縁の一部にも及ぶ。
28	礫石錘	L−19−3　3層	7.8×4.4×1.7　92.4		長楕円形、偏平、紐かけは簡単にうち欠いた後に敲打調整。両側縁中央にも敲打があり十字紐かけ。

小　結

石製品は、大珠２点、滑石製海垂具１点、用途不明三角形石製品１点、磨製石斧未成品１点、石錘23点がある。石器総量の中では顕著な存在ではないが、硬玉製大珠の存在などに特徴がある。

県内の大珠出土例は、報告されたものに勢多郡赤城村三原田遺跡の硬玉製４点、太田市小町田遺跡の硬玉製１点などが知られているが、本例はこれに次ぐものである。本例は、安山岩製のものと共伴する点で北陸地方からの硬玉製、搬入品だけでなく、遺跡内で模倣製作したことも考えられる。磨製の石製品や斧未成品の存在は、これを技術的に裏付けるものであり、安山岩製大珠自身の穿孔具のちがいも指摘できる。

石錘は、紐かけの加工状態から礫石錘と有溝石錘とに大別し、礫石錘を紐かけの状態から、(1)うちかきによるもの、(2)うちかき後に敲打調整したもの、(3)うちかき後に一部を磨いたもの、とに細別した。法量の特徴は、長軸で3.5㎝と５㎝前後の２つに集中域があり、法量上の統一感が見られるが、重量分布では14〜92ｇまでと分散する。ただし、紐かけのえぐりの深さで見ると、全体に均整感のあるものは両端の深さが近似し、不整形のものは重心のある方を粗く、深くうちかいてバランスをとる傾向がある。石材では、遺跡地近くの鳥川、碓氷川水系に多い安山岩と西の鏑川、鮎川水系の片岩が混在しているが、前者は不整形、厚いもの、後者は薄く偏平で均整感のあるものが多い。

第５章　古墳時代の遺構と遺物

大平台遺跡からは縄文時代以外の遺構として、古墳時代前期の方形周溝墓２基が確認され伴出遺物も極少量出土した。また、滑石製模造品１点が出土した。遺跡周辺は横穴式石室を有する小円墳群が点在しており、遺跡周辺の丘陵頂部は後期古墳の群集地として知られていたが、本調査により、古墳時代前期より墓域として設定されていた可能性が示唆される。

１号方形周溝墓（第104図　図版31－１・２）

Ｂ区北西部のＤ－10を中心に位置している。丘陵頂部縁辺の北西方向へ下る傾斜面にあり、等高線に直交して築かれている。トレンチ内だけの確認であり、西辺・南辺・東辺の一部とコーナー部を確認しただけである。規模は21.50ｍ四方と推定される。周溝は幅1.80～2.70ｍで深さは44～54㎝である。周溝の断面形は底面がやや平坦で丸みを持って立ち上っている。出土遺物は南西コーナー部から土師器の折り返し口縁の甕の口縁部破片と土師器台付甕の破片３点が出土した。本周溝墓の時期は出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

２号方形周溝墓（第104図　図版31－１）

Ｂ区北西部のＧ－12を中心に位置している。本周溝墓は南辺の一部と南西コーナー部を確認しただけであり、全体の形状・規模は不明である。一部確認した周溝は1.30～1.40ｍで深さは58～66㎝で、断面形はU字状を呈していた。出土遺物はないが、１号周溝墓と平行して築かれていたと考えられ、本周溝墓も１号と同時期と推定される。

１号周溝墓出土遺物

土師器甕（第104図１　図版31－３）

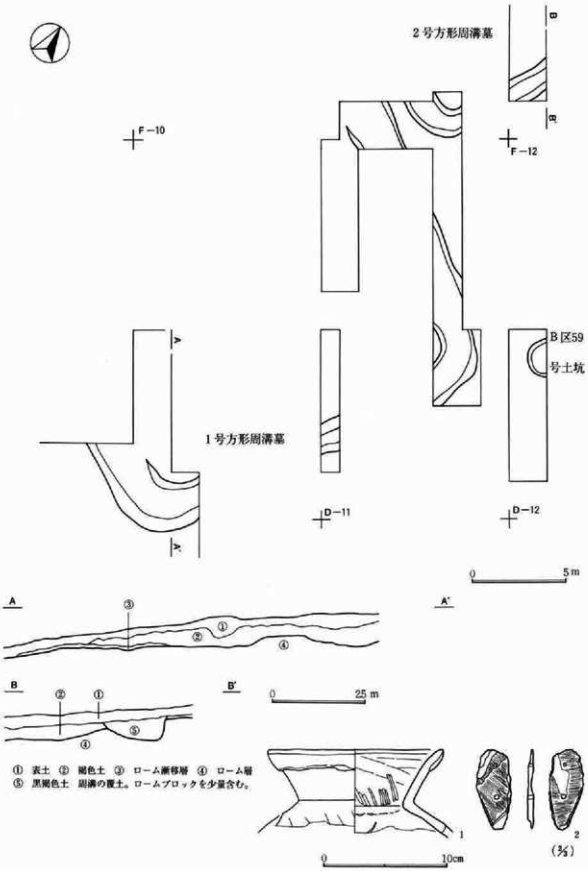
折り返し口縁を有する甕の口縁部から頸部1/3残存の破片である。口縁部は外傾して開き端部はわずかに屈曲してさらに開く。頸部は「く」の字状に屈曲し張りのある肩部を呈する。口縁部外面は横ナデ調整され、頸部外面はヘラナデ調整されている。口縁部内面はヘラケズリ後、棒状工具による放射状の研磨が見られる。頸部内面は輪積痕が認められ、ナデ調整されている。色調は明褐色を呈し、胎土には微砂粒、鉱物粒子を含む。焼成は良好で外面はやや磨滅している。残存高は6.5㎝、口径の復原径は14.6㎝である。

土師器台付甕（図版31－４）

Ｓ字口縁台付甕の頸部と胴部下半と脚部の小破片である。頸部の屈曲は大きく肩部の張った器形を呈すと考えられる。また、脚端部内面は折り返されている。外面はヘラケズリ後、ハケ目調整が施され、内面はナデ調整されている。また、脚部内面には指頭圧痕が見られる。色調は淡褐色を呈し、胎土には微砂粒を含む。焼成は良好である。

Ｂ区出土の滑石製模造品（第104図２　図版31－５）

残存状態は長さ3.2㎝、幅1.3㎝、厚さ0.3㎝で両端と側縁部が一部欠損している。双孔の剣形模造品で、表裏面や側縁部に粗いミガキ成形痕が見られる。古墳時代後期の所産と考えられる。



第104図　古墳時代の遺構と遺物図

第6章　まとめ

1．縄文時代中期前半～中葉の土器について

大平台遺跡からは、縄文中期の土器が多量に出土したが、中期前半の資料は後半のものに比して量的には少ない。群馬県内の該期資料の多くは北部の山麓部及び東部の平野部に集中し、本遺跡の立地する西部の丘陵地帯の調査遺物は未発表資料を加えたとしても貧弱であり、本遺跡出土の土器群は少量ながらも該期研究に良好な資料を提示できよう。ここでは、本遺跡A区145号土坑出土の深鉢を中心に若干の所見を述べる。

A区145号土坑の大型深鉢は、本遺跡出土の深鉢の中でも屈指の大きさを誇り、また、文様要素も複雑であり、展開図を必要とした逸品である。中部山岳地方、南関東地方の影響を強く受けた土器である。突起、胴部文様帯に意匠文を配し、各文様帯内の文様割り付けはしっかりしている。意匠文はおそらく人体状モチーフが歪曲化したものと思われる。勝坂3式併行だが群馬県内では資料が乏しく、類例資料による検証はできない。本遺跡の立地する地理的環境を考えると、群馬県内の該期資料の蓄積が始まった県北部の土器群とはやや様相を異にするであろう。文様帯は3帯であり、口縁部文様帯は突起を中心にした正副2単位を配す。胴部文様帯は2帯に分割され、上位の文様帯は人体状のモチーフが連続し5単位を数える。下段の文様帯は楕円枠状文の配列で8単位を数える。口縁部文様帯を基本単位とすると胴部上位の文様帯は奇数単位配列で口縁部文様帯の対極する2単位とは整合しない。このことは、器面の文様割り付けの規則性が2単位から、後続する中期中葉の加曽利E式出現期に見られる複雑な単位構成を取る経過の過渡的な手法と捉えられよう。

また、本資料にも認められるが、対称性を崩す土器が持つ文様構造の特徴として、正面観の強調が著しい事が上げられる。これは、県内の勝坂式の前半段階に認められる大形突起や大型の橋状把手にその初現が求められよう。前半段階では、胴部文様帯などに非対称性は多くは認められず、横帯文区画が強い構成を取る。しかし、いわゆる「焼町土器」などに代表される在地系の土器群の影響であろうか、各文様帯が等割される構成は徐々に薄れていくようである。この在地系の土器は本遺跡でもA区12住6、15～27、A区29住に出土しており、群馬県北域ばかりではなく平野部にも根強く分布することが考えられる。

前述のように勝坂式後半段階で、文様構成の非対称性が一特製として、次代の加曽利E式土器への移行に大きくかかわるとすれば、A区145号土坑の深鉢は本来の勝坂式土器の持つ文様構成ではなく、過渡的な存在を示唆する構造であろう。そして、A区12住や29住などに見られる在地系の土器群はこの過渡期において、文様構成の変化に重要な役割を担っていたのではないだろうか。グリッド出土遺物ではあるが131～136に認められる横位蛇行隆線などは、在地系の土器群の中でも新しい文様要素であろう。

この横位蛇行隆線は他にA区8住、12住にも認められ、特に12住出土の1群は「焼町土器」の系統に位置する。しかし、本来の「焼町土器」は12住6、15のように頸部や屈曲部に幅狭の文様帯を設けず、蛇行隆線は施されない。勝坂式の文様要素である波状文や山形文からの影響とも捉えられ、本遺跡の立地する群馬県西部を念頭におくと、加曽利E式出現期に在地の土器群に勝坂式終末的要素の影響が与えられたと考えられないだろうか。

群馬県における縄文中期前半から中葉にかけての土器群は、複数の型式や在地の系統が混在するようである。本遺跡の該期土器群は勝坂式後半から終末段階及び加曽利E式出現期に併行し、おそらく中期後半の加曽利E式初現のものと同時存在する可能性もある。その中で、145号土坑出土土器は中部山岳や南関東地方で見られる勝坂式に極めて近く、複雑な県内の中期土器群の変容過程を捉える際に基礎的な資料となろう。

2．縄文時代中期後半の土器について

大平台遺跡の出土土器の主体は中期後半に属するものであり、検出遺構の大半は当該期に所属するものと考えられる。ここでは前段で土器観察表や住居跡の時期決定の基準として使用した、加曽利E１～４式の段階についておおまかに触れ、さらに主体的時期と考えている加曽利E３式の４段階案について提示し、後段では、口縁部文様帯からの系統関係について若干の問題提起をしたい。資料としては遺構・グリッド出土を問わず全段階を通して器形・文様の捉えやすい深鉢を扱い、また、加曽利E式を表示するに当たっては１～４のアラビア数字を使用することをことわっておきたい。

段階説明

第105図に提示した加曽利Ｅ式の段階設定図は、当遺跡の土器の分析から導き出したものではなく、他遺跡における分析を踏まえた概念図的性格のものである。

加曽利Ｅ１？式段階としたのは、勝坂・阿玉台式的な要素を色濃く残した段階である。これらの土器が加曽利Ｅ２式へ漸移的に変化したと仮定すると、段階的欠落が想定され、いわゆる加曽利Ｅ１式に先行する可能性もあるが、南関東でいう加曽利Ｅ１式土器は県内において明確な出土例が無く、群馬県における加曽利Ｅ１式段階の土器群として捉えておきたい。この段階については渋川市行幸田山遺跡や赤城村三原田遺跡等での分析で確定するものと思われる。

加曽利Ｅ２式段階としたのは、口縁部文様帯・頸部無文帯・胴部文様帯の三帯構成をとり、定型化した一群である。この段階では17や19のように曽利式や大木式に系統が求められるような土器の共伴が見られる。

加曽利Ｅ３式段階としたのは、口縁部文様帯・胴部文様帯の二帯構成を特徴とするもので、特に胴部文様帯における無文部のあり方及び施文技法から４段階が想定できる。

第Ⅰ段階は、胴部文様帯の沈線間を磨消し等によって無文部としないことを特徴としており、加曽利E２式からの漸移的変化として捉えられる。口縁部文様帯の区画は、隆帯と沈線を組み合わせて明確に施している。この段階には、前段階で出現すると考えられる22のような連弧文系の土器の共伴が多く認められる。

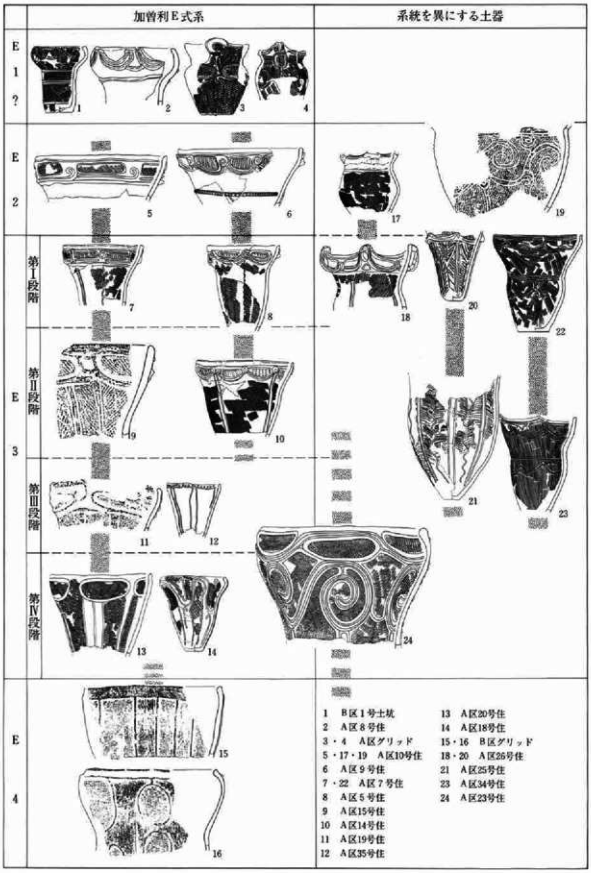
第Ⅱ段階は、懸垂する平行沈線間を磨消して無文部とする段階で、口縁部文様帯は第Ⅰ段階同様隆帯と沈線で明確に区画する。また、胴部文様帯における平行沈線の幅が、次段階と比較して狭いことも特徴としてあげることができる。

第Ⅲ段階は、胴部文様帯の無文部の幅が広くなり、充填縄文技法によって表現される。また、口縁部文様帯の区画は幅広の沈線主体で施文され、胴部文様帯との境界は曖昧な傾向がある。

第Ⅳ段階は、胴部文様帯の無文部は第Ⅲ段階同様充填縄文技法によっており、口縁部文様帯は幅広の沈線（撫で状）で区画され、胴部文様帯との境界は曖昧である。また、この段階では、口縁部に文様帯を持たない14のような文様構成の異なる土器が顕著に共伴することが知られている。この加曽利E３式段階では、前述の連弧文系土器・曽利系土器・曽利縄文系土器などの系譜を異にする土器群がそれぞれに変化をしているものと思われる。

加曽利Ｅ４式としたのは、加曽利Ｅ３式で文様帯の主体を占めた口縁部文様帯を持たないことを特徴とし、細く鋭い沈線または微隆帯で文様施文しているものである。

次に、調査時の新旧関係所見から上記段階設定の検証をすると、Ａ区10号住（Ｅ２）→Ａ区17号住（Ｅ３第Ⅰ段階）、Ａ区９号住（Ｅ２）→Ａ区７号住（Ｅ３第Ⅰ段階）、Ａ区24号住（Ｅ２）→Ａ区31号住（Ｅ３第Ⅱ段階）、Ａ区２号住（Ｅ３第Ⅰ段階）→Ａ区35号住（Ｅ３第Ⅰ段階）→Ａ区22・28号住（Ｅ３第Ⅲ段階）、Ａ区33号住（Ｅ３第Ⅱ段階）→Ａ区19号住（Ｅ３第Ⅲ段階）→Ａ区20号住（Ｅ３第Ⅳ段階）→Ａ区30号住（Ｅ



第105図　加曽利E式段階模式図

3第Ⅳ段階)、A区29号住(勝坂Ⅱ)→A区13号住(E3第Ⅲ段階)→A区21号住(E3第Ⅳ段階)、A区16号住(E1?)→A区14・15号住(E3第Ⅱ段階)→A区6号住(E3第Ⅲ段階)の関係が捉えられ、ほぼ第105図に提示した各段階が堰に推移していることがわかる。

以上加曽利E1～4式について述べたが、加曽利E1式段階の捉え方には未解決の部分があると思われ、今後の検討を待つ以外にない。加曽利E3式の段階区分については、上野国分僧寺・尼寺中間地域(以下国分寺中間地域遺跡と略称)出土土器の検討から既に4段階区分を提示済であるが、この2・3段階を当報告では施文技法主体の検討からⅡ～Ⅳの3段階に分離したため、内容に若干の齟齬が生じている。対応関係としては2段階→第Ⅱ段階、3段階→第Ⅲ・Ⅳ段階とすることができる。ここで国分寺中間地域遺跡で4段階とした時期について当遺跡では捉えることはできなかった。しかしこの段階の資料は、国分寺中間地域遺跡例の他、当遺跡と烏川を挟んだ対岸に位置する下佐野遺跡でも検出され、国分寺中間地域遺跡だけの特殊性とは考えられなくなりつつある。加曽利E3式の段階設定についてはさらに検討を加えていきたい。

系統に関する問題

当遺跡出土の加曽利E2～3式にかけて、口縁部文様帯の構成に2つの特徴的な流れが認められることに気付いた。それは第105図に提示したA(5→7→9→11→13)とB(6→8→10)である。当遺跡内でのA・Bの明確な共伴関係は認められないが、下佐野遺跡・国分寺中間地域遺跡等の例からも併行して同様の変化をしていることは明らかである。A・B共に基本的には楕円区画文と小渦巻文で構成されるが、Aが口縁部文様帯の下端をほぼ水平に区画し帯状文とするのに対して、Bは小渦巻文を連結し隆帯を弧状に施して口縁部文様帯を構成している。また、Aが汎関東的に主体的に見られるのに対し、Bは主体を占める地域は認められず、特に南関東及び県内東部ではあまり顕著に見られないようである。この点については下佐野遺跡報告中でも指摘した。このBの系統は、県内の加曽利E2式以前の段階では第105図2の土器などに類似がみられるだけで、明確に系統を追うことはできず、Bが当県内西部で比較的顕著に見られるとしても、県内で成立したものとは考えにくい土器である。このBの系統については、南関東のいわゆる加曽利E1～E2式段階の口縁部文様帯に、S字文系・渦巻文系・一端に小渦巻文を有する連弧状系等のバラエティが見られ、この連弧状系の文様帯の下端を区画する隆帯が省略されることによって成立したのではないかと考えている。したがってA・B共にその系統は、いわゆる汎関東的な加曽利E式を成立させた地域に求められるものであるが、それが特に当県西部域に比較的良く根付いたとみるべきと思われる。いずれにしても当遺跡を特徴付ける土器群である。

以上顕著な違いの認められるA・Bの2系統について取り上げたが、Aとしたものもその文様構成は1系統とは考えられず、今後この文様の系統を体系付けて考えてみたいと考えている。

3. 小　　結

大平台遺跡は群馬県西部にあり長野県境の山脈に水源を持つ烏川・碓氷川・鏑川に挟まれた、低丘陵ながら狭峡で水利に乏しい岩野谷丘陵の北端に位置している。遺跡は丘陵頂部に近い台地の頂部とこれから続く北方へ緩やかに下る台地の2地点(前者がB区、後者がA区)に分かれ、遺跡の北西約100mに湧水をひかえた丘陵中では稀な居住適地である。

B区は南北100m、東西80mほどの台地の頂部で、B区とA区との距離は50mほどであるがこの間は比較的急傾斜な面となっており、A区はB区より約8m低い。A区は幅約80mの北方へ緩やかに下る台地の端部にあり、東西は埋没谷が入り込み北端は比高差約2mの小崖が東西に走っている。A区の北方にも台地が続く

が小屋により地形的には断続している。

概述した上記のような地理的、地形的条件下に立地する大平台遺跡の縄文時代の出土土器や住居の構造・分布は下記の様相を示す。

出土土器の様相

大平台遺跡の初現の土器は早期前半に比定される楕円押型文土器である。その後、早期後半の条痕文系土器群から後期中葉の加曽利B式まで、若干の断絶を有するがほぼ連綿と各時期の土器が出土している。

早期後半の土器群は在地的様相を示すもので占められている。前期初頭には在地の土器群とともにB区2号住に見られる特異な施文工具による文様構成をとる土器が存在する。また、中葉段階には有尾式系の土器が、後半段階には興津式系の土器等が在地系の土器に伴出する。

中期は初頭段階では在地的様相を示しているが、中葉段階では中部山岳地帯の影響を多分に受けた土器群が展開している。後半段階初頭では在地的な土器群とともに中部山岳や関東東部に特徴を持つ土器が入り混り、搔鉢期の様相を示している。後半中葉～末段階は在地色の強い土器群（特に烏・磯氷川水系が基盤と考えられる土器群の存在が予想される。）が主に展開し、これらに伴って曽利系・大木系・連弧文系の土器が伴出している。なお、後期の土器群は在地系の土器が展開している。

以上のように各時期において、在地の土器群が展開する段階と在地の土器群とともに他地域の影響を受けた土器を伴う段階とがあり、特に中期中葉から後半段階では群馬西部に独自の地域性を持った土器群の存在が窺われる。

住居構造の変遷

出土した土器は早期から後期に及ぶが確認された住居跡は、前期初頭1軒、中期初頭～中葉前半2軒、中期中葉後半6軒、中期後半32軒である。住居は未完掘のものや重複による破壊により、全体構造が判明する住居は限定されるが、各期の住居構造は以下の通りである。

前期初頭段階　B区2住の1軒だけである。本住居は隅丸台形をなし、規模は約4.10×3.60mで4本主柱と考えられ周溝が全周している。しかし、炉は他住居との重複により不明である。本県における花積下層式段階の遺跡としては月夜野町前中原遺跡（住居跡4軒）や赤城村三原田城遺跡（住居跡8軒）等があり、これらの住居跡は隅丸方形や長方形を呈し、炉は石組み炉、地床炉、埋設土器を伴う石組み炉、石を伴う地床炉がある。[注1] 本遺跡のB区1住は県内例に比し、小規模であるがこの時期の一般的な形態をなしていると考えられる。

中期初頭～中葉前半段階　B区6・7住の2軒で6住を完掘した。傾向を示すことはできないが、B区6住は径約4.70mの円形を呈し、周溝はなく4本主柱で炉は地床炉であった。

中期中葉後半段階（加曽利E式出現期）　A区11・12・29住とB区1・3～5住（3～5住は確定的ではない。）の7軒がある。住居の全体構造を完掘した例に欠けるが、径が4～6mの円形を呈し、周溝は全周する傾向にある。主柱は明確でない。炉は方形の石囲い炉と長方形の石囲い炉で炉体土器を持つ例がある。しかし、炉体土器は中期後半段階に比べ小型のものが用いられていた。前段階に比べ、平面形や規模は変化ないが、炉の構造に石囲い炉が用いられており、次段階以降に引き継がれる形状の変化が見られる。

中期後半初頭段階（加曽利E1式）　A区8・16住の2軒があり、1軒を完掘しただけである。A区8住を例にとれば、平面形は楕円形を呈し、規模は5.30×5.50mで周溝は全周していた。主柱は6本で炉は円形の石囲い炉である。前段階に比べ、規模は変化ないが平面形が本段階以降に多出する傾向となる楕円形を呈している。炉は円形が加わることになる。

中期後半加曽利Ｅ２式段階　Ａ区３・９・10・24住の４軒があり、３軒を完掘した。平面形は楕円形を基調とし、規模は径が６ｍ前後が一般的と考えられるがＡ区10住は径が約7.30ｍと規模が１回り大きいものが出現する。周溝は全周する傾向にあり、主柱は５本と６本のものとがある。炉は石囲い炉で長方形より方形を呈するものが多い。また、小型の炉体土器を有する例がある。Ａ区10住は釣手形土器の出土もあり規模の点からも集落内の一般的住居とは異なる可能性も考えられる。

中期後半加曽利Ｅ３式第Ⅰ段階　Ａ区１・２・４・５・７・17・25（本住居は２時期に分かれる。）・26・35住の９軒がある。平面形は円形と楕円形がほぼ半数ずつである。規模は径５～6.50ｍ前後と比較的規模が大きくなる傾向にある。また、Ａ区17住は径約８ｍと本遺跡の中で最大規模である。周溝は全周する傾向にあり、主柱は６本を基調とするがＡ区17住は規模に合わせた８本柱である。炉は石囲い炉で方形と長方形がほぼ半数ずつで炉体土器を持つ例がほとんどである。本段階の住居構造は安定した感がある。また、Ａ区17住は占地の点からもＡ区10住の系譜を引くものと考えられる。

中期後半加曽利Ｅ３式第Ⅱ段階　Ａ区14・15・25・31・33住の５軒があり、全体構造が確認できる例は少ない。平面形は楕円形を基調とし、規模は径６ｍ前後に落ち付く。周溝は全周する傾向にあり、主柱は４本の例が確認されている。炉は長方形を基調とする傾向にあり、炉体土器を持つ例が半数弱である。

中期後半加曽利Ｅ３式第Ⅲ段階　Ａ区６・13・19・22・23・27・28・32・34住の９軒がある。平面形は円形と楕円形がほぼ半数ずつで、規模は径６ｍ弱の例が多い。周溝は全周する傾向にあり、主柱は４～８本と様々である。炉は石囲い炉を基調とするが埋甕炉もある。また、方形と長方形が半数ずつで炉体土器を持つ例が１例と炉も多様性を有する傾向にある。

中期後半加曽利Ｅ３式第Ⅳ段階　Ａ区18・20・21・30住の４軒があり、全体構造が確認できる例はない。平面形は円形と楕円形とがあり、規模は４ｍ弱～７ｍ強と差がある。周溝は全周する傾向にあり、主柱は明確でない。炉は石囲い炉を基調とするが、平面形は方形・長方形・円形と多様で大型の炉体土器を有する傾向にある。

以上の住居構造の変遷において中期ではいくつかの画期が認められる。初頭～中葉前半と中葉後半では平面形・規模は変わりないが炉構造に変化が現われる。次の後半初頭には平面形や主柱穴配置に変化が現われ、加曽利Ｅ３式初頭段階は規模の拡大傾向が認められ、構造上の一応の安定が見られる。加曽利Ｅ３式後半段階は構造や規模に多様性が認められる。

その他の構造上の特徴として、中期の住居跡９軒が改築を行なっており、炉と主柱穴を中心に改築している。また、炉の縁石には石皿が多用されている。中期後半段階の６軒の住居跡に出入口部の構造が推定される例がある。また、加曽利Ｅ３式前半段階の２軒に埋甕が住居の南西方向周溝中に埋設されていた。また、加曽利Ｅ３式後半段階の２軒の住居跡において、廃絶時に炉体土器上面に蓋石を行なう例が認められた。また、Ａ区５住は炉縁に立石を有していた。

住居の分布傾向

住居の分布は調査範囲が限られたものであり集落全体の推移をとらえることはできないが、中期については限定的ながらその動向を窺い知ることができる（時期により段階を設定したが１段階内での住居間の時期差は改消されていない）。

前期初頭段階　確認されたのはＢ区２住の１軒だけである。住居はＢ区台地頂部の西縁部に占地しており、同時期の小集落の存在が予想される。なお、本遺跡周辺の丘陵頂部平坦面には前期の遺物小散布地が数ケ所あり、各期の遺跡が点在している。

第6章　まとめ

中期初頭～中葉前半段階　確認されたのは2軒だけである。2軒はB区の北縁部と東縁部に占地しており、A区には存在しない。本段階の住居群はB区に占地していたと考えられ、数軒の小集落を形成していたと推定される。

中期中葉後半段階　A・B両区に7軒（内、3軒は時期が確定的でなく、また、時期差が認められるものもある。）が確認された。A区の3軒は北西部と南東部に分れて占地しており、B区の4軒は中央部寄りに占地している。本段階からB区からA区への進出が始まり、小集落の併存状態が出現したと考えられる。

中期後半初頭段階（加曽利E1式）　A区に2軒の住居が確認された。2軒は北縁部と南縁部に分れて占地している。また、土坑からの遺物出土状態からB区にも住居の存在が考えられ、前段階と同様に2地点に分れて小集落が形成されていたと考えられる。また、A区の住居の占地状態も前段階と同様の傾向を示す。

中期後半加曽利E2式段階　A区に4軒の住居が確認され、本段階以降、加曽利E3式未段階までは住居はA区だけに占地する。住居は南西部を除く他の縁辺にそれぞれ占地している。中期中葉～本段階までのA区住居群は環状を形成する様相を示している。

中期後半加曽利E3式第Ⅰ段階　A区に9軒の住居があり、住居数が前段階までより約2倍に増加する。住居はA区台地の中央部から西縁部にかけて占地している。加曽利E3式段階の住居群は前段階までのA区での住居占地と異なる様相を示す。

中期後半加曽利E3式第Ⅱ段階　A区に5軒の住居がある。住居数は前段階に比して約1/2となり、占地も北縁部に限られている。

中期後半加曽利E3式第Ⅲ段階　A区に9軒の住居があり、住居数は再び増加する。住居はA区台地中央部から北西部にかけて占地している。

中期後半加曽利E3式第Ⅳ段階　A区に4軒の住居があり、住居数は減少する。住居は北縁部から東縁部に散在的に占地している。

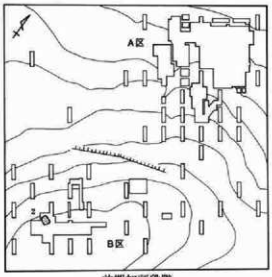
中期加曽利E4式段階　A・B両区ともの住居の確認はないが、B区台地頂部中央部寄りのD－12グリットで確認された風倒木痕からは本段階の一括遺物が出土しており、住居の存在した可能性があり、また、A区においては本段階の土器がほとんど見られない所からも、中期未段階で住居占地の転換が再び行われたと考えられる。

なお、後期の遺物は初頭から中葉段階まで継続的に出土したが、遺構は確認されなかった。しかし、後期の遺物はA区北縁に集中する傾向にあり、A区北半の厚く堆積した黒褐色土中に遺構の存在した可能性とA区台地の北方へ延びる一段下った台地上に展開する可能性とがある。

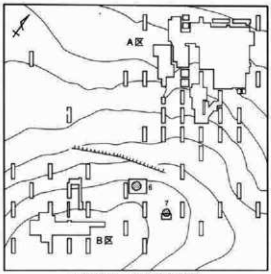
土坑については時期を確定する資料に乏しいが、中期の住居群の推移と連動するものと考えられる。また、土坑の分布はA・B区とも偏在性を窺うことができる。調査範囲が限定しているが、A区においては北半部に集中する傾向にあり、B区においては西半部に集中する傾向にある。

大平台遺跡の中期住居群はB区の小集落より始まり、中葉段階にひとつの画期を持ち中葉後半～後半初頭段階は近距離ながら地形的に隔絶した2地点に分村した小集落の形成が見られる。次の後半加曽利E2式段階ではA区への定着が認められる。この段階までのA区の住居群は台地上での相対する位置に占地する傾向にあり、住居数もあまり変化なく環状を意図する小集落形成がなされている。次の加曽利E3式段階は増減を繰り返すものの住居数の増加が認められ、また、各段階の住居群には偏在性が認められ環状を明確に意図する集落形成は希薄となる。そして、中期未段階では集落占地を再び変えたと考えられる。

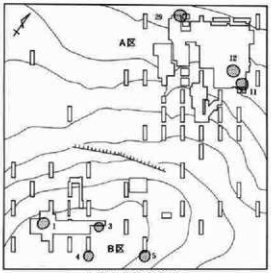
以上、大平台遺跡は岩野谷丘陵中の居住適地として継続的な集落形成がなされ、中期においては地域にお



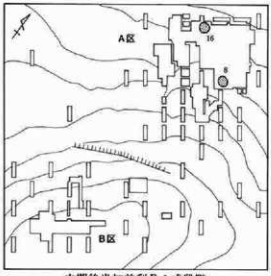
前期初頭段階



中期初頭～中葉前半段階



中期中葉後半段階



中期後半加曽利Ｅ１式段階

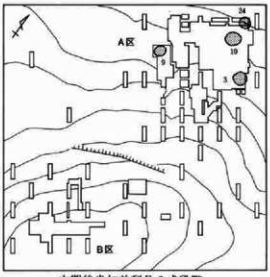
第106図　時期別住居分布図 (1)

ける中核的集落が形成されたと考えられる。地理的には中部山岳地帯に近く多分に文化的な影響下にあったと考えられるが、群馬県西部の在地性を有した独自の文化圏の形成を担った一集落と考えられる。

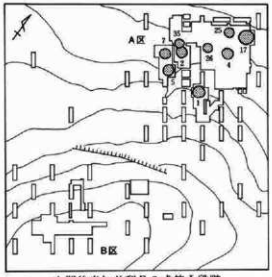
本遺跡の整理は調査後15年を経過しており、一部の遺物や資料に不明な点が存在し、資料操作に不十分な面が生じてしまったことをお断りしたい。

文末ながら、発掘調査や本書の作成にあたって大勢の方々の御協力、御指導を賜りました。記して感謝の意を表す次第であります。

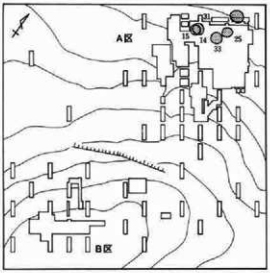
注1.「群馬県史　資料編1」　群馬県　昭和63年



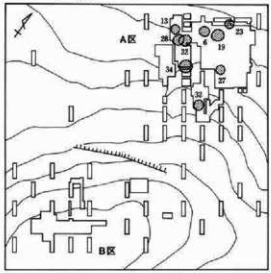
中期後半加曽利Ｅ２式段階



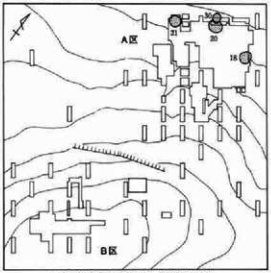
中期後半加曽利Ｅ３式第Ⅰ段階



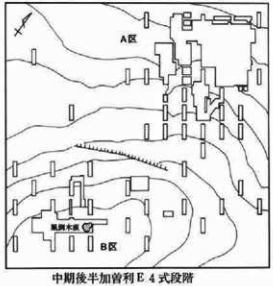
中期後半加曽利Ｅ３式第Ⅱ段階



中期後半加曽利Ｅ３式第Ⅲ段階



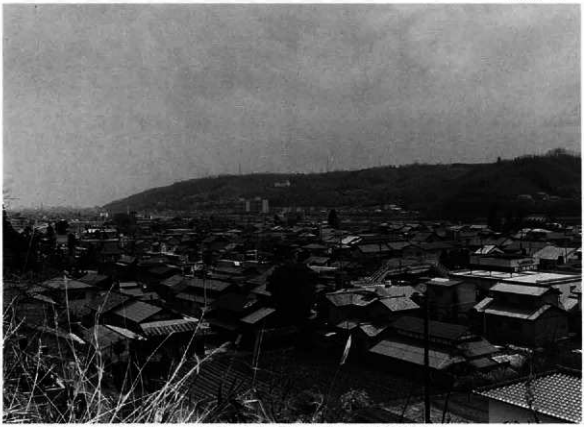
中期後半加曽利Ｅ３式第Ⅳ段階



中期後半加曽利Ｅ４式段階

第107図　時期別住居分布図　(2)

図　　版



1　遺跡遠景（遺跡は正面丘陵中央頂部にある。遺跡の北西４kmの八幡丘陵より）

2　遺跡の西100mにある湧水地からの流れ（湧水地の北東50mより）

図版　2

1　遺跡遠景（後方の山は赤城山、西より）

2　遺跡全景（南西より）

1　予備調査風景

2　本調査風景

1　現在の県立みやま養護学校（南西より）

2　A区南半全景（北より）

1　A区東半全景（北西より）

2　A区西半全景（北より）

図版　6

1　A区1号住居跡（北より）

2　A区1号住居跡遺物出土状態（北西より）

1　A区２号住居跡
（東より）

2　A区３・11号住居跡
（南より）

3　A区３号住居跡の炉
（南より）

図版　8

1　A区4号住居跡（東より）

2　A区4号住居跡の炉（南より）

3　A区4号住居跡の炉体土器出土状態（東より）

4　A区4号住居跡遺物出土状態（南より）

5　A区4号住居跡遺物出土状態（西より）

1　A区5号住居跡
（南より）

2　A区5号住居跡の炉
と立石（北より）

3　A区5号住居跡炉上
部の遺物出土状態

1　A区6・14・15・16号住居跡（北西より）

2　A区6号住居跡の炉（北より）

3　A区15号住居跡の炉（北西より）

4　A区14号住居跡の炉（東より）

5　A区14号住居跡の埋甕（西より）

1　A区7・9号住居跡（東より）

2　A区7・9号住居跡遺物出土状態（南東より）

3　A区7号住居跡深鉢出土状態（東より）

4　A区7号住居跡の炉（南より）

5　A区9号住居跡の炉（東より）

図版　12

1　A区８号住居跡（南より）

2　A区８号住居跡の炉検出状態（南より）

3　A区８号住居跡の炉（東より）

4　A区８号住居跡遺物出土状態（東より）

5　A区８号住居跡遺物出土状態（西より）

1　A区10号住居跡（南西より）

2　A区10号住居跡遺物出土状態（南西より）

図版　14

1　A区10号住居跡炉周辺の遺物出土状態（南西より）

2　A区10号住居跡の炉（北より）

3　A区10号住居跡出土の釣手形土器（南より）

1　A区12号住居跡遺物出土状態（南より）

2　A区12号住居跡遺物出土状態(北西より)

3　A区12号住居跡の炉（南西より）

1　A区13・21・29号住居跡（北より）

2　A区21号住居跡の炉（西より）

3　A区29号住居跡遺物出土状態（西より）

1　A区17号住居跡（東より）

2　A区17号住居跡遺物出土状態（南東より）

3　A区17号住居跡床面遺物出土状態（南より）

4　A区17号住居跡床面遺物出土状態（西より）

5　A区17号住居跡の炉（南より）

図版　18

1　A区18号住居跡の炉
（北より）

2　A区19号住居跡の炉
（南より）

3　A区20号住居跡遺物
出土状態（北西より）

1　A区22・28・35号住居跡（北より）

2　A区28・35号住居跡遺物出土状態（西より）

3　A区28・35号住居跡遺物出土状態（南西より）

1　A区23号住居跡
（東より）

2　A区24号住居跡
（東より）

3　A区25号住居跡
（南東より）

1　A区26号住居跡
（南東より）

2　A区26号住居跡の炉
（南西より）

3　A区26号住居跡
（北西より）

図版　22

1　A区27号住居跡
（南より）

2　A区27号住居跡の炉
（西より）

3　A区30号住居跡
（東より）

1　A区31号住居跡
（東より）

2　A区32号住居跡
（西より）

3　A区32号住居跡の炉
（東より）

図版　24

1　B区1・2号住居跡
（西より）

2　B区1号住居跡遺物
出土状態（東より）

3　B区D－12グリット
遺物出土状態
（西より）

1　B区6号住居跡
（東より）

2　B区6号住居跡の炉
土層断面（東より）

3　B区7号住居跡
（南より）

1　A区18号住居跡周辺の土坑群（南西より）

2　A区145号土坑大型深鉢出土状態（南より）

1　A区116号土坑の立石（西より）

2　A区143号土坑（南東より）

図版　28

1　A区27号土坑
（西より）

2　A区21号土坑
（南より）

3　A区16・17・18号土坑（南東より）

1　A区28号土坑
（南より）

2　A区68号土坑
（南東より）

3　A区44号土坑
（西より）

図版　30

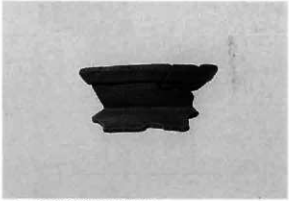
1　B区1号土坑
（北より）

2　B区4号土坑
（東より）

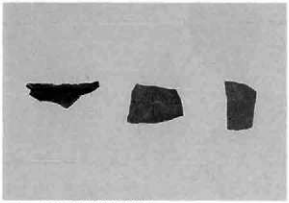
3　B区69号土坑
（東より）

1　1（左）・2（右）号方形周溝墓（東より）

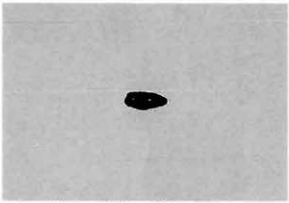
2　1号周溝墓（南東より）



3　方形周溝墓出土遺物(1)



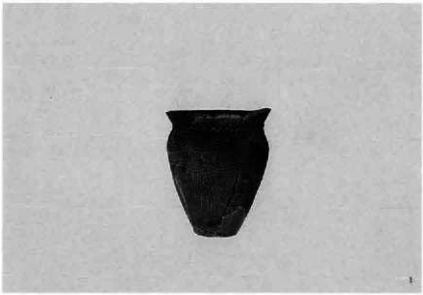
4　方形周溝墓出土遺物(2)

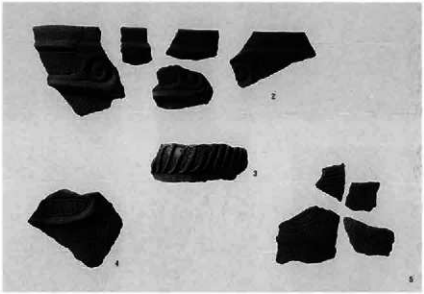


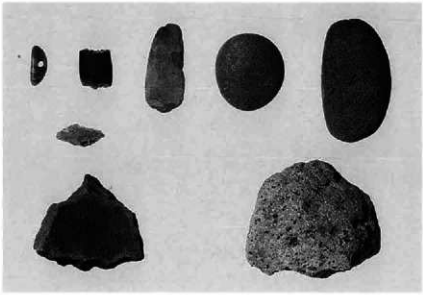
5　B区出土の剣形滑石製模造品

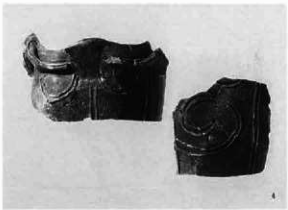
図版　32

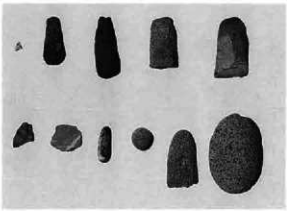
A区1号住居跡出土遺物



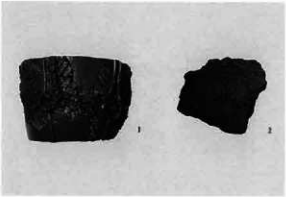


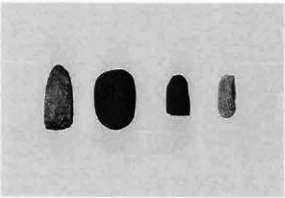




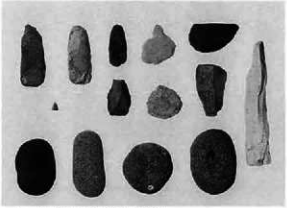


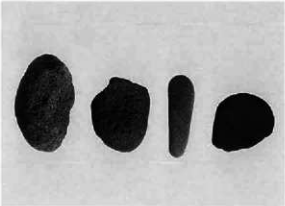
A区2号住居跡出土遺物



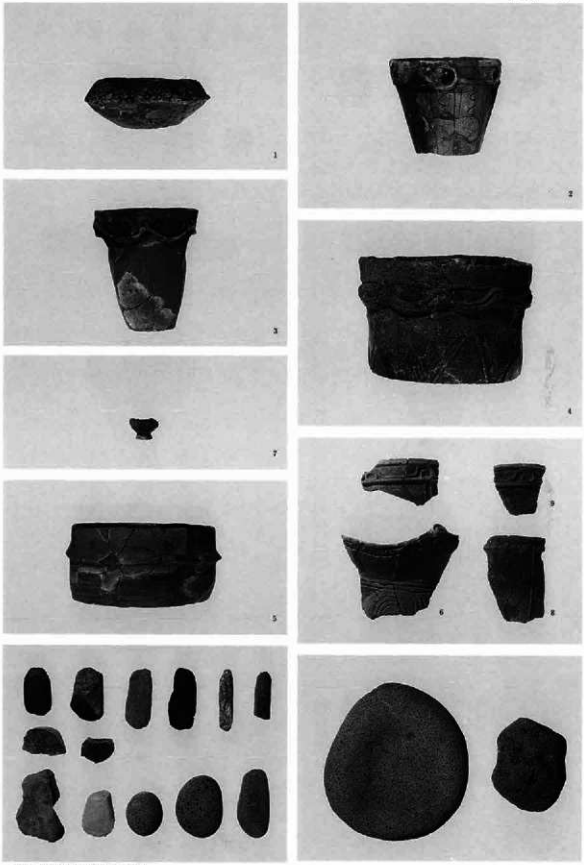


1　A区3号住居跡出土遺物

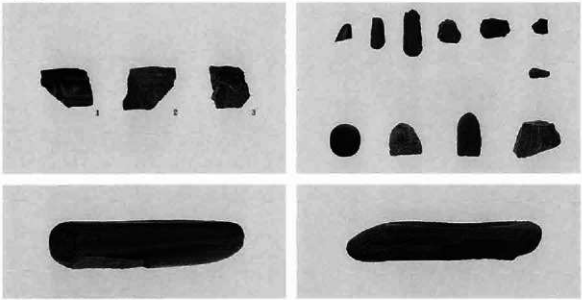




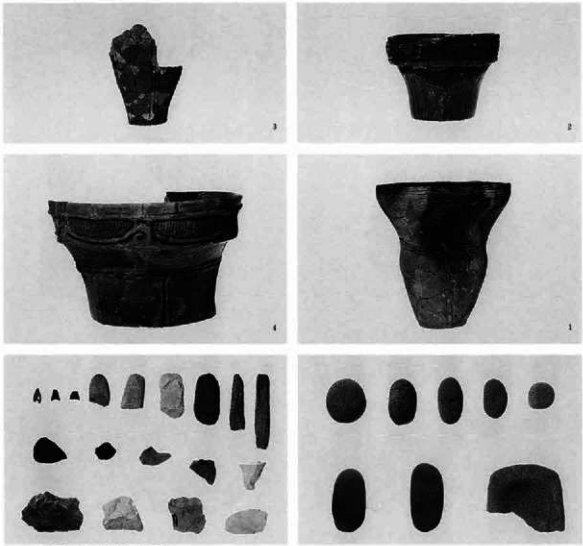
2　A区4号住居跡出土遺物



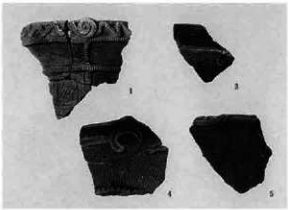
A区5号住居跡出土遺物

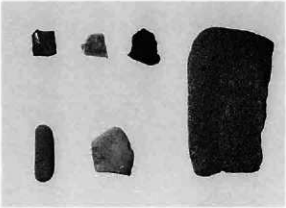


1　A区6号住居跡出土遺物

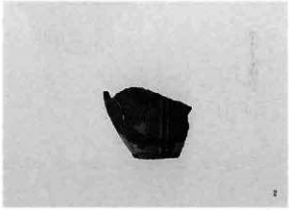


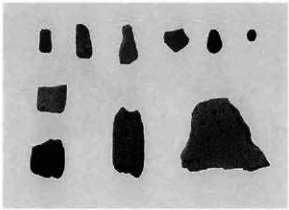
2　A区7号住居跡出土遺物





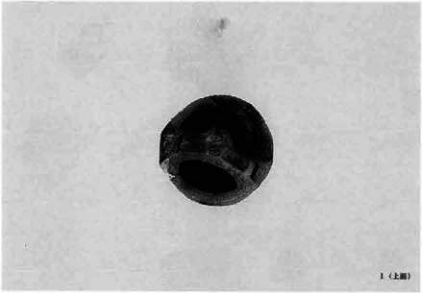
1　A区8号住居跡出土遺物



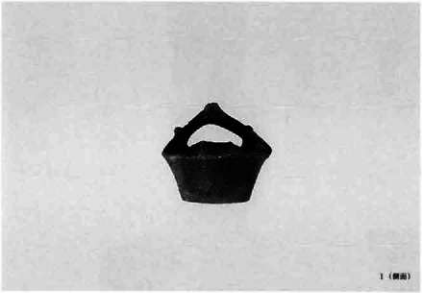


2　A区9号住居跡出土遺物

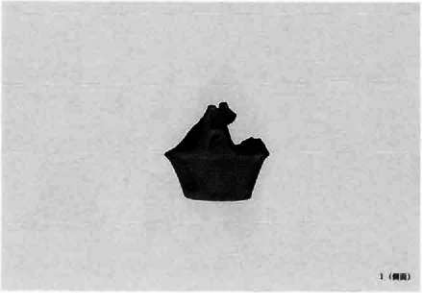
A区10号住居跡出土
遺物(1)



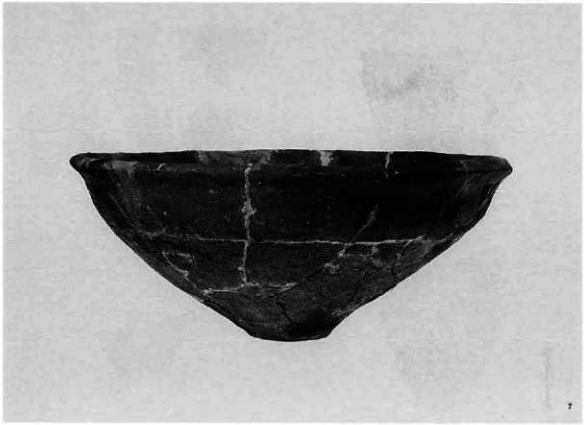
1（上面）

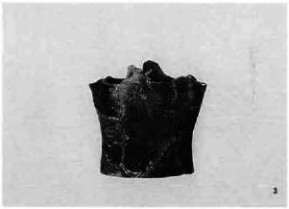


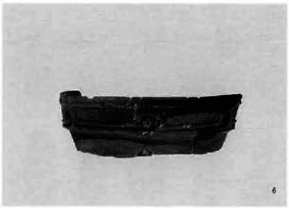
1（側面）



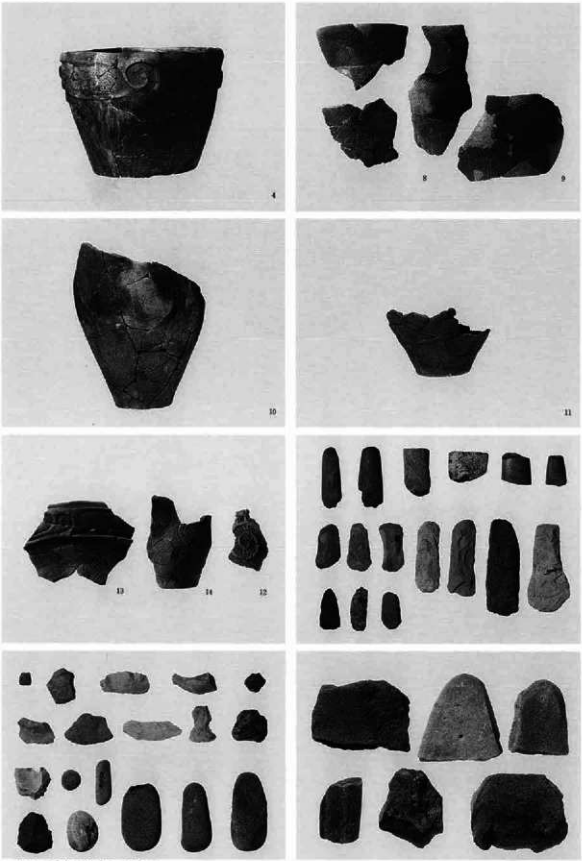
1（側面）



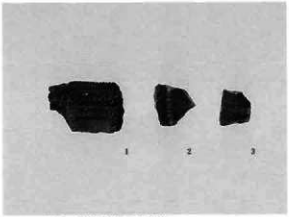


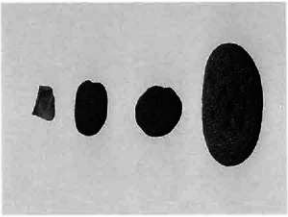


A区10号住居跡出土遺物(2)

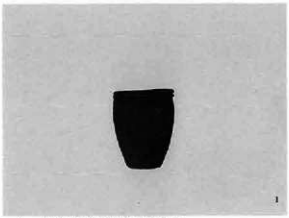


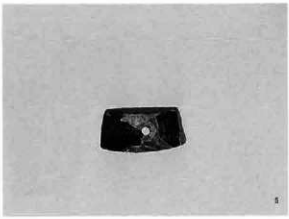
A区10号住居跡出土遺物(3)



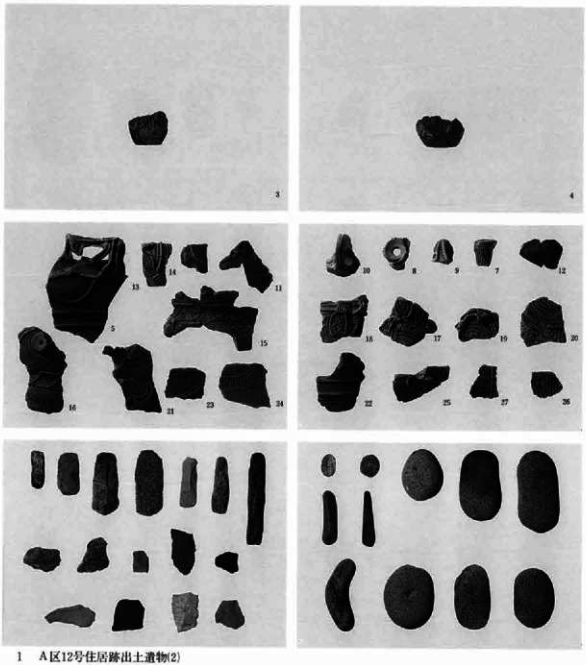


1　A区11号住居跡出土遺物

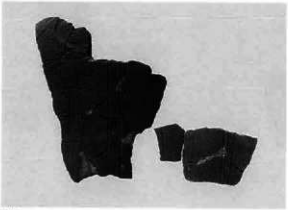




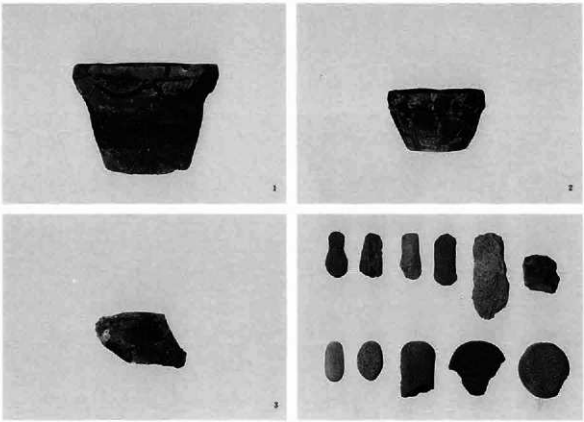
2　A区12号住居跡出土遺物(1)



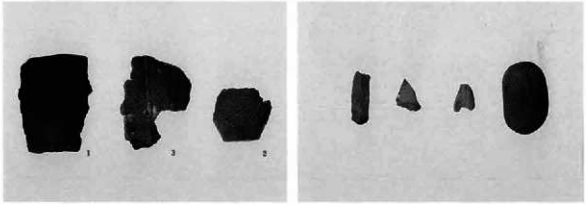
1　A区12号住居跡出土遺物(2)



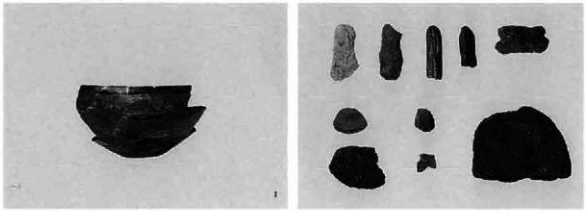
2　A区13号住居跡出土遺物



1　A区14号住居跡出土遺物



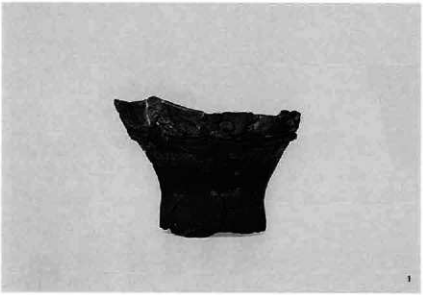
2　A区15号住居跡出土遺物

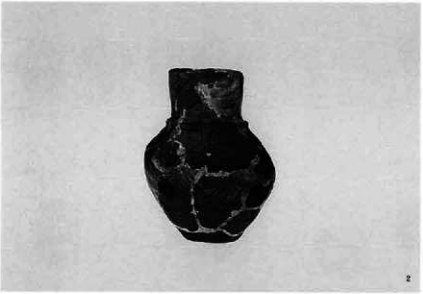


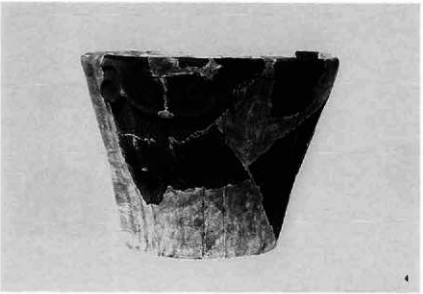
3　A区16号住居跡出土遺物

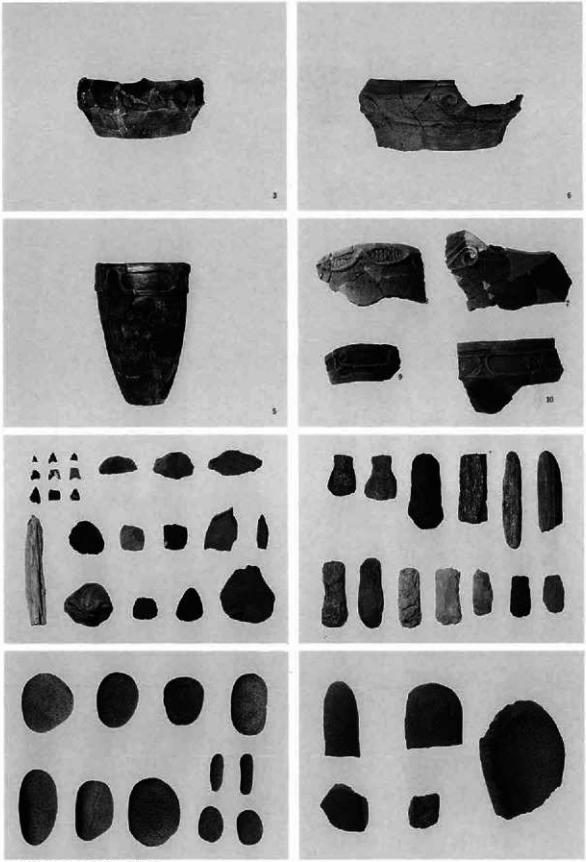
図版　44

A区17号住居跡
出土遺物(1)

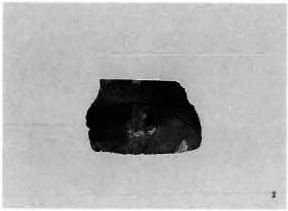


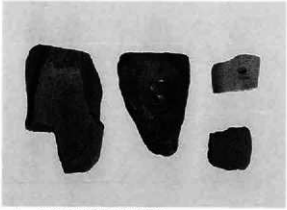


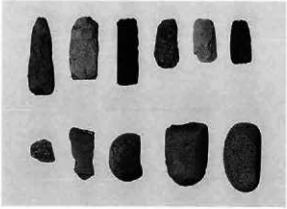




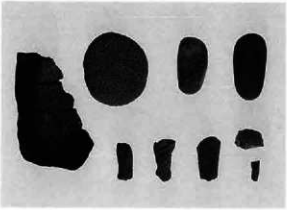
A区17号住居跡出土遺物(2)





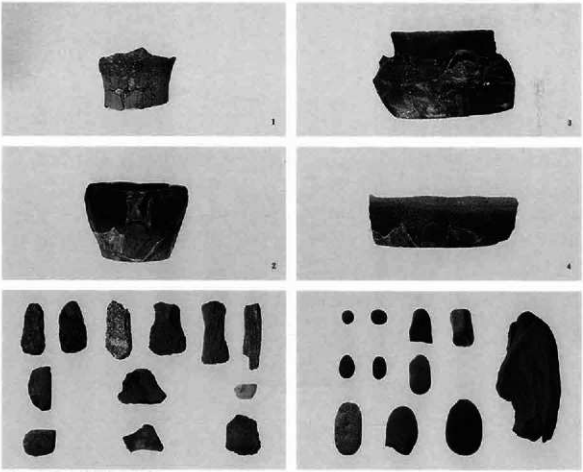


1　A区18号住居跡出土遺物

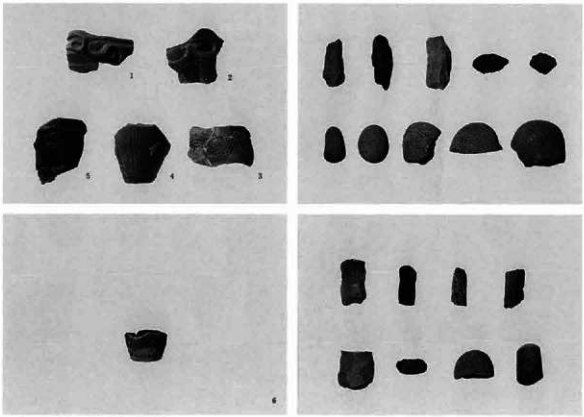


2　A区19号住居跡出土遺物

1　A区20号住居跡出土遺物

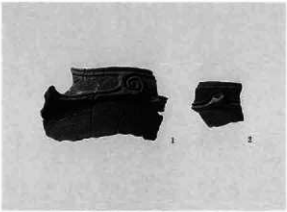


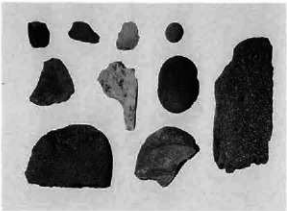
2　A区21号住居跡出土遺物



1　A区22号住居跡出土遺物

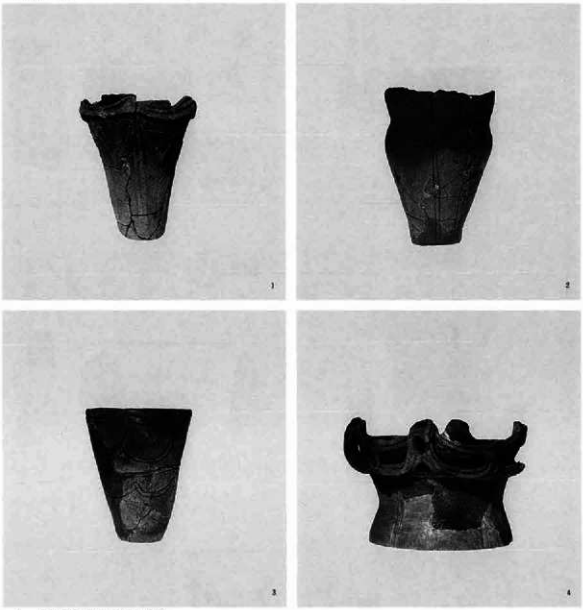
2　A区23号住居跡出土遺物



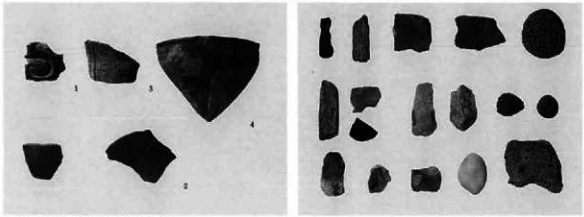


1　A区24号住居跡出土遺物

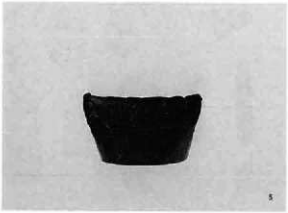
2　A区25号住居跡出土遺物



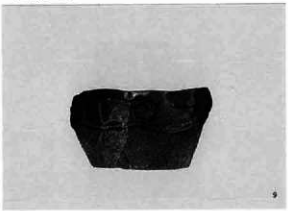
1　A区26号住居跡出土遺物

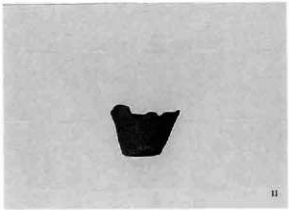


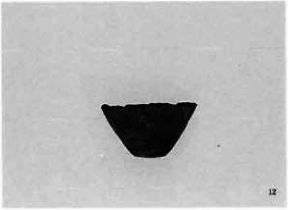
2　A区27号住居跡出土遺物

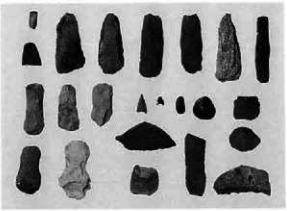


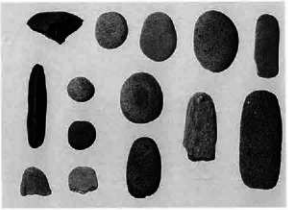
A区28・35号住居跡出土遺物(1)

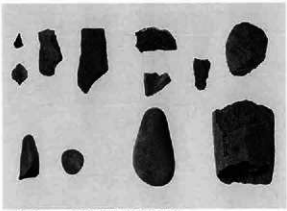




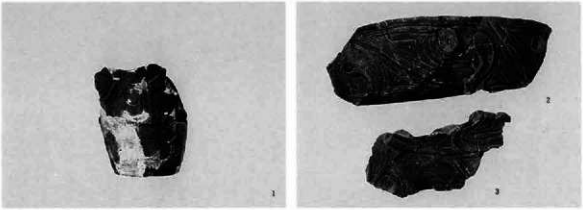




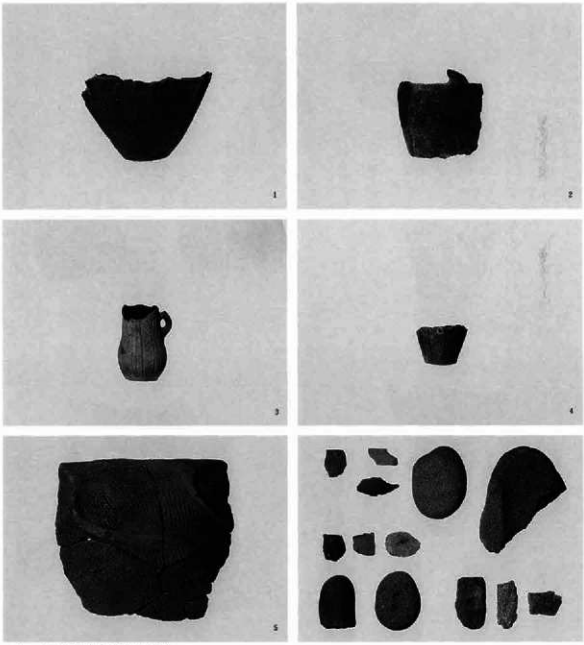




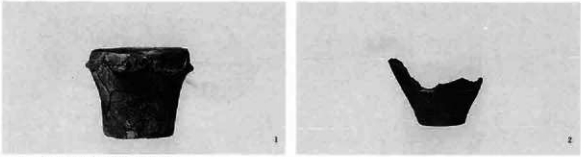
A区28・35号住居跡出土遺物(2)



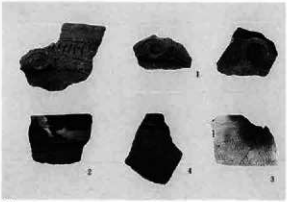
1　A区29号住居跡出土遺物



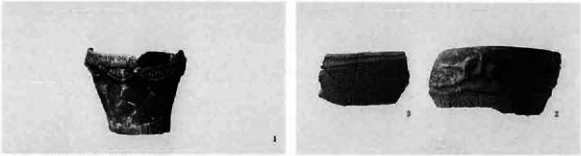
2　A区30号住居跡出土遺物



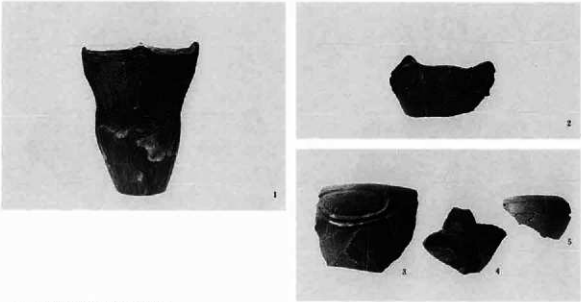
1　A区31号住居跡出土遺物



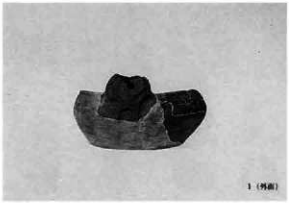
2　A区32号住居跡出土遺物



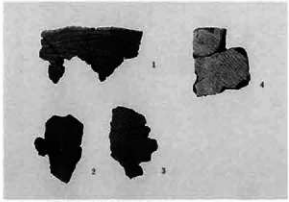
3　A区33号住居跡出土遺物

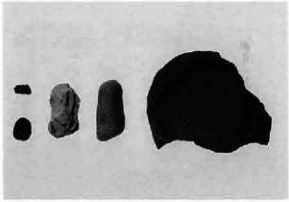


4　A区34号住居跡出土遺物

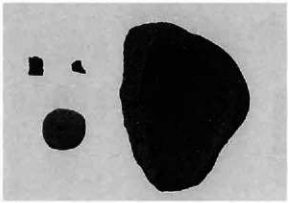


1　B区1号住居跡出土遺物

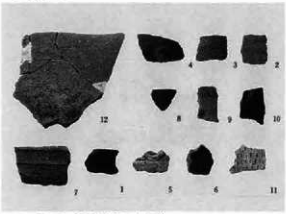


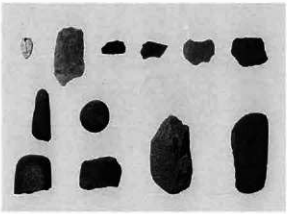


2　B区2号住居跡出土遺物

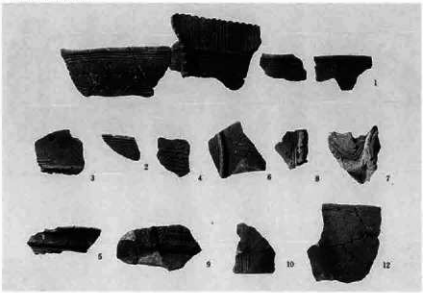


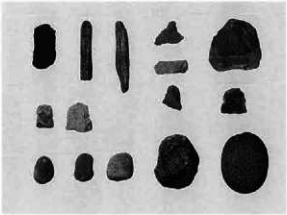
3　B区3号住居跡出土遺物





1　B区6号住居跡出土遺物





2　B区7号住居跡出土遺物

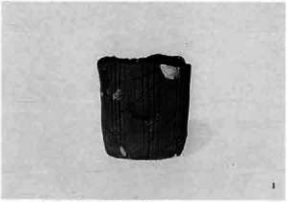
1　A区145号土坑出土大型深鉢（正面）

2　A区145号土坑出土大型深鉢（裏面）

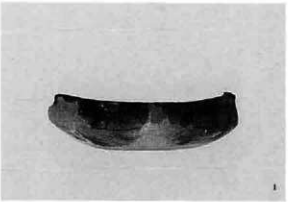
3　A区145号土坑出土大型深鉢（側面）

4　A区143号土坑出土遺物

1　A区16号土坑出土遺物

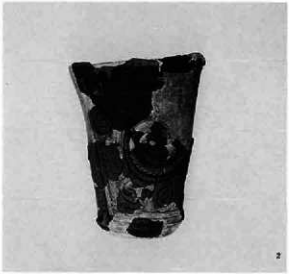


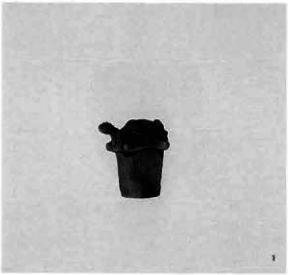
2　A区14号土坑出土遺物



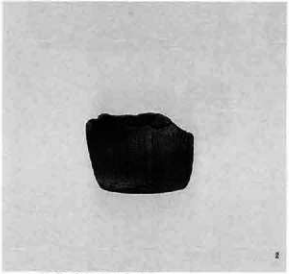
3　A区15号土坑出土遺物(1)

4　A区27号土坑出土遺物





1　A区21号土坑出土遺物



2　A区28号土坑出土遺物(1)

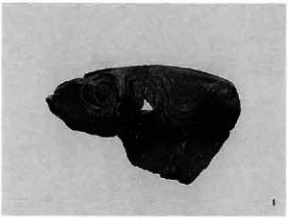
3　A区36号土坑出土遺物

4　A区59号土坑出土遺物(1)

5　A区68号土坑出土遺物

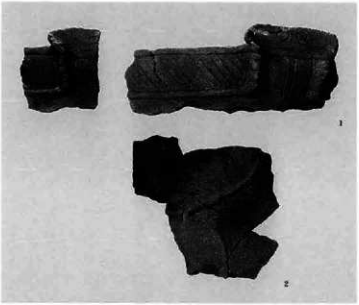
図版　60

1　A区96号土坑出土遺物

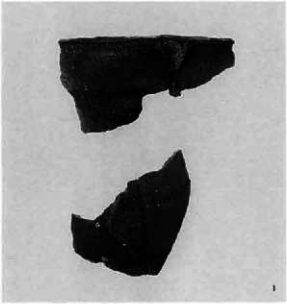


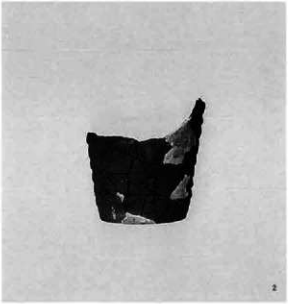
2　A区100号土坑出土遺物

3　B区1号土坑出土遺物(1)

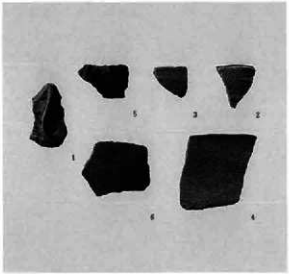


4　B区4号土坑出土遺物

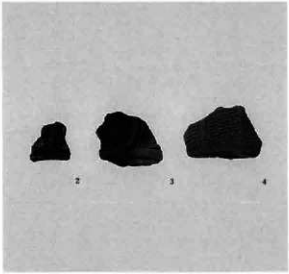




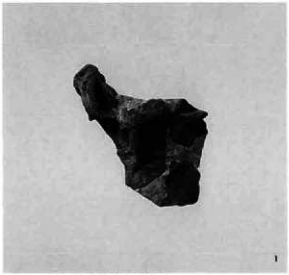
5　B区7号土坑出土遺物



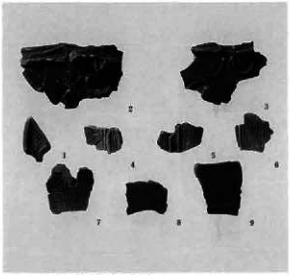
1　A区13号土坑出土遺物



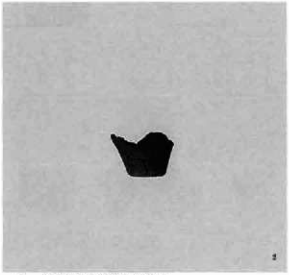
2　A区15号土坑出土遺物(2)

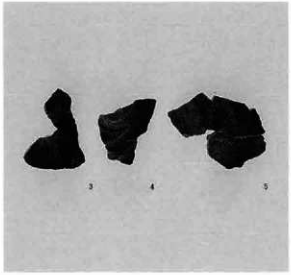


3　A区28号土坑出土遺物(2)

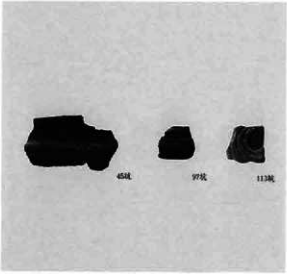


4　A区44号土坑出土遺物

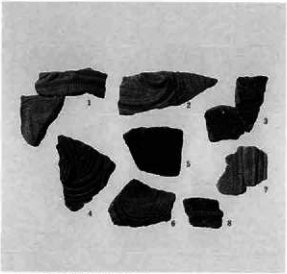




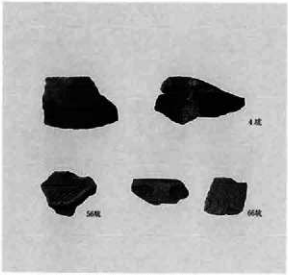
5　A区59号土坑出土遺物(2)



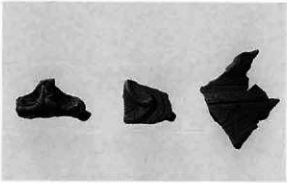
1　A区45・97・113号土坑出土遺物



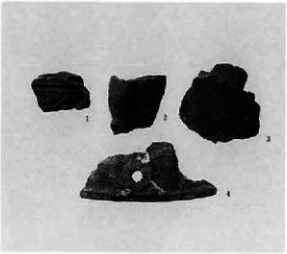
3　B区5号土坑出土遺物



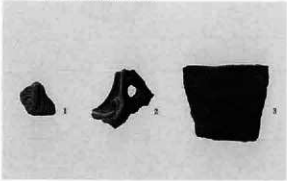
5　B区4・56・66号土坑出土遺物



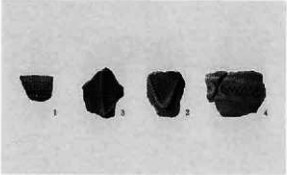
2　B区1号土坑出土遺物(2)



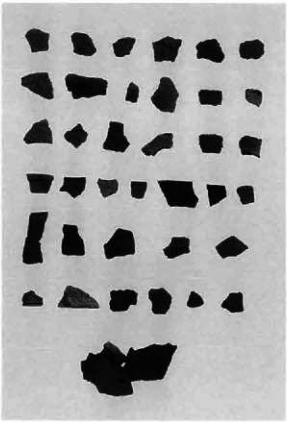
4　B区8号土坑出土遺物



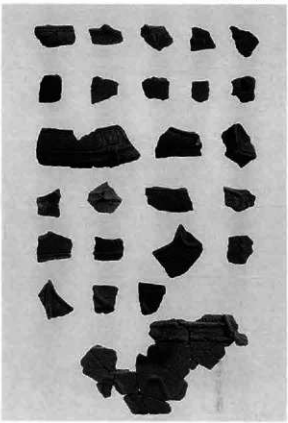
6　B区67号土坑出土遺物



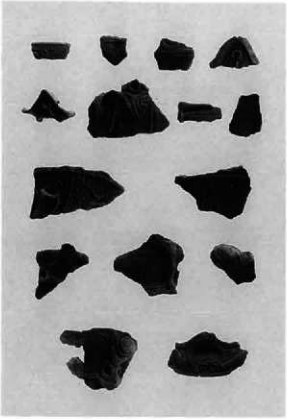
7　B区68号土坑出土遺物



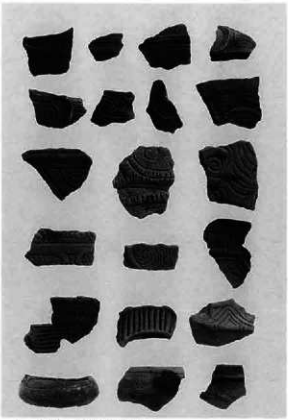
1　グリット出土遺物(1)・(2)



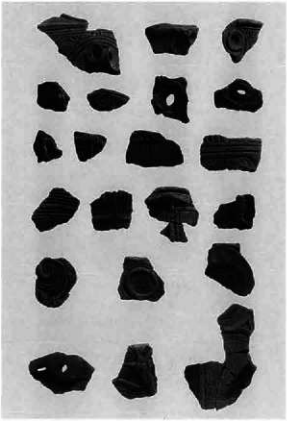
2　グリット出土遺物(3)



3　グリット出土遺物(4)



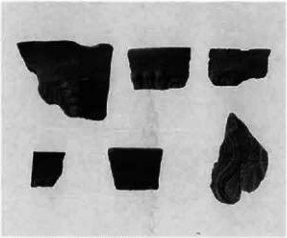
4　グリット出土遺物(5)



1　グリット出土遺物(6)

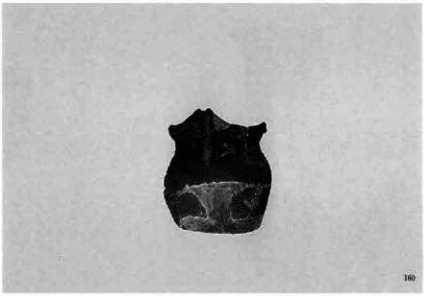
2　グリット出土遺物(7)

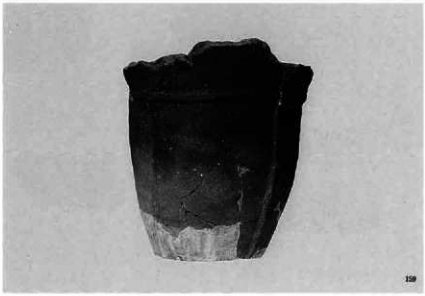
3　グリット出土遺物(8)

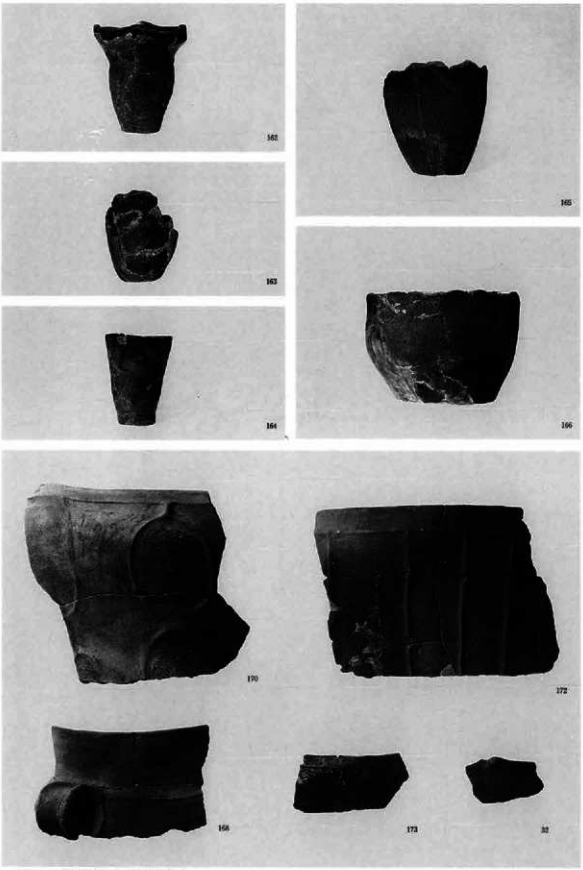


4　グリット出土遺物(9)

グリット出土遺物(9)

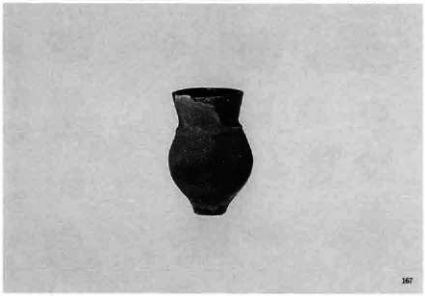


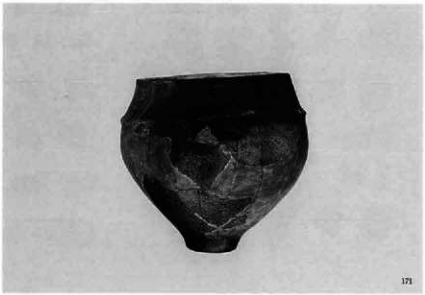


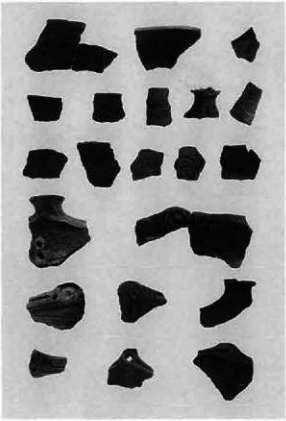


グリット出土遺物00（32は前期）

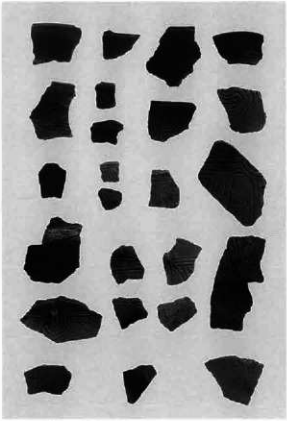
グリット出土遺物00



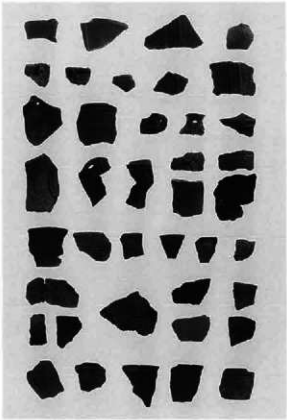




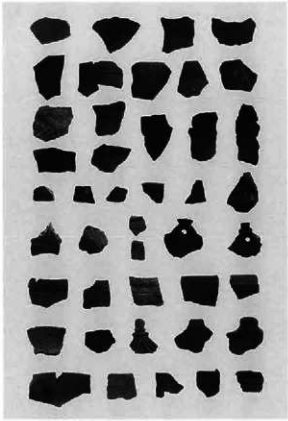
1　グリット出土遺物01



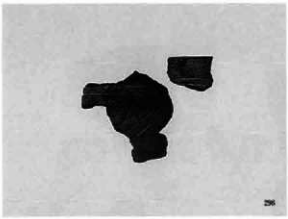
2　グリット出土遺物02

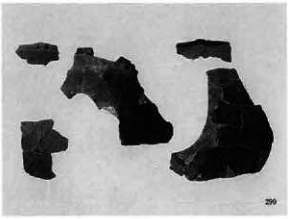


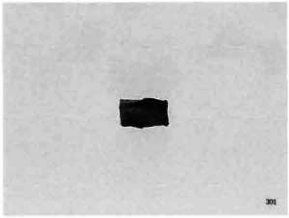
3　グリット出土遺物03

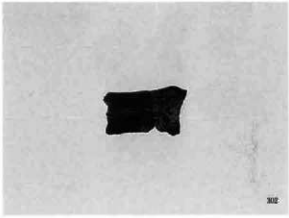


4　グリット出土遺物04

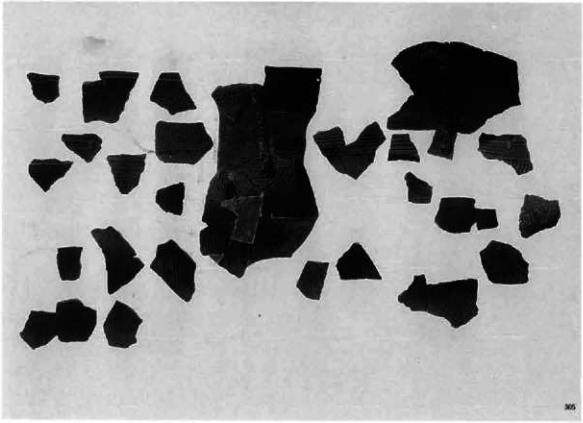


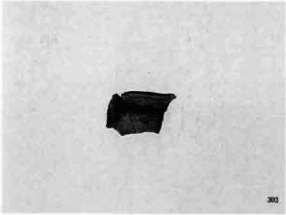


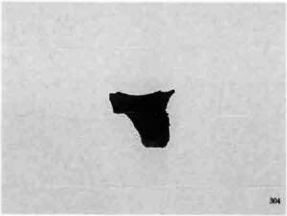


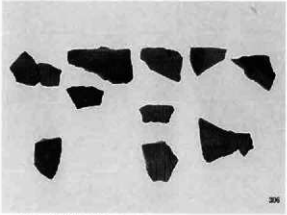


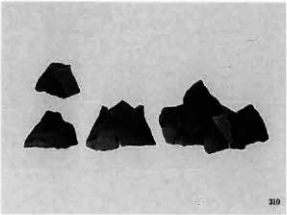
グリット出土遺物15





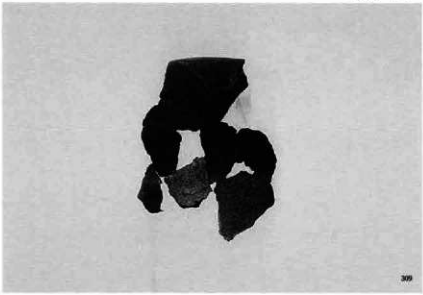


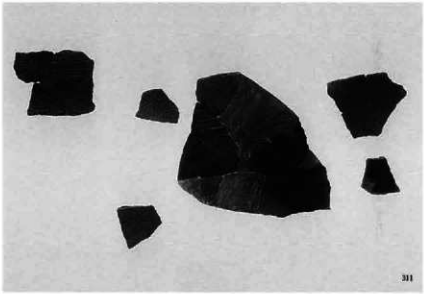


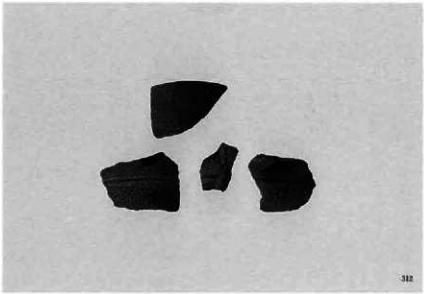


グリット出土遺物05・06

グリット出土遺物06

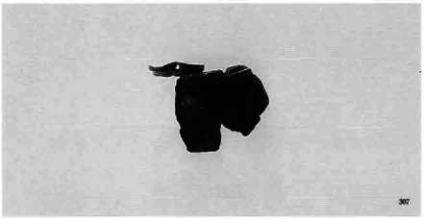


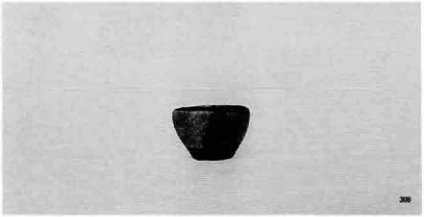


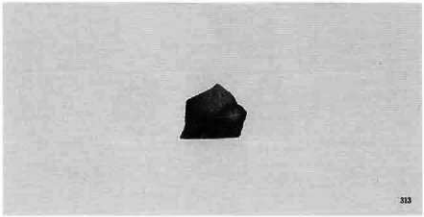


図版　72

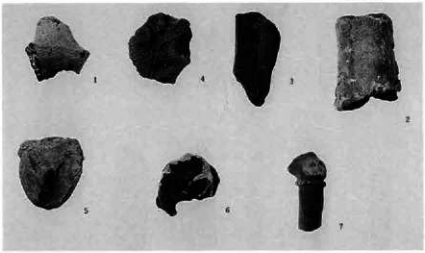
グリット出土遺物⑩





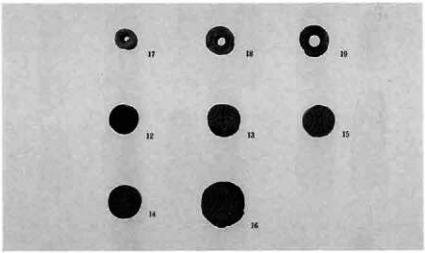


土 製 品

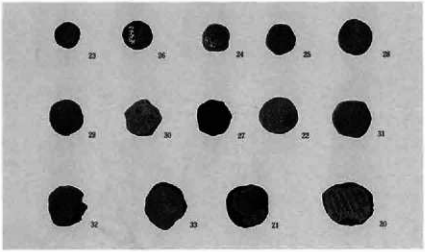


1 土 偶

2 土製品



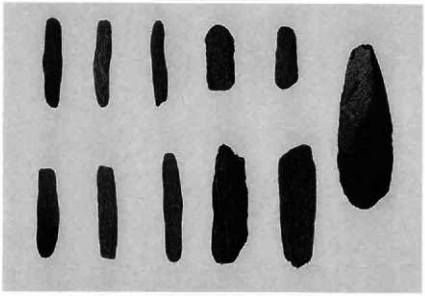
3 耳 栓



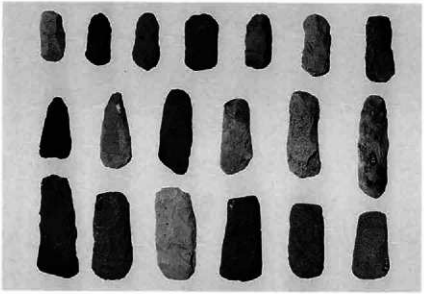
4 土製円盤

図版　74

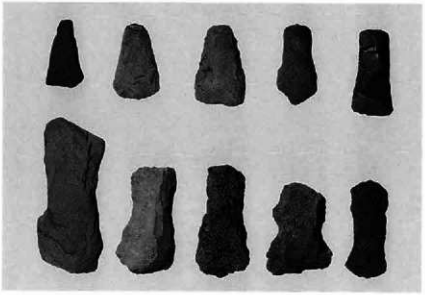
グリット出土遺物(17)



1　打製石斧(1)

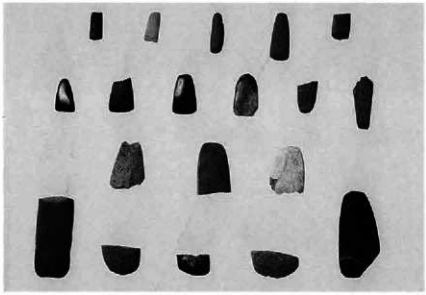


2　打製石斧(2)

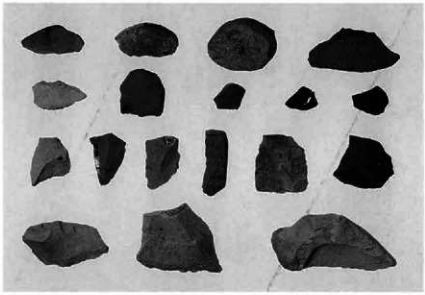


3　打製石斧(3)

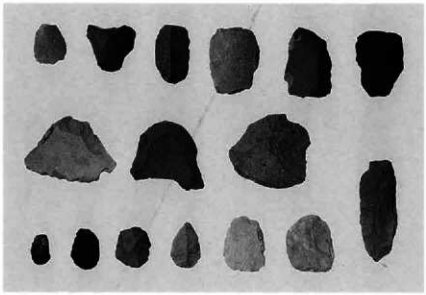
グリット出土遺物08



1　磨製石斧



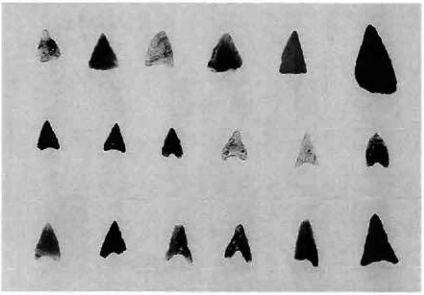
2　剥片石器(1)



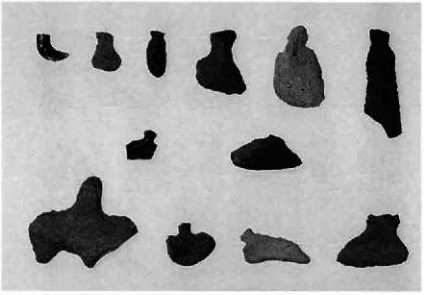
3　剥片石器(2)

図版　76

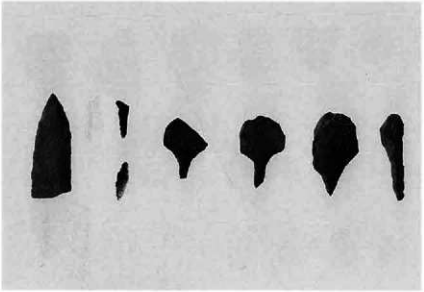
グリット出土遺物(1)



1　石　鏃

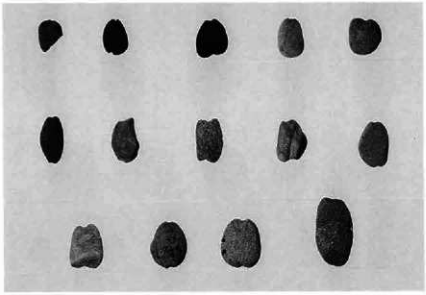


2　石　匙

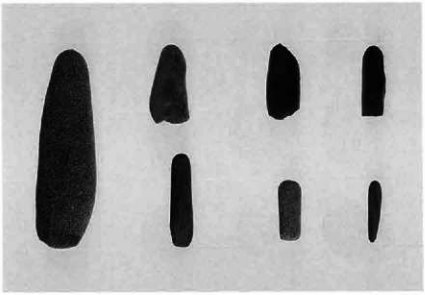


3　石槍・ドリル

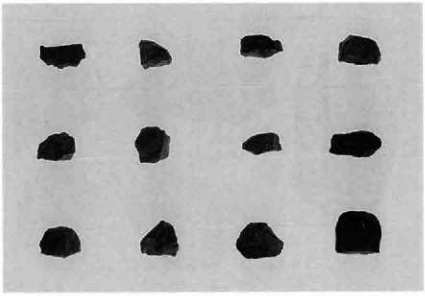
グリット出土遺物(2)



1 石 錘



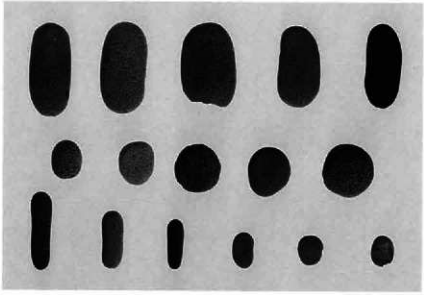
2 敲 石



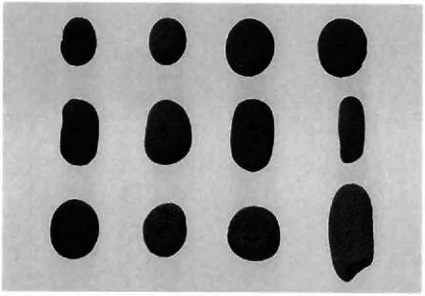
3 石 核

図版　78

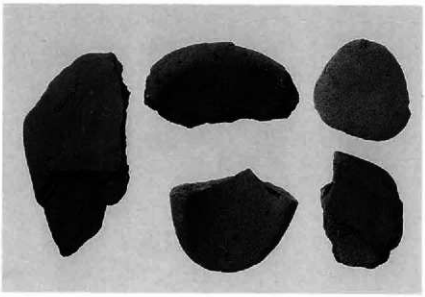
グリット出土遺物(21)



1　磨　石

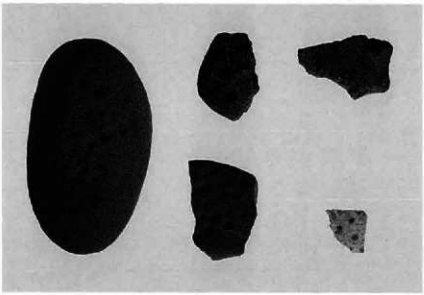


2　凹　石

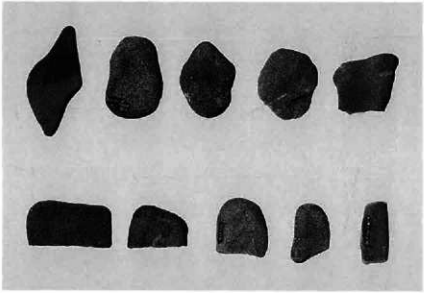


3　石　皿

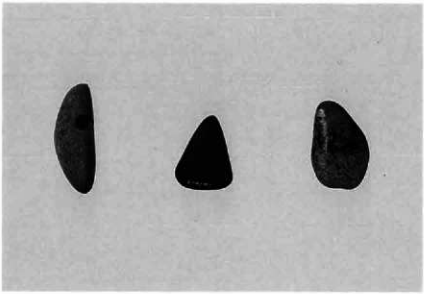
グリット出土遺物(22)



1　多孔石



2　砥　石



3　石製品

㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団
発掘調査報告第102集

大平台遺跡

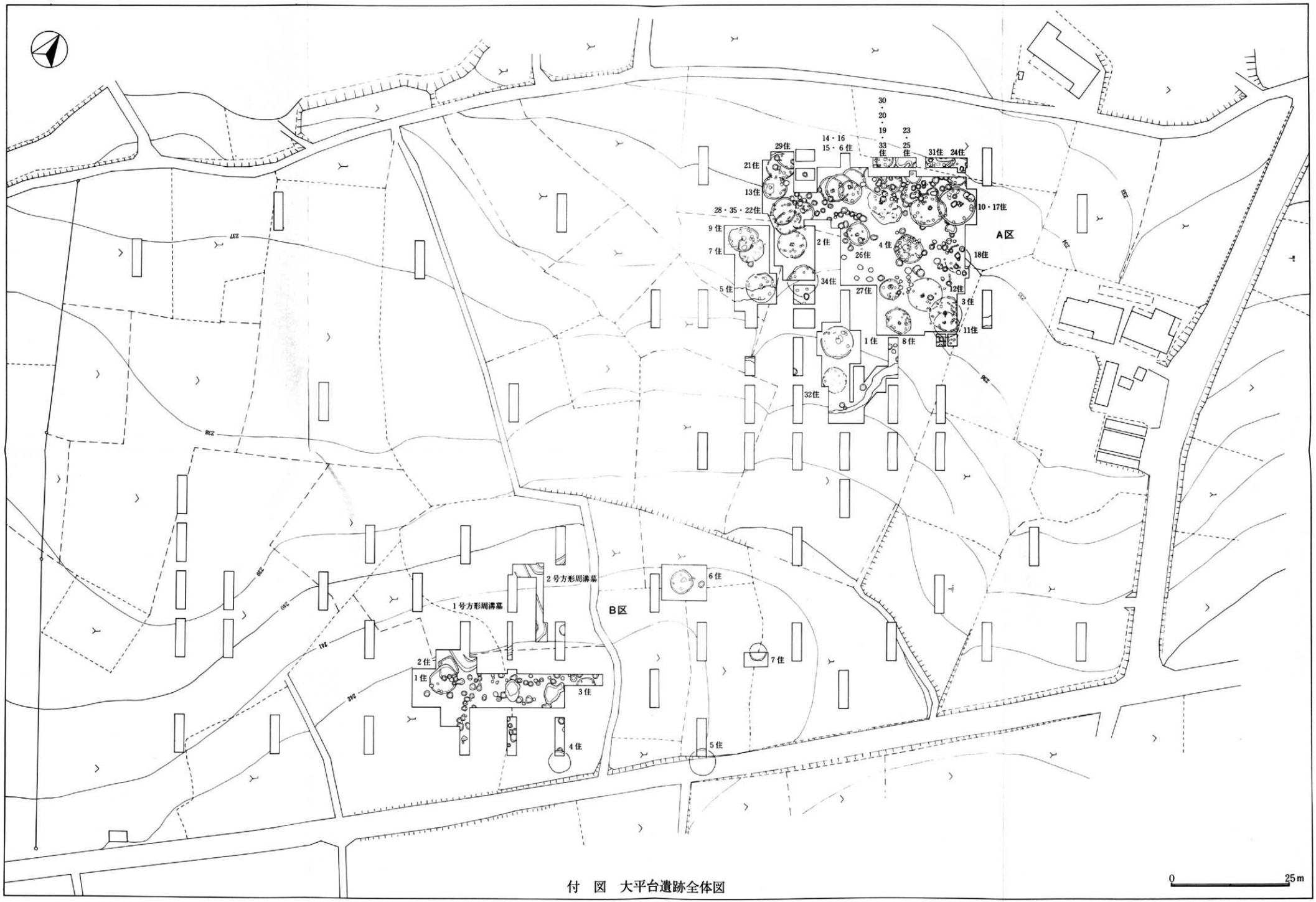
——県立みやま養護学校建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書——

平成元年3月25日　印刷
平成元年3月30日　発行

編集　群馬県教育委員会
前橋市大手町1丁目1－1
㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橘村大字下箱田784番地の2
電話(0279)52－2511（代表）

発行　群馬県考古資料普及会
勢多郡北橘村大字下箱田784番地の2

印刷　上毛新聞社出版局


A区
B区
1住
2住
3住
4住
5住
6住
7住
8住
9住
10・17住
11住
12住
13住
14・16
15・6住
18住
19
20
21住
23
24住
25
26住
27住
28・35・22住
29住
30
31住
32住
33
34住
1号方形周溝墓
2号方形周溝墓
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
0
25m

付　図　大平台遺跡全体図